えすぱにや・ぽるつがる記



木下杢太郎著

岩波書店版



GALLIAE CONFINIA.
GALLICVS Sinus
Pyrenaei montes.
BALEARICVM Mare
Colubraria
SVCRONENSIS Sinus
Ebusus insula
Ophiusa insula
ILLICITANVS Sinus
VIRGITANVS Sinus
Heditani, vel
Lobetani
Sedetani
Leonicenses
Celtiberi
Contestani
Bastitani
RIOR.
Cosetani
Ilergetes
Surdaones
Laletani
Cerretani
Orient.
HISPANIAE LOCA ALIQVOT INCOGNITAE POSITIONIS.

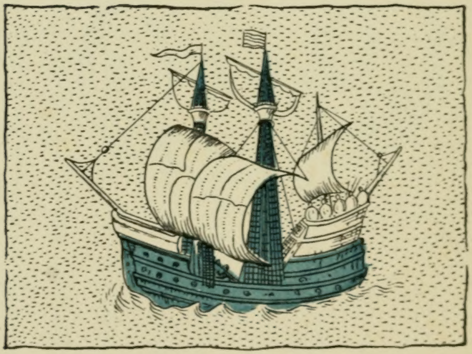

HISPANIAE VETERIS DESCRIPTIO.
Ex conatibus Geographicis Abrah. Ortelij.
OCEANVS ATLANTICVS, QVOD ET MARE HESPERIVM, VESPERTINVM, OCCIDVVM, ET EXTERVM.
Occidens.
Frons Hispa niæ Septentrionalis.
Frons Hispa niæ Occidentalis. Plin. et Melæ.
GADITANVM MARE.
Zoelæ.
Astures transmontani.
Pesici.
Celtici.
Lucenses.
Astures Augustani.
Cæpori.
Seuri.
Cileni.
Callaici
Bedui.
Amphilochi.
Bracari.
Gronij, et Grauij.
Nemetati.
Origeni.
Vettones.
Lancienses.
Ocellenses.
LVSITANIA.
Belitani.
Lusitani.
SP. EXT.
Colarni.
Turduli.
Celtici.
BAETVRIA.
Turdu res.
Li Vete
Ossidamnij, et Cynesij.
CVNEVS Ager.
BAE
Turdeta
Cunaici
Bastuli qui Pœni.
TARR:
Carpitani
Mauri populi.
Ortelij
1586.
SVMMO THEOLOGO DNO D. BENEDICTO ARIAE MONTANO: VIRO LINGVARVM COGNITIONE, RERVM PERITIA, ET VITAE INTEGRITATE MAGNO: ABRAH. ORTELIVS AMICITIÆ ET OBSERVANTIÆ ERGO, DD.

えすぱにや・ぽるつがる記

及び初期日本吉利支丹宗門に關する

雜槀

木下杢太郎著



東京

岩波書店刊行

昭和四年七月　MXCXXIX

序

大正十三年の六月には佛蘭西を立つて歸朝する積りで、既にマルセイユからの船室をも豫約して置いたが、本文にも記したやうに、急に西班牙葡萄牙への旅行を思ひ立ち、歸朝を延ばし、船を換へた。それは西葡兩國に行く爲めのいりめの出る見込が付いたからである。わたくしは歐羅巴、殊に伊太利亞、佛蘭西に於て多くの古寺院を訪ね、又しばしば舊教の儀式を觀る機會があつたので、久しく打ち忘れてゐた日本に於ける天主教の歷史に關する傍業的研究の事を想ひ出した。之れより先獨逸伯林の一書肆で偶然フランシスカン派僧オツトオ・マアスの著書「スパニエン」を購ひ、またその後巴里に於てこの方面の研究の書二三を繙いて、西葡に對する游志がいよいよ切になつたのである。まだ獨逸に在つた時、この事をわが舊友なる一獨逸東洋學者に話すと、肩を聳して、君は今度は古文書漁りを始めるのかと言つた。是人は予の道草を食ふ性を好く識つて居たから、かく予

を揶揄したのである。予は然し決してそんな大それた考を持つてゐたのではなかつた。ドン・マンシオ伊東等の青年が四百年前にどんな處を歩いたかを見て、わが戯曲的空想の資を得むと欲したに過ぎなかつたのである。

さてその地に行つて見ると、それ等の史料は思ひの外に豊富であつた。珍奇な古書、希有な史料の類が、專門外の我等にも極めて容易く手の觸れるところに存じてゐた。是れ予が旅行記に柄にもなきペダンチスムの臭を加へた所以である。

兼ての約束からこの旅行記は大阪毎日新聞に載せた。（同新聞社は予の歐米旅行に對して多大の便宜を與へた。）唯「ぽるつがる記」の方は新聞には不適當であつたから、雜誌「思想」にその掲載を依頼した。

この旅行の間に寫したり手に入れたりした材料をば、歸朝後公職のひまびまに翻譯し、整理し、編輯したものが本書の外篇である。その尤も重要な三篇の文獻は、それぞれ西班牙語、葡萄牙語に堪能なる笠井鎭夫君、岡本良知君の手によつて翻譯して頂くことが出來た。亦予の大に徳とする所である。それ以外のものは、實は皆ヂレタンチスムである。日本歴史の素養なく、またその研究の

便宜に闕けてゐる著者は、極有り觸れたことを誤つたやうなことが多大に有るだらうと考へる。殊文獻に現はるゝ日本の固有名詞に關しては、その調査を怠つた所が多い。然し予の今の狀態では急に之を完全にするあてもないから、杜撰は杜撰のまゝ、過誤は過誤のまゝで本にすることにした。また插入した版畫の半數は寧ろただ裝飾的の意味にしたのである。十分その出所を調べて見なかつたものも尠くない。

予が西葡の旅行は、この書の印行の事と共に、岩波茂雄君に負ふ所が多い。予が滯歐中常に行李の裡に收めた名著「南蠻記」の著者新村出博士からはその後もいろいろの御厚意に預つた、また東洋文庫の石田幹之助君には隨分御迷惑をかけた。この三君には此機會に於て改めて御禮を申上げる次第である。

昭和三年八月十五日仙臺に於て

著　者　識　す

目次

ほるつがる記

外篇

插入圖說明

西蔺前記

リユウ・ド・セイヌ

Rue de Seine（リユウ ド セイヌ）のあたりは昔は巴里都城の外廓を廻る水道であつたさうである。今は Boulevard（ブウルヴァル）Saint Germain（サン ジエルマン）から此通（とほり）に入ると、其初の數歩の間は、人をして、おや、奉天の邊門へ來たのではないかと思はしめる。朝九時十時の頃は殊ににぎはふ。多分伊太利から來たのであらう、黄色の柑子、橄欖、これから南佛の野菜——佛蘭西の新聞は、うまい佛蘭西の野菜をば、英吉利人の方が本國人よりやすく食ふとこぼす。近頃輸出税の低下が決定せられたからである——乾物屋には鰊、またアドック（鱈?）の鹽物、腸詰の鎖、鶏肥肝（フォワグラア）の曲物（まげもの）、鰯の罐詰。肉屋には大牛の肢體、羊の背肉の他に、皮を剝いだ、蒙古のお祭の面のやうな豚の頭。呉服屋にはまたやすい見切りものの切地、女の靴下……その間に、一人の壯漢が大聲を擧げて客を呼ぶ。佛蘭西の市場の生活は支那と樣式の似てゐるとは、誰しも氣の付くところであるが、この朝市の有樣はまるで瀋陽城外の景觀である。

然しこの小路に交叉する Rue Jacob から先にゆくと、通の情景がずつと變つて、如何にも古風な靜な街になる。春の日が明かに、古く汚れた白壁に當つて、その黄い弱い反射が窓の緑に對照するのを見ると、まるで十八世紀の銅版畫の裡の風情である。ああ、巴里には江戸がある。是故に自分はこの都を愛する。

けちな雜貨商の店の硝子窓の裡に置かれた、うそくもたい木偶には、クリノリンで腰を膨らした女が淑ましき公園の小徑を行く。この街に配するには惡くもない姿態である。

もつと歩いて行くと、右側には Au Vélin d'Or、Fischbacher などといふ古本屋がある。初めの店には時々珍しい古本が出る。Kaempfer の佛譯の初版を買つたのも此店である。Littré の手翰が五フランだといふ目録を見て買ひに行つたらもう賣られて居た。新版では美術書がある。フイシュバッシエエはアルザス人でもあるのか、獨逸名である。そして獨逸の本を澤山持つてゐる。ほかには新教の書籍を出版する。古本屋はまだ四五軒この側にある。Félix Regamey の馬琴の小說の佛譯などを賣つてゐる店もあつた。

左の側には、Rue de l'Echaudé といふ小路に交叉する角に Maison d'Angleterre といふ小店

がある。看板には肖像畫工と書いてゐる。一人の老人が常に店先で畫をかいてゐる。そして入口の硝子の窓には自分の作畫を一ぱい懸け並べてある。

赤い美しい絨氈を着せた阿剌比亞馬の畫が二枚までもある。一體この老畫家は詩的空想の強い作家と見える。ヱネチヤのやうな海港の、水に面した廣場に數列の不思議な圓柱が並立ち、その下を騎士、美女きた惡魔が絡繹として練りゆく所などを、心の細い堅い鉛筆で極めて纖密に描いて、薄く彩色したのが一組かかつてゐた。Gustave Moreau の空想で、筆がそれに及ばないのは可憐である。

少年の日、余は中學校の歸途、しばしば砲兵工廠の前の畫工の軒下に立つた。道路に面した一面は硝子障子をはめてあつたから、道ばたに立つて畫工の揮毫を窺ふことはたやすかつた。頭巾をかぶり、ちやんちやんを着た高齢の畫工は、實に慣れ切つた手ぎはで、寶船を描き、熨斗を描き、寶珠の玉を描き、水瓶の花を描いた。そして必ず「贈、某さんへ」と筆太に記すのである。これはひらのゑかきであつた。處は違ふ。歴史は異る。然しなんと人生の歸趣と感情との相似たることとゝやと思ふ。余は少年の時の如く、しばしばこのメエゾン・ダングルテエルの店先に立つ。

その通りに交叉する他の小路になほ古く美しいのがある。一々說明してゆくわけにも行かぬ。左側 Rue des Beaux Arts の横道からは美術學校の正門が見られる。また右側には、「郵船テナシティ」の戯曲で知られた詩人 Charles Vildrac の夫人の經營してゐる畫廊もある。ギャルリイ・ヰルドラックが共號である。此家はもと有名の優人 François-Joseph Talma (1763—1826) の住む所であると云ふ。ヴラマンク、オットマン等の風景がその壁の主たる作品であつたが、又長く巴里にゐた一日本畫家の京都の舞妓を寫した油繪が暗いところに懸けられたのも見た。

さて道は愈よ l'Institut français の左翼に突き當る。Mazarin (Giulio Mazarini) に由りて外國學生の黌舍として建られたこの十七世紀の建築は、やや伊太利建築を想はせる處があつて、その靜かな中庭に彳むと、時として身のフイレンチェに在るかと疑はしめることがある。

この門を潜ると、マラケエの河岸。古本屋の木函胸壁の上に並び、かなたはセイヌを越えてルウヴルの遠見となるのである。

セイヌの河岸まで出てしまつては爲方がない。余の用事はリユウ・ド・セイヌの中ほどの處にある。余は最近所用があつてしばしばこの街を行く人となつた。一軒の古本屋と懇意になり、その年

寄りの主人が余の爲めに所要の古本を搜してくれるのを尋ねてゆくのである。

耶蘇會（コンパニイ・ド・ジエズウ）の學者の著作を蒐めた Backer や Sommervogel の圖書解題、Annati の奥州記、Cordier の著書目、Charlevoix, Pagès の日本史などは、余はまづ此家で親しくなつた。

或る雨のそぼふる暗い午後であつた。余はそのおやぢの葉書に誘はれて、その店の閾をまたいだ。何かまだ用事があつて落付かなかつた時、卓上に積まれた二三の古書を繙いて、余は突然自分の現にすむ時代と場所とから拉しさられ、思はず不思議な世界へ導かれたことがある。

一つは千五百八十二年、フライブルグで獨逸語に飜譯された Gaspar Coelho の報告書である。も一つは千五百八十六年羅馬に出版せられたる Guido Gualtieri の編輯本である。

飛び飛びに紙を飜すうち、いつの間にか身は可憐なる敬虔の四青年の心情に引き入れられ、古書堆かき古壁の間に、ともすれば寸隙を生じ、その蒼茫たる外光の裡に、マドリイを出で立ち、リスボアに足を停め、更にピザ、フイレンチエを經てロオマに入る、伊東鈍滿所、千々石鈍彌劍ル、中浦鈍壽理安、原鈍丸知野の幻を見る。

◇

主人は――ま白な頭髪に黒い帽子(ボンネ)をいたゞき、身には短き黒の仕事着(ブルウズ)をつけてゐたが――機會を見出してさう云つた。

「さうです。私のまだ若い時分でした。レオン・パジエスさんが亡くなつて――日本に關する本は隨分持つて居られましたが――その賣立があつたのです。本は大抵メエゾン・ネエヴとパイイウに行きました。――兩方共今有りません。メエゾン・ネエヴの方の出版物はリユウ・ボナパルトのルルウが引受けたのですが、あの本は今は何處へどう散つて居るでせう。私も少しは買ひました。然しもう今は何も殘つて居ません。あなたの御註文は古本屋仲間の月報へ廣告して搜して居るのですが、中々見つかりませんね。」

「伊太利、西班牙、葡萄牙へ行つたら何か手に入るでせうか。」

主人は肩を聳やかし、手を擧げた。そして曰つた。

「ビブリオテエク・ナシオナアルはどうですか」

「ええ、ぼつぼつと始めてゐます。中々進みません。」

余はふと其頁を飜して

「ああ、わたくしの久しい前から疑問にしてゐた事がやつと今分りました。」

「それは何ですか。」

「その四人の日本の青年たちが、何の國の言葉を使つたかといふことです。から書いて居ります。彼等は主として葡萄牙語を話した。西班牙語はそれほどよく出來なかつた。伊太利語は人の話すことは理解した。然し羅甸語はかなりよく習得した。それは本當でせうか。」

「……………」

「然し日本のセミナリオやコレジオで日本の學生に主に葡萄牙語を教へたといふ事が分つただけでも私に取つては大した進歩です。」

外から夫婦連れの客が入つて來て主人はその方に去つた。鼻眼鏡をかけて、愛嬌の乏しい眼付きをした――然し心の善ささうな妻君が聲高に話してゐる。多分この家の娘だらうと思はれる太つた少女は、向うの隅でタイプライタアを打つてゐる。

余の坐してゐる、大きな案(つくゑ)のまはりが靜かになつて、余はまた手中の本に讀み入る。古風な、片

言のやうな葡萄語は語る。純バルトロメオ(大村純忠)は純ミケレの母のその息子の旅行に反對することを恐れて、それを言ひなだめることに心を勞した。然し後には其母もこの光榮ある使命に同意した。純ジュリアンの母もまた心中に其息の出立を悲しんだ。

此記述によつて、かの四青年はもう古き昔の歴史上の幻ではなくたつた。年端もゆかぬ現實の人である。その母なる女たちも、太閤記、信長記などのうちの、夢の如き歴史的形象ではなくなつた。その限りなきの闇かば闇てゆべき肉身の女性である……

余は重き空想で壓せられ、醉人のごとき足取りで、腕に二卷の小冊子をかかへながらまたリュウ・ド・セイヌを歸り行く人であつた。英吉利屋の老書工ももはや眸には入らず、いつサン・ジェルマンの大通、いつサン・シュルピスの横町を通つたかも氣が付かず、ふらふらと自分の宿に入つた。

◇

我々が十數年前に所謂「南蠻熱」に浮された時には、夫に關する史籍は甚だ寥々たるものであつた。最も多く行はれたのは譯本日本西教史で、この外大學には數種の伊太利本があつた。多分バルトリイの日本史の古刊本であつたらう。當時余等はそれらの原書をば之讀きなかつた。日本語で書

かれた本とては、殆どないというてよかつた。九州大名の使節、伊達政宗の使者のことなど、さるで空想裡の影に過ぎなかつた。天馬異聞などといふ本の原本さへ知られてゐなかつた。

つひこの一月ばかりのうち、その方の書籍を注意して見ると、コルヂエエの書目に出ただけでも中々大部がある。是は主として倫敦の英國博物館の圖書館、巴里の國民圖書館及び英佛（稀に伊）に於て個人的に保管せらるる本の目錄だけであるから、更にワチカンの所藏、伊太利各地の圖書館をさぐり、またヹネチヤ、フイレンチエ、ピサ等の市史を渉獵し、或はリスボア、マドリイ、バストラナ、ゼビイヤ、バルセロナ又はクウバ、メキシコ等に之を求めたならば、必ずや之に漏れたるものの尙甚だ多きを悟るに至らう。これ等の研究上が我々の青年時代に旣に出來てつゐなかつたといふことに對して我々は誰にその不平を訴へよう。

この序に、順序もなく、彼等のことに關する斷片を書き付けて見る。

これ等四人の使者が歐羅巴に赴くやうになつたのは、耶蘇會の巡察師父、アレッサンドロ・ワリニヤニのはからひである。一說には、フランシスコ・シヤギエルが旣に計畫したことでもあるといふ。

「理解と趣味と智慧とのある人々をして歐羅巴を見せしめば、いよいよ天主の教を深く悟るに至るべし」と考へたのである。

そして上述の四人の青年が選ばれた。初は一行の主としてジェロニモ伊東が定められたのであつたが、是れは安土のセミナリオに在つて、船の出帆までに九州に來る間がなかつた。ドン・ミケレの母は、取り分け、我子の遠く行くのを嘆いた。

當時有馬には、一つのセミナリオがあり、二十六人の貴族の子弟がそこで教育せられた。然し時折通ひ來るものを併せれば、五十人に上つた。セミナリオは有馬に日本風に建築せられた。その他に僧院、禮拜堂があつた。またこれより小さい寺院は有家にも有つた。その年は六百人の人々が洗禮を受けた。そこでは知識の教育の外に作法、藝術も修業せられた。青年たちは皆よく勉めて豫期以上の成績をあげ、歐羅巴に生れた青年以上の記憶と理解とを示した。そのうちでも語學の習得は最も困難であつたが、然し數箇月のうちには既に讀み書きの出來るやうにたつた。その上にまた羅甸語及び音樂が授けられた。

其他豐後の臼杵には修道院、同じく府内には學林があつた。

中に就き安土のセミナリオのことは殊に興味が深い。信長が安土山に築城したが、伴天連オルガンチノはその機會を逸せしめずに、耶蘇教寺院の建立を請願した。信長は濠の一部を埋め立てさせてそこへ寺院の建築を許した。工成つて、信長自身に檢分に來た。そして建物が小さ過ぎるといつて更にそれを増築せしめた。それと同時に僧房とセミナリオとが建られたのである。

アレツサンドロ・ワリニヤニ師は青年使者たちと共にゴワまで行き、已れは東洋を去り難き事情の故に、その代りにロドリゲス師を一緒につけてやつた。リスボア（千五百八十四年八月十日）マドリイ（フエリペ二世の厚遇を受く）を經て、千五百八十五年三月廿二日羅馬に着いた。

彼等の歐羅巴に於ける行動はかなり詳しく記錄せられてゐる。殊に伊太利本日本使節記は、エヴラの大司教ドン・テオトニオ・ブラガンサ、西班牙王フエリペ二世、羅馬法皇グレゴリオ十三並世にシストオ五世の如何に彼等を優待したか、また羅馬入城の儀式、ヱネチアに於ける歡迎、マントワに於ける花火の饗應が、如何にはたばなしく、如何に敬虔に、時としてまた如何に物狂ほしく行はれたかを事細かに物語つてゐる。葡萄牙のギラ・ギソザの莊園で、ブラガンサ太公の御母、その子ドン・ヅアルテに急拵への日本の着物を着せ、日本の人一人に會はせまゐらせうと彼等を欺いた

といふも情深い話である。それ等の事に關しては他日ゆつくりと語り傳へる機會もあらう。

其他彼等の羅馬に於ける行動、九州諸侯が法王に送つた手翰、それに對する法王の答辭等は羅甸、伊太利、西班牙、葡萄牙、佛蘭西、獨逸語に記され、羅馬、フイレンチエ、パドヴ、クレモチ、エネチア、ミラノ、フエララ、リエジユ、パリ、リオン、ヅエエ、セビイア、ヂリンゲン、マカオ等に於いて刊行せられて居る。

マカオでは又エヅアルド・ダ・サンデが彼等の旅行記を羅甸語に翻譯して出版した（新村博士「南蠻記」）。この極めて珍しい本は、倫敦のブリチッシユ・ミユジアムに在る（此事コルヂエエの書に出てゐる。）（追記余は後に其六本を算へることが出來た。）

——或日余が巴里に於て既に甚だ高齢なる教授コルヂエエを尋ねたところ、教授は自分はそのフアック・シミルを作つたといつて、雨の日の暗い書齋の、ごたごたした書棚を捜してくれたが、見つからなかつたことがある。——

この本は是非見たいものと思つてゐる。

それやこれやで、余が頭の中には今や新しい幻影境が形成せられつつある。伊太利は既に之を看

たから再びそこに往くことも出來ぬ。然しピレネェの南は未踏の地である、一たびこの半島に到らば、古城の廢墟のほとりに、蒼然たる古寺の壁に、またもろもろの寶庫、文庫の所藏に、わがこの幻想に形態を與ふるに足る遺物も有らう

爾來余は西、葡の旅を夢みる人となつた。（一九二四年二月、巴里に於て。）

アンリイ・コルデエエ教授

巴里の Musée Guimet のM氏は Wenckstern の日本帝國圖書史（A Bibliography of the Japanese Empire）及びコルヂエエの日本書志（Bibliotheca Japonica）を推薦した。そしてコルヂエエ教授に紹介してあげても可いと言つた。

その頃は余の此方面の準備も至つて不十分であるから御斷りした。然し西班牙に立つ前には是非コルヂエエ教授に會ひたいと思つた。有名な支那書志（Bibliotheca Sinica）の他に、亞細亞に關する無數の著書の作家である。（註。同教授の著作は次の書に由つて知ることが出來る。Bibliographie / des Oeuvres / de / Henri Cordier / Membre de l'Institut / Publiée à l'occasion / du / 75e anniversaire de sa naissance / ...Paul Geuthner / ......1924）

其千七百八年十一月中金石志及美文學のアカデミイに於て講演したる「佛蘭西に於ける支那の影

著書（La Chine en France au XVIIIe Siècle. 1910.）は余の嘗て愛讀したるものである。そして今歐羅巴に來てこの方面の事物のかなり多きを見て、寧ろ其等に對する研究の十分でないのを感じたのであつた。

然し余が今回同教授を訪問しようといふ氣になつたのは、唯ぼんやりした豫感からであつた。之によつて余の西班牙、葡萄牙にはつきりとしたペルスペクチィヴが出來るだらうといふ希望からであつた。



第一圖

アンリ・コルヂエエ氏像

アンリイ・コルヂエエ教授

つひに醫科大學のB教授が余に紹介狀を書いてくれた。

「もう高齢な人だ。」と二度繰返されたのは何か意味があつたかも知れぬ「親切な人だからきつと會つてよく話してくれるだらう。」佛蘭西人が第三者の批評をなす時屢あの人はジャンチイであるとか、サンパチツクであ

ゐるとか、ないとかといふことに氣がついたことがある。そして其後、親く會つた人人からの印象で非常に親切な人と、それに反して極めて冷淡な人との二種がはつきり區別されるやうに思はれた。

コルデエニ教授は今は地學協會の會頭をしてゐる。でその集會のある夜なら自分で紹介してやらうといはれたが、予はその前に、その私宅に同教授を訪れた。トロキヤデロに近き或街に住んで居られた。

午後四時頃訪ねると不在で、七時少し前に再び訪れて會ふことが出來た。成程八十に近き高齢であるらしく見えた。

外には雨が降つてゐて、狭い書齋は甚だ暗かつた。書棚にぎつしりつまる本の背には往往支那文字のものもあつた。又同教授の多分若い時の肖像だらうと思はれる鉛筆畫の胸像などが懸つてゐた。日本に於ける加特力の歴史に關する書籍を搜すのには西班牙、葡萄牙よりも寧ろ羅馬に往つた方がいいと曰はれた。特にそこの信教協會の圖書館には、何人からも整理せられない手稿が澤山あると。

西、葡中では、バルセロナの圖書館がよい。その日本に關する書目は W. E. Retana の作つた

カタログ、「フイリツピンの煙草會社がバルセロナに所藏するフイリツピンの一般歴史の書目」中に發見せられると教へてくれた。

またたとへば倫敦のブリチツシユ・ミユジアム所藏の稀覯本たる孟三德（Eduardo de Sande）のマカオで印行した第一回日本遣羅馬使の紀行は、自らそのフアツク・シミルを作つたことあるといふので、いらいらした老年の手付で、本棚のあちこちを捜してくれたが、到頭見付からなかつた。既に晩めしの時間であるから予は後日を約して辭去した。（一九二四年四月記）

註。その後余は一佛國新聞でコルヂエエ教授の訃を悉つた。今ここにその年月日を詳記するを得ないのは殘念である（追記）。

ボルドオ

今から六十餘年前のテオフイル・ゴオチエの紀行で見ると、Bordeaux（ボルドオ）も今のボルドオとは餘程變つて居たらしい。（Théophile Gautier: Voyage en Espagne. 初版は 1843.）「西班牙の影響が已に感じ始められる」と彼は記してゐる。

昨日の朝八時十二分の汽車で巴里を立つてその夕方六時頃この都會につき、そして夕飯前中央の繁華街を散歩した時には、所謂西班牙の影響なるものは予にはまだよく感じられなかつた。今日 Rue（リユウ） Sainte（サント） Catherine（カテリイス）、またそれに交叉する Rue（リユウ） de（ド） l'Intendance（ランタンダンス） などを歩いて見ると、少しそれらしい氣持を感ずる。道が割合に狹く、そして左右の商店が軒から道に日蓋を出すところ、殊に夏の日が街道をぎらぎらと白く輝かせるところなど、人をしてそゞろにクウバ島の首府ハバナの町などを想起せしめる。然し凡ての掲示が西佛兩語で記され、殆ど凡ての本屋が此兩語の書籍を賣る

といふやうなことは今はない。

此都會の女についてゴオチエは述べて日く「彼等は實際トレ・ジヨリイである。殆ど凡てがまた直た鼻立をして居り、頰に顴骨尖らず、その大きなまつ黒な眼は眞に美しい。髮はずつと後に出上げてたマドラアを掛け、毛の頂に落ちかかるのを喜ぶ風情である。また足まで届くシヨオルをはおる。腰は細く反り、極めて輕捷である。頭上は籃、包、小瓶を負ふ。宛として往昔の希臘の女たち乃至ナウシカの王女を見る如くである。」

さう云ふ風俗はいまは見られない。然し眼の碧い女が少く、それに反してその黑色たるがをいのは事實である。

此地の案内記を買つて讀むと亦訪ふべきいろいろの記念碑、建築物の有るを知る。予は既に是等の名所見物に倦きて、美術館をさへも窺はうとはしなかつた。唯偶然の漫歩の序に Pey-Berland の塔（十五世紀）、Saint André の寺院（十一—十六世紀。英國治下の所建）、市廳、大劇場（一七七三—一八〇年。リツシエリエ將軍の命によりヰクトル・ルイこれを建つ。その內部の階段はガルニエを歎賞せしめ、巴里オペラの建築の階段を作る構想に資せしといふ）を見た。

ここの醫科大學の寄生病學の主任S氏は、助教授の試驗を受ける爲めに、つひ近ごろまで巴里の大學に來てゐて知つてゐるからその教室に往つて見た。また皮膚病學の教室に Dubreuilh 教授を訪ねた。その他また一二の病院を觀察したが特記するに足ることもなかつた。

コメヂアの前のキャフェ・ド・ボルドオといふ家で喫した中食は予を喜ばした。殊に苺、櫻實等の果實は巴里より遙にいい。此地は名だたる醸酒地である。が、侶伴なき一人旅では古酒の榮燿をしようといふ氣も起らなかつた。（五月廿七日）（以上大阪毎日新聞所載）

えすぱにや記

サン・セバスチヤン

西班牙領に入つて予の第一に迷ひこんだのは、思ひもよらぬ立派な海水浴場であつた。尤も早朝ボルドオを立つて後のピレネエ以南最初の西班牙の都會はイルンであつたが、あまり小さな新開地であるから電車でここまで來て見たのである。「天井には手が屆かぬ。」「四年毎に二月は廿九日である」といふベルリツ仕込みの西班牙語は早速の役に立たなかつた。が然し數字のことばの知識の爲めにひどい赤毛布を演ずることもなかつた。

ここは佛蘭西のニイスのやうな町で、エスパニヤとはいひながら、ボルドオが西班牙に似る以上、佛蘭西に似て居る。わかい女は全く巴里風であり、青年は巴里の人よりも更に一層ハイカラである。澤山のカフエ、立派なカジノ、孰れも巴里又はモナコに見るが如くである。然しカフエでくれる珈琲は到底巴里のそんな店では飲まれぬ好味である。



第二圖　サン・セバスチアンの或る酒場

が、強ひて地方色を求むれば、建築の様式、男の大黒帽また華かな服装の兵隊や巡査にそれを感ずることが出來る。殊に兵士が群をなし、町の表面の生活の主要分子をなしてゐるところを見ると、已にこの國の國柄を想像することが出來る。この點甚だ支那の都會と似て居る。

陸地は狭い口を殘して巾着の如く海水を包む。それでこの灣は貝殼（コンシャ）の名を有する。狭い岸には旅館、カフェ、カジノ等が櫛比してゐる。

予は夜行で Madrid（マドリイ）市に行くことを好まなかつたからこの町に止つたのだが、今日家の人から

聖フランシスコ・ハビエルの出生地にゆく道を聞いてからは、そこへ往くのが義務であるかに感じられ出した。マドリイに往く切符を買ふべく停車場に向つたが、その前の橋の上に立つて思案して、つひに明朝パンプロナに行くことに決心した。

ハビエルの城に昔の面影のないことも聞いてゐる。そして其地は聖フランシスコの生活には或は重大な意味を有つてゐなかつたかも知れない。然し日本人としては多大の好奇心を抱くに足る土地であり、且つや邦人のここに參詣したものは甚だ稀である。これらの事情が予のそこに到る決心を促すもととなつた。

カフエの外に此所の菓子のうまいことも附記する價値がある。それは佛國に近い故であるのか、それとも昔からの傳習であるのか。（五月廿八日）

ハビエルの城

（聖フランシスコ・シヤギエル出生の地）

Xavier 上人の名前はいろいろに發音することが出來る。西語の V は強く B の如く響く。古文書には同上名が Xabierre, Ssavierr, Ixavier, Exaverre, Xavierr と書かれて居るさうである。語義は Casa nueva 新家であると云ふ。

その昔日本に於ては此パドレは何と呼ばれたことだらう。當時日本に於て最も弘く行はれた外國語はポルツガルの語であつた。上人自身もしばしば此言葉で手紙を書いた。それで予は新村博士に倣つて上人をシヤギエルと呼び奉ることにしよう。

上人出生の地には、近ごろ新に城と禮拜堂とが建てられた。土地の人は之をカスチイヨ・ハビエルと呼んでゐる。

この城に詣るのには、ピレネエ山脈の南方の都會 Pamplona（パンプロナ） を過らねばならぬ。即ちサン・セ

バスチャンを朝七時四十分の電車（であつたか輕便汽車であつた）に乘ると、午前の十時過ぎには
パンプロナの市に着くのである。

この市は千五百十二年にカスチイヤ（卽ち今の西班牙人）に滅されるまでは小いながら獨立の王國の首都 Navarra であつた。そして上人が出生せる頃までがその盛期であつたのである。父の Juan de Jassu はボロニヤ大學出身の法律學士で、この王國の重要なる臣（始めには大藏卿、後には宰相）であつた。

所がフランシスコが物心付く頃からこの王國は不幸に襲はるることになつた。そして一揆、敵襲、離散、破壞、追放、監禁の一も闕けぬ騷動が起つた。卽ちこの王國とカスチイヤ國との間の戰爭が彼の六歲の時始まつたのである。法王ジュリオ二世が佛王ルイ十二世と爭ひ、カスチイヤのフェルナンド王は法王に左袒した。ナバルラ國は兩者の間に中立を保つことが出來なくなつて、遂に佛王に與するや、パンプロナの市は西兵の砲火に破れ、市民は法王より破門せらるるに至つた。ナバルラの王はフランスに遁げた。

フワン・デ・ハツスウはその後も故國の恢復については努力を怠らず奔走したが、然し彼の夢は

實現せられなかつた。そして千五百十五年の十月にはこの世を去つた。ソス、サンゴエッサ等に於けるハビエル家の所領は公賣に附せられた。そしてナバルラ王國も亦西班牙に併合せられたのである。ここにフランシスコは孤兒となつた。

その後三月でフエルナンド王は死し、カルロス五世の世となり、佛蘭西ではルイ十二世歿後フランソワ一世が續いた。ナバルラの王も異境に死して、ここに戯曲の凡ての人物は一變したのである。然し Azpilcueta の城（母方の家族の所領）には王黨のものが殘留して居たので、カルデナル Ximenes はナバルラ國中に在る不要且危險な城砦を毀たしめた。初めにばアスピルクエタの城、等で亦ハビエル城の塔が破壞せられた。

ハビエル城に在つては塔は毀れたが、屋形の方は殘された。が、砲眼を備へてゐた其外廓は取崩された。其他小城砦並に揚橋も壞され、城廓の觀を與ふる部分は凡て取去られたのであつた。そしてそこに西班牙兵が止まつて監視の役をした。

パンプロナも同樣の運命に會し、カルロス五世はここに城廓を築く爲めその用材をばナバルラの舊臣の家から集めたのである。ハッスゥの屋形も取毀たれ、そこの材木は取り去られた。

この悲哀に遭遇した時フランシスコは十一歳になつてゐた。

聖フランシスコ・シヤギエル上人は慓悍たるバスク族の血を承けてゐる。そしてその少年時代にはかくの如き世情を見た。而もその幼年時代には嚴肅な宗教的教育を受けた。後世の彼の勇敢な傳教事業も、是等の事情に考へ及ぶと、其精神的の聯絡を知ることが出來るやうに思ふ。

パンプロナからハビエル城に行くまでに、序に言つた Sangüesa（サングエサ） と云ふ小な町がある。所でそこに往く電車は午後二時五十分でなければ出ない。そこでここの一旅館に行李を預けて市街の見物に出かけた。ホテルは佛蘭西名を有つて居り Maison neuve といつた。是れが Xavier の語の意譯であつたことは後に始めて知つたのである。この町の「コンスチツウシオンの廣場」と呼ばれる處はエスパニヤに固有な廣場の體裁を爲してゐた。即ち中央に方形の空地あつて、その四周には二列にアカシヤの樹を植ゑ込み、それを取り圍んで建てられた家の最下層は、廣場に對して柱列を作る。此種の市街設計は、予は始めて之をクウバ島のハバナに於て見、奇異の感を抱いたことがある。即ち予が少年以來空想した「西洋」といふものが、空想以上に強烈に其形を現はしたからであつた。

その後予は英佛の諸都會を見たが、ハバナほど「西洋」らしく感じた所はなかつた。この地はハバナから見れば本家に當るものであるが、その富をも、その珍奇な植物をも持たぬが故に、そつけなく、うら寂しく感ぜられた。

折柄葬式の歸りと見えて、黑の高帽、上下ともに黑のフロックコオトを着けた人人の通るのに出會つた。かかる片田舍にも似ず、その服裝は正しく且つ清げである。邊幅を修める趣味がこの國民にあることを予は段段と知るやうになつた。

わかき女たちの着附けは全く佛蘭西風である。後頭に高き櫛を刺し、頭巾（マンチリヤ）をかつぐ風は甚だ稀にしか見られぬ。それに反し男の小さい、黑又は紺の無緣の丸帽を被るものは甚だ多く見た。フランスで Béret と稱するものである。

建築は大したものがなかつたが、偶然或家の入口の兩側を飾る軒燈が注意を引いた。それにはアラビヤ好みの金具がついて居り、曾てはモハメツト族を住ましめた此地の地方色を濃厚に印象するものであつた。

サングヱスタまでの電車線路は風景に乏しい。唯一箇所だけ、溪水が高い水成岩層を貫いて造つた奇怪の絶壁があつた。車が隧道を拔けると、數十丈の斷崖が鐵道の上に立ち塞り、近き崩壊の達さへ見えて、氣味わるい限りであつた。

サングヱスタは失はれたる小村、遊子の心を傷ましむるに足る。イタリイのシシリイ島邊の小村落に似るがそこの紅綠なく、そこの快活なく、暴く且つ寂しい。ここから馬車を傭うて、八キロメエトル許りの行程、ハビエルの城に到るのである。

耶蘇會のブルウ師のシヤギエル傳にはかう書いてある。「是より（卽ちサングヱスタからは）新鮮にして蔭多きバスクの鄉土を離れて、人はエブロ盆地の蕭條たる風物中に入る。其後なほ一里ばかり、小石を蹴り、砂土を踏んで、馬上田畝の間を横ぎる。已にして山間の小徑漠漠たる谿谷に導き、彼方には日に燒け乾きたる連山廣闊なる地界線を成す。北面して波形を畫く傾斜の上に一小部落あり、十餘の小屋と貧寺及び荒廢せるカスチイヨ共間に聳立す。是れハビエルの鄉なり。」（A. Brou, S. J.: Saint François Xavier. II Edition. Paris, MCMXXII. Tome I. P. 6.）

目睹の光景は全くその通りである。途中しばしば雷鳴し、沛然たる驟雨が來た。その雨とその晴

とが、丘陵の面に色彩上の變化を與へなかつたなら、そして時時の風が、麥の畠の麥の穂の上に、海潮の面と同じやうな波紋を畫かなかつたら、この車行は退屈の極みであつたらう。草さへも斑らにしか被はぬ丘、いたいたしき麥、小さき葡萄の列、その他には數へるほどの樹しかない。樹もアカシヤと橄欖（?護讃樹?）、まづこの二種類である。



第三圖　パンプロナ市の或家の軒燈

この風物の裡にフランシスコの少年時代を入れて考へることは、寧ろ心を痛めしめる。たとへ其時代には立派な邸宅があり、城廓が立つてゐたとしたところで、荒涼單調な山水は、このままであつたに違ない。

この鄕は彼が母方の所領であつた。母の名は Maria de Azpilcueta。フランシスコは、彼女と

フワン・デ・ハッスウとの間の第六子で、千五百六年四月七日の聖週の火曜日に生れたのである。六歳になるまではこの郷土に於て幸福に且つ宗教的に嚴格に教育せられた。目(ま)のあたりこの土地を見て、そして耶蘇會の事業を考へると、兩者の間に、その氣分に於て、相通ずる所のあるのを見出すのである。

車が城前の坊に着いた時は、支那の田舍を旅行して古寺前の客棧に着いたと同じ心持がした。此地は全く歐羅巴の山西省である。人の數よりも畜類の數の方が多く、驢馬の悲しい鳴聲は、この村落の重要なる生活記號であつた。

今のハビエルの城(カスティロ)はブルウ師の記す所と同じではない。それは數年前に一貴族の夫人の喜捨に政府の補助を併せ之を新築したからである。そし生生(なまなま)しい紅煉瓦造りの宏大なるものとなつたので實際見るよりも空想に畫いてゐた方が增しだつたと思はれた。

それでも日のあるうちにと城の見物に出かけた。予を案内してくれた僧侶は二十餘年間印度に於て布教に從事してゐたと言つて、片言の英語を話すことが出來た。お互の話、要領を得ない。この

建築のうち、昔のままであるものとては石の階段と、二枚の鐵の扉、家族の禮拜堂（少フランシスコが此裡に祈念したといふ）、これからその本尊たる十字架像であるといふことであつた。

石の階段は本物らしいが、そこをば煉瓦壁、窓、鐵の欄干などで飾つたから、好い感じは起らなかつた。そしてその壁には、近年日本の信徒から寄贈した三幅の繪、一本の旗などが懸つてゐた。畫も字も田舍人の筆で、頗るひどい代物であつた。「侯爵夫人カルメナ・デ・キラエルモサに獻ず」とある可き「獻」の字が「健」に代つてゐる爲めに、おかしなことになつてゐた。旗の方には大友義鎭の三百五十年忌の記念として寄贈するといふ意味の文句が記されてあつた。

それから昔のままであるとか云ふ禮拜堂、その本尊たる十字架上の耶蘇は、神秘的といふよりも黑く煤けて氣味のわるいものであつた。

もう日は落ちて、寺内は暗くなつた。そこを立ち出でて境の胸壁から四圍の丘陵を眺めると、白黑の兇さ、旗の寂しさが身に逼つた。

ポサダ（宿屋）の窓から見る寺院前の廣場はこの村全體の夕方の營みを展開してゐた。其一隅には石垣の下に水道と家畜の水かひ場があり、その爲めに、古風な水瓶を持つて女たちが水を汲みに

集まる。牛、馬が水を飲みに來る。其他犬、猫までも夕方の空氣を吸ひに外に出て來、山羊、羊及び既に記した驢馬がてんでに散策を試みてゐる。人と畜生とが共同して世帶を持つてゐるやうな村である。

一夜明ける。

前夜はすばらしい雷鳴で、寢室の天井あたりへ雷が落ちるのではないかと懸念せられたほどであつた。雷鳴の爲めに睡眠が出來なかつたなどとは、生れて初めての經驗である。然し今朝はもう好く霽れた。

朝十時ごろ又バジリカを尋ねると、こんどはその首座のフランシスコ・エスカラダといふ人が會つてくれた。自國語の他には拉丁語しか話さず、唯ゞ顔を見合はす許りである。そのうちに、彼の呼びにやつた尼さんが二人來た。一人はわかく、一人は年取つてゐた。二人とも佛蘭西語を好く話す。本來フランス人であつたのである。どうしてフランス人がこんなエスパニヤの僧院などに居るのか、事情が分らなかつた。

この首座の僧にはこの城に關し、又聖フランシスコ上人に關して二三の著述がある。その爲めの



第四圖　ハピエル城の舊觀を殘せる部分

参考書を見せるとて人をやると、少時して、一人の少年が大籠に一杯の本を持つて來た。就て見ると、さして珍品でもなく Cros（クロオ）、Pagés（パジエス）、Guzman（グスマン）、Delplace（デルプラス）、Bartoli（バルトリイ） の程度のものであつた。

首座は予を導いて、再び舊き禮拜堂、又新築のカテドラルの内部等を見せしめた。後者の禮拜堂の壁には日本人パヴロ・マキ、ホワン・ゴトウ、デエゴ・キサイ（？）等のモザ

イコ像が、他の殉教者と同列に並べられてあつた。孰れも其手に十字架と椰子の葉とを持つてゐる。

予は主僧及び二人の尼さんたちに分れて宿坊に歸つた。宿の構造や食物のことなど話すと面白いが、説明が煩はしい。ただ魚肉、羊肉を調理するに多量の橄欖油を用ゐることだけを告げて置かう。一種の味と一種の臭がある。

午後はパンプロナに歸り、ここに一宿した。きりぎりすの聲がこの町には聽かれるのであつた。歐羅巴に於て此蟲を聽くはこの時が初めてである。ゴオチエの書に西班牙の人は鳴く蟲を飼ふと書いてあつたことを思ひ出す。つまらぬ事ながら、この國の言葉で商店の事をアルマセンと云ふのがおかしく思はれた。天草の田舍の店で物を買ふと、有るものを「ねい」といふのと好一對のしやれである。

食後コンスチツウシオンの廣場に行くと、そこには人人が雜踏してゐた。カフエエに腰かけて、その群を眺めてゐると、混雜のうちにおのづから規律のあることが段段と分つて來た。彼等は皆廣場の一隅を歩いてゐるのであるが、皆二人、又三人の横列をなして居り、それが更に縱隊を成し、此約一中隊ばかりの男女の群が、その廣場の中心に近きは左に進みその外側のものは右に進むので

ある。卽ち或る一點に於てはその行列は方向を換へ、側を異にして逆歩するのである。予は嘗つて、ブエノス・アイレスに此風習のあることを傳聞した。で今、ははあ、是だなと思つた。青年男女の相識るには好機會である。

十時半ごろ宿屋に歸ると、食堂は予の喫飯せし時よりもこみ合つて居た。予のフランス風の夕飯時間は、この國の習慣より二三時間も早かつたのを氣が付いた。（一九二四年五月廿九三十日、パンプロナの一客棧に於て。）（中央公論所載）

サラゴッサ

Zaragoza(サラゴツサ) には午後着いて、まづ何よりも市(まち)の見物に出かけた。廣い Ebro(エブロオ) の河、それに渡した七つの穹窿のある 石橋(プエンタ・デ・ピエドラ)、是れが何と云つてもこの市の景觀の第一である。若し橋を渡つて彼岸から見たらば Nuestra(スエストラ・) Señora(セニヨオラ・) de(デ・) Pilar(ピラル), La(ラ・) Seo(セオ) 等の大寺、取引所(ロンハ)(孰れも多大の回教徒者の趣味を入れてゐる)の並び聳ゆるものがあつて、その眺めは一層であらう。

この市(まち)は我我日本人に取つてなかなかになじみ深い土地である。千五百八十五年(天正十三年)陽暦八月の某日に九州諸侯の使者ドン・マンシオ伊東某他(ほか)三人の青年がここを過ぎてゐる。それは一行が既に羅馬に至り法王に謁見しての歸路(かへりみち)である。

(Guido(グイドオ・) Gualtieri(グワルチエリ)(千五百八十六年板日本使節記百五十一頁)は語る。「時恰もカトリコ教國王(註フエリペ二世)は Monzon(モンソン) の地にましまし、數月以來そこに行宮(あんぐう)が設けられてあつた。日本

使者の一行のその地に達するや、陛下は彼等の爲めに善美を盡した居室を準備せしめたまうた。かくして謁見の御儀があり、前回と同じく（註、使節たちは往路にも陛下に謁したのである）陛下は太子並に諸皇子と共に直立したまひたるまま彼等を引き、有りがたき御言葉を下したまうた。その後は勅令によりその凡ての費用は公より支給せられ、一行はマドリイに向ふ途にサラゴッサを過ぎた。ここでは其爲めに市民のいろいろの催があつて滞在三日に及んだ。中に就き、彼等の前にて美しき對話が朗讀せられ、その曲中には日本、スパニヤ、イタリヤが現はれ出で、一行の旅行に關して問答する所があつた。云々」

更に千六百十五年（慶長廿、元和元年）の支倉常長もこの地を訪れてゐる。一行の羅馬に向ふ路にマドリイにフエリペ三世に謁し、それより Alcala、Daroca を經て、馬車でこの市に來り著いたのである。

「奥州記」の著者 Dottor Scipione Amati は記して曰く「九月三十日の第二十四時に同市に著し Gielbes 侯 Don Diego Piementello は翌朝豫め人を遣はして使節の手を吻ひて歡迎の辭を陳べしめた。後一行を朝餐に招き、且つ市の見物の爲めに二輛の馬車を準備せしめた。人人は之に乗

トピラルの御寺に赴いた。是れは基督教徒の間には有名な靈場で、一名 Camera Angelicale と云ふのである。寺に入ると、音樂、儀式、オルガノに由つて、座主及び諸役僧に迎へられ、一行はこの禮拜堂に於てメサを聽き、かの貴き柱を拜し、また數數の寶物を觀た。それよりサン・フランチェスコの御寺に赴き本堂、僧院を觀、その廻廊を通つて副王の館に入つた。」

それから副王の館にて饗應を受け、食後二時間ばかり會談し、太公は一行に馬車を供して散歩せしめたなどとある。人人はなほ日本服を著て居たと見えて「珍らしい人人及びその立派な衣服を看せしめむが爲めに、その夫人を訪問することを許した」とも言つてゐる。

文中の貴き柱といふは Pilar とも、Columna immobilis とも云はれ、使徒ヤコブ Santiago de Compostela に赴く時、聖母この柱の上に現はれたといふ傳説に據るのである。

その時は今ではないが、彼等が見たエブロの河、その七穹窿の石橋のたたずまひなどは十分にその當時を想像せしむるに足る。

マドリイのプラドの畫廊に Velázquez の女婿 Juan Bautista del Mazo (1630—87) の畫いた「サラゴッサの景 (Vista de Zaragoza) といふ大幅がある。この市の暴動の後、千六百四十七年



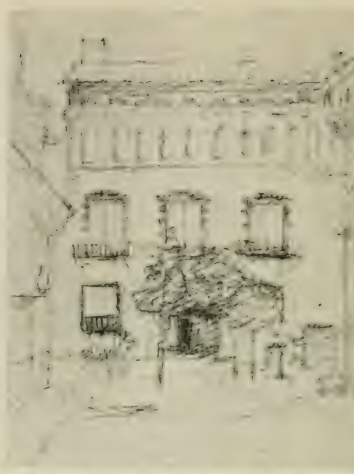
第五圖

フワン・バウチスタ・デ・ル・マソ筆サラゴツサ風景

の作に係ると云ふが、成程かの七穹窿の大橋の中央部は破壞せられて居り、前景なる河岸には騎馬又徒歩の士(さむらひ)が物物しげに立つてゐる。畫の此部はベラスケス自身が加筆せるもので、フェリペ四世の宮廷の人人を現はすものだとのことである。然し河の彼方には大厦尖塔が立ち並び、その上の空こそは重く曇つてゐるが、それと思つて注意しない限り、さして不安な氣分はない。若しこの慘憺たる破壞の姿を見ないことにし、またこの歷史的事實からの聯想を阻止し、却つて前景人物中に、空想的に騎馬の日本人の姿を入れて考へるとしたら、正に是れ貴人に護られつつこの市を過ぎ行くわが支倉が道中圖となるのである。

　予のこの散歩の途中に、少し入りこんだ小さい路次にふと心を引く家家を見出した。何が心を引いたかは確實に追

究することが出來なかつた。家の前に狹い前庭があつて、疎らに木が生えてゐる。廣い入口からは暗い奥がふかぶかと見透される。家は三階で黒塗である。第一階には入口の左右に大きな窓が二つ、二階には三つあり、孰れもその腰に出窓の欄干が設らはれてある。第三階には狹い窓が澤山並ぶ。そして繁き飾の附いた蛇腹の上に屋根がある。この家の左右には、前庭に面して、鉤の手に二棟の家が立つ。一瞥の印象は懷しさであつた。それは多分（震災前の）東京の河岸に立つ土藏造りの家などと共通の分子があつたからであらう。同時に亦この家の構造にヱネチア風の所があつて、それが異國趣味的（エキゾチック）且曼底（ロマンチック）の或る響を鳴らしてゐたものと見える。



第六圖　サラゴッサの或家

歸途一珈琲店の路上の椅子に腰かけてゐると、西班牙の帽子をかぶつた男が予に話しかけ、そして予の問に答へてマドリイに於ける二三の宿屋の名を敎へてくれた。その Hôtel Roma は後に實

與予に快い滞在を可能たらしめたのであつた。予はこの地に宿泊することなく、夜行でマドリイに向つた。（予の此地を過ぎつたのは千九百廿四年の五月卅一日である。而して此部分の記事は後日の追懐に據つたのである。）

マドリイ市

市街の外看

此首府の名をば西班牙の人はマドリイドとは言はないでマドリイと發音する。予はサラゴッサから來て（六月一日の）朝の九時過にこの地に着いた。停車場にはきれいな娘さんたちが大勢ゐて、金をねだる。予は始めは應じなかつたが、第二の群には金を拂つた。いはゞ「花の日」ともいふのであらう。さうすると粗末な布製の赤い花を襟にさしてくれるのである。

停車場から市街へ出るとかういふ女の群はその數を增してゐた。彼等は道路の中央に立つて、走る自動車をもとめるのであつた。見れば一人の男の襟に十數個の花を差したのもある。女の人には賣らぬのか、女の人は花を刺してゐない。

此風習は近來は日本までも傳はつて來たが、好いと評すべきか、惡いと評すべきか、予には別に

考へもわかぬ。然し後で宿屋の男にきくと、さう云ふ女たちは皆良家の子女であつたさうで、そのお蔭で、予はいち早く西班牙の若い女たちの顔立、服裝を識ることが出來た。彼等は皆濃い栗色の髮の毛を有して居り、往往日本でいふ黒髮に近い色もある。ブロンドは殆どなく、明るい褐色も少い。眸は茶色が多いが、蒼味がかつたのも少くない。服裝は全くア・ラ・フランセエズである。高き帽を着し、白或は黒のマンチリヤを被つたのは、派手なショオルを被へるものと同様、數へるほどしか見られなかつた。

　顔立の點は、ベラスケスの繪に見る瓜實顔（長めの卵なり）ばかりと云ふのではない。然しさう云ふのはかなり多かつた。まるでベラスケスの中の女が巴里風の衣裳で出て來たと云ふのがあつて不思議に見えた。顔色は黄くはない。黄いのはアラビヤ人の血が雜つてゐるのである。そして體は概して佛蘭西の女同様小さい。かの Gautier は四人のうち三人は美しいと云つたが、少くともマドリイの市で、今日の花の日に見る限りに於ては、その言を首肯することが出來た。

　「マドリイに來てまづ聽くは水賣の聲である。Agua, agua, quien quiere agua? Agua helada, fresquita como la nieve!（水、水、水はよしかえ。冷い水、雪のやうにつめたい水。）と女、男

が賣りあるく。」とはゴオチエの本の中にあるが、それは六十年前の事、今はそんなことはない。然し暑氣もひどいに相違ないが、この町の人はよく飲物をのむ。その爲めに巴里風のカフエエと北米風の飲料店とがある。

一體 Puerta(プエルタ) del(デル) sol(ソル) から Calle(カエエ) de(デ) Alcala(アルカラ) の通を中心とした最も繁華な街區に西班牙の地方色を捜さうとしたら、それは間違ひである。今のマドリイ市は、まるで植民地に出來た新開の都會である。謂ふまでもなく、その第一の傾向は「アメリカ風」である。建築材料はやや粗末だが、また其趣味も概して劣るが、新しく建てらるる家は十階前後の層を有し、その下層に芝居、カフエエ、商店等をつくり、その趣味、傾向、まるでアメリカである。恐らく歐羅巴の都會では一番アメリカ風のものであらう。或はこの傾向は南米から入つたのかも知れない。新聞ではヤンキイと云つて罵るが　此都會は全くヤンキイ風の勢力下に在つて、舊國首府の品位を見ることは全く出來ない。

第二は巴里風である。女の服裝の他にはこの市のカフエエが之を代表する。相當の宿屋の料理は佛蘭西風である。

このカフエエには朝から晩まできちんとした服裝の紳士が坐してゐる。この國の人の邊幅を修む



第七圖　古石版のマドリイ市

ることを喜ぶ傾向は予は已に氣付いたのであるが、彼等のズボンには筋の通つてゐないことはない。そして貴金屬の商賈は、（趣味は少しく惡いが）孰れも驚くべく高價な品物を蓄へてゐる。

西班牙の富は一體どこから來るかとは、予のマドリイに入る第一の日から疑つた所である。

大通の商店も朝の九時にはまだ戸を開けぬ。街道は夜の二時三時まで雜沓してゐる。そして食事の時間が不思議で、晝は二時か三時、夜は九時半から十一時である。それ故食後に仕事することは出來ぬ。食前に仕事することも恐らく出來まいと思ふ。カフエエが繁昌するわけである。

予の考ふるに、彼等は實際すべき仕事がないであらう。それ故時を惜しむといふ觀念に乏しいのだらう。學者の數は少く、

何れの方面も名作名著に富んではゐないらしい。

西班牙は既にその使命を終つた人人の國であるかに見える。

マドリイの第一日の印象は、少くとも予に取つては右の如きものであつた。

國民圖書館

此日宿に着いて荷を置くとすぐ予は國民圖書館に行つた。この圖書館は又世界に有數のもので、ベデカによると多數の原稿、版畫の外に六十五萬冊の印刷書を有するといふ。

新しい宏壯な建物で入口には Servantes、Lope de Vega 等の立像を据ゑる。内に入ると右に事務室あり、左に草稿の文庫あり、つき當りが讀書室である。讀書室の前房にはただ一人の番人が居り、そのわきに目錄棚がある。目錄は木にたつてゐて總數百冊もあるか。さて讀書室はと見ると、二百人ばかりの人の坐り得る卓があり、建物の外部の立派なのに似ず、荒廢の看を呈してゐる

坐してゐるものを見ると、生理學書を讀む青年、乞食のやうな服裝した老人等二三十人にも足らぬほどであり、之を倫敦、巴里の圖書館と比べると全く別趣である。

本は一時に一種、冊數は二卷以下を貸してくれる。一度一度返しては借りるのであつて、その間十分なり十五分なり待たねばならぬ。「死は西班牙より來れ、其歩遲からむ」といふ相だが、本の配達の遲いのを待つは大儀である。

この圖書館には別に Museo-Biblioteca de Ultramar と云ふのが附屬してゐる。これは千八百八十七年にフィリピン群島に關する記念物の展覽會のあつた時に出品せられたる書籍を土臺として、後に之を常住の圖書館としたのである。この圖書館のカタログも千九百年に出版せられてゐる。この方の圖書の閲覽室は他にあり、そこにはムリイヨ、ベラスケス等の素描もあつた。ベラスケスの素描は、小さいもの一枚であつたが、あまり感心しなかつた。

事務員の爲めの書目索引室は別にあつた。そこで自ら書目を搜すことは許されなかつたが、書名が分れば番號を搜してくれるし、また予は特に予の望む範圍の書籍のカタログを集めて貰つた。

さて印刷せられたる書としては、予の知り得た所では、そして書の日本に關するものとしては、稀有の珍本といふやうなものを發見しなかつた。書目をコルヂエエの歐文日本關係書目と比較するとそれに無いやうな本は殆ど無かつた。大抵は倫敦か巴里かの圖書館で見出されるもので、その爲

めにわざわざマドリイに來るほどのものとては無かつた。偶あれば（コルヂエニに名だけあつて巴里、倫敦等になき本。予は支倉六右衞門に關するものを捜した）他との合本でその部分だけむしり取られてあつたりした。例へば Relacion / breve, y svmaria, del / Edito que mãdó publicar en todo su Reyno del / Boju, vno de los mas poderosos del Iapon, el Rey / Idate Masamune……Gamarra, 1614. の如きである。尤も二葉の新聞である。）或は全く紛失してゐたりなどした。例へば、セビリヤ版一五八二、八三、八四年、日本年紀。）

然しながらこれは世界の圖書館との比較の上であるが、さすが西班牙のこと故我我の垂涎に値する書籍は實に夥しく存した。日本にはこの種の書籍はまるでないので、日本の圖書館に比すれば無論材料豐富である。（追記。予は當時東京の東洋文庫の事を知らなかつた。且つこの文庫はその後廣くその藏書數を増した。）

圖書目錄のうちではコルヂエニ教授の特に重要視したレタナのフイリピン刊行書目が數種あり、予は之によりて多くの書名を知り得た。其一種は之を求むることが出來たが、他のものはマドリイの本屋では之を尋ね得なかつた。

その第二の一種の裡に左記の書名の記載せらるるを見た。

24. VIRGEN S. MA-/ RIANO TATTOQI ROSARIO / no xuguioto, vonagiqu Jesusno / mimano Cofradiani ataru / riacuno quirocu. / CORE PREDICADORESNO Mon-/pano vehi-Padre Fr. Juan de los An / gelesno fonyacu nari / SCVTUM (*Escudo de la Orden de Predicadores*) FIDEL / Odinariono yuruxino comuri, Binondoeno S. / Gabrielno Hospitalni voite fanni firaqu / mono nari. 1622.

26. VIRGEN S. MARIANO / TATTOQI ROSARIONO IARDIN / tote fanazoni tatoyuru qio. / VONAHQU JESUSNO COFRADIANO / REGIMIENTONO RIACO. / Core Predicadoresno mompano vehi Fr. Joan de / los Angelesno fonyacu nari. / (*Escudo del Orden de Predicadores, con el sol naciente en el centro y arriba el busta de Sto. Tomás grab. en cobre.*) Supperiorto, Ordinariono yuruxiuo comuri, Binondoeno S. Gabriel / no Hospitalni voite fanni firaqu mono nari. / Goxuxxe yori 1623.

孰れもマニラ版であり、そこの聖フランシスコの寺に（不完全な状態で）存してゐるといふ。これ

等の書籍はコルヂエニの書目には出てゐない。今若し尚マニラに存するとすれば就て見る便宜もあらう。

次に我我には珍しいものは一五八三—一五九〇年の四人の遣羅馬使者の紀行である。是れはヅワルテ・ダ・サンデが、羅甸文に記したもの（羅甸文の原書は倫敦及びセビリヤに存する筈）であるがそれを Doctor Buxeda de Leyua といふ人が西班牙語に譯したもの（一五九一）である。卷末には耶蘇會士の手紙を收めてゐる。

右の譯書はブリチシュ・ミュジヤムにも有る相であるが、予はここで初めて見た。そして Guzman 乃至 Crasset の日本史中の右遣羅馬使の事を記す部分と甚だよく一致することを知つた。蓋し是等の紀行がその種本であつたのである。予はその使節の旅行に關する部分（即ち約四分三）だけは之を書寫した。In-8 で全體百七十九枚即ち三百五十八頁の本である。然し之がヅワルテ・ダ・サンデの書の忠實な飜譯であるか否かを知らぬ。（追記。アヘダの書は伊文のグワルチエリの書の譯書である。サンデの書は恐らくグワルチエリなどを參考にして編したものである。此事に關して後に言ふ所あらむ。）

次に葡文の CARTAS QUE OS / PADRES E IRMÃOS / da Companhia de Iesus escre-

ne/pão dos Reynos de Iapão & China / aos da mesma Companhia da India / & Europa, desdo Anno de 1549 até o de / 1580.……の千五百九十八年の刊本の二卷は二欄組の厚い本で、この年間の多數の手簡を收め、殊にルイシュ・フロイシュのものだけでも四十餘通を數へ、極めて便利な本である。この一本が、少くとも其寫しが日本に有つたら便利だらうと思つた。（追記。本書の初版本はその後東洋文庫に入つた。）

其他 Sosa, Acosta, Morejon, Frois, Torsellini, Sicardo, Orfanel, Piñeiro, Riuadeneira 等の日本に關する著書もここで見ることが出來た。

書肆ビンデル

此市の Calle Relatores 街の四に Vindel と云ふ古本屋がある。かなりの珍本を藏してゐる。殊に其東洋に關するものは千九百十年及び十一年に出版した二回の書籍目錄（Biblioteca oriental / comprende 2747 obras / relativas á / Filipinas, Japón, China……Tomo I, II.）に網羅してある。表紙の寫眞なども刷り込み、好個のカタログである。予は此地の圖書館で初めて此書目を見、或日

早速この家を尋ねた。二階住居で、一見しもたやの如くである。午後の二三時間だけ店を開ける。

主人は已に死し、其娘が店を經營してゐる。あくまで肥つた年増で、ひどく喉が嗄れてゐた。その奥の部屋の四方の壁には、書架にぎつしりと古い本が積み並べられてあつた。

予は無論カタログを買つたに過ぎぬ。それ以上のことは金の有餘る人のすることとである。たとへば Diego Aduarte の HISTORIA DELA PRO / VINCIA DEL SANCTO ROSA-/ RIO DE LA ORDEN DE PREDICADORES EN PHI-/ LIPPINAS, IAPON, Y CHINA.——1640. は六千ペセタスの價である。(尤も新しいカタログでは四千となつてゐる。四千としても約百二十磅以上である。——一九〇四年ライプチヒでの相場は六百五十マルクであつた。)諸式一般は無論、古本も亦西班牙は非常に高い。一般に古本は佛蘭西が割合にやすい。レオン・パジエスの豐富た文庫が市に出た時、日本の圖書館は之を買ふべきであつた。

東京の丸善と、バロン・オオトリと云ふ名とをこの店の女主人は知つて居つた。

この本屋は別として、マドリイの本屋は一般に現在出版の西班牙書目に關しても知識を持つてゐない。たとへば十年前出版の本を買ふなどは既に困難を極める。チヤマルチンといふ處の倚房で耶

蘇會士の著作の出版を始めた。聖フランシスコに關するもの（第一卷は書翰集、第二卷は師に關する文獻）もその一部であるが、マドリイの四五軒の本屋の主人はまるでその事を知らなかつた。唯一軒の本屋が出版所たる僧房の番地を教へたので、予はわざわざ烈日の下を郊外まで行つたが、主任僧が不在で要領を得なかつた。然しその第一卷が品切であることは確であつた。

又ロペ・デ・ベガの如き西班牙の古大匠の完全な全集も、この市では殆ど手に入れることが出來ない（尤もこの人は途方もなく澤山の著作をしてゐる。）普通、市の本屋で賣るものは、その著作の極少數を蒐めた四卷本である。

又現在西班牙人の手に成る著作らしい著作を本屋の店頭で見ることはない。多く有るは獨逸語の美術書と佛蘭西の小說（世界の出版界のクロパともいふべきものである。その播殖の繁く且廣き意味に於て。）とである。（六月四日、マドリイに於て）

伊國王の西班牙王宮訪問

予のマドリイ市に逗留してゐた間はお祭ばかり續いた。それは伊太利王の一族が此市を訪問した

ためである。それ故圖書館はやすみになる。美術館は公衆を入れぬ。又折角紹介狀を貰つても役人に會ふことが出來ぬ。

伊太利國王は英國を尋ね、佛蘭西をば素通りにしてこの國に來た所を見ると、何か政治的意味があるのだらう。新聞はこれに關する記事を滿載し、その他には佛蘭西の目下の政變の報道ばかりである。

或朝アルカルに行かうと思ひ、中央停車場の方へ歩いてゐると、パセオの近くは一ぱいの人で身動きがとれぬ。それで停車場へゆくことは斷念しなければならなかつた。ちやうど伊太利王の行列があり、騎兵、歩兵、砲兵がこの逍遙路に並んでゐたのであつた。予は望外にも遠く伊太利王の鹵簿を拜し又この國の華美な軍隊の儀式を見ることが出來た。

家家の窓には伊太利國旗になぞらへて三彩の布をかけたが、また然るべき家では、その家の紋章を織込んだ絨毯をその出張窓の欄干にかけるのであつた。

日中の市街は暑氣酷烈である。また居室は日中は戶を閉して甚だ暗い。宿屋に閉ぢこもつてゐるのもいやなれば外に出るのも大儀である。しかのみならず、マドリイの大通りは、お祭の日でたく

でも、其歩道は群集が一ぱいで、道を歩くだけでさへ尚困難である。

この間に唯パセオ・デル・プラド、パセオ・デ・レコレトスがアカシヤ、橡の密葉樹を植ゑ、薔薇の欄を作り、色ある花を飾り、且つ時時水道から撒水する故、清涼の感を與へる。殊にそこには多數の童子が群集し嬉遊する（佛蘭西から來ると子供の多いのが目立つ）。そして男の子でも女の子でも十歳前後までは殆ど十中十まで美しい

この大きな逍遙道の他に處處に小さい草原がある。たとへばプラサ・デル・プリンシペ・アルフォンソといふのは極小さい公園ながら、或る夕方ふと迷ひ込んだ時にはいい感じを與へた。方形の園には芝を植ゑ、其まはりには大樹が茂る。中に多數の卓があつて人人が麥酒又は清涼飲料をのむ。この小公園を四方から圍む小道に面しては、小間物、布地、本など賣る店がカフェエと共に立ち列び、且つここには例の西班牙に固有なコロナアドがなかつたから、重苦しい氣分がしなかつた。後に日盛りに再びそこを通つたらそんなにいい感じではなかつたが、夕方の燈火の下には奥ゆかしかつた。たとへば東京の人形町などに見る、小ざつぱりとした商家が街道に於てではなく、芝生の小公園を向いて並んでゐると考へれば、この景趣を想像することが出來る。

午後はその邊のカフエエには人が一ぱいゐる。一體何を食べてゐるかといふと、輪切りにした烏賊の（日本風の）天ぷら、蟹或は車海老の煮たもの、オリイヴの酢漬などを食ひ、麥酒を飲むのである。さうすると官許の富籤を賣りに、きたない服裝のばあさんや老人(ぢいさん)が入つて來る。それは一枚五ペセタス（二圓近く）であるが、皆よく買つてゐる。（是れは六月七日の事であつたと思ふ。追記。）

プラドオの美術館

西班牙の特別の事物に興味のない限り、西班牙といへば、人はまづプラドオの美術館（Museo Prado）と闘牛とを想起するが常である。それは兎に角ベラスケスの畫と美しい女とがなかつたなら、今のマドリイは全く乾燥無味なる近世的都會に過ぎぬ。

この地に着いて三日目の朝、予は圖書館に行くのをやめて初めてプラドオの美術館に赴いた。側の入口から入ると、そこに四五幅の歷史畫が懸かつて、次の室はもうベラスケスであつた。ちやうど空腹時に前菜も羹(あつもの)も取らず、直にすてきたビフテキに有りついたやうな感じであつた。たとへが下品だと云ふなら、まるで思ひがけなく天に昇つたやうだと云つて好い。

是迄マドリイまで來た甲斐があると云ふものだとさう思つた。ベラスケスは巴里でも、維也納でも倫敦でも見てゐたが、かう澤山に本物が並んでゐると面喰らはざるを得ない。今まで歐羅巴で見た畫工のうち一番氣に入つたものだとさう直感した。

フエリペ四世の半身像を見ると Manet を想起した。まるでマネである。否マネの方がベラスケスである。然しマネほどの鬪氣はない。

聖アントニオ聖パブロを訪ふ圖。全體暗調の灰色、そこに輪廓のくつきりとした一羽の鳥、すばらしい趣味である。それから「製絨工女圖」の大幅。こいつは寫眞ではよく承知してゐたが、こんなはでな、しかも落付いた、明るい繪だとは知らなかつた。彩色畫だけは、寫眞ではだめである。殊にこの繪の中央部の穹窿の奧のけしきの氣持のよさは全く話にならぬほどであつた。

ちよつと筆つきの相似から Rembrandt 思ひ出すが、兩者の氣分はまるで異る。伯林でレンブラントを澤山見た時には、途方もない大匠として驚嘆した。然しベラスケスの方には拉丁人の氣輕さがある。殊に西班牙人の氣分が淨化せられ出てゐる。

ベラスケスを見ると、マネ、クウルベは支店のやうに感ぜられる。ドラクロアは必要以上の道具

立をしたやうに考へられ始める。

それから羅馬のキラ・メヂチを畫いた二小幅があつたが、ベラスケスの純粹の風景は予には珍らしかつた。蒼味がかつた灰色の諧調うちに石の門、密葉の樹などを畫いたものである。

又少し興味が異なるが、マルチネス・デル・マソとの合作の「サラゴッサの景」といふ大幅が予の注意を引いた。蒼灰又褐灰の調子で、寺塔、樓門、城砦、民家の參差たる十七世紀中葉の古都の前をば、エブロの大河が流れ、帆船が通ふ。こなたの岸には、騎士、婦女、民衆が群集してゐる。

ベラスケスに對する予の驚嘆は數日間頂點に達してゐた。其後閑を得て此畫工に關する著書を讀むに及んで、予の考も多少變じて來た。今迄はベラスケスのみが予の空想を支配するものであつたのが、批評家の著書のうちに現るるは、世界の畫工中の一人としてである。知識と實感とは餘程違ふものである。他人の著書によつてベラスケスを知識的に考へるやうになつてのちは、予の一番好きなのはベラスケスだとも言ひ兼ねるやうになる。

Goya(ゴヤ) は何といつて好いか、予にはまだはつきりとつかめない。二枚の「マヤ」の畫は美しく、マネのオラピヤなどより遙に好い。然し概していふと、ゴヤは予は好まぬ。殊にその澤山のカリチ

ユウルは予の趣味に合なかつた。ゴオチエには合ふ處があつたと見えて一一根氣よくその題目を調べ上げてある。

巨（Greco）。之を大藝術家とは考へないが、その畫面の筆ざはりは實に見事である。ことに黑と白との多く用ゐられたる場合にさうだ。それ故オルガス伯爵の葬儀の下畫はすばらしい氣持もあつた。殊に右方の白衣を着つけた僧と左方の蠟燭を持つ近習（自分の娘をモデルにしたのだと云ふ）は誠に美しかつた。

闘牛

日曜（六月六日）には闘牛がある。名物ゆゑ一度行つて見た。建物は羅馬のコリセオを粗末にしたやうなものであるが、内に入つて見るとちやうど國技館のやうな感じであつた。但し雨のない處故、天蓋は青天井である。

一ぱいの群集であつたが、國技館の中に入つたやうな甘美た氣分はない。西洋から日本を見ると「東洋」で、なるほど西洋人の目には不思議な點があるだらうと考へらるるが、然し人の集まると

ころには、劇場でも相撲の桟敷でも、或る風情がある。或は日本の服装の贅澤に由來するのである
かも知れぬ。又藝者などが德川時代の或氣分を身につけてゐるせいであるかも知れぬ。ここの闘牛
場は夕日に顔を向けて石段に腰かけ、已に甚だ殺風景なものであつた。

予は十數年前に日暮里の屠牛場を見たことがあるが、その際或氣分に襲はれた。それは美的であ
り得るかどうか知らぬが、たしかに異常な感覺情緒であつた。それと同じ氣分を予は今日再びここ
に感じたのである。闘牛は謂ふまでもなく非常に手間をかけた屠殺である。殊に目をふさがれた瘦
馬が、牛にも馬にもお互には敵意がなくして、腹を牛の角にさかれ、其れから腸を出しながら走り
廻るのを見ると、むかむかと吐きさうな氣持になる。その上に立派な服装をした騎士が長槍を執つ
て、鷹揚たる様で看客の喝采に答へる物物しさは、いかにもドン・キホテの國の產物である。

我我の如く異邦人として唯一度闘牛場に入るものに向つては闘牛の事たる全く無趣味である。實
に惡いしやれである。そこに人情味がまるでないからである。この有名な國民技は、恐らく、闘牛
通で、その屠殺者（マタドオレス）の個人に對し知識と共に偏愛又は敵意を有して居り、そしてそ
の殺氣の間に一脈の人情を感じたもの、並にその特別の技術（牛の心理、屠牛者の手練）をよく理

解するものに對して、始めて意味のあり得るものであらう。

然し日本ではこの事のあるを知つてそれがどんなものであるかを知る人が少いだらうと思ふからちよつとその手順を書きつけて見る。

第一に二人の十七世紀の風に盛裝した騎手が入つて來る。そのあとにマタドオル（屠牛者）が徒歩でつづく。そのあとからは錐を以て牛の背を突く役（バンデリエロ）が同じく徒歩で來る、最後にピカドオル（自分の乘馬を牛に突かせる役）が騎馬で入場する。あとからまた極めて逞しき數匹の牛が引かれて出る。これまでが顔見せである。

それらの群が一旦退場すると、今度は新に一方の扉が開かれて、一匹の大牛がすばらしい勢で驅け込む。まるで彈んだ毬のやうである。牛の驅ける事實を予は始めて見た。恐らくかげで既にひどく刺戟してあつたのだらう。猛り切つた牛は何か相手はないかと見廻はすと、向ふに赤い切れが見える。牛はまつしぐらにそれに驅けつけると、赤布の男は、周壁と同じ色で塗つた、隱壁の後に身をかくす。牛はその角で二つきその壁をついた。するとまたあつちにもこつちにも赤い布が出る。牛はまたその方へ驅けてゆく。この赤い布を以て牛を怒らす役人をばカペアドオルと呼ぶ。それは

必ずしも定つた人ではなく、マタドオルもバンデリエロも此役を勤める。

牛からさう遠く避けずに、而も始終その赤布を以て之を怒らせるのが好いとしてあるらしい。又牛の方からいふと、自分に敵對するものが何であるかといふことの判らぬ愚鈍と、一つの對象に注意を集めないで、直ぐ外の赤布に氣を取られるといふこととが其身を亡ぼす原因である。一人が危くなつた時、他の方から赤布を見せびらかすと、牛は已にその力の下に陥つた相手を捨てて他に走るのである。

この一段がすむと、ドン・キホテが馬へ乗つて出てくる。憐れむべき痩馬は右の眼を閉されてゐるから牛の襲撃を覺ることが出來ない。然し牛とても馬が其敵であると決して思はない。馬上のドン・キホテが無理に之を怒らすのである。牛は時として、かくても馬には無頓着なことがある。

馬は心臓部か腹部をやられることが多い。心臓部をやられた時は血が瀧のやうに出る。到底冷静に視てゐることが出來ぬ。腹部をやられると、腸（はらわた）が西瓜を包んだ風呂敷包のやうに落ちる。それでもその害が少いと騎手は再び馬を驅けらす。

馬上の役人ピカドオルは美しく盛裝してゐるが、脚に重い金具をつけてゐるから、馬が牛につか

れて落馬した時など一人で起き上れぬことがある。人が助けて起してやるが實にきつい姿態である。牛に馬を屠らす仕草を二回も三回も又それ以上もする。闘牛技のうちでこれが一番醜なるものであり又殘酷なものである。

それがすむと、次の段に從つて向つてくる牛に逆つてその背に錐を通す藝である。これは三人の人に由つて行はれる。

最後に花形たるメタドオルが、巧に牛を怒らし、之をあしらつてその脊椎のうちに劍をさしこむのである。このわざは實際むづかしいらしい。一劍で見事に成功したのは一回しかなかつた。數回劍を代るやうな醜態さへ見られた。以上の技藝は五六牛を代へて行はれ、屠らる馬の數は二十頭に上る。

ネツトオ・ミアヌと云ふ獨逸人の書いた「Spanien」といふ旅行記の中にこの闘牛の事が精密に記述せられてゐる。この人は傳教僧であるが、西班牙贔屓であるから、闘牛に對しても辯護の勞を取つてゐる。戀愛の筋をしこんだ芝居に涙を流すに比べれば數等増しであると。この結論は他の人の下したものであるが其れを引用した所を見ると彼も之に同意したのであらう。

◇

Aman-Jean（佛國現代の畫家）は其著ベラスケス（千九百十三年版）の中でたかたかしやれたことを言つてゐる。殊にジエズイト派の宗教を論じ且西班牙伊太利兩國人の氣質を比較したところが面白い。たとへば聖者たちのうちでも、アシジの聖フランシスコと聖イニヤシオ・ロヨラと比較すると、前者は詩人的聖者で、後者は武人的聖僧であると。予はかの大聖者フランシスコ・シヤキエルに於てもこの「武人的」性格を見出すのである。西班牙に來て、ベラスケスやグレコを除いては、その造形美術に心を喜ばせるものがたい。伊太利の旅行とはその趣き大に異なるものである。日本が始めて泰西文明の光を浴びたのは此種の武人的傳敎師、武事商業冒險に强く美術に弱き國民（西、葡、蘭、英）と、ジエズイト的信條とに由つたのであつた。多數の日本の殉教者は恐らく熱烈なる信仰を得たのであらうが、どれだけ泰西の詩を解し得たか疑問である。

伊東マンシオ、支倉六右衞門の旅行も詩の精神と係ることが少い。彼等は盛代の伊太利に使したが、ソリニヤニや、メスキタや、ルイス・ソテロが先生では其國の詩、美術——殊に復興期の精神を理會する準備をすることは出來なかつたであらう。

アルカラ

敎育が專ら僧侶の手中に在つた時、Alcala は西班牙の學府であつた。予はマドリイの圖書館に於てアルカラに關する多數の文書及び研究のあるのを知つたが、解し難き國語の故でその内容を知ることが出來なかつた。然し天正の伊東ドン・マンシオも、慶長の支倉常長もここを過ぎてゐるから、一見せずばあるまいと思ひ、六月六日、烈日の下にこの小市を尋ねた。今は唯荒村であるが、コロナアド作りの家並、阿剌比亞風の景物に、この國ならでは見られぬ趣があつた。

ドン・マンシオ等一行のここに到つたのは千五百八十四年の十一月廿六日である。その如何なる歡迎を受けたかはグワルチエリが之を詳述してゐる。（本書外篇の「ポルトガルロ、スパニヤよりイタリヤへ」のうちにその翻譯があるからここには之を抄することを略す。）

又常長及びその一族は、マドリイでフエリペ三世に謁し、それから羅馬に行く途中に之を過ぎた



第八圖　アルカラの或る小路

のである。校長、學生たちから懇ろに款待せられたことはアマチに出てゐる。（是れも亦、外篇の「支倉六右衛門の事」のうちに抄した。）

その市、その學校には、恐らく昔日の面影は存してゐまい。またこの學校の圖書の大部分は今はマドリイに移されてゐるらしい。予は唯この市の外觀を見ただけで歸つた。後日頭に殘つてゐるは、商店の窓に日本製の玩器や雜貨を見たことと、又物賣る人の笛が、日本の按摩の笛に甚だ似たる響であつたことくらゐに過ぎない（追記。）

トレド

予はモハメット教民の文明及び藝術を好まぬ。トレドに來るともう其影響が甚だ顯著である。モオル人と猶太人との巣窟であつたトレドには、過酷な宗教裁判によつて彼等を追放したあとでも其の痕跡が遺つて居る。

然しトレドの一日は慰藉であつた。それはその有名なカテドラルの爲めではなく、寧ろサント・トメ寺院内のエル・グレコの壁畫であつた。これは實によく保存せられてゐた。此寺の大壇那たるオルガス伯爵の埋葬を畫くものである。伯爵の死は古いが、畫中にはグレコ生存時の三十六名士の肖像があり、彼自身も亦插入せられてある。また燭を秉る黒衣の美少年は畫工の女を寫したものであるとモリス・バレスは曰ふ。

この地には彼の邸宅が保存せられてある。中堂、庭園孰れも氣持よく出來てゐる。



第九圖　トレド風景

カテドラルはその古さに於ても大きさに於ても、工事の歳月の點からも亦費用の大きかつたことからも有名な寺である。その外部の構造の缺點（並に美點）は Blasco（ブラスコ） Ibañez（イバニエス） の小說の裡に精しく批評せられてゐる。ゴチク風の三つの大門の上に忽ちグレコ・ロマン風の高閣が乘り、恰もシンフオニイの最中に頓狂な喇叭が迷ひ込んだやうだと彼は記した。又この不調和な建築は、寺に餘り金が有り過ぎたからだとも云つてゐる。

この市の人はよほどこの寺が得意だと見えて、案內者がすばらしいものだらうと二三度問うた。然し廻りに狹く民家が立ち罩め、外部からその全體の構造を見ることが出來なかつた。

予はそれよりもその寶物庫のなかに、何か昔の日本の使節たちを記念する品物でもないかと物色したが、つひぞそんなものはなかつた。ルビイ、エメラルド等を惜しげもなく使つた器具、服裝が保存せられてあつた。



第十圖　トレドのグレコ美術館入口

この市は三方から「Tajo」の河に取り圍まれた、巍峨たる大花崗石上に築かれたものである。停車場から來て、有名の橋、プエンタ・デ・アルカンタラ及び同じ名の門、プエルタ・デ・アルカンタラが見え出す頃には實際自分を一人の旅行者だと自覺する。そして世界の不思議の一に入り込むやうな氣になる。

畔に月下の散歩がすてきである。民家は多く白色に塗られてあり、道は長沙、杭州に於けるが如

く狹い。月がその白壁にあたり、やかましい屋根の隈にほのかな明暗のかげを作ると、無限の空想がそこから蜂起する。

家の構造はアラビヤ風であり、大きな門のうちに、奇妙な模様に織つた鐵の扉をたて、その中の椰子の樹、花の草など戸の外からも透視せられる。或家では鉢植の芭蕉に打水の雫を見せて居り、そのかげに石の彫刻を置いたりしてゐた。また見ると、その中庭の彼方の小室では、ちやうど子供が夕めしを食つてゐる最中であつたりした。

道側に子供の唱ふ歌の曲節は全くカイロの芝居で聽いたもののやうであつた。

このカテドラルも、その廻りにある唯一の廣場卽ち市廳の下の空地から眺めると、強烈な日光の裡で見る時とは全く別趣の看を呈した。（六月十三日。）



第十一圖

コルドバの水瓶

コルドバ

朝トレドを發した汽車が夕方Cordoba（コルドバ）に近づく頃、山に初めて些しばかりの綠樹が見え、畠にはオリイブ、時としてコルクの樹、水邊には葦など生え、地に生色があつた。殊に其間に固い瓦、白い壁の家の散在するので、寧ろ南方支那の風景である。

宿に行李を置くや、日のあるうちにと、直ぐに市街の見物に出かけた。ここに於て始めて水を賣る人人を見る。素燒の瓶を抱へてアグア、アグアと呼ぶ。又その素燒の瓶を路上に並べて鬻ぐものもある。其形極めて奇である。異境の感じが身にひしひしと迫る。

斜日は其光なほ酷烈である。狹き繁華街は路上に天幕（テント）を張る。民家は多くは白く塗るが、綠色又は海碧色に塗るものも少くない。それらの色の壁に強い日があたると、晝でもなほ月夜かの錯覺を起すのである。この地は久しくモオル族の住んだ處故、彼等の去つたあとでも家の構造に於て、人



第十二圖　コルドバの一市街



第十三圖　コルドバの一寺院

の生活に於て東洋の風習が遺つてゐる。殊にアラビヤ人は支那人との接觸が淺くないゆゑ、この地に「支那」を感ずるのも敢て不思議はないのである。

　狹い道をあるくと、ふと杭州又は長沙に居るかの氣持になる。これ等

の陰路は可なり強い繪畫的印象を與へる。

或る名を忘れた小路であつたが例の如く白壁の家が立ち並び、窓には出張床、そこに花など置く。壁に取りつけた不恰好の街燈も亦重要な繪畫的材料である。その葡萄の蔓（？）などの生ひかぶさつた白い壁の上に、紅色の衣の童女が首を出したなどは、實に鮮かな色彩的效果であつた（第十二圖）。

家の窓、入口、入口の奥の鐵門、それを透けて見える中庭――是等のものには、阿剌比亞、波斯の小畫に有るやうな趣が通つてゐる。

その他、今まで見なかつた一種の建築様式がこの地にはある。それはあまり古い建物には見ぬ。寧ろ近頃のものであつた。三角の壁に急傾斜の屋根が乘り、その壁には極めて小さい二三の窓がつく。又その側面に（屋根の平面に對して）に再び、幅の狹い屋根が出る。言葉で説明するのは厄介だから略畫一枚添へる。早い話が日本のお城の様式である。予はそれで日本の城と南方西班牙の建築との間の關係を空想した。

いつのうちにか Guadalquivir の河の岸に出た。夕方の燈のつき初めるころの好い眺望であつた

ち、石灰質地の自然道路の塵埃高く飛揚するのには辟易した。

ここに來るまでの汽車の中であつた一人のわかい獨逸商人は、コルドバの女の美しいことを賞揚した。セビイアは如何と問ふに、彼は首を振つた。地はさう遠く離れてゐなくても、この邊りは住民の種の地理的分布に差異があると見える。

翌日は有名のカテドラルを看に出かけた。是れもとは回教の大伽藍である。昔（七八五年）アブデルラマンが此地を以て西方のメッカたらしめようとして作つたもので、柱の數は八百六十、眞に森林の如くである。十三世紀に此地が基督教王の手に歸してからは、ミンラブ、ミハラブは取り毀たれ、外圍の柱と柱の間は壁を以て埋められ、又中央にルネサンス式の禮拜堂を插入して一種奇態な耶蘇教寺院となつたのである。（六月十四日。）

セビイア

もう十年も十五年も前になるが、自由劇場が吉井勇の「河内屋與兵衛」を出して、その二幕目に左團次が、例の不思議な聲で「セビルラへ、セビルラへ」と叫んだことがある。油繪の背景には市街と高塔と其前の河とを見せ、幕の切れ目には寺の鐘を鳴らした。今考へれば寺はそこのカテドラル、塔は其ジラルダ、而して河はグワダルキビルの積りであつたらう。

現實のセビイアは十年前の日本青年の夢想に現はれたやうにそんなに詩的ではない。道は狹く息苦しく、午日は酷烈、椰子を植ゑた折角の廣場廣場も、稀なる客を待つ多數の馬車の爲めに、常に馬尿の臭を通はしてゐる。

予を此地に誘引したのには一二の原因がある。ここは Fray（フライ） Luis（ルイス） Sotelo（ソテロ） が生地である。師に伴はれて來た支倉六右衛門は此地で厚き歡待を受けた。また此地には今世界に僅かに四五冊を數ふる

珍書の一冊がある。又有名な Archivo general de Indias の建物がある。前者はポルトガル生れの宣教師 Duarte de Sande（支那名孟三德）が拉丁文に綴つた四人の我遣羅馬使の紀行であり、後者はアメリカ、印度、フィリピナス（並に支那及日本）に關する十五乃至十七世紀の文書を藏する大文庫である。

セビイア（西班牙人はセギルラとは呼ばないで、かくいふ）に着いたのは夜の九時過ぎであつた（六月十五日）。偶然に行李を下した宿屋は思はしからぬので、夕飯を濟ますと直に街に出た。狹い道路の間に人馬絡繹たる有樣は支那の長沙、武昌などを想起せしめる。

忽ち一漢が暗い小路から出て、覺束ない英語で予に呼びかけた。亞米利加の領事館とかに奉公してゐると云つたが、別に惡さうな男でもなかつたから一緒に歩いた。そしてその男の案内で、そのうちに一軒の宿屋を見付け、あしたからそこに移る約束をした。男の曰ふには、今夜は有名の歌伎が或るコンセエルに出るから行かうぢやないかと。セビイアといふ名と、有名といふ形容詞とが、予の心を挑發し、且つ多少の穢心にその男に從つてゐた。行つて見ると薄ぎたないキヤバレエで、西班牙にもこんなのがゐるかと思はれるやうなしこ女が座席に跳梁した。生ぬるい麥酒を飲みなが



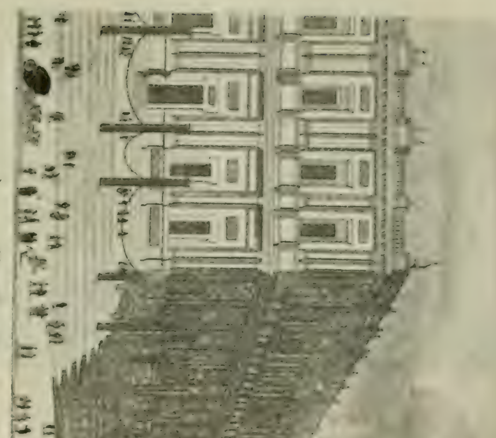
第十四圖　セビイア遠望圖

ら我慢して二三席の唱歌を聽いたが、ギタルラに合せて唱ふ曲節には、やはり阿剌比亞の唱歌に似通ふところが多かつた。

その小屋は此町の中心とはやや離れた處にあつた。そこを立ち出でると、案の定その男がゆすりを始めた。けちなゆすりで、しまひには一二ペセタスで可いと曰つた。セビイアの第一夜は餘り印象の好いものではなかつた。

印度古文書館

あくる日を待ちかねて此文庫の見物に出かけた。毎日朝の九時から午後三時まで開いてゐるのである。そして予の今まで見た西班牙の公共



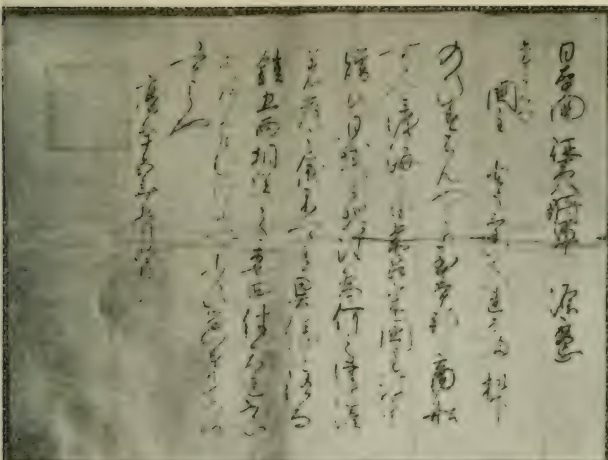
第十五圖　印度文庫館

的の研究機關のうちではこれほど活動して居り、またこれほど自由の氣分に滿ちたものはなかつた。大きな室内に多數の卓が並び、その上には古文書が堆積する。幾臺かのタイプライタは間斷なく

音を立て、又二人の寫眞師はしつきりなしに文書を複寫してゐる。外國の研究者も見物も何等むづかしい條件なしに出入を許される。

予は獨逸のフランシスカン派の僧 Otto Maas の書「西班牙」に由つて始めて此文庫の存在を知つたのである。館長は Don Luis Rubio y Moreno であるが、近頃その人は不在であつた。予は Don Juan Lafita と云ふ、佛蘭西語を話す館員から大に世話になつた。此人はマアスの書に據ると、有名な漫畫家であるとのことであつた。

この文庫はカテドラルの直ぐわきに在る。大きな岩乘な建物で、今でも Casa Lonja と呼ばれてゐる。カザ・ロンハはその名の如く、昔ては取引所であつた。セビイヤが盛りの時分には西班牙の植民地貿易の中心であつた。商人は（南國人の常として）取引を戸外でするのみならず、雨の日、酷暑の候には屢〻カテドラルの内部で之を行つた。卽ち二千年前ジェルサレムの寺院で行はれて、基督の怒りを買つた光景が再び此地の聖堂の裡に現出したのである。それで時の大司教 Cristóbal Rojas がフエリペ二世に請ひ、ここに其取引所を建設するに至つたのである。今や其全部がアルチボとして使用せられて居る。



第十六圖　外國船入津許可狀

予は其後數回このアルチボをおとづれたが、全部で四萬卷を算すると云ふ古文書のうちにも、日本に關するものは甚だ寥寥であつた。それはフイリピナス群島からの書翰（68—1—37乃至41）中に含まれ、十六世紀末から十七世紀初頭にかけては、僅に數通のルイス・ソテロの手翰を見るのみであつた。

又陳列棚の裡には慶長十四年及び十五年に源秀忠の名に於てフエリペ三世の宰相レルマの公爵に宛たる二通の手紙があつた。その一のお家流の字體が如何にもうまいので予の注意を惹き、幸ひ寫眞で複寫することが出來た。それに關するルイス・ソテロの手紙もあつたが、これは甚だ讀みに

くきものであつた。是も寫眞を造つたから他の機會で考へようと思ふ。秀忠の手紙の一に曰ふ

日本國征夷將軍　源秀忠ゑすはんや國主　とうけいていれるま机下　のひすはんやより至本邦商船可令渡海之由前呂宋國主より被申聞候日域之地雖爲何之津湊着岸之儀不可有異儀候隨而鎧五兩相送候委細伴天連ふらいあろんそむゑよすふらいるいすそてろ可申候也　慶長十五年五月四日



第十七圖　ルイス・ソテロの手紙の一枚

慶長十五年は西暦千六百十年に當りとうけいていれるまは Duque（ヅケ） de（デ） Lerma（レルマ）、また Alonzo Maenoz は Fray Luis Sotelo と共にフランシスカン

派の宣教師である。

此アルチボには其處の主とも云はれる人がある。それは Pablo Pastello といふ高齢のフランシスカン派の僧で、五十年來ここに於て、主としてフィリピナス群島の傳教史を調べてゐる。近頃は暑中の休暇で來て居らぬ爲め、殘念ながら會ふことが出來なかつた。Francisco Colin の古い「比律賓傳教史」に委しい註解を施してバルセロナから新に出版してゐる。

ツアルテ・デ・サンデの日本遣歐使節記

此書のことは、予は新村博士の「南蠻記」に於て始めて之を知つた。またその西班牙譯のことについては先便既に書き送つた。

縦十九サンチメエトル半、幅十三サンチメエトル半の本で、本文だけでも四百十二頁ある。是は此地の文科大學の圖書館にある。コルヂエーに據るに倫敦のブリチシュ・ミユウジアムの圖書館が一本を藏する。又いろいろの文獻學上の著作に據るとリスボアに尚二三冊存してゐるらしい。だから無二の珍本と云ふわけでもないが、我我に取つては興味の深いもので、南蠻文獻の複製を作る場合

には第一巻の範疇に收めらるべきものである。紙は雁皮に似る宣紙である。本文は拉丁語で記され、LEO や LINVS（九州にある日本人耶蘇教徒）の間に答へて、MANCIVS（伊東某）MICHAEL（千々石某）MARTINVS（原某）等が物語る。所謂「互の問答の如く」書き綴つたものである。

是は當時長崎又はマカオに於て出版せられたる他の拉丁文の書と共に、日本耶蘇教學林の學生にして拉丁語を學び併せて耶蘇教の教儀及精神を悟らしむる爲めの目的で作られたものである。當時の學生はジョアンネ・ボニファアシオの青年訓（マカオ版）シセロ演說集などと共に此書を讀まされたのである。結髮、帶刀、古風な封建時の服裝と拉丁學との對照は、今から追想すると奇觀である。

此書は近時歐羅巴に於ても問題になつた。コルヂエニに據ると倫敦のブリチシュ・ミユウジヤムの圖書館で、一度或機會に陳列せられて「歐羅巴人の支那に於て刊行せる最初の書籍」として紹介せられた相である。其後千八百九十四年に西班牙の文獻學者の José Toribio Medina が一小冊子を出して此書のことを論じて居るが、斯人に據ると右は所謂最初の書ではない。彼は右書卷頭のァレツンドロ・ヴリニャニ師の序文を引用して、それよりも二三年前にマカオで「耶蘇教青年訓」(Joanne Bonifacio: Christiani pueri institutio adolescentiaeque perfugium) が刊行せられた。

是れが恐らくマカオに於て歐羅巴の活字に由つて印行せられたる第一の書であらうと曰ふのである。

四人の遣羅馬使は孰れも可憐の青年であつた。今の留學生の意味でヷリニャニ師は之れを歐羅巴によこしたのである。然るに日本發見後五十年の最初の日本人、殊に諸侯の子弟であるし、其學止も典雅であるところから、葡、西、伊各國に於て頗る款待せられた。取り分け羅馬法王廳に詣る日の行列は物物しいものであつた。彼等の事を傳ふる伊太利文小冊子の今に遺るものも少くはない。又その傳譯、抄錄がいろいろの國の言葉で作られてある。然し其精密なる描寫は既述のグイド・グワルチエリの伊太利亞語本を除いてはヅアルテ・デ・サンデの書に若くものはあるまい。それは直接の當事者から材料を得る關係もあつたからである。唯右の書が甚だ稀有なると、その文が拉丁なるが爲めに廣く知られなかつた。

文科大學は市場の近くにある小さな建物で、學林としては轉た荒涼の感があつた。唯その圖書館には充棟の古書を藏してゐた。その日本に關するものは果してどれだけあるか分らなかつた。印刷せられたる圖書目錄はないし、そのカアドには、直接予の觸るるのを厭うたから十分捜索することが出來なかつた。予は僅に四五の書名を求め得たに過ぎなかつた。其一にはルイス・ソテロの刑死

が記されてあつた。

支倉六右衛門に關する文書

第二回の遣歐使者即ち伊達政宗から遣はされた支倉六右衛門の事蹟に關しては之を傳ふる書、第一回使節に關するものに比較すると著しく少い。そのややまとまつたものではシピオネ・アマチの伊文「奥州記」がある。他は皆片片たる小冊子であり、主として羅馬法王廳に於ける事を記するものである。日本に於ても支倉が史料は寥寥たるものであらうと思ふ。予が先年仙臺に遊んだ時なとは、彼の墓さへも有るか無しかであつた。

支倉の人物、性格の事も亦甚だ知り難い。それは一には、彼を伴つたルイス・ソテロに歴史家的天分が無かつたことにも原因するかとも思はれる。たとへば、ルイシュ・フロイシュが五十通の手翰は一一是れ好個の日本史である。ソテロの書に至つては商人の覺え書に似る。而して支倉自身に於ても、果して前の四人の青年使者に於けるが如き敬虔なる信仰、潑溂たる好奇心があつたか否か疑はしい。(羅馬ワチカンに遺る四人の手記と西班牙ワリアドリイの文書閣に蔵する支倉の手記と

を比較すると其差一見して顯著である。支倉はむしろ通商の事を議するが本旨であつたらしい。）

此地市廳のアルチボの壁にはセビイヤの市に寄せる伊達政宗の書翰が、ソテロの飜譯と並んで懸つてゐる。日附は慶長十八年九月四日（西暦千六百十三年十月六日）である。此字體は支倉六右衞門の手に甚だ似てゐるやうにも見えた。金銀箔を處々に散らし、薄墨で萩を描いた鳥の子に書いてあるが、銀は燒けて黑くなり、薄墨の字體は萩の葉、銀箔とまぎらひ、判讀すること甚だ困難である、此書翰の事は多分日本の數寄者の既に知るところのものであらうが（註。大日本史料、第十二編之十二にこの書翰の寫眞とこれを活字に直したものとが出てゐる。追記。）この書面に據ると、支倉は羅馬法王及び西班牙の耶蘇教王（フエリペ三世）に敬意を表すると同時に、西、葡の商船が（九州の諸港を仲介とせずに）直接奧州と貿易することを求めたものである。

予は豫ねてより支倉に對しては疑問と興味とを有してゐたが、マドリイに於ては彼に關する手がかりを得なかつた。ここに來て幸ひ二種の小冊子を見付けた。それ等は Biblioteca Colombina と云ふ圖書館にあつた。此圖書館も亦有名なものであり、コロンブスの息子の學問好きな Fernando (1539) が歐洲旅行中蒐めた四千冊の書籍が基礎となつて成立つたのださうである。是は政府の管理

に關しない。カテドラルの僧房の一部に在つて、それに附屬するものである。

さて支倉に關する小冊子の一は支倉の西班牙王に奉れる書翰の寫し、一はマドリイのサン・フランシスコの寺でフエリペ三世の玉座の前で、Don Diego de Guzman の手から洗禮を受けた顚末を詳細に物語るものである。ルイス・ソテロがセビイヤに在る其兄弟に寄せた手翰を印行したのである。その內容はアマチの「奧州記」中の同じ項の記事と殆ど差がない。唯其千六百十五年の二月十七日はアマチには水曜日とあり、ソテロの手紙には火曜日となつてゐる。蓋しアマチの書はソテロに負ふ所が多大なのであらう。又前の冊子の終りの頁には支倉らしい人の肖像を載せてゐるが全く想像に據つたもので、その面影を忍ぶたよりもない。

祭典

木曜日（六月十九日）は聖體の祝日（Fiesta del Santisimo Corpus）であつた。旅中日曜以外に休日のあるのは我我に取つて大敵である。殊に況んや一日に四五時間しか公共の建物の開かれてゐぬ國に於てをや。然しこの祭日はセビイアの宗教的祭典のうちの大きなものの一つである。行列

のある街頭には樂の葉を敷き、きたない狭隘路も今日は芳香を立てた。耶蘇、聖母、コロンブス等の人形の車が通り、金銀の旌旗の間に、盛裝せる僧侶、官吏がつづく。殊に長き燭を持つ少年の群は甚だ可憐であつた。此日カテドラルの裡には猶太の古禮を遺す六人舞踊がある相下あつたが往つて見る機會を失つた。



第十八圖　アルカザルの園庭

アルカザルの宮殿

是は全く阿剌比亜風の宮殿である。アルハンブラを見ない予は之を以てそれを想像した。然しそれよりもそのわきに在る庭園が予を喜ばした。セビイアの混雑、その汚さをここに於て忘れること



第十九図　アルカザルの御苑

が出来る。大きな椰子の繁茂する森。杉の並木道。薔薇を壁とする小さな仕切り。その透間から見える、夕日をあかあかと受けた花壇の遠見。また阿剌比亜風の亭を中心とした広場。孰れもアラビヤ夜話中の光景である。之を現在、目の前に見るなどとは嘗て夢想したことだになかつた。

夕方人なき庭園を歩いてゐると図書館で読んだ（看た？）本のことを想ひ出した。それにはルイス・ソテロの死のことが記されてあつた。支倉にどんな男であつたにせよ、六年七年一緒に其の旅路の伴侶であつたソテロの刑死の報を得た時は、悽惜の情に打たれたことだつたらう。予はしばらくそれやこれやと空想したが、材料不足の為め、いつか朦朧たるものになつた。切に知らまほしきは、帰朝後の支倉が動静である。

註。無知は往往にして僞作者である。予は Alcazar（アルカザル）の苑（その）で、晩年逼塞（ひつそく）してゐる支倉常長が、フライ・ルイス・ソテロの刑死の報を得て心を傷ましむるといふことから、一場の戯曲を想像したが、あとでよく調べて見ると常長の死は元和八年（一六二二年）の八月である。即ちその帰朝より二年あとの事で、享年五十二歳だといふ。然るにソテロはその時はまだ呂宋（ルソン）に在り、その九月始めて薩摩に入り、ここに捕はれて、寛永元年（一六二四年）に火刑に遭つたのである。（追記。）（又曰。以上の「えすぱにや記」は後日の追記並にサン・セバスチァン及びハビエェルの城の項を除き、凡て大正十三年中の大阪毎日新聞に寄稿したものである。）

シマンカス

七月七日月曜日の朝、リスボアからマドリイに歸着した。今度は善く此國の語に通ずる松井氏と知り合ひになつた爲めに便宜が多かつた。

いつも不得要領に追ひかへされた王立史學院 Real Academia de la Historia の内部にも入ることが出來た。レオン・パジエスに據るに、伊達政宗よりえすぱにや王に送る手簡の此國の言葉に飜譯せられたもの、及び之に對する王の答書が寫本として此に保存せられてゐると云ふから、もしやその原物もと人に取調べて貰つたが、それはここには存してゐなかつた。その代り、Cartas de Japão と名けられた二冊の大きな寫本綴を借り得た。是れは爾と、アルカラのジエズイト派のコレジオに出づるのである。このアカデミアも無論澤山な文書、原稿などを持つてゐるが、その日本に關係あるものは、事務員の言に從ふとこの二冊であつた。有馬國主ドン・プロタジオ（有馬晴

信）のポルツガル王、ドン・エンリケに送る書状の寫し、同じ大村國主バルトロメオ（大村純忠）のもの、其他日本在留のパドレたちの書翰いろいろあつたが、是等は既に他本に印行せられてゐるものであるか否かをば詳しく調べなかつた

然しルイシュ・フロイシュの書翰としては、今までひろく知られてゐなかつた（少くともアンリイ・コルヂエエの日本書目には見えぬ）日附のものが少なからず見出された。

一五七〇年	デセンブロ	一日
一五七一年	マルソオ	十日
◎同	マルソオ	十五日
同	マルソオ	廿日
一五七三年	アブリル	廿日
◎同	ジュニヨ	十七日
◎一五七六年	ジャネイロ	十七日
◎同	ジャネイロ	廿五日

一五七八年　ウッブロ　十六日

◎一五八〇年　（日附不明）　（安土より發信）

一五八一年　アブリル　十四日

一五八三年　フエヹレイロ　十三日

右のうち頭に◎印を附けたのがそれで、他の日附のものは已に他本に載つてゐるものである。

（註。最後（G. Schurhammer 及 E. A. Voretzsch 兩氏がルイシユ・フロイシユの「日本歷史」を獨逸語に譯し（一九二七年）その書の序文中にフロイシユの書翰百三十八通を擧げてゐる。卽ち從來刊本によつて知られたものを遙に超過する數である。それにしてなほ既述の◎印を附したもののうち、第二の一五七三年ヂユニオの十七日の分を除く外の四通は闕けてゐるのである。追記。）

フロイシユの書翰は予の數へ得たる所だけでも七十餘通ある。（註。前行の追記を參考せられたし。）願ふらくは之を一本に集めてフロイシユ全集を作り且つその和譯を得たいものである。

なほフロイシユ師の書翰に就ていふに、此地に又一個の荒廢せるジエズイト寺院があり、その圖書館も多少の寫本類を藏してゐるといふことを知り得た。午日の烈烈たる時であつたが、予は松井氏と共に辛うじてその寺尋ね出した。もはや人も居ず、明日來れと曰はれたが、予は翌日そこに行

くことが出來なかつた。後に松井氏は獨りそこに至つて、ソロイシユ師に關しては左記の日附の書翰の寫しを見出したと云ふ。

◎一五六五年	マルソオ	六日
◎同	アブリル	廿七日
◎同	ジユニヨ	十九日
◎一五六六年	ジヤネイロ	廿五日
◎同	セテンブロ	五日
一五六九年	ジユリヨ	十二日

右は孰れもコルデエニの記載に見出さぬものである（註。但し上記ジェウェンハンメル及フオニツォエユ兩氏の序文には是等のものは皆記錄せられてゐる。追記。）

日と路用とを吝む故に、予は此地に再び長く留まることが出來なかつた。それ故にまた此地に於ける予の歴史的研究も發展しなかつた。

ミデカに據るにここの武庫 Almeria には日本使節が千五百八十三年にフエリペ二世に獻じた日

本の甲冑が二具存するが、孰れも火災の爲めに損ぜられてゐるといふことであつた。甲冑の贈物のことはいろいろの遣歐使節記にも見えぬやうであり、珍しいことに思つたが、そこに往つて見るとさう云ふものは見當らなかつた。

アルカラ及びエスコリアルは前者は昔の大學の所在地として、後者はフエリペ二世の離宮として古來名高く、又二回の日本遣歐使もここを過ぎてゐる。アルカラは前回至り見たが、今や一小荒村に過ぎなかつた。エスコリヤルの宮殿は全體が大花崗石を組立てて造られ、宮殿といふよりも城砦か監獄かのやうであつた。ここもツウリストの一行と共に同じ氣分で見終つてから別にいふことはない。今も記憶に殘つてゐるのはゴヤの油繪がタピスリイとなつて多くの室を飾つてゐたが、油繪よりもこの方がひどく似合つてゐるといふことである。

圖書館には美麗な圖書が飾られてあつた。案内の僧に尋ねると、日本文の書籍も亦書庫の裡に在るといふ。どの年代の如何なる種類のものかといふことに對して多少の好奇心も湧かぬではなかつたが、この地に逗留してそれを調べて見ようといふ根氣はなかつた。

◇

マドリイを出て Valladolid に來ると、もはや田舍らしい小都會で心持の緊張が失はれる。コロンブスは此に死し今その記念像も立つてゐるが、その他にはさして面白いものもなささうである。

唯この近村の Simancas は此國の古文書のアルチボのある處であるから、よもやに引かされてこゝまで來たのである。午後の日は酷烈を極めたが、一輛の馬車を傭うてそこに行つた。往くに約二時間かかる。土色の壁をした數へるほどの家並が集る一荒村であつた。アルチボは直ぐ見付かつたが、開かれた門を入つて音づるるも答へる人がない。一人の兒童が內へ入つて尋ねてくれたが誰もゐないといふ。それでしばらくいきれる草の香のうちに休んでゐると、やがて館長が出て來た。午後は休であるといふが特に入れて貰つて、カタログを調べると、十三世紀の古文書は澤山あるが、日本に關係あるやうなものはない。「日本に關係のあるものは唯これだけです」と言つて、館長が示したのは、陳列用の廻り額に入つてゐる日本語の一手翰であつた。それを外して貰ふと、奉書を縱二つに折り、その一面に毛筆で書かれてある。署名は支倉六右衛門とあり花押がある。年號は慶長十九年八月廿六日で宛名はとうけいてれるま(Duque de Lerma)樣御披露とある。(橫文字の簡單な說明では一六一四年のセツチエンブレの三十日となつてゐる。)

本文は文體や假名遣が今と異り能く之を讀み下すことが出來なかつた。また寫眞屋とてもない村落のこと故寫眞に取る便宜もなかつた。分つた處だけを日本文に寫して見ると

一日本にをひて拙者主一奥州之屋形伊達一政宗貴天有主之一御宗門奉聞一段一ち殊勝ま存へゐ分國中一きをしきんに罷成(?)ゝ樣一まヒ申付ゝ爲其貴老一樣きましたん大帝王并はつえ様一世界之きをしきん之御一親司之由及承御一兩人を八年恐おゐみ一申ためにに作天連甫一龍以賴以手をてろ拙者一指添使者としてヒ相渡ゝ然者此望相叶一申ためにはん有難んまし一もこの作天連ヒ相渡ゝ一樣まヒ仰ゝ付者一可忝ゝ何も其地へ伺ひ一仕ゝ時分重方ミ可得一御意候次衣ミ海山一とこし参ゝへとも大勢之一あま返さきつる事ニゝ一又御目見へニ参ゝへえくら一き所も明き所へ出申ゝこゝ地一いさし外聞ち申令ゝ一滿足候處外まてゝへとも一謹て一書申上ゝ恐惶一敬白一支倉六右衛門　長經一慶長十九年一八月廿六日（花押）一やこまてきる返様一御披露一

（註。當時この手紙の後半など予は判讀することが出來ず、その字劃を倣寫して歸つたが、後大日本史料第十二編之十二一一三〇頁に之を活字に寫すものあるを見て、相較べて始めて解し得たのである。その一三一頁には當長の他の一書の文句が出て來る。この原物は當時予の見るを得なかつたものである。追記。）

支倉は千六百十四年の六月の廿三日にハバナを船出して十月の五日にサン・ルカルの港に着いたといふ、即ちセビイヤの南の、今榮えてゐるカヂスの港に接近した海岸である。この手紙は、この日附で見ると船中で書いたものとしか思はれない（此項「女性」に掲載）

ぽるつがる記

リスボア

セビイヤよりリスボアに

Sevilla と Lisboa との間は直徑にすれば巴里、里昂の距離に及ばぬ、鐵道に沿うても亦巴里アギニョンの間隔よりも近い。然し此間には急行列車の便なく、緩慢なるオムニビユスに乘り、幾度かの乘換をしなければならないから、セビイヤを朝七時十分に立つて、リスボアに着いたのは翌朝の、ちやうど其時分であつた。行厨を用意しなかつたから、廿四時間、殆ど飲まず食はずである。三等車には乘客溢れ、彼等は遂に二等車を占領した。一等車は空虚であつたから或は横臥も出來るかと、車室を代へたら、今度は二等乘客の爲めに滿員となつた。

乘客の大部分は沿線地方の百姓たちである。皆大きな袋を背負ひ、支那の苦力が他國に出稼にゆく時の風體に似てゐる。三等車内は混雑を極め、一漢はギタルラを彈じ、衆人がそれに合はせ唱歌



第二十圖　リスボア圖

した。光景は甚だ繪畫的であつたが、同時に亦粗野であつた。葡萄牙は予の想像に於けると全く別趣の外貌を呈した。

宿に着いて、五階の一室を占める。窓から此都第一の逍遙道、Avenida da Liberdade を見下す。廣き街道の中央は鬱蒼たる樹木の帶である。楡を主として、樅、椰子の高き頂が聳立する。道は廣く、樹は多く、リスボアの第一印象は清潔の二字に盡くされた。然しその左右に立ち並ぶ建築は煉瓦造の二の町普請であつた。殊にオベリスク形の一長大紀念碑は其意匠凡庸を極めた。凡て千七百五十五年の大地震以後のものであるから、懷古的情緒を動かすに足るものは一つもない。

午前中繁華の街路を散歩す。店頭の玻璃窓のうちには何等の珍らしいものはないが、織綢衣裳等の價の極めて廉な

ることを知り得る。此地は蓋し歐羅巴中物價の最も廉なる都府であらう。煙草の輸入稅は安いと見えて、英商を通じて來るもの、クウバより來るもの、品目頗る多く、價も英佛等の半額である。香煙を鬻ぐ家には新聞を懸けて置く。佛獨及び西班牙のものが甚だ多い。蓋し葡文の新聞は田舍びてゐて、之れを以つてしては中央歐羅巴の事情を知り難く、且つこの國の人は多くは他國語を讀むを以て、外國の新聞紙がかくの如く多く坊間に行はれるのであらう。

この地の植物園は有名なるものの一である。理科大學に附屬し、一般公衆の入園を許すものではない。門番が予を誰何し、外國人である故に特に許すと云つた。小ぢんまりとして華潔であるが、必しも珍木に富むとはいへない。予はハバナの植物園に於てより多く珍奇の熱帶樹を見ることが出來たのを記憶してゐる。

午後國民圖書館(ビブリオテカ・ナシオナアル)及び Academia das Sciencias(アカデミア・ダシユ・シエンシヤシユ)の圖書館に往くに、已に鎖門の後であつた其途上偶然にも Largo do Calhariz(ラルゴ・ド・カリヤリス)の十四番地に一軒の古本屋を見付けた。屋號は Livraria de Manoel do Santo と云ふのである。そこには、たとへば次の如き書籍があつた。

Fernão Guerreiro, Relaçam annval das coysas que fizeram os padres da companhia de

Iesvs na India, & Iapão. その千六百年及六百一年（一巻）、六百六年及六百七年（一巻）、六百七年及六百八年（一巻）。

其他數種の日本及び支那に關する古本があつた。右の如きは歐羅巴の圖書館に於ては敢て珍本と云ふべきほどのものではないが、然しまた之を求めむと欲しても容易く得べきものではない。この分で行くと、西、葡、伊等の市場を探せば、今とても尚ほ、多少のこの種古書を獲ることが出來るかも知れない。

そのうち、例へば六〇〇年六〇一年の分の一巻は千八百エスクドシュ（邦貨百圓强）を唱へてゐた。然し十數年前巴里の古本屋では（尤も六〇七及六〇八年分）七十五フランした。現今は凡て當時の價の三四倍するから、右の一本も必しも高價ではあるまいと思ふ。

隻眼の詩人 Camões（カモイシユ）の銅像は同じ名の廣場に立つて居る。凡そこの國に於て人の尊崇するは、この詩人と Vasco（ヷスコ） da（ダ） Gama（ガマ） とである。最近には亦空中をマカオに航行した二青年飛行家である。

アヴェニダ・ダ・リベルダデはま直ぐに海岸に走るが、此中ほどのところは、新築の一劇場に遮られる。即ちそれより先は Praça（プラサ） Don（ドン） Pedro（ペドロ） IV（カルタ）（ペドロ四世の廣場）となるのである。西側の

歩道に向つては珈琲肆、煙草屋、小間物屋が軒を並べる。その舗石道はかなり廣い。それにも拘らず、午後三四時から夜裡にかけて、ここを通行することは甚だ困難である。人は、常に彳立して動かざる群集の間を拔け、向ふから來る人を避けて進まねばならぬ。此時街道は即ち公園である。彼等は尤も極端なる身振り手振りをして語り合ふ。その口音は甚だ重い。s は sh の如く響く。e は ee の如く、e は i の如く。偶ゝ人の衝突するものがあつても敢て咎めない。人にぶつかつても謝罪の辭を陳べない。我日本に於けると同樣である。

ベデカはリスボアを評して、世界中の最も騷々しい都會の一であると云つた。誠にその通りである。午前の三四時まで、アヴエニダに人聲が絕えぬ。粗き方石を舖いた道の上を軋る自動車は、すばらしい音響を立てる。日も夜も、物賣る人が高聲で呼び叫ぶ、殊に此日の夜は、日の白む頃まで爆竹を鳴らした。

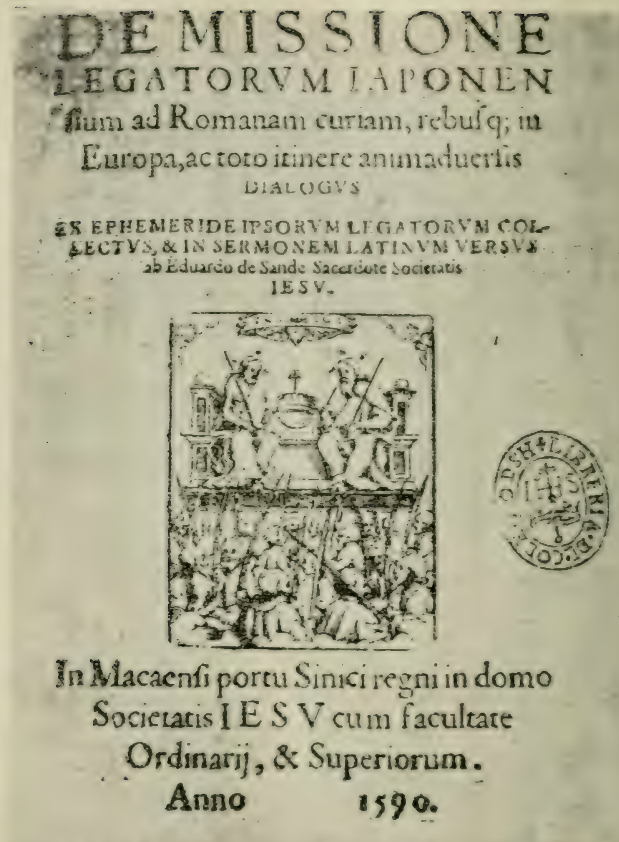
此地の圖書館のこと

圖書館の屈指のものには、先づ國民圖書館(ビブリオテカ・ナシオナアル)、Bibliotheca da Academia das Sciencias、Ajuda

舊王城の圖書館、Archivo da Torre do Tombo 等である。而して予は殆ど偶然に、この地のジエスイタ派の中學校の名もなき圖書室に於て、一冊の珍本を見ることが出來た

國民圖書館は日本に關する多くの古刊本を藏してゐるが、同じ方面の筆寫本は少い。ここにも印行せられたる書籍目錄は存してゐなかつた。そして事務員の取扱ふカタログを直接に見せて貰ふまでには多大の抵抗を受けたのである。閲覽室は普通のものと特別のものとがあつた。孰れにも書籍を持つて入ることが許されない。普通の閲覽室の方では又鉛筆以外の――ペン、インク等の――使用が許されない。又書籍の借り出しは、同時には一種一本に限られてゐる。之を以て此室を訪ふ一般閲覽者の人柄の、巴里、倫敦のそれよりも我國（今は知らず、十年ばかり前の上野の）のそれに近きことを推知することが出來る。特別室には特殊の入場劵が要る。これは容易く發行して貰ふことが出來た。そして閲覽人はここに於て遙に自由なる取扱を受けた。この二室は然し書籍の分類に應じて分たるるもので、普通室でなければ借りることの出來ぬ書籍もあるのである。

この圖書館の有する刊行本中日本に關するものでは、必しもここでなければならないといふほどのものもなかつた。即ち倫敦、巴里の圖書館に存せずして、唯ここにのみ有るといふものは恐らく



DE MISSIONE LEGATORVM IAPONENSIUM ad Romanam curiam, rebusq; in Europa, ac toto itinere animaduersis

DIALOGVS

EX EPHEMERIDE IPSORVM LEGATORVM COLLECTVS, & IN SERMONEM LATINVM VERSVS ab Eduardo de Sande Sacerdote Societatis IESV.

In Macaensi portu Sinici regni in domo Societatis IESV cum facultate Ordinarij, & Superiorum.

Anno 1590.

第廿一圖　アヅアルテ・ダ・サンデ著拉丁文日本使節記表紙

眞實たるものであらう。それにしても、既に記する所の（大阪毎日新聞に載せたるセビイアの記）、アヅアルテ（或はヅアルテ）・ダ・サンデ（或はエヅアルド・デ・サンデ）の日本遣歐使節記の如きは二本もあつた。此書は尚ほトルレ・ド・トンボに一本、アジユダに一本ある。（即ちこれで倫敦のブリチツシユ・ミユジアムにあるもの及びセビイヤにあるものを加へると、都合六冊の存在が知られてたわけである。）

一體葡文圖書誌として有數のものは左記の諸種である。

1) Barbosa : Bibliotheca lusitana. MDCCXXXI.

2) Jorge Cesar de Figaniere : Bibliographia historica portugeza. Lisboa, 1850.

3) Dictionario bibliographico Portuguez estudos de Innocencio Francisco da Silva applicaveis a Portugal e ao Brazil. Lisboa, 1868.

又倫敦のブリチツシユ・ミユジアムに於ける葡國の歴史（其1部は同時に日本の歴史）に關する寫本文書の目錄としては

4) Frederico Francisco de la Figaniere : Catalogo dos manuscriptos portuguezes exi-

stentes no Museu Britanico etc. Lisboa, 1853.

がある。

また特に日本及び東洋に於て刊行せられたる古書に關しては左の三つの論文が有益である。

5) D.r Sousa Viterbo: Litteratura Jesuitica en Portugal. II. A imprensa no Oriente. Journal do commercio de Lisboa, No. 11768.

6) Jordão de Freitas. A imprensa de tipos móveis em Macau e no Japão nos finos do século XVI. (Anais das Bibliotecas e Arquivos de Portugal. Outobro de 1915; Vol. I. No. 5.)

7) Subsidios para a bibliographia portugueza relativa os estudo da lingua japoneza e para a biographia de Fernão Mendes Pinto — Grammaticas, Vocabularios e Diccionarios — Con observacões philologicas pelo Ex.mo S. A. R. Gonçalves Vianna. 1905.

（七）は昔の伴天連の日本語研究に就て論じ、（六）は東洋に於て西洋印刷機を以て印行せられたる書籍に就て考證するものである。

予は私かに此圖書館に存する日本關係の書目を作つたが無論完全には行かなかつた。予は亦偶然、天草騷動に關する歐文の一記事を見出した。

天草事件に關する歐文書

天草事件は已に苛酷なる禁教の後に起つたから、當時記されたる歐文の記錄は極めて少い。予は十數年前上野圖書館に於て「天馬異聞」といふ寫本を見、人に賴んで之を筆寫したことがある。寬永十四年十一月朔日（西暦千六百三十七年十二月十七日）に始まり、翌年四月中旬（千六百三十八年七月二十九日）に至る迄の間の約五十篇の日記である。序文に據ると是れはその頃の加比丹の日記中の記事を、文化年間に加比丹ヘンテリツキドーフが抄寫して末次獨尖翁に與へたものを、翁が如淵吉雄先生に請うて譯して貰ひ、之に天馬異聞と名稱したものである。最後に筆寫した有季といふ人が亦一翁に請うて寫字して帳中に秘したものである。始めには米澤の稻澤格與家庵誌といふ跋もあつたとのことである。予は此書を見て奇とし、もし其原本を見るを得ば幸であると思つた。實際に於てこの事は予の想像ほど困難ではなかつた。この書の原本は今は和蘭のハアグの文書館に

あるらしい。原日記は和蘭の加比丹 Koeckebacker（當時平戸の商館の總長）の手に成るものであり、或はバタヰアに在る總督 van Diemen、或は平戸、長崎の奉行、或は臺灣に在る和蘭の總督 Johan van den Burch 又或は平戸に於ける蘭商 François Coron, Tan van Elserack 等に送られたものであるといふ。明治初年の頃、長崎出島商館の總長であつた F. C. Rose 氏が、日蘭交通史を書く意があつて、その方面の多數の材料を集めたが、その志を遂げずして死歿し、それ等の文書はアムステルダムの古書商に出つて Satow 氏の手に入つた。そしてそのうちに右のケツケバツケルの日記の寫本もあつたのである。Dr. Geerts 氏がそれを英譯したものが原文と共に、千八百八十四年頃の Transaction of Asiatic Society に出てゐる。予はそれを天馬異聞と對照して見ぬ、から、兩者が全然一致してゐるか否かは知らぬ。とに角右の書は天草事件の歴史を知る重要な史料の一である。

倚右の他では、予が此處の圖書館で見付けた記事が、當時の外國文獻としては珍らしいものである。但し史料としての價値のケツケバツケルのに比して遙に劣るのはやむを得ないのである。

書名は RELAÇAM DO ALEVANTAMENTO de Ximabāra, & de seu notauel cerco, &

de varias mortes de nossos Portuguezes pela Fé etc. Escrita por Duarte Correa. Lisboa, 1643.

但し天草に關する記事は唯の十頁位のものである。(この書名も著者名も、アンリイ・コルヂエエが日本書目には見えぬ。)

アジユダ文庫

日本に關係ある古書、古寫本の貯蓄所としては、此圖書館は多分筆頭に置かるべきものと思ふ。

アジユダはリスボアからは、電車で約一時間のところに在る。車道は海岸に沿ひ、町外れらしい街衢を走る。ワスコ・ダ・ガマに由緒あるジエロニモシユ・デ・ベレムの僧院(Convento dos Jeronymos de Bélem)の少し手前で車を下り、それから緩かな勾配の、繪畫的印象に富む街道を登ると、やがて陰鬱き松原の中に、アジユダの舊王城が見えて來るのである。

舊王城の門は古び、その前に一人の番兵が立つてゐた。予は初め圖書館のその王城の裡に在ることを知らなかつたから、城門前の小さな郵便局に就いて尋ねた。まだ午前であるのに、たつた一人

の男が、兩腕に顔を埋めて午睡をしてゐたが、忽ち身を起し、予を案内し、番兵に會釋して城門の裡に入つた。するとやや崩壞はしてはゐるが尙よく宏壯の感を與へる一廓がそこに現出した。中央は大きな穹窿門になつてゐる。そして左側の、奥まつた門の上に Bibliotheca da Ajuda の扁額が懸つてゐた。この圖書館はもとは王室の所有であつたに相違ない。今は一般の觀覽を許すが、ここを訪れ來る讀書生は甚だ罕であるかに見えた。

予の始めてここを訪れたのは午前十一時半ごろであつた。館長は不在だつたが、そこに居た一人の監督は甚だ親切な人であつた。然し向ふが佛蘭西語を話さなかつたから、相互の意志の傳達は困難を極めた。予が簡單な葡語を述べると、彼は人の解不解に頓着なく澤山の言葉をしやべつた。然しとに角に腰領は獲た。そして予はまづカタログ調べに取りかかつたが、その所藏の頗る豐富であることを知ることが出來た。が同時にそのカタログの極めて不完全であることにも氣が付いた。聖フランシスコ・シヤヰエルの詳傳を書いた（Cros 師は自ら西、葡の地に赴いて、親しくその圖書館を探したから、今まで中央歐羅巴によく知れ渡つてゐなかつた史料を蒐むることが出來た。それに反してアンリイ・コルヂエエはピレネエを超えなかつた（？）から、その博覽を以てしても、なほ

その「日本書目」に重要の書を逸してゐる。それは蓋し西班牙、葡萄牙の圖書學の完全でたかつた爲めである。このアジュダのこれだけの圖書館に於て、印行せられたる書籍目錄を有しないのは遺憾の極みである。そして閉館が午後四時であり、午餐を取ることとたくはたらいても予の一日の仕事は實に僅少であつた。但然し最初の日からすぐ氣特よくカタログ調に取りかかれたのは、西、葡に於てはこの圖書館が初めてであつた。

この圖書館の藏する日本關係の印行本中最も珍奇なるものは左の一書であつた。

CHRISTIANI / PVERI INSTITVTIO / ADOLESCENTIAEQVE / perfugium: Autore Ioanne Bonifacio / SOCIETATIS IESV / 即ち基督教兒童青年訓である。直譯すれば基督教少年の學堂青年の避難所といふべきであらう。著者は Ioanne Bonifacio、千五百八十八年のマカオの出版である。即ちこの書の印行は、前便にしばしば云ひたる四青年使節の歐洲紀行の出版に先つ一年である。アレッサンドロ・ワリニャニ師が歐文活字を東洋に輸入して出版したる第一の本である。

この書の大さは縱百十二ミリメエトル、横七十六ミリメエトルで CHRISTIANI / PVERI IN-

STITVTIO / ADOLESCENTIAEQVE / perfugium : autore Ioanne Bonifacio / SOCIETATIS IESV / cum libri unius, & rerū accessione plurimarū / の標題の下に、かの DE MISSIONE LEGATORVM IAPONENSIUM ……の書の表紙と同じキニエツトがある。即ち鐵の長方形を教壇に由つて二分し、上部に地球を眞中にして坐す二使徒、下部に多數僧侶の巨大なる聖筆を持つて坐する所の圖である。このキニエツトの下になほ cum facultate superiorum / apud Sanas, inPortu Macaensi / in Domo Societatis IESV / Anno 1588 の細字が印刷せられる。

内容は目錄及び正誤を入れ數へて五百二十八頁を占める。始めにアレキサンデル・ワリニヤヌスの序文及び著者ジョワンネス・ボニフアシウスの緒言がある。ワリニヤニ師のものは日本セミナリオの學徒に與ふる訓言である、彼等に拉丁語を教へ且つ歐羅巴の事情を知らしむる爲めに特にマカオに歐洲活字を輸入し、そこに在る教師ボニフアシオをして一教科書を編輯せしむる旨を記するのである。このうちに收められたる數百種の短篇は單に新舊約全書中の人物、逸話、耶蘇教の聖者の行狀と限らず、亦希臘、羅馬の英雄、作者の傳記よりその材料を集めてゐる。一言すれば歐文で日本人の爲めに記されたる第一の西洋事情教科書である。

（此書に關聯して想ひ出さるゝは左の一書である。

Emanuelem Barretum. Lusitanum presbyterum Societatis Iesu. Flosculi exveteris ac novi testamenti. S. Doctorum et insignium philosophorum floribus selecti. Nangasaquij. In Collegio Iaponico eiusdem Societatis, anno Domini, 1610. In 4.

即ち前書より遅るゝこと廿二年にして長崎のコレジオに於て出版せられたる短篇集である。この書のことは、西班牙マドリイ市ビンデル書店の千九百十三年のカタログ Catálogo de libros escogidos（珍書目錄）に出てゐる。解說によると新舊兩約の聖書から拔萃したる小篇を辭書の形として蒐めたものであるといふ。この唯一無二の書の孰れの所藏より出づるかは明記してない。然るにこの珍本は偶然にも日本に渡つて來てゐるのである。予の一瞥したる處によると內容は聖書よりの拔萃ばかりでなく、又前書の如く、同時に希羅名家の逸話をも記載してあるやうであつた。）

右は刊本の珍なるものであるが、更に廣く日本歷史の資料として尋ねる場合には、この圖書館は亦他にすばらしいものを藏してゐるのである。それは Jesuitas na Asia といふ標目の下に並べられたる六十二冊の寫本である。後日之を圖書館長の Dom（ドン） de（デ） Freitas（フレイタシュ） 氏に質問するに、これらは

十八世紀の初に支那から來たといふだけで、詳しいことは分らなかつた。或はマカオあたりのジェズイト派の寺務所見たやうな處に在つたものかも知れない。（註。この寫本の由來に關しては、その後 Schurhammer 及 Voretzsch 兩氏がフロイシュ「日本歴史」翻譯書の序文に精しく記してゐる。今は略してここに之を傳譯しない。追記。）全部支那紙の上に寫され、その字體も明瞭であり、多くは會士の書翰文は著述のコピイである。この圖書館に於て此等寫本の占むる番號は 49—IV—49 乃至 49—IV—66；49—V—1 乃至 49—V—34；49—VI—1 乃至 49—VI—16 で、都合六十二冊となるのである。その關係圖は日本に限るものではなく、寧ろ印度、支那に關するものが多數を占める。これによつて吾人は日本の西南部に於けるジェズイト教師の活動、彼等の其地に於ける宣教及び教育の機關の有樣（九州に於ける宗教書出版の設備等）を知ることが出來る。殊に予に取つて極めて愉快であつたことは、ドン・マンシオ・伊東其他三人の青年が長の旅路を後にして、アレツサンドロ・ワリニヤニ師に連れられて久しぶりに墳墓の地に復歸した數丁の記録である。

殘念なことには右に關する内容目錄の印行せられたるもののないことである。この圖書館に藏する不完全なる目錄をば予は之を自由に閲覽することを得たのであるが、それさへ予の短時日の滯在

では悉く之を筆寫することが出來なかつた。その裡或は一五四九—一五五二及一五四四—一五七〇年間の日本歷史（49—IV—53）、一五四九—一七四四年間日本傳敎史（49—IV—54）、一五八五年十一月十三日に日本ジェズイト派の總長にあて長崎に於いて記されたる書簡（49—IV—56）、一五八八—一五九三年間日本寺院史（49—IV—57）等があるが、今は煩を避けて一一之を記さない。

熟く調べればこれらの記錄の或物は、既に刊行せられたるものと重複するものがあるかも知れぬが、其大部分は多分まだ印行せられて居まいと思ふ。これ等の事は尙ほ能く調査する必要がある。

一例を擧ければ Henri Cordier は嘗つてレオン・パジェスの文庫に存した珍らしい寫本に就いて記してゐる。その標題は Apparatos para a Historia Ecclezinstica do Bispado de Japão (1583—1593) と云ふのである。その上卷は四遣歐使節の旅行記、京都に於ける宣敎事情等數十篇を收せ、第二卷はオルガンチノ、コエリョ等の手紙及び前述の四使節の日本歸着の記事等を收めてある（コルチエエ氏日本書目第一九〇—一九一欄）。是等は印刷せられたる已刊本と別途の材料であるやうであつた。而してその所謂第二卷は實にこの圖書館の「亞細亞に於ける耶蘇會派」中なる49—IV—59 の一冊に該當するものであつた。而して予の最も見んと欲した所謂第一卷は缺けて居

たのである。コルチエエ氏に據るにこの未刊の原稿は始め Lazaristes の文庫に出で、それよりパジエス氏の手に渡つたものであると云ふ。多分この圖書館の寫本と其原書を同じくするものであらう。而してこの地に於ける圖書目錄印行の事業が閑却せられてゐた爲めに、彼のコルヂエエ氏の如き學者をしても、なほその「亞細亞耶蘇會史料」の叢書の一部であることを氣付かずに過ぎしたのである。この寫本叢書は、館長の言に徴するに、葡國に於て印行せらるる望はない。故に須く我國の有志の手を俟つて之を行ふべきである。それより先にその精確なる内容の目錄を造るのが必要事である。それに用ゐられたる國語は主として葡語である。

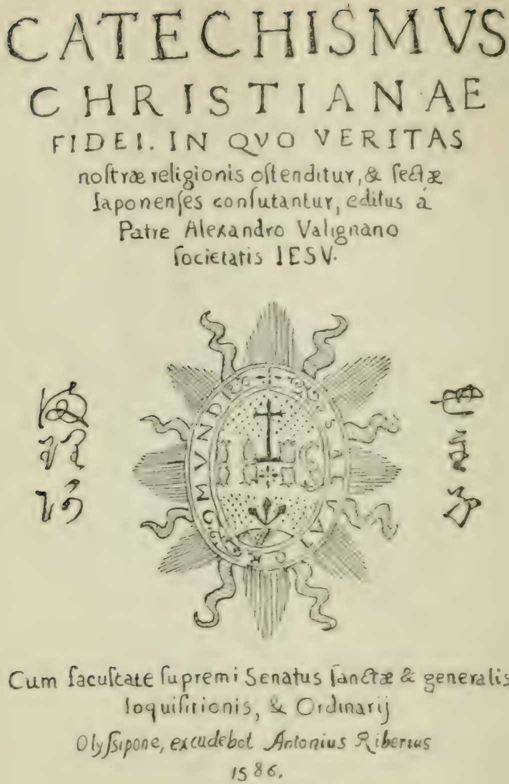
其他の珍本

予は已に記する所のデ・フレイタシユ氏の論文に由つて尚二冊の珍本の名を識ることが出來た。當地在住外務官小峰氏によつて予は此地地學協會の João Farmhouse 氏に紹介せられたが、その爲めに予は亦國民圖書館の數氏を識る機會を得た。そのうちの一人に或日予は質問した。マニラに

於て西洋活字に由つて印刷せられたる古書に就ては西班牙の文獻學者の精密なる研究がある。然るにマカオに於ける圖書出版の歴史に就ては予は不幸にして未だこの類の研究を發見することが出來ないと。その時その館員が予に教へてくれたのが右のデ・フレイタシュ氏の論文である。稿中甚だ珍奇なる二書に就て記す所がある。孰れもこの地のジェズイト派の中學校に在つたのであるが、一は尙ほ現存し、一は既に散佚した。

此中學校はもと Liceu central 或は Liceu de Passos Manuel と呼ばれた。現在なほジェズイト派と關係あるかは聞き漏した。が然し宏壯なジェズイト派の寺院の直ぐ傍に在る。カモイシュの銅像の立つ賑な同じ名の廣場から、Carçada do Combro のま直ぐの繁華街を通り Rua do Valle の狹隘路を右に入ると卽ちこの寺の廣場に出るのである。學校の建設及び設備は全く近世的であるが、學生は黑きフロックを着け、夏も亦黑き長大なるカツパを被り、其風甚だ古雅である。階上の一室を占むる其圖書館は明くて清潔であるが、一見何等の期待を抱かしめぬ。極有りふれた讀書室であつた。予がそこで希望を述べると、やがてドウトル某氏に紹介せられた。この跛なる青年レイトオルは然し甚だ親切な人であつた。そして予をこの讀書室に導き、圖書主任を呼ばしめたが、そ

の人はまだ来て居なかつた。それで予は午後再び来ることを約して、一たび外に出でた。


CATECHISMVS CHRISTIANAE FIDEI. IN QVO VERITAS nostræ religionis ostenditur, & sectæ Iaponenses confutantur, editus à Patre Alexandro Valignano societatis IESV.

Cum facultate supremi Senatus sanctæ & generalis Inquisitionis, & Ordinarij

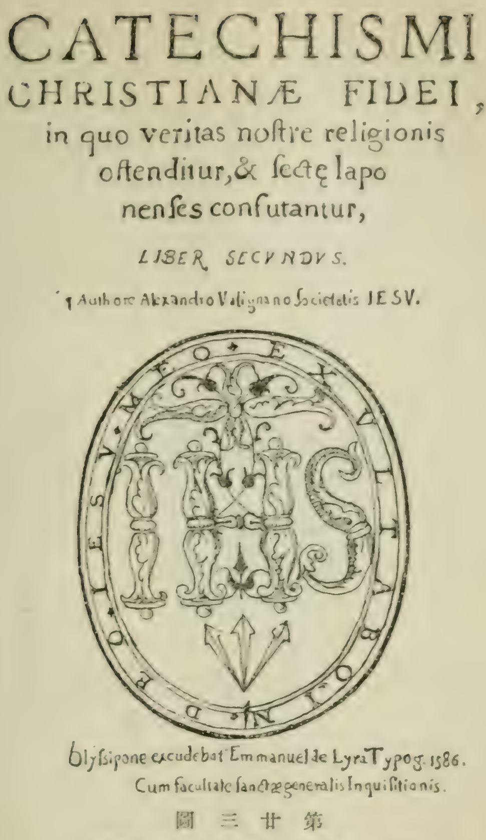
Olyssipone, excudebat Antonius Riberius

1586.

第廿二圖

ワリニヤニ師著カテキスムス　第一部表紙(摹寫)

午後再び来訪すると既に圖書主任が在つた。この甚だ年老いたる漢子は、初めは知らざるふりして、予の求むる古書を取り出すことを拒んだが、予がデ・フレイタシュの論文を楯に飽く


CATECHISMI
CHRISTIANÆ FIDEI,
in quo veritas nostre religionis ostenditur, & sectę Iapo nenses confutantur,
LIBER SECVNDVS.
Authore Alexandro Valignano Societatis IESV.

Olyssipone excudebat Emmanuel de Lyra Typog. 1586.
Cum facultate sanctæ generalis Inquisitionis.

第廿三圖

同　第二部表紙（摹寫）

までこの書の此に存することを主張し、且つレイトルの名を云ふに及んで、彼はしぶしぶと奥に入り、やがて一個の大嵩な紙包を持つて來た。包の裡には十餘冊の古書があつたが、大部分は阿剌比亞語で記されたものであつた。そのうちたつた一冊の、ぼろぼろした表装の書籍が、實に予

の求むる所のものであつたのである。

この書はもと某小村の古寺に出づると云ふ。然し最初エヴォラの僧院に在つたものであることは確である。

CATECHISMVS / CHRISTIANAE / FIDEI, IN QVO VERITAS / nostrae religionis ostenditur, & sectae / Iaponenses confutantur, editus à / Patre Alexandro Valignano / societatis IESV. /

右は其書の標題である。基督教信仰問答とも譯すべき本書は、アレッサンドロ・ヷリニャニの執筆に係り、千五百八十六年 Olyssipone（リスボア）に於て印行せられたるものである。20.2×13.5 cm の小本で、上巻七十六枚、下巻二十四枚。表紙の右標題下には紋章を置く。それは楕圓形の裡にＩＨＳの三字を入れ、又楕圓の外輪中に SALVATOR MVNDI を記し、その外側を光芒を以て飾りたるものである。この紋章の右に世主子、左に滿理阿を日本字を以て印行したるは奇觀である。世主子は無論ぜずすのあて字である。

たゞ紋章の下には Cum facultate supremi Senatus sanctae & generalis / Inquisitionis, &

Ordinarij. / *Olyssipone, excudebat Antonius Riberius.* / 1586. と印行せられ、其下にペンに依つて Liber Carthusiae scolae coeli dono donatus ab Ill.^{mo} et R.^{mo} in x° Patre D. / Theotonio a Bragança Archiepiscopo Eborensi fundatore et donatere eiusdem domus と書かれてある。

既に其標題の示すが如く、この書は歐羅巴宗教の眞理を說示し（第二卷）並に日本宗派を折伏する（第一卷）を以て目的とするものである。

第二卷の表紙は其紋章を異にするが題名はほぼ同樣である。但しこの方は Emmanuel de Lyra の活字に由るといふ。

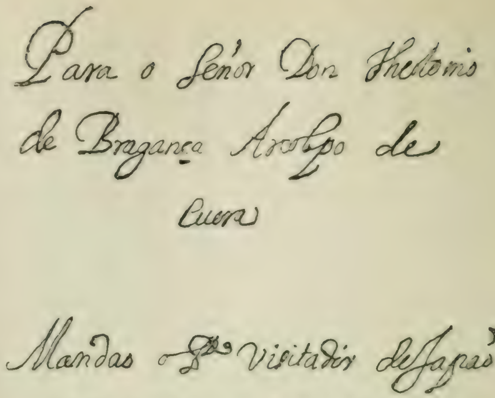
右は世界に於て唯一無二のものであるか否かを知らぬが、蓋し甚た珍奇の書である。而してこの中學堂に於ける此一部は實にアレツサンドロ・ワリニヤニ師の葡國エヴラの大僧正テオトニオに寄贈したものである。そして第一卷の卷紙裏にはワリニヤニ師の直筆（？）を以て

Para o Señor Don Theotonio / de Bragança Arcobpo de / Evora / Mandaa o P^{e}. visitador de Japão の句が記されてある。

予は亦此書に就ても、日本に於て其フアツク・シミルの作られむことを望むものである。

人の動物と殊り理知を有し萬物の靈長なること、其序文に於てしばしば繰返されるが、當時の宣教師の根本思想はこの書に於て現はるものと思ふ。

恐らくワリニヤニ師は右書の出版に於て、つくづく活版書籍出版の困難を感じたものであらう。即ち草稿は便船に托せられてリスボアに送られ、そこに他の人の校合の下に印行せられ、そしてまたかくて出來上つた本が歸りの便船で東洋に輸入せられるのである。この間容易く二三年の歳月は經過したのであらう。そしてこの困難が——歷史上の一重要事件——師をして後に歐文活字、その機械及び職工を東洋に迎へる企圖を抱かしむるに至つたのであらう。かくして東洋（マカオ）に於て、歐洲活字を以て印刷せられたる第一



第廿四圖　サテキスムスの獻文辭（摹寫）

の書がボニファシオの少年訓であり、第二の書がヴァルテ・デ・サンデの四遣歐使節記であつた。マカオに於ては其後も同種の書籍が出版せられたのであらうが、今に於て之を識るたよりがない。然し數年すると、日本にも印刷器が來るやうになつた。次に、曾つてこの中學堂に存し、今は失はれたといふ書籍は我等にとつて一層興味深いものであつた。それは我國天草に於て出版せられ、本文は全部羅馬字綴の日本語である。

NIPPON NO IESVS / no Companhia no Superior / yori Christan ni sōrō no cotouari no tagaino / mondō no gotoqu xidai no vacachi tamō / DOCTRINA.

是が其標題である。

その下に縱長方形の輪廓の中に、左手に地球儀を載せ、右手に上天を指せる基督の像を畫ける裝飾模樣を置く。この長方形の輪廓の下には EGO SVM VIA, ET VERITAS, ET VITA. の細字あり。なほその下方に

IESVS NO COMPANHIA NO COLLE- / gio Amacusa ni voite Superiores no von yuru / xi no cōmuri core no fan to nasu mono na / ri. Toqini goxuxxe no NENQI. 1592.

とある。

この年號で見ると、サトウ氏書目の第二號、羅馬字「平家物語」と其印行の處と時とを一にし、又其第三號「エソポの物語」は同處に於てその翌年刊行せられたものである。

この失はれたる書籍は日本紙の上に刷られたのであるから其趣味に深かつたと云ふ。表紙の前の丁は白きままに殘され、そこには次の文字が記されてあつたといふ。

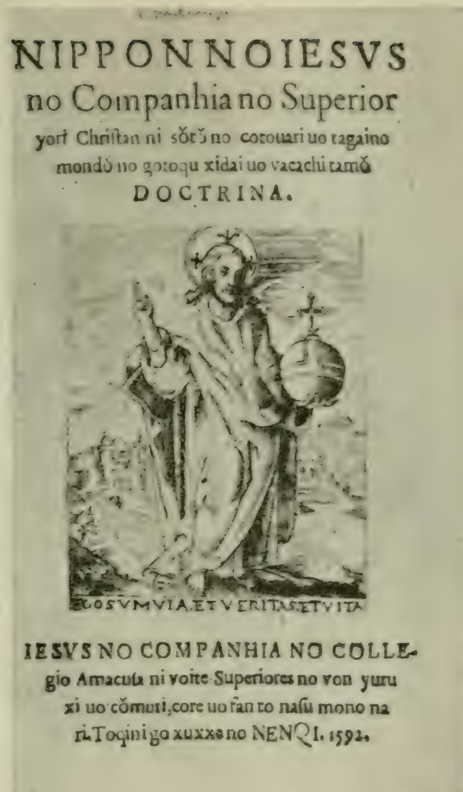
Doctrina xpana en lengua / Japonica p'a el Sr. Don / Theotonio de Braganza Arc° / bispo de Euora / Mandaa o pe. visitador de Japão.

（フレイタシュ氏に據る。ピンデルの書目には小異あり。）

本文百十四頁、その前に二枚の扉あり。大さは約 15×9 cm であつたといふ。デ・フレイタシュ氏に據ると、表紙刷の裝飾圖章の輪廓は 6.9×5.2 cm である。

この書は千九百十年にリセウの書庫から失はれた。それが千九百十二年には西班牙マドリイの古本屋ピンデルの店に現はれ、未だ嘗つて記載せられたることなき唯一無二の珍本として五千五百ペセタスで北米人に賣られたと云ふことである。

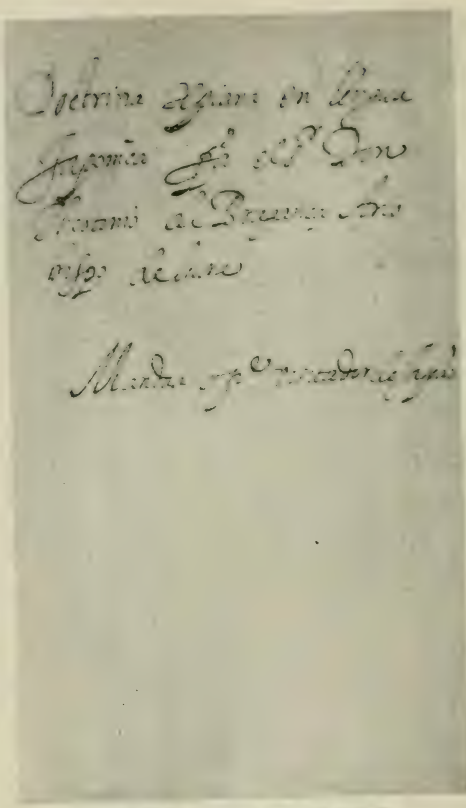
「著者註」予の後に再びマドリイに歸るや直に書肆ピンデルに往つて彼の書のことを質問した


NIPPONNOIESVS
no Companhia no Superior
yori Christan ni sŏtŏ no coroiari uo tagaino
mondŏ no gotoqu xidai uo vacachi tamŏ
DOCTRINA.
EGO SVM VIA ET VERITAS ET VITA
IESVS NO COMPANHIA NO COLLE-
gio Amacusa ni voite Superiores no von yuru
xi uo cŏmuri, core uo fan to nasu mono na
ri. Toqini go xuxxe no NENQI. 1592.

第廿五圖　ドチリナの表紙

例の唖れ聲の、肥つた娘さんはそれに就いて詳しい事を知らなかつた誇張した身振をしていふには、「貴方考へて御覧なさい、その時私は、まだこんなにこんなに小さい子供でしたから」と。この書に關しては、前に言ふ所のこの店の千九百十三年の書目に詳しい説明が出て居り、又その表紙の複製が亜鉛版となつて載つてゐる。

今年十月予が東京に於て内田魯庵氏にお目にかかつた時偶ゝこの本のことを語つた。氏は例の微笑を滿面にたたへて、「その本なら東洋文庫にありますよ」といはれた。



第廿六圖　ワリニヤニ師獻本辭

同氏の教示により予は此日本に於て遂にこの本を見ることが出來た。その時の喜は格別であつた。

予は初め此書紛失の事情を知り、この種の日本の歷史に取つて重要なる書籍は早くファック・シミルを作つて置く可きを急務と感じたが、原本があればそれに越したこ

とはない。然しながら、その爲めに予は毫も予の考を飜すべき理由を見出さぬのである。

本書の日本語は「平家物語」のやうな口語ではなかつた。師と弟子との問答體となつてゐる。

この書の解説には他に其人があらうから、予は今之を記さぬ。（再註。橋本進吉氏の手に成る本書の翻字及び解説は原本の寫眞版複寫と共に昭和三年東洋文庫から出版せられた「文祿元年天草版、吉利支丹教義の研究」といふのがその標題である。追記。）ただ左にその項目を寫すに止める。原書は無論羅馬字をゐてゐる。）

Doctrina no jo (prefacio)

第一　ドクトリナ（一乃至四頁）
第二　クリスタンのしるしとなる貴きクルスのこと（五―一四頁）
第三　パアテル・ノステルのこと（一四―二二頁）
第四　アヱ・マリヤのこと（二三―二六頁）
第五　サルヱ・レジナのこと（二六―二九頁）
第六　クレドオ並にフイデスのアルチゴのこと（三〇―四〇頁）

第七　デ□の御掟の十のマンダメントオのこと（五〇―六〇頁）

第八　（闕）

第九　御母サンクタ・エクレシアの御掟のこと（六〇―六八頁）

第十　七つのモルタル科のこと（六八―七四頁）

第十一　サンクタ・エクレシアの七つのサクラメントオのこと（七四―九六頁）

第十二　この他クリスタンに當る肝要の條條。慈悲の所作。色身に當る七つのこと。（九六頁）。スピリツにあたる七つのこと。カルデ・アレスのヰルツウデスは四つあり（九七頁）。テオロガレスのヰルツウデスは三つあり。スピリツウ・サンクトのドネスは七つあり。ベナヱンツランカは八つあり（九八頁）。あやまりのオラシオ（九九頁）。食前のオラシオ。食後のオラシオ（一〇〇頁）。（これにて終り。次に一〇一より一〇六頁までは）もろもろのクリスタン識るべき條條のこと。

（最後に難句解あり即ち）

ドクトリナのうち言葉に由つての和らげ（これは漢語と當時の俗語と葡萄牙語とを對照せ

るものである　一〇七—一一四頁)。

たとへば食前のラオシオの文句は次のやうである。

デウス・パドレ・フイリヨ・スピリツウ・サンクト、三つのペルソナ御一體のデウス、我等の上の飲食(おんじき)の上にベンサムを唱へたまふやうにと賴み奉る」アメン、パアテル・ノステル・いつぺん。

コインブラ

リスボアに滯在中予はコインブラに往つて見た（六月廿六—廿九日）。汽車三四時間の行程の處であるが、一日に唯一兩回の往復のみであるから、巧みに時間の按配をすることが出來ぬ。予のこの町に近いたのは既に薄暮であつた。車窓の外に、河沿ひの丘陵の上に建設せられたる、此頗る特色のある古都を望見することが出來た。

宿を定めて後市街を漫歩したが、街燈は暗く、人影は疎で、轉ろに異境の感を抱くのであつた。宿の直ぐ前は Rio Mondego の河に沿うて散歩道を作り、そこに大きな蘇鐵などを植ゑる。その石欄に倚つて河水を眺めてゐると、蛙の聲が頻りにして來、またそこここに螢が飛んでゐる。河には洲が廣く、對岸には時として燈火が搖らめく。微風あつて肌に冷く、この光景とこの情趣とは、寧ろ甚だ我邦の夏の田園に似通つてゐた。たとへば伏見にでもゐるやうな氣分である。



第廿七圖　コインブラ遠望圖

この町には相當に古い建築がある。Santa Cruz の僧院（創建は一一三一年）、Sé Velha（同十二世紀）、Sé Nova（同一五八〇年）等の寺院であり、殊に第一のものは後年重作せらるるものであるが、甚だ古雅である。然しながら予の興味はそれ等のものにはなかつたから、翌朝は直ちに大學に赴いた。大學は既に十四世紀から此地に創設せられたが、實際活動したのは、十六世紀中葉以後ジエスイト派の手に移つてからである。カモイシユも此に學んだ。我遣歐四使節はこの地をば訪問しなかつたが、當時に於てはここは蔚然たる學府であつたに相違ない。現在の建物は主に十七八世紀に作られたるものであらうが、其樣式に特殊の味があつて、自分を現代的氣分から遠からせる。



第廿八圖　コインブラ風俗

その禮拜堂の傍に建てられたる圖書館の内部は極めて華美たるものであつた。大理石を以つて方柱とし、其天井をば金の紋章を以て飾る。藏書の數は十萬と稱して居り、多くはこの國の古典籍である。役員の一人に佛語を話す者があり、予はその人から、遲く入り來れる館長に紹介せられた。

館内の閲覽には十分の自由と便宜とを與へられ、予は容易く藏書の目錄を調べ、數種の古寫本を借り出すことが出來たが、然しそれ等の寫本の裡には予の興味を引くもの――即ち日本のジェズイト派の歷史と關係あるものを見出すことが出來なかつた。

巧みに葡語を話す一青年獨逸人が數月來この圖書館に通つてゐるといふ。

予は二日に亙りこの圖書館に來たが、豫期した獲物もなく、そこを立ち去るやうになつた。

この地は歐羅巴とても已に邊陲で、風俗には粗野なところが多い。阿剌比亞族との雜種が多く遺つてゐるので、その奇たる風俗は多分それに原因するものであらうと思ふ。女は多くは跣足で、頭上に荷を負ふ。多くは黑く長きショオルをまとふ。炎暑の候に於てもそれは常套である。小徑は狹く、そこの生活の有樣は埃及に於ける如く、又往昔の希臘の庶民の生活もかくやと想像せられた。混雜したる市場では、鹽鰯、梨などが主な商品であつた。又大顆の琵琶がしばしば見られた。素燒

の瓶や碗が澤山並べられてあつた。

蒙古人の被るやうな、黒天鵞絨の小帽を被る女たちも見られた。

河原に出て、燈ともしごろの市街を眺めるのが、この町を見る最も好い地點であつた。Serra de Lavrão の山の上に築かれた都會であるが、緩い傾斜の圓い丘が二つ並び、その上に隙間もなく、白堊又煉瓦の家が建てこめられてゐる。丁度二つの巨大な蝶螺を二つ逆さに並べたやうな恰好である。この裾をばリオ・モンデゴが流れ、高窓の燈をその面に映す。

コインブラから、日本の歴史に關係の深い Evora に往かうと思つたが、時間の具合がうまく行かなかつた。それで一旦リスボアに歸つたが、たうとうエヴラに行く機會を失つて、今更殘念に思つてゐる。（「思想」第四十號、大正十四年二月。）

（註。本文のうちに、天正の日本四青年使節がコインブラを訪問しなかつたと記したのは大なる誤であつたから、玆に之を訂正する。彼等は實に羅馬よりの歸路、千五百八十五年の秋ごろ此地を過ぎたのである。今例のグイドオ・グワルチエリに據つて左にその事を記さう。

「而して印度に向つて乘船するまでにはまだ長い間があつたから、コインブラに行き、世にも名高い大學の在る市を見るのがよからうといふことになつた。さてその地に到ると、司教台下並に市の長は市門の外まで

出でて一行を迎へ、群れ集へる市民と共に、喇叭の響、人人の喊呼の聲の間に之をジエズウの學林(コレジオ)の御寺まで案内した。此御寺に於ては良き音樂が奏せられ、美しいオラシヨが讀まれた。終に美美しく飾られた各の居室に入つた。一行の此地に止まつたは廿日の間であつたが、日としてさまざまの催しの開けるといふはなかつた。卽ち學校に於けるもろもろのオラシヨ、演戯または高尙な悲劇の催しの如きであつた。それには日本の公子たちの外に、司教台下を始め、市の主なる人人、多數の學生が臨席した。云々。」　昭和三年七月追記。）

外篇

日本の發見

（附、鐵砲傳來の事）

我日本は神世からの國だけれども、歐羅巴人の眼から見れば發見せられたる國である。マルコ・ポロの記事「東方に一島あり、大洋の裡に横はる。其地廣袤千五百里、頗る廣大なる島嶼たり。住民は白皙にして擧止典雅。偶像を尊崇す。黃金の生產無盡藏なるも、其他大陸に遠くして、之を賣買する商人なければ、國中到るところ黃金充溢す」と云ふのから、歐羅巴人もうすうすこの黃金の島について知るところはあつたのである。

然し實際彼等が親しく其眼を以て我日本を存たのは西曆千五百四十二年我天文十一年のことである。此年に三人の葡萄牙人が偶然薩摩の種子ヶ島に漂着した。

ポルツガルの國の首都のリスボアより電車で三四十分の行程のところにアジュダといふ村落があり、その地に同名の城がある。是れは革命以前は葡萄牙王の離宮であつたが、今は海を見る見はら

しのうちに、荒廢に任せられてある。そこには別にこれぞといふ美術品もあるわけではないが、この Bibliotheca Pública da Ajuda（アジュダ公衆圖書館）と稱せられてゐるものは、世界有數の圖書館である。それは藏書の數が多いといふわけではない。希有の典籍に富むからである。殊に我我に取つて興味のあることは日本及び東洋の事に關する未刊行の珍本の多いことである。その中には日本巡察師伴天連アレッサンドロ・ワリニャニ師や、また四十年間も日本に生活して日本の事情に詳しく且また一隻の歴史眼を有したる伴天連ルイシュ・フロイシュやの日本歴史の稿本がある。孰れも未刊行である。

それに劣らず重要なるは筆者不明の日本歴史稿本 Historia da Egreja do Japão（日本教會史）である。それはいま同文庫の番號では 49-IV-53 となつてゐる。此筆者は千五百七十五年から千六百三十四年まで日本に在住した耶蘇教僧（複數）に由りて作られたものであるといふが、それが誰を指すのか分らない。それで名著「フランソワ・ド・サギエエ」を書いたクロオ師は（Cros: Saint François de Xavier. Toulouse-Paris. 1900. II. P. 37）此作者を假に「マカオの年代史家」（l'Annaliste de Macao）と呼んだ。（クロオ師の著書には此寫本の番號は $\frac{25}{12}$ と記されてある。即ち現

在は番號を變更したと考ふべきである。同じ番號のうちにはヴリニヤニ師の稿本 Libro primero del principio y progresso de la Religion christiana en Japon も含まれてゐる。） 最近葡萄牙駐在の獨逸公使 Voretzsch 氏は此筆者を以つて多分 João Rodrigues Tçuzzu であらうといつた。(E. A. Voretzsch: Auf den fernen Osten bezügliche Manuskripte in den Bibliotheken Portugals. Artibus Asiae. MCMXXV. No. 1.) 若しさうだとすれば、葡文で日本文典などを書いた同じ人である。

そんな事はどうでも可いとして、この教會史（三部より成り、第一部には東亞總論、第二部には日本事情を記し、眞の日本史は其第三部で、唯一五四九年から一五五二年の事を述べてゐる）に僅かばかり日本の發見の事情が出てゐる。然し僅かであるがそれが尤も信を措くに足るものである。

「歐羅巴人にして此島嶼を發見したる最初のものは葡萄牙人であつた。千五百十一年 Afonso de Albuquerque がマラカを占領したる後、千五百十八年 Fernando Perez de Andrade が Manoel 王の使節として支那に赴いた。彼は既に此時琉球諸島に就て識る所があつたのである。是等諸

島は日本の諸島と連續し、それと甚だ接近する。實際は寧ろ日本の所屬と謂ふべきである。それは日本諸土の來るや皆その地を經て來るのでさう察せられるのである。然し人が眞に始めて日本の諸島を識つたのは千五百四十二年のことで、それは Antonio Galvão の書 Dos varios descubrimentos（種々の發見）の誌するが如くである。此年は Martim-Afonso de Sousa が印度の總督であり又フランシスコ・シヤギエルも亦同年印度に達した。時に Antonio da Motta, Francisco Zeimoto 及び Antonio Peixoto の三人がジヤンクに乘つて支那の「Sião」を出帆したところ、ツウフアオ（支那ではタイフオン、日本ではタイフウと云ふ）といふ暴風に會し、廿四時間大洋の上を漂流して、遂に日本諸島へと押し流された。彼等はそのうちの一島に上陸した。それは薩摩の海に在る種子ケ島といふ名の島であつた。是等葡萄牙人は島人に鐵炮 espingardas を作る術を敎へたところ、此技は忽ち日本全土に傳播した。種子ケ島に於ては今なほこれ等三人の葡萄牙人の記念（その名及びその爲したる功績）を保存してゐる。」

日本の發見に關して確實に知られたる史實は唯それだけである。然し歐羅巴人の多くは日本發見の事を此史料に據つて知つたわけではない。むしろ他の書によつて此事が喧傳せられたのである。

所謂「マカオの年代史家」はなほ語り續ける。

「Fernão Mendez Pinto は其虚構の書に依つて自已をその三人の葡萄牙人の一人であると信ぜしめようと欲した。然しそれは事實ではない。その書中の他の多くの物語と同様架空の事で、實は事實を記するよりも寧ろ物語を創作したのである。」

　然らばピントオの史話はどんなものであるか。それを紹介するに先だち、なほ「マカオの年代史家」の日本に就いて語り續けることを傳譯しよう。

「其後葡萄牙の他の商船が日本に行つた。是事は日本人のイルマン Yio foken Paulo の著書「物語」(原文 Monengatasi) に出て居る。のみならず、彼自身がその生きた聲を以て親しくわたくしに物語つた。人人は豐後に於て一語も發するなく、葡萄牙人と商議した。秤と分銅とが言葉の代りになつた。當時の豐後の大侯は後に吉利支丹教徒となつたるドン・フランシスコの父であつたが、船中の貨物の豐富なるを見て、船荷を奪ふ爲めに葡萄牙人を殺さうと欲した。然しその子はかかる行爲の道理に背き、且つ異國人の抱く尊敬と好意との感情を裏切つて、己が名聲を損ふものであると云ふ事を以て之を諫止した。其後豐後に於ては葡萄牙人との通商上の關係は今の千六百三十三年

まで繼續してゐる。

日本王國を成す島嶼は無數である。就中八島を以て主とする。それから大八洲國（オホヤシマノクニ）といふ名稱が出でたのである。

一體此邦にはいろいろの名稱がある。又他國人も之をいろいろに呼んでゐる。此國のうちに於ても人の普通に用ゐるものと、詩に用ゐるものとの差別がある。大八洲國（オホヤシマノクニ）といふのは最も舊き稱呼であるが、詩語としては今もなほ用ゐられる。

主たる名稱の一は神國（シンコク）（守護神或は靈の國）といふのである。守護神とは神を言ひ、是れ此世を創め、而して日本の種族はそれに出づるのであるといふことになつてゐる。

も一つの重要なる名は Nippon（東方の邦又日の國）といふのである。而して支那人が之を Nippon（日或は東の極端、或は發點）と呼ぶのも亦同樣の意味である。

最も通俗の語は俗語の「日の本（モト）」といふのである。支語では之をニフオン又はニッポンと呼ぶ。日の根原、日の發生の意味である。卽ちこの島は人の知るもののうち最も東方に位するのである。支那人は此語を Nippon, Jopuen と發音する。廣東の音では Jepuen である。葡萄牙語の Ja-

pão はそれに因由する。

葡萄牙人は初め此諸島を ilhas dos Ladroens と呼んだ。それはその海に海賊が横行するからである。西班牙人は、此邦が銀鑛に富むと信じたから、之を Islas plantarias と呼んだ。

八つの主なる島嶼のうち、その三つは殊に大きく、各々數多の王國を容れてゐる。第一は京畿或は日本（即ち眞の意味での日本で、そこには都がある）、第二は九州又は下、第三は四國である。更に小さき五つの島嶼は佐渡、隱岐、淡路、壹岐、對島である。

日本の統治には三期があつた。第一期は千三百四十年に終る。日本全土は六十八箇國に分れ一王に統御せられた。地方は多くの一時的副王に由り管理せられた。第二期の統治は總帥に由り創められた。然し中央政府の力弱きが爲めに各副王は之に背いて獨立し、戰爭、暴政、土匪、海賊の亂世となつた。それはフランシスコ・シヤギエルの此に來れる當時の日本の狀態である。

王國の統一は信長及びそのそれを繼いだる總將によつて行はれた。それは千五百八十五年に始まつて千五百八十八年に完成した」（以上引用の部分はクロォ師の翻譯に據る。）

此記事によつても、筆者の甚だ日本の事情に通じてゐたことが分る。殊に日本の名稱を論ずるあ

たりは文獻學者の具味があつて、獨逸公使が之を以て文法家ロドリゲスに擬したのもいはれがあるのかも知れないと考へられる。

さて次にフエルナオン・メンデス・ピントオの事であるが、彼の書は普通 Peregrinaçam de Fernam Mendez Pinto（フエルナン・メンデス・ピントオの遍歷）として知られてゐるが、昔の本の事とて、その標題は非常に長く、法性寺入道前關白太政大臣どころではない。初版はリスボアの Pedro Crasbeeck で千六百十四年に出版する所に係る。尤もこの版本は今極めて稀である。千八百廿九年の翻刻本もある。相當に舊い佛獨英の譯本がある。

わたくしは今その原書も譯本も持つてゐないから、シヤルヴワ（Charlevoix: Histore et Description Generale du Japon. MDCCXXXVI.）の引用する所に由つて、ピントオの語る所を傳へようと思ふ。

ピントオは Diego Zeimoto 及び Cristophle Borrello といふ二人の葡萄牙人と共にランパカオ（媽港）といふ支那の港に居たが、印度に戻らなければならないのに船がなくて當惑してゐた。時

に支那の武裝商船の船長に Sampochea といふ男が此港に來て識り合ひになつた。此男はこの邊の海路を自分の繩張りとするものである。その男は日本號、支那號などと云ふ船を所有してゐたが一日彼等三人を自分の船に招待し、話の序に一つ琉球へ連れて行つてやらうと云つた。琉球のことは葡萄牙人は皆よく知つて居たのである。さて船が出帆して見ると風が變つて、琉球へは中中着かず、長い間海上を漂流した。それで船體を修覆したり、飲料水を得たりする爲めに日本の方へ航行しなければならなかつた。そして始めて着いた處はタネシマ（種子ケ島の誤か）であつた。

　異船が島に着いたといふので、その何物であるか、何を要求するのであるかを確める爲めに、二艘の舟がやつて來た。自分たちは支那から來たものであるが、船には好い東西が一ぱい積んである。若し交易が許されるならしたいと云ふのが船人の答であつた。すると島から來た者の一人が言ふには、此島の領主のナウタキン殿*)（歷史上には種子島時堯）は多分同意せられるでせうが、その代り税を納めなければなりません。向ふもそれでよろしいと云ふことになり、島人は彼等を懇切に待遇し、一港に船を導いた。ピントオに據ると此港はミヤジマといふのであるが、居民多く繁華に見えた。支那の船がそこに錨を下すや、多數の小舟がそれを圍繞した。孰れも商品の食料飲料を積んで

居たが、之を支那船の人に與へた。

二時間ばかり經つと島主のナウタキンが多數の屬從や商人を連れて船に來た。そして三人の葡萄牙人を睹ると驚くものの如く、船長に向つて、是等異人は何處より來れるかまた何れの國民であるかと質問した。船長サミボシエカは、彼等は支那の大都マラカより來れるものであり、其生國は歐羅巴の大王國ポルツガルであると答へた。此語を聞くとナウタキンはびつくり仰天して暫くは口もきけなかつたが、ややあつて屬從の人を顧みて言ふには「これは昔の本にあるチンチコジ（天竺人）に相違ない。天竺人は水上を飛翔し、水の圍む國といふ國は、それが有福であればなほさらのこと自分たちの手に收めてしまはねばやまぬといふことだが、今この人たちがそんなのでなければいいが。そして我我と同盟を結んでくれればこれほど幸福なことはない。」

島主は支那語を能く話さなかつたから、それの出來る琉球女を呼びにやつて通辯とした。そして船長にどう云ふ目的でかういふ異國人を日本に連れて來たかと質問させた。

船長は答へた。「わたくしは此人たちがランパカオで印度行の船を待つてゐる間に、近付になつたのです。わたくしは人の困難の爲めに自分に出來るだけのことはしてやる癖ですから、この人た

ちを自分の船に載せてやつたのです。かうして置けば若しも自分が同じやうな境遇になつた時にも神さんはどうかしてくれるでせうから。」

この答がナウタキン殿を安心させて、何の懸念もなく支那船に上つて行かれた。然し一緒に隨從して來たものを皆は伴はず、そのうちから幾たりかを選んで連れて行つた。そして船に上るとその隅隅隈隈を物珍らしげに眺め、それからかずかずの質問をば葡萄牙人に向つて放つた。また一度自分の屋形へ訪ねて來いと勸誘した。

翌日は早朝、島主は立派な果物の贈物を船に遣はした。三日目に三人の葡萄牙人及び支那船長は島主の屋形に伺候した。船長は其齎せる商品の各ゝのものの見本を島主に獻上した。ナウタキン殿は大に喜ばれた。葡萄牙人等の贈物も亦それに劣らず島主を喜ばした。島主はその町の最も富める商人の幾人かを其屋形に來らしめ、そして是等商人はその見本を仔細に點檢し、互に商量して程好いところで其價格を定めた。その事了つてのち、葡萄牙人たちは島主のなすかずかずの質問に答へてその好奇心を滿足せしめなければならなかつた。仲間はその答辯の役をピントオに讓り、ピントオは（その書中に率直に自白して居るのに據ると）島主の問に對しては、精確な事實を以て答へる

といふよりは寧ろ彼等の屬する國家、その國王の威力について、尊敬を起さしむるに都合の好いやうな返事をしたのである。

ナウタキン殿は曾つて支那人、琉球人から聞いたことのある三箇條の事についてピントオに質問した。その一は葡萄牙が支那よりも大きく支那よりも富裕であるといふがほんとかといふのであつた。その二は實際葡萄牙王は世界の大部分を征服したかといふこと。第三はその王が黄金白金の一ぱい充滿した二千の家屋を所有してゐるといふのは眞であるかといふ間であつた。ピントオが之に答へて曰ふには「その三つの事は決して嘘、僞でも誇張でも御座いません。然しわたくし自身とても、我國の國王陛下の宮殿の事は、今までそれを調べて見ようといふ氣を起したことはなし、それに何といつても國が途方もなく廣いものですから、つい詳しいことは知りません。」

すると日本人の太守は感慨深き面持にて、左右を顧みて「この世界に生れた以上、どうせ大名になるなら、その位の大國の大名にならなくてはつまらないなあ」と仰せられた。

島主は葡萄牙人を共夜遲くまで自分の傍に引留めて置いた。そして己が屋形の家屋を準備してそこに彼等を止宿せしめ、又そのうちの一を支那船長に提供して、そこでゆつくりと商取引をさせた。

取引は雙方に好都合に行はれた。支那船長は葡萄牙人に、初め一千五百兩しかたかつた貨物が二萬兩になつたと、そつと打ち明けた。

その間にピントオと二人の旅仲間とは獵や魚とりで日を暮した。またその町とその近在とには澤山の寺があるので、それを見物したりして遊んでゐた。どこへ往つても人が皆親切にしてくれた。そして日本人は一體に異國人と話をするのがたいへんにすきだとよく旅行者の言ふことはほんとであると感じた。ゼイモトは士耳古で買つた一挺の立派な火繩銃を持つてゐた。この島の人たちはまだ一度もかう云ふ火器を見たことがなかつたのである。それでみんなすつかり感心してしまつて、いつかこの噂が島主の耳にもはひつた。島守もその話を聞いてすつかり驚いてしまひ、此異人が尋常の人ではないと思ひつめてしまつた。ゼイモトは超人扱ひをうけ、ナウタキン殿は自分の馬の一つにそれを乘らせ、一人の傳令を先きに立てて市中を練り廻らせた。そして傳令は大聲を擧げて、「此葡萄牙人は殿の親戚であるが、今後皆その積りでをれ」と呼ぶのであつた。殿も時時自らゼイモトを連れてこの一種の凱旋式に參加した。ゼイモトには自分の屋形の一屋を與へてそこに住はした。ゼイモトはその鐵砲を殿に進上してこの恩寵に答へたのであつた。するとナウタキン殿は立ち

どころに千兩の耳を揃へてゼイモトに取らした。日本人は本來中中賢い性質であるから、初め彼等が唯感心して看てゐたばかりのものを、やがては自分でそれを型どつて製造して見るやうになつた。それで三人の葡萄牙人が五箇月ここに滯在していよいよ出發するといふ頃にはもう鐵砲は此邊どこにでも見られるやうになつた。

それはさて措き、是等の冒險家たちがミヤジマに來てから三十日ばかり經つた時のことであつた。支那の船長は商用も濟んだので、皆を促して出帆しようとしてゐた所へ、恰も豐後王が回漕してよこした一隻の船が此港に着いた。それには一人の侍が乘つて居つて、豐後王からナウタキン殿に遣した手紙を持つてゐた。島主はその手紙を讀むと、三人の葡萄牙人を呼び出させ、そしてそれに豐後王の言傳を告げたのである。その手紙の末段は次の如くであつた。

「豐後（ブンゴ）及び博多（ハカタ）の王、フイヤンジマ、土佐（トツサ）、阪東（バンヅウ）の大侯、五島（ゴツトオ）及び下關（シモノセキ）諸島の小王の總督オリゼンドオ申す。

汝が生を享けたるものにも劣らず親愛なるわが子よ。近ごろ三人の天竺（チンチコチイ）人汝の島に到着し、諸人悉く之を珍重する由。尤もそれ等の異人は貿易の爲めに渡海する商賈の類には非ず、孰れも然るべ

き身分の者にて、その性も甚だ怜悧なりと聞き及ぶ。余も亦風聞により、この世にはわが國よりも遙かに廣大にして、無數の各色の國民の住居する國土の存することを知り得たり。汝は彼等異人に由り、それ等國土の模樣いろいろと問ひ尋ね發明致せしことも少なからざる由、一段と結構に存ずるなり。然れば余も亦汝に折り入つて頼みたき一條あり。

それは別の儀ならず、有異國人ども、我使者フィインゼアンドノ相伴ひ當方に遣はされたし。汝も知る如く、余は年來痼疾に惱まされて居り、彼等望むらくは之を治するを得む。もし汝に於て必要の場合には有異國人即刻返還せしむべきこと、余の神明に誓ふ所たり、餘はわが使者に言ひ含め置きたれば委細尋ねられたし。余は此使者に由つて、汝とわが女の消息を知らむと鶴首切望するものなり。府中(フチエオ)にて。月の九日。」

ナウタキン殿は此手紙の意を三人の葡萄牙人に傳へたのちに言ふには「友よ、豐後王は身が主君でありまたわが伯父卽ちわが母の兄である。わしは之を父同樣に考へ、之を呼ぶにも他の稱號を以てはしない。尚ほわしの妻はその嫡女である。王はその王子の誰にも增しわしを慈しんでくれた。だからわしも自分の力で出來る丈のことなら、何でもその要求に背きはしない。否自分の出來る限

のことを盡くして、時あつては又身命を賭して之に事ふることを己が幸福だと思つてゐる。だから願はくば貴殿たちも余が意を汲んで、この要求に同意して貰ひたい。尤も貴殿等三人が揃つて行く必要はない。二人のうち誰か一人府中へ往つてくれれば結構である。然しゼイモト殿はもう今は余の親戚同様だから往つて貰つては困る。」

そこでピントオとボレルロはそれに答へて言つた。

「われわれは殿より受けた一方ならぬ恩寵を何かの機會に報いたいと考へて居りました。で、どうぞわたくしども二人のうちから、伯父王にして岳父翁殿たる御方のところへ遣はすべきものをお選び下さいまし。」

すると殿はしばらくは語もなく考へて居られたが、やがてピントオを指して言ふには、「貴殿は始終陽氣で樂しげに見え、むづかしげなところは少しもない。わしの伯父の要求には最も適當してゐる。も一人のお連の方は大層まじめで、わしは大に尊敬してゐるのであるが、伯父の氣鬱症を癒すにはちと不向きかも知れない。」

そこで殿は豊後の使者を呼んで、「もはや當方の相談も成立したから、いつでも出立せられて差

支ない。ピントオ殿が貴殿と同伴するであらう。」と言つた。そして直ぐ二百兩の金を持つて來させて之をピントオに與へた。ピントオは殿の前を辭去し、その仲間を抱擁し、そして豐後の船に乘つた。

臼杵（うすき）の城に達した。ここは府中（フチエオ）から七里の行程である。そこで船を棄て二日間滯留した後使者とピントオとは陸路、豐後の首都に赴いた。そこには日中に到着したのである。

彼等が町に着いたと聞くや否や、豐後王は九歳か十歳ばかりになる子息を遣はして之をねぎらつた。使者はそれにナウタキン殿の手紙を渡した。オリジエンドオ（豐後王）はその手紙を讀むと、人に命じて、葡萄牙人を迎へしめた。そしてそれを最も鄭重にもてなしたのである。そしてピントオに問うた。「貴殿の巡歷された國にも今現に余の惱む痛風（つうふう）といふやうな病氣があるか。余はその爲め困却してゐるのであるが、この病氣を癒す藥はないものであるか。」

ピントオは答へて曰つた。「わたくしは醫者ではございませんから十分な御返答も出來ませんが、偶ゝ支那より持つて來た函の中に、痛を止める藥劑がはひつて居ります。願はくは殿下には一度それを御試み下されませ。多分痛も直きになほるでございませう。」

そこで豐後王は直ちに種子島（タネガシマ）に人を遣し、ピントオの船に殘した藥劑を求めしめた。藥が到着すると、それを浸藥にし、王に勸めた。王がこの藥を服用すると、數日の後疼痛は紙を剝ぐやうに癒へた。そして王は、二年以來始めて立つて歩くことが出來るやうになつたのである。

病氣治療の功に由つて、ピントオがどんな恩寵を受けたかは想像するに餘りがある。彼を款待する爲めに、有らゆる催しが擧行せられた。その上彼の鐵炮の威力はナウタキン殿の屋形に於けるに劣らずこの殿の屋形を駭かしたのである。が然しそれはまた禍の基でもあつた。殿には、今年十六歳は十七歳になる世嗣の君があつた、そして例の鐵炮を打つて見たくてたまらなかつたのである。ピントオは、鐵炮を打つには十分その術を會得しなければ危いからと云つて、百方若殿の輕はずみの好奇心を阻止してゐたのである。若君はいよいよ切望し、たうとう父王に異人の餘りにつれない事を訴へた。父王も子の愛に惹かれその言ふことを愜へてやるやうにとピントオに賴んだ。そこでピントオも同意せざるを得なかつた。さて翌くれば二月五日のことである。その日ピントオは若殿を狩に連れて行つてあげると約束したので、若君は日の明くるのも待ち兼ねてピントオの家に行つた。所がピントオはまだ寢てゐるので、それを起すのも氣の毒と思つて躊躇したが、たまたま鐵炮

の有るのを見付け、之を手に取ると逸早く庭に出て、一打ち打つて見ようといふ氣をおこした。ところが塡むべき硝藥の分量も知らず、何んでも多ければ可いと思つて澤山塡充したから、引金を引くと、銃炮は手の中で張り裂けて、右手の拇指がまるでちぎれるほどの大怪我をした。その上火藥で頭をやけどし、彼は地上に倒れて、死んでしまつたかと思はれた。

此兇報は瞬く間に全市に擴まり、みんな若殿の輕率やお附の人人の不注意を責めないで「異國人の持つて來た魔術の銃炮が世嗣の君を殺した」と信じてしまつた。さう云ふ噂がピントオに對する敵意を煽つた。それとも知らずピントオは爆然たる音響に何事か起つたかと、かつぱと起り上つてその場に行つて見ると、まづ第一に彼の眼に止つたものは、流血の中に浸つてゐる若君の姿である。その原因をまだ知らなかつたので、彼はびつくりし、我を忘れてはや事きれたと思つた若君の上に飛びかかつた。

ちやうど其時であつた。豐後の王は魂も身に添はず、半分死んだやうになつて、駕籠でその場に驅けつけた。そのあとからは目に涙をいつぱい湛へた奥方が、二人の女の手を引いて徒歩でそこへと來られた。二人のむすめたちは取り亂して、聲を張り上げて叫喚した。屋形の者も皆そこに集ま

り、そしてもはや命の微もない若君とその傍に血にまみれて伏してゐるピントオとを見て、てつきり此異國人が射殺したと考へたのも無理はない。二人の兵卒は拔身の刀を執つて、いきなりピントオのところへ進み寄り、あはや一刀の下にその首をちよん切らうとする時しも、王は「者共待て」と之を叱し「此者が何故有つて若君を殺したかを白狀するまでは刑罰を加へることは相成らぬ」と仰せられた。

　王がかう言つたのは、前日數名の侍が謀反の嫌疑で死罪に處せられたから、もしかすると其親類が若殿を殺させて遺恨を晴らしたのではないかと考へついたからであつた。王はそこで若き殿の變事を目睹した二人の從者を呼び出し、事の顚末を訊問した。二人は天竺人の鐵炮が其主君を殺したこと、鐵炮には確かに魔法が仕かけてあつたなどを言上した。變事の起つたときそこに居た他の人人の返事も同樣であつた。そして皆一齊に異人をば最も酷き刑罰に處すべきであると言うのであつた。王は人人を制し、罪人の口供をも取らなければならぬと言つた。そしてこの騷動に恐を懷いて何處かへ逃げて行つてしまつた通詞を呼びにやつた。人人は諸方を搜してたうとうそれを連れて來た。王は恐ろしいけんまくで通詞を叱し、うそ僞の通辯をしてはならぬぞと申し渡した。なほピン

トオの返事を書き取る爲めに三人の書記を呼びにやり、また五人の刑吏が白刄を手にしてわきに控へた。被告は兩手を縛られ、王の前に跪かせられた。

時に裁判の長たるアスケラム・ティシエと云ふ僧がピントオに近づき、恐ろしげな音聲でピントオに言つた。「惡魔め、地獄へ落ちろ。うぬも昨日の謀反人めらと同じ處へ行くのがいい。此國の榮たる若君をうぬが魔法で弑し奉つたのは、一體誰に賴まれたか、きりきりと白狀せい。」

ピントオは一言も返事をしない。彼はまだ氣を失つたままで居た。たとへ一刀に打ち殺されても分らないほどであつた。僧（ボンズ）はピントオの沈默に氣をいらだせて、前よりも一層恐ろしい聲をはり上げて、「もしまだ默つてゐるのなら、罪狀を白狀したことと見做し、恐ろしい責苦にあふとさう思ふがいい」と言つた。ピントオはまだ正氣に復らず、一言も發しない。それで僧侶は彼に一拳を食はしめて言つた。「やい白狀しろ。うぬにこんな惡事をさしたのは一體誰の指金だやい。」

ピントオは激しい打撃で始めて自分に還つた。「皆わたくしのせゐにしますが、それは全く無實の罪です。この事件についてはわたしは何も知らなかつたのです。若殿の命を失はれたのは全くまがつびの仕業です。」と叫んだ。

この言葉を聽くと、其場に居合せた一同は忿怒の叫を擧げた。そして彼等が犯罪者と考ふる者に其罪狀を自白せしめ且つ其共犯者を發見する爲めに、彼の前に各種の恐ろしい刑具を積み重ねた。もし彼が依然として口をつぐむ場合には直ぐそれで拷問しようといふ段取りであつた。其途端に國王の息は我に歸つた。そして目の前に父王が痛恨に沈んで居、母君、姫君たちは涙に浸り、宮人は其眼に顚患の色を浮ばせ、大勢の人人は激怒して叫號して居、また刑吏は各種の刑具を提げて居り、その前に彼の葡萄牙人が屠處の羊の如く悄然として居るのを見て、始めて事の顚末を覺り、痛痛しい聲で言つた。「この兇事は全く自分ひとりの咎で誰も知つたことではないのです。」そして父王に異人の縛を解かしめられなことを歎願した。王は直ぐ其乞を容れて、ピントオはやうやく縄から放たれた。其時四人の僧侶が傷を見んとて若殿の方に進み寄つたが、其創面のあまりに大きいのに驚くだけで、何の手段も施すことが出來ないで引き下つた。そしてこんな大怪我をなほす藥などとてもありやうはありませんと言ふのであつた。その言葉を聞くと怪我人は大に落膽し早く他の醫者に見せて下さいと叫んだ。それでまた他の坊さんたちが出て來たが、傷に碌碌手を觸れることとさへしないで、全くどうして好いか知らなかつたのである。それでも何とかかとかめいめいの考を國王

に言上した。國王は失望し、誰かもつと好い醫者を知つてゐる者はないかと尋ねた。するとアイセ・アンドノといふ坊さんは名醫との評判が高かうございますると答へた人があつた。然しその坊さんは府中からは七里も離れた博多の町に住んでゐるのであつた。病人の容體がこんなでは、到底そんな遠い處へ醫者を呼びに往つてゐる暇はないと國王が考へられた。また若殿自らも、たとへその醫者が間に合つたところで、もう自分は弱り切つてしまつて、到底藥も効能を現はすことは出來ないと言ふのであつた。だからそれよりも自分の信用する異人と一緒に置いてくれ、どうせ死ぬ命ならば、年も寄つて目が見えないつて云ふそんな藪醫者よりも、自分の爲めに痛ましいうき目に會つたこの異人の手に抱かれて死んだ方がいいとも言つた。

王も全く當惑してしまつて、どうして可いか分らなくなつた。そしてピントオの方を振り向いて言つた。「さればピントオ、其方が息の命を助けてくれたら、わが領土もその恩に報ひるには足りないと思ふが、何か一つ工夫はないものかの。」

でピントオは、「拙者出來るだけ力を盡して、御意に副ふやうに相試みませう、しかしながらこのやうに大勢の人人がやがやとした中では話す言葉も聞え兼ねる有樣ですから、まづ無用のものを

違ざけて下さるやうに」とお答へをした。王もそれをば尤もだと考へられ、人人を退散せしめた。そこでピントオは若君の創を檢めて見ると、頭蓋骨には損傷がなかつたといふことが分つた。然し片手の拇指はもう全く手に殘つては居なかつたのである。それで兎に角一箇月のうちには若君の怪我をなほして見ませうと王に答へた。さていよいよ傷の治療に取り掛らうとすると、坊さんたちが抗議した。「若しこの異人が若殿の傷に觸つたら、若殿は次の日を待たずに死んでしまいませう。一番好いのはこの危險な人物の首を切つて、神佛にお祈をすることでございます。それでないと、きつと殿樣は、自ら若君の死を急がしたと云つて後悔せらるやうになるでせう。」と言ふのである。さすがの王も今度は全く困惑して、言葉もなく、じつと思案に暮れてゐた。奥方、姫君たちも絶望の淵に沈まれ、石をも毀つべき叫びを擧げられた。僧侶たちは又僧侶たちでがやがやと聲高に言ひ罵り、何はともあれ博多の僧を迎ふべきことを主張した。そして宮廷の人人は之に同意した。そして博多の高僧が來て傷に觸りさへすれば、すぐもう癒つてしまうでせうと言つた。そしてそんな奇蹟はその僧にあつては別段珍らしいことではないと附け加へた。

そこで國王も心を動かされたやうに見えた。が若君はまた言つた。「もう我慢が出來ない、苦し

い、たとへ坊さんが来てもそれまでに死んでしまうだらう」と。國王は屋形のうちの一番賢い人たちに其意見を尋ねた。その人たちは若君の言はれるところはもつともであること、このままに便便と病人をうち棄てて置くよりは、葡萄牙人の藥を試めして見る方がまだしもであると答へた。で國王もその氣になり、今度はピントオにいろいろとやさしい言葉を賜はり、かずかずの好ましい約束をもして、もう自分も意を決したから若君の治療のことをよろしく頼むといふ仰であつた。ピントオはその頼を謹んでお受いたし、くれぐれも心配することはないと説明して國王に安心させ、自分が印度にゐるとき、自國の外科醫が同じやうな場合に取る處置を見て覺えて居た通りにやつて見たのである。ところがその法があはよく成功して、僅か廿日ばかりのうちに若君も殆ど全快し、唯瘢痕と、拇指の麻痺が殘るぐらゐになつた。屋形のうちの喜がどんなであつたかは想像することが出來るだらう。殿も奥方もこの名譽の國手に立派な褒美を賜はつた。この治療の代が、ざつと千五百兩に當つた。

そのうちピントオは支那船の船長がもうそろそろ出帆の仕度をしてゐるといふ通知を受取つた。そこで屋形に御暇を乞うた。人人も殘り惜しく思うたが、たつて止めるわけにも行かず之を許した。

國王は一艘の艙を艤裝せしめ、澤山の食料の類をも載せ、一人の侍を附けてピントオを送つた。

ピントオは其後たほ十五日間「ミヤジマ」に止まり、そしていよいよ日本を後にして出帆した。

彼はまづ支那のランパカオで上陸したが、此地は既に說くが如く、葡萄牙人がたくさん居て貿易に從事し、極めて繁昌の處である。

シヤルゾワ師評して曰く、此物語に出づる所は固より一一信を措くべきではない。著者は寧ろ奇を說くを以て目的とし、その眞僞は久しく人の疑ふところであつた。然しながら彼の後に東洋に航したものは皆彼の言ふところを諒としたのである。恰も今人がクセノフオンを諒とするが如くである。言に求めて眞を飾るところがあつたとしても、それは必しも眞を害ふものではない。彼の物語が全然虛誕であると評ふることは出來ないのである。殊に況んや此書の人の容易くその眞僞を判斷し得べき時代の作なるに於てをや。

シヤルゾワ師の評は中つて居ると思ふ。彼がよしむば日本に渡來した最初の葡萄牙人ではなかつたにしても、そのしばしば日本の地を踏んだ者であることは疑もない事實である。

クラセ師の著書（日本西教史）に據るとピントオはフランシスコ・シャギエルの親友で、師に先ちて日本に在り、既に夥多の資財を得たから本國に歸つて餘生を安穩に送らうと思ひ、其歸途に就くに先ちメルシオオル・ヌニエス (Melchior Nugnez 又 Belchior Nuñez) 師に懺悔を爲す爲めに、ゴワから一里ばかり距れた小島に在る禮拜堂に往き、師と日本の事を物語るうち、急に啓示を受け、歸國の心を失ひ、自らヌニエス師の大檀那となつて、師の爲めに日本に學寮を建て、耶蘇教を弘めむと決心をした。そして已れもまたジェズイト教會に入つて僧となつた

ヌニエス師はピントオに動かされ遂に日本に渡るやうになつた。師の日本の到着したのは千五百五十六年で、その時ピントオも再び日本に歸り來つたのである。日本に來て師と共に大友宗麟にも會つてゐる。

して見ればピントオの說く所は、縱令自家の經驗でないとしたところで、日本を知る人の記錄と考へて不可はない。少くともかくの如きことが當時の日本には有り得たのである。

日本に殘る鐵炮傳來の傳說もその輪廓だけはマカオ史家の說く所又ピントオの物語る所と一致する。尤もそれが日本人間の傳說であるか、原は西洋人の傳說であつたかは今になつては判明しない。

日本に於ける鐵炮の傳說は大槻玄澤氏の「銕法起原考」（磐水存響、乾）に引用するところを見るといろいろあるが、中に就いて鹿兒島の釋僧大瀧文之（號は南浦）の「鐵炮記」（南浦文集に收めらる。「代種子島久時公」とある由）が最も古いものらしい。それと並に長沼賢海氏の「歷史地理」第卅三卷六〇號（大正三年）に揭ぐる論文と併せて綴つて見ると大體次のやうである

「隅州の南に一島あり、州を去る十八里で其名を種子島といふ。天文癸卯（十二年）の秋八月二十五日丁酉に西村浦にどこから來たか分らない一大船が着いて、その中に船客が百餘人ばかり乘つてゐた。其容貌は異常で、言語は解し難い。其うちに支那の五峰といふ儒生があり、西村浦の主宰の織部丞といふ者が文字を解して、之と筆談すると、是れは西南蠻種の賈胡である。そこで織部丞は、此から十三里して赤尾木といふ處があり、そこに我領主が住んで居られ、數千戶もあり繁昌の地であるからそこに行くがいいと敎へてやつた。織部丞からの使が行つてゐるので、船がその津に着くと島主の種子島時堯が數十の船を泛べて之を迎へた。それは月の廿七のことである。商人の長は二人あり、一は牟良叔舍（ムラシュクシャ）といひ、一は喜利志多佗孟多（キリシタダモタ）と云つた。

人は二三尺ばかりの一物を持つて居たが、其中は通で外は直で重い。管の一端は塞がれて、その傍に一つの穴があり、そこが火を通ずる道となつてゐるのである。妙藥を中に入れて、小團鉛を添へる。岸に一小白を置き、其身を整へ、其目を眇めると、忽ち其穴から發火して、團鉛が出て、小白に穴を穿つのである。全く掣電の光の如く、驚雷の轟の如くである。

時堯は之を珍しんで、人をして用法を習得せしめ、又家臣篠川小四郎をして妙藥の製法を學ばしめた。此時また紀州根來寺の僧杉坊某がはるばる種子島に來て鐵砲の傳授を切望した。時堯が其志を嘉して其一を與へ、火藥の製法及び之れが使用法を教へしめた。

其後時堯は鍛匠に命じて新に鐵炮の製作に從事せしめ、略完成の域に達したが、唯其底を塞ぐ術が分らなかつた。そこで家臣をして其底を塞ぐ所以を習はしめ、歳餘にして數千の鐵炮を製出した。其時泉州堺港の商人橘屋又三郎同島に滯在すること一兩年にして鐵炮を學んで其技に熟して歸つた。人期せずして之を呼んで鐵炮又と云つた。此後畿內の近國は勿論關東に至るまで之を傳習した。

又嘗て聞く、天文十一年の頃、新貢の三大船明國に航せむとして同島に於て艤裝して發するや、第一船沈沒して、第二は無事明國に着き、第三船は大破して種子島に歸る。翌天文十二年、第三船

再び發して彼の地に着岸し、貨物を滿載して歸る。適ま海上風波に遭ひ、伊豆に漂着す。島人載貨を掠む。船中に種子島氏の家臣松下五郎三郎なる者あり、鐵炮を所持し、國人之を傳習して、之より鐵炮が關八州に普く傳習せらるるに至つたのであると。時尭鐵砲を求め之を學び、一發にして扶桑六十餘州に震動し、且又鑄匠をして之れが製法を知らしめ、五畿七道に偏らしめた。然らば則ち鐵砲の種子島に權輿するや明である。」

右の記事は、よく檢めて見ると、極めて手がかりの薄いものである。唯キリシタ・ダ・モンタの名が「マカオ史家」のアントニオ・ダ・モッタと合はぬこともない。又和漢三才圖繪には長子口といふ名になつてゐるさうであるが、ペイショトと多少音の似通はぬこともない。尤もこの方は年號は甚だ遲れ、弘治元年（一五五五年）となつてゐる。

まづまあこんな具合にして日本が「發見」せられたのである。果してピントオが言ふがごときうまい利益が出來たかどうか知らないが、危險な航海を償ふに十分な商賣はあつたらうと思はれる。隨つて一度道が開けたのちは、其後もずんずん異國（主として葡萄牙）の商船が入津したことであ

らう。

さて其後、千五百四十九年にシャギエル上人が日本に渡來するまでの七年の間にどんな船か日本に來たか。是れは歐羅巴の文獻を調べたら或る程度までは判明するだらうと思ふが、今は資料もなし、問題外にする。

が、近世歴史の上で、日本が世界から知られたのは、何と云つてもフランシスコ・シャギエルの事業と關聯してゐる。

右上人は千五百四十九年八月十五日の聖母昇天祭日に日本に着した。その到着の港は薩摩の鹿兒島であつた。Cosme de Torres 師（西班牙生れの伴天連）、Juan Fernandez（同コルドバ生れの伊留滿）、日本人伊留滿 Paulo da Santa Fé 其兄弟の Joannes 日本人の下僕 Antonio 及び二人の從者（一人は Amador と呼ばるる印度人、他の一人は Manoel といふ支那人）の七人が師に隨つた。

中に就いて、パウロといふ日本人が實にシャギエル上人の日本に來る手引をなしたのである。此男はワリニャニ師の記する所に據ると一般にはアンジエロと呼ばれてゐるが、其實名はヤジロウで、

後に遁世剃髪してアンセイといふ名に代へた。ゴアで洗禮を受けてパウロ・ダ・サンタ・フエニと云ふ名を貰つた。（ルイシユ・フロイシユ師の「日本歴史」にはハンシロオとある。實名は或は半四郎であつたかも知れぬ。）

この男は鹿兒島に生れ、既に結婚したが、わかい時人を殺し良心の苛責に堪へず、佛僧に就て解脫を求めたが之を得ず、貿易の葡萄牙人に由り、印度に大聖います由を聞いて、遂に意を決して印度に渡り、艱難辛苦の末聖フランシスコ・シヤギエルの眷顧を得たと傳へられてゐる。そしてゴワのサンタ・フエ（聖き信仰の意）の教會の學校に學び、拉葡西語を習得し、後日本に於て大に斯教の爲めに盡したのは諸書の齊しく記すところである。またその手紙も殘つてゐる。

その始めて日本を出立したのは（George Alvarez の船に依つた。で彌次郎或はパウロが異國人と懇意になつたり、その船で印度に渡つたりしたところを見ると、貿易船の往復も既に甚だ頻繁となり、邦人もやうやく海外の事情に通じて來たことと想像せられるのである。

なほこの彌次郎或半四郎の事、また聖フランシスコ・シヤギエルの事に就ては好機會もあらば、

再び之を詳說しようと思ふ。（「婦人公論」大正十五年一月號）

註。「中央公論」昭和三年四月號に林若樹氏の「メンデス・ピントー」と題する短篇が出てゐて參考になる所が多い。そのうちに次の如き章句がある。曰く「ピントーが種子島に漂着して鳥銃を献じた時の領主は種子島時堯である、……然るにピントーの紀行には時の領主をナウタキム Nautaquim としてある、……然るに之に就いて大島富士太郎男は貴重なる發見をされた、それは故天囚西村時彥博士の著なる南島偉功傳……中、種子島家系圖時堯の條下に、時堯初名直時とあるを見出されたのである。直時とナウタキム優に同一人である。一六一四年初板のリスボン板によれば明にナウトキム Nautoquim とあるに於ておやである。」云々。其後此篇に於て林氏は大にピントーの爲めに辯護して居られる。追記

日本に於ける吉利支丹の運動

緒言

日本に於けるキリシタン宗門の運動に關していつかは鳥瞰的觀察を施して見たいとはわたくしの兼ねてからの希望であつた。わたくしの時折調べてゐる所は甚だ部分的であつて、唯其の初期隆盛時代の歴史の一部に彷徨して居る間に、この講座の編輯者のわたくしに課した題目は過大であつた。玆にわたくしはその課題を果すべく試みては見るが、恐らく杜撰或は未熟との譏をまぬかれないことであらう。

*

日本が内部的に積極的な文化を建設する爲めには耶蘇教は最も重要な材料と指南とを與へるものであると思ふ。現代に於て、如何なる國の文化でも、一度基督教的心理の濃厚な層を透過して來た

ものでなければ、深いとも、強いとも謂ふことは出來まい。東洋の宗教的、文學的、論理的又實用的の文化は現に我我の裡に生活して空氣となり、食物となつてゐる。然し之を再び自覺し、之を更に精査するには、耶蘇教的プシコロジイの監督が必要である。我我は印度の神秘主義や支那の功利主義が、善惡の意味に於て、我我の祖先をどう導いて來たかといふことを飽くまで熟知してゐる。而して已に我我はその世界觀、その處生訓から一廻轉を試むることを望んでゐるのである。又西洋の古典的人道主義の我我に必要なることをも痛感してゐる。然しこの新しい人文的要素を納れる時にも亦我我は耶蘇教的心理の監督を要するのである。別言すれば、我我が希拉の古典的文化に入るにはルネサンスの門を通過して遡るべきであると思ふ。卽ち希拉のユマニテエと耶蘇教のそれとの間には多大の矛盾衝突がある。その悲痛な闘爭を看ざるまねして直に泰西の古典に就くは、まことに時代錯誤である。最後にまた、最近の唯物的な主意的な西洋思想に接して、之に何等の監督（殊に耶蘇教心理の）を與へなかつたら、我我は果してどこへ導かれて行くのであらうか。

この種の反省は我我の現在に於て直面するところである。が然し同じ問題は既に三百年四百年前に、我我の祖先の前に提供せられてゐた。そして彼等が如何に此問題を處理したかといふのを歴史

的及び心理的に解明するのがこの稿の目的——少くとも意向である。

日本に於ける天主教史の四期

日本に於ける吉利支丹宗門の歴史を四つの期に分けるのが便利であると、わたくしは嘗つて既に言明したことがある。（「新小説」大正十五年七月南蠻號）

フランシスコ・シャキエル師が日本人アンジエロ（フロイス師はハンシロオと書く）の手引に由つて日本に渡つたのが千五百四十九年（天文十八年）八月十五日、聖母昇天祭の日のことである。千五百五十一年に師が日本を去り、師と共に日本に來たコスメ・デ・トルレス師が首座となり、ジオアン・フエルナンデスが之を輔けて九州地方に耶蘇教を擴め、その後段段と他の宣教師も來り、殊にメルシオオル・ヌネス師、ガスパル・キレラ師、ルイス・フロイス師、フランシスコ・カブラル師、オルガンチノ師などが來朝するに及んで、耶蘇教は火の燎くが如く九州から京畿の地方までに擴まつた。やがてアレサンドロ・ワリニヤニ師が九州の貴族の子弟に勸めて歐羅巴に赴かしめたなどといふ華華しく且可憐な插話も生れた。この勃興期に於て人人はどういふ動機から新教に歸依

したかといふことを窮めるのは洵に興味が深い。それを以て必しも單純な群集心理と見做し難いものが往往ある。それは後に述ぶることにするが、信長が光秀に殺され、秀吉が天下を取るや、最初は亦よく天主教を庇護したが、千五百八十七年（天正十五年）の九州征伐の機會に於て突然と禁教の令を發して、七月廿五日、時の副管區長（日本天主教の首座）ガスパル・コエリヨに對して、廿日以内に凡ての宣教師の日本を退去すべきことを命じたのである。まづ此邊までをわたくしは日本天主教史の第一期と考へるのである。即ち隆盛期である。別言すれば天主教が積極的に日本の民衆にはたらきかけて居た時代である。そして此間が其文明史的興味と華かなエピゾオドとを以て、最も我々の心を動かす時期である。

それから第二期の退守及び衰微の時代が來る。尤も此時代も其初期にはかのワリニャニ師が歐羅巴から歸來した四青年を連れて秀吉に謁して、その款待を得たやうな賑かな光景のないでもないが、教徒迫害の事が漸く踵を接して起つて來る。殊に千五百九十七年（慶長二年）のフランシスカン派僧六人、他教徒二十人の死刑は其後續續と生じた大殉教の最初のものである。（一體この期に於て活動したものは耶蘇會よりもむしろフランシスカン派の僧侶である。）翌年秀吉が死し家康の

天下にたつてからは團體的に教徒を死刑に處することが頻繁になつた。そのうちでも千六百二十二年（元和八年、秀忠）長崎に於ける九月二日の所謂「大殉教」といふのが最も著しいものである。耶蘇教師二十二人、宗徒三十名、其內二十餘人は生きながら焚かれ、他は斬に處せられた。將軍家光の寛永年中には日本各地に於てまた屢教徒處罰の事があつた。かくして寛永十五年に至り天草一揆の事が勃發した。是事あつて以後は教徒の檢索は微細の極に達した。而してわが第二期もこの擾亂を以て界とする。尤もこの第二期の間にも支倉六右衛門常長及びその一族の渡歐といふやうな戲曲的な出來事も無いではなかつた。

第三期は宗門剿滅の時代である。既述の第二期までは、宗門の事情は歐洲の文書によつてかなり精密に傳へられてゐる。所が天草一揆の事になると、橫文史料は極めて寥寥である。殊に第三期に至つては從來殆ど之を記すものがなかつたのである。

大正十四年に至り、姉崎正治博士がもと長崎奉行所に殘つてゐた寫本類を重要なる材料として、「切支丹宗門の迫害と潜伏」とを公にせられ、翌年又「切支丹禁制の終末」を續刊せらるるに至り此間の事情が漸く明になつた。

＊

是等の諸期を通觀すると、我我教外の者には、殊に近世生物學的信條を以て敎育せられた者には日本に於ける天主教といふものは、違ふ國土、異る培養地に移植せられた、巨大な一生物として感知せられるのである。神戸の市にただ一つ聳立するユウカリプチュスの巨樹を見ると、我等は往往一種悲壯の印象を受ける。淮南の橘、淮北の枳と云ふ古諺もあるが、我我は屢屢新しい培養基に移植せられた黴菌の（不倫の譬ではあらうが）段段と代を重ねて行く間に枯死するさむしい相を看て知て居る。而して我我は同じく寂しい退化の姿をわが天主教にも見出したのである。

大正十五年の春四月、わたくしは一友と共に攝州高槻在の一村落を歩いてゐた。重い雨で、丘、谿の濕つた中に、椿、桃の花が咲いてゐた。そこは近年天主教の遺物が發見せられたる土地であつた。我我を案內してくれた一青年が問はず語りに我我に聞かせてくれた所に據ると、その鄕土には近頃まで他と交際を斷つた一部落の人人があつた。彼等は他と異りたる神に齋く。その信仰は極めて堅い。そして私かに彼等の信仰を窺つた人に尋ねると、彼等の齋くものは牛狡トけの神であつたといふ。かの熱血僧フランシスコ・シヤヰエルが齎らし來つたデウスの教が、近畿の邊邑に牛狡の

神となつたといふは眞であろか。然しそれは必しも滑稽な事ではない。內容は忘れられた。信仰と禮拜と勤行とは殘つた。茲に人間の宗教といふものの本相を暗示するものは無いであらうか。殊に深く人間性に根を張つたカトリク教、そのうちでも更に生の強いジェズイト教が、頭を碎かれた鰻の魚のやうに動く姿をここにわれ人は見ないのであろか。

又マルナア師は語る。千八百六十五年三月十七日（元治元年は三月七日に改元、慶應となる）午後零時半頃晉築の「廿六人の殉教者の御寺」の入口に、男女兒童うちつれた十四五人の人人があつた。その樣は唯の好奇心で來たものとは見えなかつた。プチジャン師は扉を開いて人人を內に入れた。心のうちに、神の祝福の彼等の上に在らむことを念じつつ祭壇に進み、聖櫃のうちの聖體を拜し、而して彼等を動かし、その裡に禮拜者を出させる言葉を與へられむことを神に祈つた。その時五十歲乃至六十歲ばかりなる女が師の近くに來て跪いて、一人はその手を胸に置き低い聲で言つた。

「ここなわたくしどもの心は貴方と同じでございます。」

「本當ですか」と師は答へた。「そして一體どこからお出でですか。」

「わたくしどもは皆浦上の者です。浦上では大抵の人が、わたくしどもと同じ心でございます。」

その女の人が直ぐまたかう尋ねた。

「Santa Maria no gozowa doko ?」

この名を聞いてプチジャン師はもはや疑ふ所はなかつた。是れこそ日本古基督教徒の裔である。彼はその心に溢るる天啓に、いかにして神の恵に謝すべきかを知らないほどであつた。

「ほんに、これこそサンタ・マリア様です」彼等が曰つた。「御覧なさい、腕に Onko Jesus Sama を抱いていらつしやいます。」

彼等は又曰つた。「霜月の二十五日には御主エズスさまの御祭を致します。その日の眞夜中にエズスさまはお生れになり、それから貧困のうちに御成人になられました。三十三の御歳にはわたくしどもの魂の救ひの爲めに十字架にて御かくれになりました。只今はちやうどその Kanashimi no setsu でございます。あなた様もその儀式をお守りになりますか。」……

これが日本に於ける「基督教徒の發見」の有様である。そして日本に於ける天主教史の第四期はこの時の前後を以て始まるのである。

天主教の傳來及び隆盛の時代（第一期）

我國に於ける天主教は突然他より傳へられたものであり、全く被動的のものである。それ故まづ之を傳へたもの、能動的にはたらきかけたものを觀察する要がある。

歐羅巴人が始めて日本に渡つて來たのは千五百四十二年（天文十一年）で、是事に就いては嘗て之を述べたことがある（「日本の發見」婦人公論大正十五年一月號）。フランシスコ・シヤヰエルに由て耶蘇教の傳へられたのは之より七年おくれる。

フランシスコ・シヤヰエル（Francisco Xavier）師　師は徹頭徹尾宗教の傳道師であつた。西班牙北東、慓悍なるバスク族の地に生れ、幼時目のあたり戰禍を見、而してその心中の爭鬪力は專ら之を宗教の事に向けた。その出生の年はコロムブスの死んだと同年、千五百六年の四月七日である。同じ十二年から廿四年まではその祖國ナバルラの國が瀕死から滅亡に至つた時である。千五百廿五年から三十六年の間には我我はわかきフランシスコを、コレジュ・サント・バルブの學生として巴

里に見出す。巴里は當時歐羅巴學藝の中心であつた。伊太利に始まつたルネサンスの精神は無論この學都にも浸潤し、希拉の古學の研究の盛んであつた一方には、ルウテル新教の教養が亦漸く人人の心を捉へた。學生の生活は自由奔放であり、往往かなり亂暴であつた。そして若かいフランシスコもこの新精神に薫染しやうとした時に、偶然同じコレジユに來た年上の同輩を得、その感化によつて強いカトリクの信仰に入るやうになつた。その人こそは耶蘇會の開祖たるイニャシオ・デ・ロヨラ（Ignacio de Loyola）である。千五百三十七年二人は他の同志と共に伊太利ヱネチアで落合ひ、ここにイニャシオが既に創めてゐた病院を助けて病者の治療や傳道の事業に從つた。同年には法王パオロ三世に謁した。千五百四十一年には東洋の宣教の爲めに印度に遣はされた。翌年からゴアに住み、ここを中心として附近の地方に傳教した。而して日本人ハンシロオに會つたのは千五百四十七年の三月である。

さて日本に渡つたのは既述の如く千五百四十九年であるが、鹿兒島に一年ばかり住み、島津貴久（しまつたかひさ）に謁し、またニンジツ（忍室）といふ禪僧に會ひ、百餘人の人に洗禮を施してゐる。それから平戶山口の地方を遍歷し、又京都に行き（千五百五十一年二月）後奈良天皇、足利義輝に謁せむとして

果さず、ここに留ること十五日にして空しく又山口に復歸した。師の山口に於ける宣教事業は一千人の改宗者を贏ち得たといふが、同年秋豐後に至り大友義鎭に會ふに及んで、ここにも亦新教の教義及びその感情に同情するものが漸く多くなつた。これらの教徒は然し大概下級の者であつた。豐後はメンデス・ピントオの説に據ると、大友義鎭及び三千人の從衆の面前で大宗論が行はれたといふことである。

シヤヰエルは千五百五十一年の十一月に日本を立つた。彼が日本で何を觀察したか、又何を教へたかといふことに就いてはこの項の終に一括して言ふところがあらう。師の立つたあとは篤實なトルレス師と、日本語に熟達せる伊留滿フェルナンデスとが宣教の事業に從ひ、千五百七十年には三萬人の教徒を算へるに至つた。

コスメ・デ・トルレス（Cosme de Torres）師　師は千五百五十年頃ヷレンシアに生れた。教職に就きマヨルカ、ヷレンシア、ウルデコナに於て拉丁語を教へ、千五百三十八年にノビスパン（墨西哥）に行きルイ・ロペス・デ・ビヤロボスの遠征に從つてフイリピン、モルツケンに赴き、ここでフランシスコ・シヤヰエルを識り、千五百四十八年ゴアに於て耶蘇會に入つた。シヤヰエル師に

隨つて日本に來り、師の去つた後は日本に於ける耶蘇會の首座として、主として山口及豐後に於て活動した

山口では千五百五十六年大内八郎（大友義鎭の弟）の寄進で始めて耶蘇寺院を建立した。それが有名な大道寺である。「周防國吉敷郡山口縣大道寺事從西域來朝之僧爲佛法紹隆可創建彼寺家之由任請望之旨所令裁許之狀如件　天文廿一年八月廿八日　周防介御判」といふのが今に傳はるその許可狀である。

師は主として豐後或は口の津に在り、大友義鎭の厚遇する所となつた。千五百六十二年には肥前に行つて大村純忠に洗禮を與へた

千五百七十年印度の管區長のアントニオ・デ・クワドロス（Antonio de Quadros）師がフランシスコ・カブラル師にオルガンチノ師を添へて日本に遣はした。當時トルレス師は大村に在つたが、純忠に快からぬ者の謀反の徴があつて、その地が平安でなかつたから志岐の島に移つた。日本に來て廿一年間耶蘇會の首座を勤め、既に七十一或は二に達してゐた師は、疾の爲めに既に甚だ疲勞して死のやがて來るべきを察してゐた。所がその後繼者たるカブラルが志岐の島に着船し、その命令

でここで宣教師の會議が開かれるといふので、師は此上もなく滿足した。そしてその年の十月の二日に、その長年の偶伴たるガスパル・ヰレラ師に護られてこの世を去つた。

トルレス師がどんな人であつたかといふのは、千五百五十六年に日本に來たベルシオオル・ヌネス師の書翰に詳しい。「彼は確かに道德と禁慾との人である。」さう同師が云つてゐる。「フランシスコ師の命で山口に殘つて六年間居つたが、嘗て肉食せず、麵麭又は鮮魚を食まず、專ら米によつて生きた。」そして粗服し、常に裸足で暮したのである。

・・・・・・・

ルイス・デ・アルメイダ（Luis de Almeida）フロイス師の著書に據ると千五百五十二年平戶に富める葡萄牙商人があり、三萬クラザドスの財産を有してゐたが、發心して山口なるトルレス師の許に走り、爾後その一生を傳教事業に捧げた。彼はリスボンの名家に生れ、外科醫兼商人として日本に渡り、耶蘇會に入り、伊留滿として主として五島、志岐、天草に於て活動した。千五百八十年にマカオに於てパドレの位を得、千五百八十四年に天草の河内浦（カハチノウラ）に死んでゐる。齡はその時六十以上であつた。彼は一生南船北馬の生活をなし、膽もあり策もあり一箇の好漢であつた。

其後來朝の宣教師　シャヰエル、トルレス諸師の渡來後日本に來た宣教師としては、千五百五十二年の八月ヅアルテ・ダ・ガマの船で平戸に著いた伴天連バルタザル・ガゴオ（Balthazar Gago）伊留滿ヅアルテ・ダ・シルヷ（Duarte da Silva）、ペドロ・デ・アルカソヷ（Pedro de Alcaçova）がある。孰れも葡萄牙生れである。彼等はそれより鹿兒島を經て九月豐後に入り大友義鎭に會ひ、印度副管長の書翰を呈し、屋形の厚遇を得てゐる。そこで一人の從僕を與へられ、山口なるトルレス師の許に赴いた。就中ガゴオ師は千五百二十年リスボンに生れ、四十六年そこで耶蘇會に入り、四十八年に印度に赴き、五十二年日本に渡り豐後、平戸、博多で活動した。その後病を得、又一には日本に於ける傳道事情報告の爲めに千五百六十一年印度に遣はされ、日本には歸らずにそこに止まり、千五百八十三年ゴアに死した。シルヷは千五百五十年に耶蘇會に入り日本に來つて後は日本文典、日葡辭典を編纂した。千五百六十三年肥後の河尻（カハシリ）で死んだ。アルカソヷは千五百二十三年頃の生れで、印度に於て耶蘇會に入り日本に來る翌年印度に還り、ゴアの學校に勤務した。

千五百五十四年日本に於ける宣教事業の好果が印度に報ぜられ、更に多くの工人があつたなら一層大なる收穫があるであらうと云はれたので、當時東洋に於ける耶蘇會の首座であつたベルシオオル

ヌネス・バレトオ（Belchior Nunes Barreto）師は遂に日本に渡る決心を爲した。（彼は千五百十九年葡國ポルトオに生れ、四十三年コインブラで耶蘇會に入り、五十一年印度に來た。）そこでゴアに於けるサン・パオロのコレジオの主宰としてバルタザル・ヂアス（Balthazar Diaz）師を遺し、自分はガスパル・ヰレラ（當時はまだ修道士であつた）及び四人の伊留滿即ちルイス・フロイス（Luis Frois）、アントニオ・ヂアス（Antonio Dias）、エステワン・デ・ゴイス（Estevão de Gois）、ベルシオオル・ヂアス（Belchior Dias）並に孤兒院の生徒五名（そのうちには能く日本語を話し、パドレの通詞になつたものもあつた。殊にギリエルメ・ペレイラ Guilherme Pereira といふのは、千五百五十一年に印度に遣はされたものであるが、日本に渡つて後耶蘇會に入り、パドレになるのを肯ぜずして一生伊留滿として過した。日本語に熟達してその任務は兒童の教育であつた。千六百三年、六十六歳の齡で死んだ。）を隨へて日本に來た。それは千五百五十六年夏或は秋のことである。尤もルイス・フロイスは途中マラカに遺され、その寺院を主宰することを命ぜられ、その日本に來たのは更に後れたのである。かの有名なフェルナン・メンデス・ピントオもベルシオオル師に隨つて日本に來たといふ。彼はその頃ゴアで耶蘇會に入つてゐる。ヌネス師は然し長

くは日本に留まらなかつた。又ガゴオ師も宣教事業の困難に打ち負けて、其信仰を薄くした爲めに千五百六十年にトルレス師に由つてゴアに送還せしめられた。これらの人人のうちで、主として京畿の地方に活動したキレラ師に就いては後に尙詳しく記する所があらう。

千五百六十三年六月の六日にドン・ペロ・ダ・グエルラ（Dom Pero da Guerra）が横瀬浦に來た。後のルイス・フロイス（Luis Frois）及びジョヲンニ・バツチスタ・デ・モンテ（G. Battista de Monte）の兩伴天連がそれに伴つた。またマラカからはミゲル・ヷス（Miguel Vaz）といふ伊留滿もこの時に來たといふことである。フロイスの事はあとで書くとして、ジョヲンニ・バツチスタ・デ・モンテは千五百卅八年伊國フェラヲに生れ、五十五年耶蘇會に入り、イニヤシオの懇請で日本の傳敎事業に從ふことになり、日本に來てのちは豐後、五島、有馬、土佐、天草等に活動し、千五百八十七年平戸に死んだ。ヷスは印度に生れ、日本に來てのち耶蘇會に入り、千五百七十九年マカオに到り、パドレの位を得、千五百八十二年に長崎で死んでゐる。

千五百六十四年にはサンタ・クルスと云ふ船でメルシオオル・デ・フイゲイレドオ（Melchior

de Figueiredo)、バルタザル・ダ・コスタ（Balthazar da Costa）、ジョアン・カブラル（João Cabral）の三人のパドレが來朝した。メルシオオルはゴアで生れ、千五百五十四年耶蘇會に入り、日本に來てのちは口ノ津、島原、府内、大村、五島、博多ではたらき、千五百八十一年には府内のコレジオのレットトオルとなつた。後疾の爲めに、曲瀬道三に診を求むべく京都に赴き、八十四年には日本を去つた。カブラルは又健康を害して日本に滯在すること一年にしてここを去つた。

それで千五百六十四年の頃にはグスマン師の「日本傳教史」に據ると、日本にパドレ七人、イルマン八人が居たことになる。即ちパドレとしてはトルレスが首座で、キレラ、フロイス、モンテ、アコスタ、カブラル及びフイゲイレドオで、イルマンとしてはフワン・フェルナンデス、アルメイダ、ゴンサルエス及びサンチエス、それに四人の日本人ルレンソオ、ダミアン、アグスチン及びメルシオオルである。（パオロ・ハンシロウはこの時には既に死んでゐる。）

千五百六十八年にはアレサンドロ・ワリニヤニ（Alessandro Valignani）が口ノ津に到着した。（此事「西教史」に據る。同書には同時にロペス、ミゲル・ワスが來たやうになつてゐるが、他書の記錄は之と異る。）

千五百七十年には大師父フランシスコ・カブラル（Francisco Cabral）が志岐の島に到着した。是れは老齢のトルレス師に代り、日本に於けるスペリオルとなる爲めに、印度の管區長たるアントニオ・クワドロス師の命で日本に來たのである。ウルガン伴天連といふ名で日本傳說に殘つてゐるオルガンチノ（Organtino Gnecchi-Soldo）が之に隨從した。船はエステワン・レイテ（Estevão Leite）がジャンクである。又他の一支那船には指揮者として船長のマノエル・トラワソス（Manoel Travaços）が乘つて來たが、またパドレ・バルタザル・ロペス（Balthazar Lopes—年上のロペスといはれたる人）が同船してゐた。このロペスといふ人は千五百三十三年から三十八年頃までの間に葡國キラキソザに生れ、千五百六十一年に耶蘇會に入つた人である。口ノ津、有馬、平戸、千々石、大江野、サイツ、長崎等に於て宣教事業に從ひ千六百五年長崎で死んだ。

グスマン師、クラツセ師などの史書では志岐に於ける師父の集會を記してゐる。カブラル師の司會の下にトルレス、キレラ、アコスタ、ロペス、フイゲイレドオ、モンテ、ワリニヤニ、オルガンチノの諸パドレ及びアルメイダ、サンチエスの兩イルマンが會した。フロイス師は京都に在つて之に列することが出來なかつた。此會議で決定したことは、第一にいたく健康を害つたガスパル・キ

レラ師を印度に歸らしむること、第二にモンテ師を豐後、ロペス師を日ノ津、アコスタ師を平戸、ワリニャニ師を五島、フイゲイレドオ師を大村、またオルガンチノ師をフロイス師の補助として京都に遣はすことであつた。トルレス師は志岐の島に止まつた。そして既記の如く、同じ年の十月二日に死んだ。享年七十四だといふ。

カブラル師の事は改めて書くが、師は寺院巡回の爲めに堺、高槻を經て京都に入り、フロイス、オルガンチノ兩師に會し、又オルガンチノ及びルレンソオを從へて、安土に信長を訪問した。後に豐後に復歸して、なほ多くの教師を求めむが爲めに彼のバルタザル・ロペス師を印度に遣はした。

同じ千五百七十二年に船長ジョアン・デ・アルメイダの船が長崎に著き、それと共に二人の師父が來た。一人はセバスチアン・ゴンサルヱス（Sebastião Gonsalves）、も一人はガスパル・コエリヨ（Gaspar Coelho）である。孰れも葡人である。コエリヨは才能があつて、カブラル師により直に九州地方の宗務の主宰者とせられたが、後にはガスパル師に代り日本耶蘇會の首座となつた人である。ゴンサルヱス師は千五百三十三年乃至千五百三十十年の頃に生れ五十四年耶蘇會に入り六十二年印度に渡り、日本に來てのち主として平戸、大村、長崎、時津等ではたらき、九十八年長

崎に死んだ。

千五百七十三年にアントニオ・マノエル・デ・キリアナ（Dom Antonio de Villana）の船が印度から日本に來た。それには大友義鎭の注文した鐵砲も積せてあつたが、又ゴンザロ・アルヴレス（Gonzalo Alvarez—日本に於ける最初の巡察師父）、マノエル・ロペス（Manoel Lopes）、ジョワン・ヱリヨ（João Velho）、デエゴ・フエルナンデス（Diego Fernandez）、アントニオ・ヌネス（Antonio Nunes）が乗つて居つた。然し日本近海で大風に會つて、日本の島影を見たが船は沈み、人人は溺れ死んだ。

千五百七十六年にドミンゴス・モンテイロ（Domingos Monteiro）の船が長崎に着き、それと共にアントニオ・ロペス（Antonio Lopes）、アロンソ・ゴンサレス（Alonso Gonçalez）、クリストヴン・デ・レアン（Cristovão de Leão）の三人のパドレが日本に來た。有馬純忠がアルメイダの手で洗禮を受けたその年である。

翌年七月四日モンテイロが再び來朝し、その船で、兼ねて印度に遣はされたバルタザル・ロペス師が六人のパドレ、七人の伊留滿を作つて復歸した。グスマンに據るとパドレはアントニオ・ロペ

ス、ペドロ・ラモン、メルシオル・デ・ムラ、セバスチアン・ゴンザレス、ゴンザロ・レベルロ、グレゴリオ・デ・セスペデス、伊留満はラグナ、カリオ、アルワロ・ヂアス、デエゴオ・ミスキツタ、シモン・デ・アルメイダ、ヂエゴ・ペレイラ及びバルトロメオ・レドンドオである。

千五百七十八年にも四人の伴天連、二人の伊留満が印度から日本に渡つた（グスマン）。フロイス師の「日本歴史」はパドレたちの名を傳へてゐる。曰く、アントニオ・プレネスチノ（Antonio Prenestino）、ジュリオ・ピアニ（Julio Piani）、ジュゼツペ・フルラネト（Giuseppe Furlaneto）アフオンゾ・デ・ルセナ（Affonso de Lucena）である。

千五百七十九年の始めにはかのアレサンドロ・ワリニャニ師が日本巡察師父として再び日本に来り口ノ津に上陸した。同師は千五百八十二年二月廿二日（天正十年正月三十日）伊東マンシオ以下三人の日本青年を連れて日本を出立した。

ガスパル・ヰレラ師及び京都並に近畿に於ける耶蘇教　凡ての伴天連の活動が頗る戯曲的光彩に富んでゐるが、殊にヰレラ師に於て然るを見るのである。近年ルイス・フロイス師の「日本歴史」

の獨逸譯本が公刊せられて、その之を傳ふること甚だ精細である。千五百五十九年にトルレス師の命で、日本人伊留滿ルレンソオ及びダミアンを隨へ比叡山に赴いた。その使命は成功しなかつたが、其後京都に足を駐めて漸く多數の信徒を得た。そのやや落付くまでの艱難一通りのものではなかつた。彼は其身體が强健で、その容貌は日本人の目に親しく、又既に日本語を話し、少しく之を書くことさへ出來た。

始め下京のカワノタナの山田の後家といふものの家を借りたが、ほんとうの茅屋で永祿三年正月の冱寒を防ぐことが出來なかつた。やつと疊を買つて來て床に敷いたが、物を煮るものとては、豐後からもつて來た鍋一つよりはなかつた。それでも法華宗の男が二人訪ねて來て、一人は後に改宗してサンノオ Thome と云つた。次に六角町のタマグラノチョオなるクンダノジュチョオといふ人の家に移つた。古外套を身につけ、赤い帽を被り、祈禱書を前にしてゐると、いろいろの人が訪ねて來た。初めは唯異人を看ようといふ好奇心と、又西洋の事情を知りたい欲望とで來る人が多かつた。漸く佛僧と議論するやうになつた。今から考へて見ると、其爭點の根本問題は多神教と人間中心の唯一神教との衝突である。同年（千五百六十年）には公方足利義輝にその宿所妙覺寺に謁して

京都の布教の許可を得、甚はその制札を家の軒に懸けた。

註。山田孝雄教授の厚意によつて「改定史籍集覧」第廿七冊「室町家御内書案」中に左の寫の出て居ることを知つた。

禁制　　　幾利紫旦國僧波河（阿カ）傳連

一　甲乙人等亂入狼藉事

一　寄宿事付惡口事

一　相懸非分課役事

右條々堅被停止訖若違犯輩者速可被處罪科之由所被仰下也仍下知如件

永祿三年――　　　　左衛門尉藤原

　　　　　　　　　　對馬守平朝臣

佛僧の來り訪ふものが屢說伏せられて歸り、京都に於ける僧侶の間には印度渡來の僧に對する反感が頗る强くなつた。それで、たとへば人肉を食ふといふやうな噂を立て人人が之を迫害した。佛僧のうちでも絶對的排他の宗門たる法華宗のものが最大の敵となつた。次に叡山の僧徒である。禪

僧はむしろ甚だ批評的であつた。殊にその知識欲の爲めに往往新宗門の手中に陷つた。その著しい例は Fabião Meizon といふ紫野の僧である。是れは「南蠻寺興廢記」の梅庵と同一人であるとも云はれてゐる。然しフロイスに據るに既に八十歲の高齡で、その素性人柄、興廢記中の人物とは大に異るものがある。又若狹生れの醫師の Yofoken といふものをも改宗せしめて居る。又美濃國の屋形に土岐殿(ドキドノ)といふのがあつた。その弟が法華宗(?)の上人となる爲めに京都に來たが、それに屬從するものに小池備後守(コイケビンゴノカミ)、山田(ヤマダ)の庄(シヤウ)(?)左衞門(ザヱモン)といふ二人の侍があつた。殊に後者はその才學が天下に聞えてゐた。その知識欲は天臺、儒、淨土、眞言、神道を涉獵して滿足せず、遂に禪宗に就くに及んでやや意を得る所があつたといふ。この人が亦ヰレラに就いて改宗したから、それが世間の大評判となつた。その後三年にして此人は殺された。そのうち法華宗の僧侶たちが松永久秀に取入つて宣教師を追はしめ、ヰレラも一時八幡に逃げたが、その後京都では亂が起り、公方も八幡に逃げるに及び、ヰレラは暫く堺に退いてその地の傳教に從事した。

此等の事の間にヰレラはユキ・ヤマシロドノ(三好山城守康長)ゲキドノ(大外記淸原賴賢)やサンガノ・オオキドノ(河内飯盛の城代白井備後守。德富氏に據る。)池田丹後殿、牧野半大夫殿を

改宗せしめた。同年攝津高槻の城主高山飛彈守（和田伊賀守惟政の弟、法名ダリオ）がキレラをその城に呼び、妻子と共に洗禮を受けた（Steichen に據る）。その子のうちジユストオ高山右近大夫長房は後來日本耶蘇教史中の顯著な人物となつた。また伊賀の國、澤の城代澤某も改宗した（德富氏。――フロイス傳は之と高山飛彈守とを同一視す）。又堺ではヒビヤ・リヨオケイといふ富豪が耶蘇教の大壇那となつた。

千五百六十五年（永祿八年）ルイス・フロイスがキレラの補助の爲めにアルメイダと共に京都に來た。アルメイダは病みて堺に止り、フロイスは大阪の危難を免れ、都に來たが亦病床に臥した。アルメイダはその後奈良、トチ、澤等の諸國を遍歴し、飯盛にキレラに會しその後堺を經て九州に歸つた。

キレラはその後再び京都に出で、上京に家を借りむと努力した。その年の六月（舊暦五月）には一大事件が生じた。それは將軍義輝が三好彈正（その子の右衛門佐）の爲めに弑せられたことである。フロイスは此事を敍して極めて精細であるが、今はその紹介をば割愛しよう。この擾亂は無論宣教師に害を及ぼすことになる。これで三好康長はその甥の與平次（或は與平太、法名ジヨルジ）

を遣はしひそかにヰレラに警戒を與へた。

　その頃既述の山田ノ左衛門丞（或はユキノサエモンノジョオ）が毒殺された。それでヰレラは敢てめざましい行列を作つてこの動亂の市中を練りその葬送を爲した。人人はラテン語の歌詞を唱ひつつ進み、行人をして瞠目せしめた。そして一層僧侶殊に法華宗の反感を招いたが、然し幸に事なくして濟んだ。ヰレラは信徒の勸めを否み兼ねて七月廿七日都を立つて河内に退いた。あとに殘つたフロイスも亦やがて都を去らなければならないやうになつた。

　さてこの調子で以て記述を續けて行つたら限もないから以後はずつとはしよることにしよう。永祿十一年（千五百六十八年）に信長が足利義昭を擁立して京都に入り、三好の殘黨を追撃し、松永久秀の來り降るに至つて、京都は再び平定した。そして人も知るが如く、信長は耶蘇教に厚意を寄せてゐたから、千五百六十九年にはルイス・フロイスは京都に復歸することが出來た。それまでの五年間は堺に在つたのである。この間に和田惟政が大に宣教師の爲めに斡旋の勞を執つた。フロイスは上洛し、和田殿に連れられ、二條御所の建築を監督してゐる信長に謁した。信長の顧問たる日乘上人は耶蘇教を喜ばず、後にフロイス日乘の宗論などの事があるが、既によく知られてゐる事ゆ

ゐここには載せぬ。

この後京都に於ける耶蘇教はフロイス、オルガンチノ、カブラル、ワリニャニの手によつて擴張せられた。而して京都から堺に退いて傳教に從事してゐたヰレラは久しく師父を闕いた豐後の地で信徒の懶惰を聽く爲めに、トルレス師からそこに呼ばれ、日日夢想せる京都歸還を果さずに千五百六十六年四月堺を立つて九州に赴いた。

千五百七十年に大師父フランシスコ・カブラル師が志岐に著し、そこに師父の集會を催したが、その決議の一はいたく健康を害したヰレラ師を印度に歸らしむることであつた。既にして我等は千五百七十一年、ゴアから葡萄牙に送つたヰレラの書翰を「パドレ書翰集」に見出すのである。

ルイス・フロイス師　フロイス師は千五百三十二年（？）にリスボンに生れ、少年時王室の官房に勤務した。千五百四十八年に耶蘇會に入り、一箇月の後は東印度に赴く身となつた。同年の十月の九日にはガレガといふ船でゴアに到着した。そしてそこのサン・パオロのコレジオの教師となつた。同時に自分もフイロソフイ、神學及び聖書の研究に從事した。千五百五十二年シャギエル師の日本よりゴアに歸るや、多大の感激を以て日本に於ける宣教の事情を聽いた。そして身もそこに赴

いて同じ事業に盡さむと決心し、旣に說くが如く、メルシオル・ヌネス師の日本に來るや、それに從つてゴアを發したが、途中にマラカに殘され、後またゴアに歸還した。

ゴアでパドレの位に昇りサン・パオロのコレジオのレクトルとなり並に管區長の秘書を勤めた彼は理解明に、記憶强く、殊に記述の才に秀でてゐた。

千五百六十四年の夏（シユルハンメル及びフオレッチユ兩氏は爾かいふ。ダスマン師は六十三年のジユリオの二日といふ）にフロイス師は始めて日本に到着した。そして直に京都に遣はされた。ここには旣にガスパル・ヰレラ師及び日本人伊留滿ルレンソオに由つて傳敎事業の基礎が築かれてゐたのである。ヰレラ師は其時四十二歲であつたが、全頭悉く白髮を頂いてゐたといふ。フロイス師は千五百六十五年のジヤネイロの三十一日卽ち永祿八年の正月の年賀の日に美美しいいでたちをして初めて公方に謁見した。公方は將軍義輝である。然しその年の（舊曆）五月十九日には三好キサンドノ（義繼）及び松永彈正殿（久秀）の爲めに害する所となつた。かくして京都はさわがしく、耶蘇敎師も危險を感じた。フロイス師もヰレラ師と共に都を出でて堺に隱れた。所で義輝の弟の義昭は僧侶であつたから三好松永の手を免れたが、この時南都より江州に逃れ和田ドノ（惟政）に賴

つた。そし還俗して義秋と名のつた。後義昭と改めたのである、後永祿十一年（千五百六十八年）には信長に救を求めた。それで信長は同年に義昭を奉じて京都に入り三好、松永を破り、義昭は同年十月十八日征夷大將軍となつた（德富氏著織田氏時代前篇に據る。）翌年には二條御所の造營を始めた。同年フロイス師も都に還り、信長に謁した。信長は伴天連に好意を示したがその秘書たる朝山日乘はそれに反し甚だ之を苦しめたのである。フロイス日乘の宗論は甚だ有名の事であつて今詳說するを要しない。和田惟政の弟ダリオ高山飛彈守及びその子ジユストオ高山右近は旣にキレラを知り又フロイスに親んだ。

天正元年（千五百七十三年）には義昭信長を圖り、其四月に信長は二條城を圍んだ。其戰亂にフロイスの身は再び危かつた。

千五百七十年の志岐島の會議の結果、新來の伴天連オルガンチノ師が京都に來つてフロイス師を補けた。それでもフロイス師の漸く害せられた健康は、北方の氣候に堪へないところから、千五百七十六年には敎會の主宰者は之を南方に還らしめた。千五百七十六年より七十九年に至る間のフロイス師の手翰　シユウルハンメル及フオレチユ兩氏は十三通を算へた。わたくしはそれに缺けた二

通を見出した」は臼杵から發信するものである。師は大友義鎭（宗麟）にたよつたのである。

アレサンドロ・ワニャニ大師が巡察使として日本に（第二回）に來り千五百八十年信長に謁するや、フロイス師は其通辯となる爲めに大師に隨從した。

千五百八十一年にはまた九州に歸つた。そしてずつとその地方に止まつた。千五百八十二年から八十六年までは主としてその「日本歴史」の著述に從事したといふ。

巡察使のアレツサンドロ・ワリニャニ師は四人の日本青年使節を伴ひ千五百八十二年に長崎を出立した。（ワリニャニ師は日本に來り、カブラル師に代つて日本在留の師父の長となつた。）そしてワリニャニ師のあとにはガスパル・コエリオ師が日本の師父の長（卽ち副管區長）となつたのである。さて千五百八十五年（天正十三年——シユウルハンメル、フオレチユ兩氏は千五百八十六年とす。ここにはグスマン師に從ふ。）にはこの副管區長たるのコエリオ師が日本各地の教會の視察に出掛けるのでフロイス師も之に隨伴した。有馬、天草、長崎、大村、平戸、堺、大阪、都其他京阪の諸教會所在地が歴訪せられた。大阪では高山右近、小西行長、黒田孝高に會ひ、そのとりなしにより關白殿（秀吉）に謁見し厚遇を受けた。

天正十五年に至つて秀吉は九州を平げ、其後彼の耶蘇教に對する態度が一變した。ジュストす高山右近をば流罪に處し、天主教を禁じ、師父に日本の退去を命じた。師父はそこで恐く平戸に集合し、コェリヨ師司會の下に會議を開いた。

耶蘇教師父の追放令が出たが、九州の大名はなほ彼等を庇護した。それでフロイス師は初めは加津佐、後には（一五九〇―一五九七）長崎に止まつた。

その間、千五百九十年（天正十八年）に、かの羅馬に遣はされたる四人の青年使節を作つて、アレサンドロ・ワリニャニ師が三たび日本に來た。そしてその翌年秀吉に謁した。それで一時耶蘇教徒に對する壓迫も弛んだが、然しその後は教徒の刑罰が續いて、耶蘇教はもとの隆盛に歸ることは出來なかつた。ワリニャニ師が千五百九十二年にマカオに還るときフロイス師も之に伴つて日本を去つた。即ち千九百九十三年には彼の手紙にはマカオの地名が記される。然し九十五年の十月の手紙は再び長崎で書かれたのである。

千五百九十七年二月五日に西班牙のフランシスカン派僧六人、日本のジェズイト信者三人及び其他十六人の日本人信者が長崎で死刑に處せられた（所謂二十六人の殉死）。フロイス師は長崎で此

事件を見た。そしてそれを記述したのが彼の最後の報告であるといふ。此時期を以つてわたくしの所謂日本に於ける耶蘇教史の第二期が始まる。而してフロイス師は同じ年の七月の八日に、長崎で死んだ。

縷に言つた通りフロイス師はその一生の間休むことなく通信文を書いた。それは千五百四十九年ゴアからの信書に始まり、前記の千五百九十七年の長崎よりの消息に終る。その既に刊行せられたるものは、アンリイ・コルヂエの「日本書目」に就いて算へると六十數通である。わたくしはその他に西班牙マドリイの諸文庫に於て約十通（寫本）を見出した。然るに最近のシュウルハンメル及フオレッチュ兩氏の研究によると、アジュタ文庫の未刊行のものを併せると實に百三十八通である。なほ兩氏に缺けてわたくしの見出したるを加ふれば百四十五通ばかりになるのである。このうちにメルシオル・ヌネスの航海が報ぜられ、明智光秀の謀叛が報ぜられ、二十六人の殉死が報ぜられる。わたくしは夙にフロイス全集（本文と譯文と併せて）の編纂の必要を説いたが、機運は漸く熟し、最近には例のシュウルハンメル及フオレッチュ兩氏が其未刊の日本歴史 Historia do Japão の飜譯を企てて、われわれも亦既にその一本を手にした。

たとへばグスマン師の「宣教史」中の日本の部は主としてフロイスに據り、後期のシャルヅワ師、クラッセ師等はグスマンに負ふところが多い。蓋しフロイス自身の書による近世の源泉的研究はクロオ師が之を始めたのである。

（註。ルイス・フロイス師に關するこの一項は既記「新小説・南蠻號」の拙稿のうちより拔いて此に挿入したのである。追記。）

アレッサンドロ・ワリニャニ師　此日本吉利支丹史上の重要人物に關しては兼ねて詳述したことがあるから今記さない。

オルガンチノ師　師は千五百三十三年に北伊太利亞のカストオといふ處で生れた。千五百五十五年に耶蘇會に入り、初めロレトオのレクトルを勤め、千五百六十七年ゴアに至り、サン・パオロの學林のレクトルになつた。千五百七十年日本に渡つてからは直に京都に遣はされ、ルイス・フロイスを輔けてその地及び近畿の布教に從事した。千五百八十一年に日本巡察師父ワリニャニ師が京都に來るや、フロイス、オルガンチノの兩師は之に隨つて信長に謁した。後オルガンチノ師は安土のセミナリオの校長になつた。天正十年（千五百八十二年）六月二日明智光秀が信長を弑し、やがて十

四日に左馬助安土山に火をかけ、それと共に安土のセミナリオも灰燼に歸した。オルガンチノ師は後秀吉に謁し、セミナリオ再建の許可を得た。千五百八十五年、日本の師父の長たるガスパル・コエリヨが秀吉に謁するときにオルガンチノ師は之に隨伴した。天正十五年（千五百八十七年）に秀吉九州を征伐し、その時から耶蘇教禁制の策を取つた。其後迫害はいよいよ嚴しくなり、千五百九十六年（慶長元年）に多くの教師は監禁せられた。それでオルガンチノ師も九十八年には長崎に退いたが、九十九年には再び京都に歸り、家康の知遇を得た。死んだのは千六百九年の四月廿二日で其地は長崎、其齢は七十九歳であつた。宗教の爲めに盡すこと五十六年で、そのうち日本で過したのは四十年である。死前三年は長崎に於てやや安穩に休息することが出來たのであつた。

フランシスコ・カブラル師　師は千五百三十三年葡萄牙のコヰリヤムで生れ、千五百五十四年ゴアに於て耶蘇會に入つた。千五百七十年から八十一年まで日本に於ける宣教師の首座となり、その後巡察使ワリニヤニ師と意見を異にし日本を去り、千五百八十二年より八十五年までは支那の大師父となり、後、印度に歸つた。カブラル師の日本に於ける事業は到著匆匆志岐に師父會を開き、諸種の制定を定め（教師の絶對的に綿服を著くることなどはその主なるものであつた、千五百七十

年大村領主ドン・バルトロメオ（大村純忠）及びその一族をして受洗せしめ、島原、有馬、豐後又山口等の教徒を見まひ、岐阜に於て信長に會ひ、又京都に將軍義輝に謁して、大に宣教の事業を擴張した。千五百七十五年（天正三年）には大友義鎭の第二子に洗禮を與へた。千五百七十九年ワリニャニ師が巡察使として日本に來り、日本の布教の事を議するに當り、カブラル師と意見を異にする所から、之を印度に返し、日本耶蘇會の首座の役はガスパル・コエリヨをして襲はしめた。

ガスパル・コエリヨ師　これは葡萄牙オ・ポルトオの生れである。生年は千五百廿七年から三十一年までの間であると云ふ。千五百五十六年ゴアに於て耶蘇會に入り、千五百七十二年日本に渡つた。九州に於ける教師の長となり、千五百八十一年に既述の如く、ワリニャニ師によりキセ・プロキンシアルに任命せられたのである。千五百八十五年（天正十三年）大阪に到り秀吉に謁し厚遇せられた。千五百八十七年以後はまた豐後の地に留つたが、同年秀吉の九州の征伐に當り、日本在住の師父は廿日以內に日本の地を退却すべしといふ命令を受けた。これは既に記する如くである。コエリヨは六箇月の猶豫を求めその許可を得、師父等を平戸に集め（オルガンチノ師はなほ大阪に止る）善後策を講じた。そして六箇月の期限が來ても、師父の大部分は日本に止り（當時師父法兄弟

等百二十人あつた。大村喜前(よしあき)、大友義統(よしむね)の領土、又天草、平戸等に潜伏した。京都のセミナリオは解散し、その生徒凡そ六十七名は有馬晴信の領土に移つた。其他多數の教師たちもここに收容せられた。後義統は領内の教師を追つた。是等の學生は千五百八十九年キキナに移され、更に八良尾(ハチラオ)に轉じたとある。同年有馬の學校をば加津佐に移し、前記の學生と合併せられたといふが是等の事情はしかと分らない。千五百九十年五月にコエリヨは死し、厚く有馬の寺院に埋葬せられた。

*

是等外來の教師に對して我邦の人人は如何なる態度を以て反應したか。その事を檢めて見なければならぬ。

それ等の人人の間にも幾多の種類がある。第一はいち早く新教に歸依して、教師又はその助手となつた者である。第二は飽くまで之に反抗し之を壓迫したものである。第三には新教に同情したもの、第四には之が信徒となり、之が保護者となつたものである。此第四の者には知識階級と無知の庶民とを別ち考ふるを便利とする。

日本人教師ハンシロオ（又アンジロオ Paulo de Santa Fé）がシヤキエル師の渡來の手引をしたことは誰も知ることであるが、その師に隨つて日本に歸るや、薩摩に於てフワン・フエルナンデスと共に師を助けて日本語を以て教義に關する書を作つた。然し彼は長くその信心を固持してゐなかつた。彼は貧窮に追はれて、八幡（バハン）の船に乘り支那に渡り、そこで殺されたと傳へられてゐる。因に曰ふ。ハンシロオが日本語に翻譯した書は簡單な信心問答で、後ベルシオオル・ヌネス師來朝に及び一層完全なもの（二十五箇條）を作るまで行はれたといふ。その他原名は分らないが、「吉利支丹信心錄」（Cros 師は Exposé de la Foi de Chrétiens といふ）、「聖福音の日本に渡る事」（同 De l'Entrée du Saint Evangile au Japon）、「宇宙の創造」（同 La Création du Monde）、「信心の極意」（同 Les Mystères de la Foi）等も作られた。

ヌレンソオ（Lourenço）（或はロレンソオ、了西。）この男は日本吉利支丹史上閑却の出來ない大役を演じてゐる。千五百廿六年頃の肥前の生れだと言はれてゐるが、「片目は盲ひ、片目は辛うじて見える」（フロイス）男で、山口でたつきの爲めに三味線を彈いてゐるのをシヤキエルは拾はれ、千五百五十一年（天文廿年）その手から洗禮を受け、「同宿（ドオジユク）」（教義問答の教師）となり、そ

の後トルレス師により伊留滿に上された。彼は千五百九十二年（文祿二年）二月三日六十六歳（或は六十五歳といふ、西教史）で長崎に死したが、その四十四年の宗教生活の間に、その才幹と能辯とを以てして、異宗を教導し、佛僧を折伏したるのみならず、或は使者とし、或は通詞として諸侯貴人の間に往來して功を成すことが多かつた。高山右近大夫父子、小西行長父子は彼の手によつて基督教に入つた。彼が活動の樣を敍するのは頗る興味があるが、今は之を割愛しなくてはならぬ。彼は獨創の才ではなかつた。然し外國渡來の僧と、日本人とを繋ぐ最も適當なメヂオムであつたのである。

ダミアン (Damião)　ダミアンは千五百四十年から四十四年の間に筑前に生れ、千五百六十三年に耶蘇會に入り、豐後、博多、島原、横瀨浦、有馬、京都、下關等で布教に從事し、千五百八十七年下關に死んだ。

ヨホウケン・パウロ (Yofoken Paulo)　此人の詳傳は本邦文籍には殘つてゐない。獨逸譯マロイス日本歷史の註にヨフオ・パウロは千五百九年より千五百十四年の間に若狹に生れ、十五年間同宿として勤め、千五百八十年學生の師範として耶蘇會に入り、府內、臼杵等に於て說教師、問答教

師を爲し、後河内浦の修道院（千五百八十九年）に教へ、千五百九十二年長崎に行き、九十六年此に死すとある。フロイス自身の記する所に據ると、此人は和學に熟達し、その性知識を愛し、改宗の後は妻子を故里に遺して、島原に出で、コスメ・デ・トルレスに就いてその教化を受け、その後十八年の間諸師父に隨つて其事業を助けた。而してその歳八十に達するに及び、ワリニャニ師は之を豐後に連れ來つて靜養せしめた。後は師父等を助けて日本文典、拉葡日語辭典、教義問答（どちりな・きりしたん）、聖者傳（サントスの御作業）其他の書を編纂した。その文體の美は人の賞讚する所であつた。（フロイス日本歷史獨譯本九五—九六頁）

　その息も亦耶蘇會に入りキセンテ・ホオインと稱した。是れも亦逸足で日本支那の文學に通じ、且つ日本の諸宗門、別して禪宗の事に詳しかつた。後アレサンドロ・ワリニャ師により都に送られ安土山セミナリオの師範とせられた云々。又同書註に曰ふ。キセンテ法印は千五百三十五年より千五百四十四年の間に若狹に生れ、受洗してキセンテ・キレラの名を得、その父と共に師範役として千五百八十年耶蘇會に入り、説教師、問答師範、學生の教師、著作者としてはたらいた。千五百八十一年より八十四年の間は安土山に青年を教へ、千五百八十七年より八十八年には大阪、八十九年

には長崎、九十二年及び千六百三年には京都に在つた。千五百九十三年の耶蘇會人名簿には曰ふ。彼はその國文に熟達すること、その國語を以て說教することに於て第一の人であり、從來日本語に翻譯せられたる多數の書は多くは彼の作る所である云云と。

ハビアン（Fabião Meizon） この人は南蠻寺興廢記の梅庵と同一視せられる。同書には「生國加賀の國の者にて、禪家の僧名を惠春と號す。」とある。名の上からは或は同一人であるかも知れぬが、その人柄はフロイスの記すフアビアンとは大に異つてゐる。フロイスのフアビアンは紫野の禪僧で千五百六十年（永祿三年）には既に八十歲前後である。高齡の爲め隱居してゐたが、好奇心の爲めに（千五百六十年卽永祿三年）ヰレラの住む京の寺院を尋ね來り、日本より支那、それより暹羅、暹羅より印度への距離を問うたり、歐羅巴に於ては人生、日本より長きか、四季・氣候の推移異るかなどと尋ねたりした。ヰレラが教門の事を聽くやうに勸めると自分はもう禪宗で悟を得たものであるからと云つてこれを斷つたが、次の日にはヰレラの生活を氣の毒に思つたかして、甚だ美しく作つた食品のつかひ物を持つてまた尋ねて來た。そしてその時はヰレラの宗談を熱心に聽き段段と興味を感じ、遂に受洗してフアビアンといふ名を得たといふのである。フロイスのファビア

ンに就いて語る所は短く、その心理は精細に述べられてゐない。吾人は興廢記の梅庵、「平家物語」及「妙貞問答」の不干ハビヤン（新村博士は、慶長十一年に不干は四十四五歳なりしならむと言はれたり」とフロイスの語る是人と同一人であると直に肯定し難い。

吉利支丹宗門に反抗した人人　山口の大内八郎の耶蘇寺院建立許可狀にも吉利支丹僧を目し「從西域來朝之僧爲佛法紹隆」云云となした。民庶は之を呼んで天竺人と云つた。即ち始めは天竺佛教徒の異派と考へたのである。それ故日本佛僧も彼等を遇するに懇切であつた。たとへばシヤキエルと鹿兒島の禪僧忍室（ニンシツ）との間の如くである。然るにシヤキエル師は博多に於て一禪宗寺院に立ち寄つた時にはつれなくもその款待を拒絶した。（フロイスはその動機を以てそこに男色の行はれてゐたからだと解してゐる。）それより以後はシヤキエル師は佛僧に對して毫も妥協的態度を執ることがなかつた。京都に於てキレラ師が說教を始めた時には佛僧は屢來つてその說を聽いた。師の態度は全く折伏的であつた。それ故佛僧は擧つて之に對抗した。佛徒のうちでも最も耶蘇教を憎んだものは日蓮宗で、次は本願寺派である。教義の性質上然るべきことである。日蓮宗は松永久秀を動かし

てキレラが新教を壓迫した。之に反して禪僧はさして之を排斥しなかつた。のみならず往往多大の好奇心を以て之に接近して行つたのである。

吉利支丹宗門に對して好奇心又は同情を寄せたる人人　先づ政略上の動機の無く、全く知識的或は宗教的の見解からこの新宗門に接して多少の同情を寄せた知識階級を檢査して見よう。

第一の人は鹿兒島の禪僧ニンジツである。既述せるが如く、新村博士はこれを以て曹洞宗なる福昌寺の忍室文勝たらむと推定して居られる。その後フロイス師日本歷史獨譯本の出づるに及んで博士の推定は是認せられることになつた。同書に曰く「是人は既に高齢で威望あり、（鹿兒島の）王の顧問を爲し、其位トオドオ（東堂）なり。フクショオジと呼ばるる大寺の長である」と有る。フロイスその他に據るにこの僧は後に改宗の志を抱いたといふ。

又同地にナンリン寺と稱せらるる禪宗叢寺があつた。その寺の東堂の位にある僧は忍室の弟子であり、時に（千五百六十二年）六十歳ばかりであつた。その時鹿兒島に來たルイス・アルメイダを自分の寺に起臥せしめて、之を厚遇し、屢夜の更けるまで宗教の事に就て語つた。彼は學僧で大部の經典を讀破し、その居室には書籍が充滿した。そして曰ふには「自分は既に七千卷の佛典を讀ん

だが、滿足を得なかつた。今吉利支丹の教義を聽いて初めて眞理を悟つた。カワナベのホオシユンジ、鹿兒島のコオカクジの方丈も亦來つてアルメイダの說を聽いた。而してこれ等の比較的寛容な禪僧の先づ感心したことは、從來の須彌山說で滿足の出來なかつた月の盈虛、日月の蝕、潮の滿干等の疑問が明瞭に解決せらるることであつた。

又京都の公家にアキマサ殿といふ天文家があつた。それが（千五百六十一年）キレラに就いて日月の蝕、天體の運動の說明を聽くと、大に心を動かし、京都に於ける初期歸依者の一人となつた。

然し知識階級の人人の心を捉へたのは、必しも科學的知識のみだといふことは出來ない。もつと心理的のものがあつたに違ない。美濃の屋形土岐殿の家臣に山田ノ庄左衞門といふがあり、その人が改宗したことは既にキレラ師の項下に記したが、良い家柄に生れ、和漢の學を兼ね、始めは比叡山に於て天台を學び、次に淨土に轉じ、眞言に走り、更に神道に就き、それより禪に參じ、而して之に於てその意に適するものを見た。かくて京都に出でて、天竺渡來の僧ありと聞き、之を探撿すべく、微服してその寺を尋ねたところ、ルレンソオによつて、禪宗の否定思想から、耶蘇教の、可視可觸の物質世界の外に積極的な神といふ實在を認むる思想に導き入れられ、豁然として悟る所あ

り、之に歸依したといふ。
かくの如き插話は、吾人は必しも之を耶蘇教師の假托、創作だとは信じたくない。既に歐羅巴の形而下學に興味を見出し、それを肯定した以上は、その哲學、その神學に好奇心を抱くに至るは自然の順序である。即ちより好く歐羅巴文明を解するには、その全體としての體系を肯定しなければならぬ。明治維新後我邦は歐羅巴の物質的文明を急速に輸入する必要に迫られた。而して之を輸入したのちには、その哲學を祖述し、之を信ずるもの亦多きを致して今日に至つてゐる。歐羅巴哲學の思索法が人間の唯一の思索法ではない。然し現在吾人はこの種思想系統から離れることは出來ないのである。歐羅巴文明の理解に對する同じ過程が既に四百年以前に於ても存したのである。即ち天文學的の知識からその哲學に入り、その神學に入り（この系統に移入すれば、基督教義の傳說的方面、儀禮的方面も亦之を肯定することが出來るやうになる）、而して遂にその實行的方面（社會的施設、個人的道德）をも取り入れるやうになる。就中個人の道德の範圍内に於ては、日本倫理學史上頗る顯著な運動が發現した。一夫一婦の思想の如きその一である。又その社會的運動に於ては、後述のダリオ・高山飛彈守の措置にその好例を見出すのである。

吉利支丹に同情をしたものに、政治上の方便からしたものがある。たとへば薩摩、平戸の領主の如きである。然しこれ等は思想的に觀た吉利支丹運動には關することが少いから敢て言及しまい。信長、初期の秀吉、又政宗の如きもこの範疇である。就中信長と吉利支丹との關係は甚だ興味がある。然しこの事は德富氏の日本國民史にも記されてあり、又予も二三の雜稿に之を敍したことがあるから今は省略しよう。

吉利支丹の大檀那　深きにせよ、淺きにせよ、この新しい宗門を愛し、信じて、之れが後援者となつた有力なる人物が多數にある。地理的には主として九州及び京畿に分れてゐる。九州の諸侯のうちでは大友義鎭（宗麟）、大村純忠、有馬晴信などが主なもので、京畿に在つては、信長に別として、高山右近父子、三好康長、淸原賴賢、やや遲れては黑田孝高、小西行長等がある。

大友義鎭と耶蘇教との關係は甚だ複雜で、事西書に詳しく出てゐる。然しその心持は必しもはつきりとは分つてゐない。德富氏は宗麟を評して「されど意志の極めて薄弱なる男であつて、當初は海外貿易の爲めに宣教師を利用したが、後には却つて宣教師から利用せられ、宛も一種の催眠術を宣教師から仕掛けられた樣にも思はるゝ。」と言はれてゐる。此評の當不當は知り難きも、宗麟が

行動が寧ろ被動的であつたことは推察することが出來る。彼は千五百七十八年（天正六年）の陽八月廿八日にカブラル師の手から洗禮を受け、シャヰエル師にあやかつてフランシスコの名を得たといひ、シャヰエルの精神上の感化は受けて居たに相違ないが、その思想並にその生活は宗教的ではなかつたやうである。然しながら大國の主として耶蘇教の爲めには大後援者であつた。その事は予は嘗つて之を敍した。（「アレッサンドロ・ワリニャニ師の第二回の來朝」改造、昭和二年十一月號）

大村純忠（法名バルトロメオ）は千五百六十三年（永祿六年）トルレスの手から洗禮を受けた。そしてその夫人及びその子女六七人も間もなく受洗した。精しい心理的の事は分らぬが、純忠は熱烈な基督教徒であつた。そして佛教寺院を何の顧慮なく破却した。もはや單に政略上の改宗ではなかつたに相違ない。

同じやうな熱心な教徒を有馬晴純の子義眞に於て見出す。然しこれらの事情は既記の拙稿に悉したから茲には之を繰返すまい。

五島の領主、五島スミアキも亦ルイス・アルメイダに對して敬愛の情を抱いた。而してその庶子ドン・ルイス（サエモンノタユウ）に至つて遂に熱心な教徒になつた。その受洗（千五百六十八年）

に當つてや、父は敢て之を阻まなかつた。父子の耶蘇教に對する厚意を喜ばなかつたものは第一に佛僧であつた。後に領主が死してその孫の家督を相續するや、その後見たる伯父たる人は、耶蘇教徒の島内に增すことはドン・ルイスの勢力を大きくすることになり、屋形の不安の基となることを恐れてドン・ルイスに改宗を促した。かくして兩派の爭鬪となつた。一年後ルイスは同勢三百人と共に五島を去つて長崎に移つた。かくの如く九州の地に於ては教義の上からする反對よりもむしろ政治的事情、並に佛僧の自衛策が新教壓迫の原因となつてゐるやうに見えるのであつた。

ドン・ルイスは其信仰を貫かなかつたが、九州諸侯の第二代のジェネラシオンには多數の教徒を出して居り、その信心は純精神的のものであつたと想像することが出來る。即ち大友宗麟の第二子ドン・セバスチアン、宗麟の夫人の弟、親方の養子シモン（ショオノシロオ殿。フロイス）、日向飫肥の領主伊東義益の子ドン・バルテルミオ（義賢）、ドン・ジェロニモ（義勝）等が其名の最も著はれたものである。又宗麟の婿にあたる土佐の國司一條兼定に由つて耶蘇教的サンチマンは土佐にも飛火した。

ワリニヤニ師が有馬、安土にセミナリオを建て、各二十五六人の貴族青年を收容したから、耶蘇

教の信仰は漸く系統的な根蒂を得始めたのであつた。

又京畿地方では既に説けるが如く、清原賴賢、白井備後守などがいち早く改宗したが、殊にダリオ・高山飛彈守の信仰が一番堅かつた。是人の信仰のうちに、吾人は今なほ明かに非合理的な所を窺ひ見ることが出來る。千五百六十三年（永祿六年）澤の城代であつた頃ヰレラの手で洗禮を受けその妻子、家臣たちにも耶蘇思想を鼓吹した。そしてそれ等の人々もルレンソの手から受洗してゐる（フロイス師に據る）。

千五百七十四年の條にフロイス師の記す所に據ると、當時高槻（飛彈守もその子右近大夫も後にここに徙る）に於て六十餘名の戰死者があり、その爲め多數の寡婦孤兒が出來た。そして從來の習慣ではそれ等のものに對して特別の救護策は施されなかつた。然るに飛彈守は進んでこれ等の者の慰安に努力した。又部下の士卒などの死ぬやうな場合にはミゼリコルヂアの協會（葡萄牙に興つた一派の耶蘇教宗門）の例にならひ、その子右近と共に自ら斡旋して、大十字架の下に人人を集めて莊重なる葬儀を行つた。又寺院を作り、墓地を設けた。無論從來とてもかくの如き設備が佛僧の手で行はれないこともなかつたらうが、ダリオに至つて、始めて一種のデモクラシイの精神を以て實

施せられたのである。別言すればこれ等の社會事業に或る新鮮な思想及び感情が作つた。

このデモクラシイの精神（單に教養上の問題としてではなく、實際の社會生活の上に於て）は、耶蘇教によつて再び鮮明に想起せられたものである。極端な封建時代に於ても、大名、領主たちの子弟が耶蘇教寺院に庶民と同席するといふやうな事實は、決して看過せらせられてはならぬ現象である。

ダリオの子高山長房がその一生に、日本的趣味感情と（彼は利休門の一人であつた）耶蘇教精神との奇なる結合を三百有餘年前の日本に於て發現せしめたことは甚だ興味があるが、その事は他日之を語る機會があるであらう。

高山一家の改宗により、飛彈守の兄なる和田惟政も耶蘇教に對して同情を有するやうになつた。そしてその爲めに亦信長の對吉利支丹政策は教徒に有利に發展した。

又それらの影響で吉利支丹宗に入つたものに小西行長がある。行長はリュウサ・ジョシム（小西隆佐）の子で、その兄ジョセイ・ベントと共に吉利支丹となり法名をアゴスチニョと言つた。又行長の父母の影響から吉利支丹となつたものに黒田孝高（シメアン）がある。この二人は高山長房と

共に京畿に於ける吉利支丹宗の大檀那となつて、その一族郎黨の多數は之に隨つて改宗した。又和めこの宗門の敵であつた山口の毛利輝元も、黒田の仲介により、その領内に布教を許すに至つた。

天正十五年（千五百八十七年）秀吉の筑紫征伐の時も寄手に小西、黒田等があり、九州の吉利支丹大名も事なきを得た。その後小西行長は肥後の一部、黒田孝高は日向の半部を與へられ、同地の教徒には好都合であつた。行長は秀吉に追はれた高山親子をその領内に匿まつた。

同じ年に大村純忠及び大友宗麟は死んだ。師父教徒に取つては大たる損害であつた。

而して秀吉は同年に禁教の令を發し、耶蘇教師父等に二十日以内に日本を退去すべきことを命じた。師父たちの方では六箇月の猶豫を乞うた。秀吉は之を許したが、師父たちの平戸に集つて乘船を待つべきことを命じた。その年八月師父たちは平戸に會して善後策を議した。之と共に九州の吉利支丹諸侯も漸く窮境に陷つた。

翌千五百八十八年の末にアレサンドロ・ワリヤニ師は歐羅巴より歸來せる日本の四青年と共に媽港に來り、日本の事情を照會して、千五百九十年（天正十九年）の七月廿一日に長崎に著した。師は行列を華華しくして關白秀吉に謁し、その爲めに吉利支丹に對する壓迫も一時緩和せられた。そ

して長崎に十人だけの師父を殘し置く許可も出づるやうになつた。

この頃からまた耶蘇會派教師の外に、フランシスカン派僧の來朝するものがあるやうになり、吉利支丹教師の間の關係も複雜になつた。その爲めに千五百八十五年には法王グレゴリオは敎書を發し、法王の許可なくして師父の日本に渡るを禁じ、暗に耶蘇會を援助した、然し孰れにしても日本に於ける吉利支丹の宗門は漸く衰運に向つたのである。

初期吉利支丹に關する考察

天文永祿から元龜天正にかけて吉利支丹宗門がかくも急激に我邦に擴まつたことはシャヰエル、ヰレラ始め、多くの教師たちの人格の力に由ることは論を俟たない。然し始めは賤民の信仰であつた。それが知識階級に浸潤するに至つて、始めて此宗門の根蒂が堅實になつたのである

人がこの信仰に入る過程はどんなものであつたか。群集心理に由る雷同性もたしかに重要な要素の一である。その例として、たとへばルイス・アルメイダが五島の宣教に失敗して怏怏としてゐた時に、博多から二人の商人が來た。その人たちは日本の宗旨の事に精しくして、アルメイダを揶揄

する積りでその説教を聽きに來たのであつた。ところが段段と感心し出して、十五日間も引續き聽聞して、遂に洗禮を受けた。この事が五島の領主やその家臣たちを驚かし、人人が漸くこの宗門に同情するやうになつた。かくの如き例はいくらでもあるのである。

知識階級がこの宗門に興味を見出す最初の出發點は知識欲である。殊に天文學上の疑問解決が彼にこの上もない滿足を與へる。この實例は既に屢述べた通りである。そして彼等の研究がやや深くなつて來ると、偏狹なカトリク教義の奧に存るルネサンス思想や希臘拉丁の哲學の構成するペルスペクチィヴがうすうすと彼等に感知せられて來る。

此際耶蘇教の傳説的、神話的の方面は理解の大した障礙とはならなかつた。それは宣教師たちの手紙にも屢言はるる通り、佛教には種種の宗旨があつて、各異る傳説的神話的のものを有して居り佛僧自身も之を方便と考へてゐたからである。而してカトリク僧の極端なリゴリズムは、當時の亂れた道徳に對して、甚だ效力のある精神的刺戟劑となつたのである。殊に佛教團體はむしろ政治的結社であつたのに反して、カトリク教教團は、毫も政治的でなかつたキリストを承けて、非政治的であつた（尤も之れに對しては異論も存し得るだらうが）點が人人の信望を得る基礎となつたので

ある。一夫一婦の教條、殊に女を奴隷視せず、一生の朋友とする考は、恐らく日本人は、この宗門から敎はつたと考へても可からうと思ふ。

も一つ在來の思想と甚だ異つたものは、汎神的でない（草木國土悉皆成佛の説は耶蘇敎師の極力攻擊した思想であつた）、人間本位のユマニテエ（肉食を敢て禁じなかつたのはこれに原く）の觀念であつた。是れが當時どの位までに理解せられたか分らないが、敎師たちの方では之を鼓吹するのが一大眼目であつた。

そして實行的方面では病院施設、博愛及びデモクラシイの生活等に於て、歐羅巴に在つては既に多大の經驗を有する諸ろの制度が、或る新鮮な快感を人人の心に投げたに相違ない。

以上は吉利支丹を善解したものである。而して善解したればこそ、信徒が之に走つたのであるから、また當時の信敎の心理を述べたと見ることが出來やう。

次に之に反對する方面を考へよう。尤も一派佛僧の反對といふやうな、むしろ物質的の利害關係の衝突に因するやうなものは今は論外にし、その最も思想的な所を檢めよう。その根本義は國體國法と相容れぬといふ點である。是れは元龜天正の昔のみならず、明治中葉まで依然として說かれた

所である。カトリク教師も國家の刑罰といふやうなものは之を是認したが、日本の神佛（支那に於ても先祖崇拜の習慣と耶蘇教信條との衝突が大問題であつた）をば佛教上の諸佛諸菩薩同様に否定した。是れは耶蘇教師の考へるやうな容易い問題ではなかつた。佛教渡來の當時既に爭はれ、近くは社會主義、共産主義の事件で新に吾人の自覺に上つてゐるこの問題は、天文弘治乃至文禄慶長の間にも屢論議せられたのである。而して秀吉が耶蘇教を禁じたのも、その理論上の根據はやはりこの思想に基いてゐるのであつた。

第二期　衰微の時代

此時代を何と云ふ言葉で表はすのが最も便利であるか、今ちよつと思ひ浮ばない。假に表題の如く名付けて置かう。教徒は日本國内に繁殖した千五八十七年（天正十五年）の頃は二萬人だといふが、其後迫害にも拘らずその數はますます増加した。

前期に於て希望に滿ちたる容貌、華華しい姿をした人人はその期に來つて段段と寂しく凋落してゆく。そして家康、秀忠、家光と徳川將軍が相繼ぐに從つて、教徒の虐殺はいよいよ繁くなつてゆ

くが、吾人は天主教の背景或は雰圍氣として、既に文化史の要素をば餘り多くは見ないで、却つていよいよ深く宗教的心理の過程を感ずるのである。殊に寛永の時代に入つては、天主教信徒の前に立ち塞るものは、將軍の威を笠に着る地方官及びその手下で、虐殺の手段はますます複雑となり、殉死の光景はいよいよ戯曲的となるが、信長、秀吉を前にした天主教の活動と比すると、甚だ見すぼらしく、田舎臭い處がしないでもない。假にこの期を秀吉が禁教の令を發した千五百八十七年から、天草の亂の寛永十五年（千六百三十八年）までと立てても、日本天主教の歴史に於てはこの間に無數の重要事件がある。それで今は之を甚だ大まかに目錄風に書き並べるだけに止めて置かう。

千五百八十七年（天正十五年）。秀吉コエリヨ師に基督教教師の退去命令を渡す。平戸に於ける宣教師會議。（當時耶蘇會の師父、法兄弟は百二十人であつたといふ。）安土セミナリオの解散。有馬セミナリオの移轉。

千五百八十九年（天正十七年）。加津佐に學校を移す。

千五百九十年（天正十八年）。ガスパル・コエリヨの死。アレサンドロ・ワリニヤニ師印度副王の使者として四たび來朝す。長崎を大村喜前より沒收し天領となし、奉行を置く。此年教師の數は

百四十人で、新に二萬人の受洗するものがあつた。禁教以來の總受洗者はこれを併せて三萬人である。

千五百九十一年（天正十九年）。ワリニャニ大師京都聚樂の第に秀吉に謁す。オルガンチノ師、メスキタ師、四人の日本遣歐使節が之に伴つた。大師はやがて京を去り長崎に歸つた。

千五百九十二年（天正廿—文祿元年）。この年ルレンソオが死んだ。六十五歳である。歐羅巴に遣はされたる四青年が耶蘇會に入つた。秀吉の子鶴松死す。朝鮮征伐の事が始まる。フイリピン總督ドン・ゴメス・ペレス・デ・マリナス（Dom Gomez Perez de Marinas）の使者ロペ・デ・リアノ（Lope de Liano）がドミニカン派の僧フワン・コボス（Juan Cobos）を伴ひ來朝して秀吉に謁した。西班人は日本貿易の事に關して葡萄牙人を妬視してゐた爲めに、この使節の一行もワリニャニ師と了解なく、且つ秀吉の面前で葡萄牙人を誹謗した。この事が後來西・葡兩國商人並に天主教教師たちに取つて甚だ不利益な結果を齎らしたのである。ワリニャニ師は事了して、フロイス師を隨へ印度に歸つた。

千五百九十三年（文祿二年）。朝鮮の役は休戰が成立つて明使が來た。フイリピンの總督もたほ

日本との通商を望んでペロ・ゴンザレス・デ・カラバハル（Pero Gonzales de Caravajal）等を日本に遣はした。

千五百九十四年（文祿三年）。伏見城の建築。京都地方では耶蘇會の教師は蟄居してゐたが新來のフランシスカン僧大に活動し、京、大阪にその寺院を興した。

千五百九十五年（文祿四年）。秀次高野に追はれやがて殺さる。

千五百九十六年（文祿五—慶長元年）。八月京都地震。ペドロ・マルチネス（Pedro Martinez）師日本司教として來朝、ルイス・セルケェイラ（Luis Serqueyra）師之れが補佐たり。慶長元年伏見に秀吉に謁す。京畿に於けるフランシスカン派の活動顯著で秀吉の忌諱に觸れる。是等諸僧をフイリピンに返すことを命ず。但し耶蘇會の教師の方は不問に附して置く。フランシスカン派教師六名、耶會信徒三名その他十七名の信徒磔刑に遇ふ。そのうちの一人たる耶蘇會のパオロ三木といふは安土セミナリオの出身である。

千五百九十八年（慶長三年）。秀吉の吉利支丹迫害一層甚しくなる。教師等天草の學校、有馬の教會を破壞す。日本司教一たび印度に退く。（後マカオよりの船中に死す。）ルイス・フロイス師

も亦この年死した。その遺稿たる日本歴史はマテオ・クロス（Matteo Couros）師により羅馬に送られた（ミャルヲワ）。有馬、大村、平戸の百三十七の耶蘇教寺院破壊せらる。秀吉死し朝鮮の戰役熄む。オルガンチノ師も遂に京都滯在を斷念して長崎に去る。秀吉死す。

千五百九十九年（慶長四年）乃至千六百二年（慶長七年）。この間は家康と大阪方との爭で教會の方面には顯著な事はなかつた。

千六百三年（慶長八年）この年に家康征夷大將軍となつた。これより以後は、四圍の情勢がいよいよ吉利支丹に不利になつては行つたが、公然たる迫害は稀であつた。家康は秀吉の發した禁教の令を徹回はしなかつたが、敢てそれを强制もしなかつた。此間千六百六年にはワリニヤニ師がマオカで死んだ。又千六百九年にはフランシスコ・カブラル師がゴアで、オルガンチノ師が長崎で死んだ。又千六百十一年にはマンチオ・伊東も死んでゐる（バジエス氏は之を千六百十二年の事となす。） 同年にはルイス・ソテロ（Luis Sotelo）師が仙臺に赴き、この地方の耶蘇會が制裁を受けた。千六百十三年には奥州伊達政宗の使者支倉六右衞門常長及びルイス・ソテロが歐洲に向つて出立した。支倉等十數人の日本人は千六百廿年に歸朝した。幕府の吉利支丹禁止の令は千六百十一年

に改めて發布せられたが、各地の迫害は漸く嚴しく殉敎の數は年と共に加つた。千六百十四年には例の高山右近がマニラに流されてゐる。各地の殉敎の事は事繁くして今一一之を錄することは出來ないが、その千六百廿二年（元和八年）のものはこれを大殉敎と稱して最も著しい。五十二名の人人が長崎に於て殺された。その年仙臺の政宗も禁敎の令を發した。千六百廿三年（元和九年）には家光が將軍となり、江戸を始めとして、東北、中國、九州の信徒の處刑は一層その數を増した。かくして耶蘇敎徒が漸く剿滅の域に近づいたころ、寛永十五年（千六百卅八年）の天草騷動が勃發した。

第三期　「宗門剿滅」の時代

第四期　「復活」の時代

「宗門の剿滅」とは姉崎博士の附せられた名稱である。博士の共著「切支丹宗門の迫害と潛伏」（同文館、大正十四年版）は島原の亂から寛文年間（千六百六十一年より千六百七十三年）よりなほその後の時期に至るまでの日本に於ける切支丹の事情を敍述してゐる。この間の事は從來の史書

に逢する所で、この著によつて我等は始めて長い間の秘境を開かれたのである。

而して文久慶長乃至明治初年の時期に於ける日本に於ける舊教信徒の發見及び宗門の復活の事は同博士の「切支丹禁制の終末」（同、大正十五年版）、浦川和三郎氏の著「切支丹の復活」（日本カトリック刊行會、昭和二年版）等に於て精敍せられてゐる。又泰西教師の著書にも亦多くの好資料がある。即ち

Francisque Marnas, La religion de Jésus (Iaso ja-kyo) ressuscitée au Japon. Paris et Lyon. 1897 (?)

A. Villion, Cinquante ans d'apostolat au Japon. Hongkong, 1923.

A. Ligneul et S. Verret, L'évangile au Japon au XXe siècle. Paris, 1904.

などがある。以上の諸書はその内容傳奇小說よりも奇であると謂つてよい。而もその敍述は歷史の基礎に立ち、一一の事實は深く人性の機微に發してゐる。わたくしは然し今これ等を抄することは斷念しなければならぬ。

結語

以上記する所は主として事實の羅列に止まつて、思想的又文明史的觀照には缺くる所が多い。是れは氣の付かないことではなかつたが、今の處手におへなかつたので、後日に期するよりは仕方がない。殊にその思想上の背景たる、當時の日本に於ける佛教及び儒教の理論的並に實際的傾向は他日精しく調べたいと思つてゐる。又シャキエル以下の諸宣教師が、宗門の傳道者としての他に、文明の傳達者としてどれだけの資格を有してゐたかといふこともなほ一層くはしく檢査して見る必要がある。日本から歐羅巴に遣はされたドン・マンシオ・伊東や支倉六右衛門などの事に關しては泰西の文書が之を傳へることが詳かでないことは無いが、多くは儀禮の事を敍してその思想を知らしむることがない。これらの時代に於ける東西思想上の同化及び反撥の問題を解するには多量の空想を要し、而もその空想の資料としては、同時代の文化を熟知することを必要とする。それ等に關しては、唯從來の研究を約束する以上に出づることの出來ぬのはいかにも殘念である。

なほ本稿を作るに當つて直接わたくしの據つたものは、既に處處に引用したものの外に左記の諸

書がある。

Jos.-Marie Cros, Saint François de Xavier. 1900.

A. Brou, Saint François Xavier. Paris, 1922.

Luis Frois, Die Geschichte Japans, übersetzt von C. Schurhammer u. E. A. Voretzsch. Leipzig, 1926.

Léon Pagés, Histoire de la religion chrétienne au Japon. Paris, 1869.

M. Steinchen, Les Daimyô chrétiens. Hongkong, 1904.

訂正増補、日本西教史（明治十一年版）

徳富蘇峰　織田氏時代

田中義成　織田時代史

新村出　南蠻廣記。續南蠻廣記。

註。日本固有名詞に振つた片假名は横文原書の綴を其まま移したものである。（岩波講座第四講、昭和三年六月發行のものに掲載）

アレッサンドロ・ワリニヤニ師の第二回の來朝

緒言

耶蘇會士で伊太利生れの伴天連 Alessandro（アレッサンドロ） Valignani（ワリニヤニ） 師は日本の天主教史上で重要な人物である。彼は素より基督教の弘法者であつたが、同時にまた文化傳達者の資格を有して居た。わたくしはドン・マンシオ伊東其他三人の天正時代の遣歐青年使節たちの事蹟を研究するに附けて、この耶蘇會士に對する興味のいよいよ加はつて來るのを覺えた。彼は前後四回我日本の地を踏んだが、其當時は一般歷史の上からも日本文化史上からも甚だ事繁き時代であつて、群雄の割據、信長の覇業から秀吉の天下平定に至る、眞に目も眩き大戲曲の連續であつた。殊に西歐の人人に接觸する機會の多かつた九州の地に於ける事情には一種特別の興味がある。西歐の文獻からワリニヤニ師の事蹟を討ぬるのは同時にその時代の歷史に對する補遺ともなることである。

ワリニャニ師の初めて我國に渡來したのは千五百六十八年即ち永祿十一年のことである。そして主に五島で活動した。然し千五百七十一年（元龜二年）には耶蘇會の總長の書簡に由り「主に捧ぐる勤務上重要なる用件の爲めに」歐羅巴に召喚せられた。そして途印度に滯留することなく、葡萄牙を經て羅馬に赴いた。その後、千五百七十五年、羅馬よりの歸途、當時エスパニャのジェスイタ派の學府なるアルカラを通り、（日本風に算へて）當時三十三歳であつたルイス・デ・グスマン師に會つて日本の事情を傳へたことは、この有名な日本傳教史の著者の書中に記されてある。

註。Luis de Guzman: Historia de las missiones que han hecho los religiosos de la Compañia de Iesus para predicar el sancto Euangelio en la India Oriental, y en los Reynos de la China y Iapon. 1601.（予は千八百九十一年板の新刊本に據る。）

其後ワリニャニ師は印度に於て巡察使の職に在つたが、千五百七十九年（天正七年）に至り、日本巡察使として再び日本に渡つた。その三年間の滯留は目まぐるしいほどの活動であつた。そして千五百八十二年二月（天正十年正月）には、かのドン・マンシオ等の青年を伴つて日本を去つた。千五百九十年（天正十九年）ワリニャニ師は三たびその姿を日本に現はした。嚮きに歐羅巴に遣

はされた四人の日本青年と共に陽七月二十一日長崎に上陸したが、このたびは印度副王の使者として太閤秀吉に謁見する爲めであつた。而して師の第四回の渡來は千五百九十八年（慶長三年）のことである。

ワリニャニ師は千六百六年（慶長十一年）に老齢を以て支那に長逝した。わたくしはまだその譯つた傳記を見たことがない。葡國アジュダ文庫の古寫本（49—IV—3）には「パドレ・アレッサンドロ・ワリニャニの生涯及び死」といふ一節がある。

此耶蘇會士には三四の有名なる著書がある。又其手翰はアンリイ・コルデエ氏の日本書目に引用するだけでも十餘通を數へる。遺憾ながら然しそれ等はおいそれと手に入るものではない。

わたくしは茲にワリニャニ師の第二回日本訪問の事情を記さうと思ふが、據るところは僅かにシヤルルヴワ師の日本史（P. de Charlevoix, Histoire et Description Générale du Japon MDCCXXXVI）クラッセエ師「日本西教史」（太政官本局飜譯本）獨譯コエリヨ師書簡千五百八十二年二月十三日長崎發信のもの（Gaspar Coelho: Summarium und kurzer Bericht von den newerfundenen Japonischen Inseln und Königreiche……1582. Freyburg, 1586）ルイシュ・フロ

イシュ師の「日本史」（獨譯本）其他兩三書に過ぎない。わたくしはたゞ之に日本側の文獻を加へて、地名、人名、其他の事情を明にせむと欲したが、今の狀態は之を爲すに十分の便宜を有しなかつた。即ち此記錄は寧ろ文學的のものである。遂にアレッサンドロ・ワリニヤニ傳の準備であり、稿本である。然しシャルルブワ、コエリヨ等の書の未だ飜譯或は紹介を見ない時に、この自家の備忘錄を發表するのも、恐らく無用の業であるまいと信ずるのである。

わたくしは本稿で、啻に原本記事の眞僞を闡明したいのみならず、又思想的にそれ等の事實を批評しない。唯古書に傳へらるゝ出來事を取捨し按排して抄錄するのみである。

日本到着、ロノ津の會議

ワリニヤニ師は數年來印度に於て總巡察使の職に在つたが、日本に於ける宣教師の事業及び行狀の巡察の使命を帶びて、再び日本に渡り、千五百七十九年の始めに口ノ津に到達した。上陸後先づ聞いたのは豐後の前領主（大友宗麟）の耶蘇教に入つたと云ふことである。それで何よりも先にその國に赴かうと欲した。殊に當時日本副管區長であつた Cabral 師が臼杵に耶蘇會の修道院を

建てようとする企圖に助力を與へむといふ心もあつたからである。然し豐後に於ける事情は師の直にその國に行くことを許さなかつた。それ故に豫定を變じて口ノ津に止まり、凡ての耶蘇教教師たちに書を送つて此港に來集せむことを求めた。

　都に在るもの、事故の爲めに來ることの出來なかつたものを除き、凡ての教師たちがここに集まつた。その時日本には五十九人の教師が居たが、ワリニャニ師が會の長老 Aquaviva に送つた報告書中には、彼等に就いては何等訴ふべきところを見ないと云つてゐる。そのうち二十三人はパドレであつた。彼等の或者は二年の間に七萬の人に洗禮を與へて居る。また或者は萬障を排して修道院とセミナリオとの建設の基礎を築いてゐる。是等の關係からしてワリニャニ師は、今や日本に司教管區を設立することを法王廳に請願すべき時期であると感じたのである。

　師はいまこそ日本は戰爭の禍害の底に沈淪してゐるが其國民は道德性に於て英雄的の所を有する者であるを知り、此國の傳道にはフランシスコ・シャキエル大師の書き遺した個條を嚴守するの必要なるを認めた。主要なる目的は殉教に走ることでなく、多くの精靈をしてクリストに赴かしむるにあると云つて人人を激勵したのである。そして基督教の傳道に對して障礙となるは何であるか



第廿八圖　メルカトオル地理書中の日本地圖

を考究した。是等の結議は個條書にせられ、ヴリニャニ師に由つて羅馬に送られたのである。

唯この口ノ津で大討論を惹起し而も遂に結著を見なかつた問題は、傳教事業は專ら既に開拓せられて妨害を受けざる地域に於て一層盛ならしむべきか、乃至は從來の方針に從ひ、不斷の兵燹に荒されて信仰の根帯の甚だ固くなり難い地方に弘通せしむべきかといふことであつた。それでこの議案は歐羅巴耶蘇會の委員會の討議を仰ぐことにした。

會議が結了して教師の大部分は各〻の寺院に復歸した。唯その受持の區域には多少の變動を見た。即ち Gregorio de Cespedez 師を一伊

留滿と共に都に遣り、そこでルイシユ・フロイシユ師の留守をなさしめた。尤もフロイシユ師も其後急ぎ都に歸つた。

ワリニヤニ師は豐後に行き、それから都に行くといふ計畫であつたが、或る事情の爲め、とに角先づ有馬に行くことにしたのである。

豐後事情

然らばなぜワリニヤニ師が豐後に往くことを躊躇したかと云ふに、そこは恰も戰亂の渦中に在つたからである。

大友宗麟には三人の息があつたが、其第二子（他の二人の名は分つてゐるが、この人の名は逸したと云ふ）は其後嗣として最も適當だとせられたが、日本の習慣として長子を措いて嗣となることが出來ない。加之近親間の不和を防ぐ爲めに佛門に入らなければならなかつた。所がこの次子（日本西教史には親家を以て之に擬す）は、當時十四歳であつた。耶蘇教の教師たちに昵れてその說を喜び聽き、佛教は却つて之を忌み嫌つたのである。

宗麟は臼杵に住み、そこに美しい耶蘇教寺院を建築せしめた。その爲めにただ一城砦の在るに過ぎなかつた臼杵の地が漸く繁華な都會となつた。宗麟は師父に（カブラル師たちに）そこに修道院とコレジオとを建てる口約をも與へてゐる。それで耶蘇寺に師父たちを尋ねる機會も多かつたであらうが、其時にはよく少い子息を伴つたのである。わかい殿が耶蘇教に薫染したのはかう云ふわけであり、終にその宗門に歸依することを申し出たので、宗麟は大に困却し、又佛教徒であつたその母は大に憤怒した。宗麟の夫人をば教徒たちはイサベルラと呼んでゐた。（註。Schurhammer 及ベーrtzsch 両氏譯フロイス「日本歴史」の註─四六九頁─に Isabel は Jezabel のことならむと有る。是れは Achab 王の妃にて基督教の敵であると云ふ。追記。）宗麟は、その子を愛して其志を容す氣があり、夫人に向つて基督教徒たらば佛僧たるよりも一層その兒に恭順たるべきを諭したが、夫人の偏執を解くことが出來なかつた。それで最後の斷案を下す前に副管區長の意見を聽かうと欲したのである。

カブラル師は時に大村領に在つたが、宗麟よりの書狀が再三も來るので、已むを得ず豐後に赴いた。そして宗麟の話を聽き、その子を見ると、その決意が動かすべからざるものあるを見て、國主に勸めて耶蘇教に入れしめた。宗麟は之に同意した。

洗禮の日には、屋形の人人が皆その儀式に列した。宗麟自身もそれに臨席し、又多數の庶民も參會した。かくして宗麟の第二子にはセバスチアン（Sebastião）といふ名が與へられた。宗麟はこの儀式の間には常に跪いてゐたと傳へられてゐる。西教史には「國王は猶佛教徒たりと雖も大師父の尊嚴を崇け、裝束所より出づるを見る時は跪き、その儀式を行ふ間は帽を脫せり」とある。又日く「主人の公子と共に洗禮を受くるもの亦夥多たり。」是れは千五百七十五年（天正三年）陽曆十二月の事であり、即ちわがワリニヤニ師の日本到着の四年前である。（これらの事情はフロイシュ「日本國史」に詳しいが、今敢て稿を改めない。追記。）

その夜國王は自ら師父の許に開かれた晩餐の會に列し且つその子と共に洗禮を受けた凡ての人人をその席に連らしめたといふ。而して宗麟の夫人は怒つて之よりその子と義絕した。

新に洗禮を受けた公子は其後極端な排佛を行つた。人人は却つて之を諫止せざるを得なかつた。翌年カブラル師は府内の信徒の需に應じ、國王に請うて、耶蘇降誕祭の盛儀を行つた（西教史で

セバスチアンは同臭の青年を集めて宗教結社を作つた。そして每日曜日每に、寺の儀式の果てたのち相集まつて研鑽した。恰も初期基督教時代に行はれた愛の會食の如くであつた。そこに於て論

議せらる事は全く教儀の問題ばかりであつたが、殊に異宗の學僧の疑問に對する討論が最も多く考究せられたのである。それより後は異宗徒は是等青年を恐れて敢へて之と討論しなかつた。

セバスチアンの洗禮以來豐後の屋形に於ける對基督教徒態度が一變した。それまではこの教を以て屋形が保護を加ふる庶民の信仰に過ぎざるものとなした。屋形の公子自ら洗禮を受けるやうになれば自ら人の考も變らざるを得なかつた。而して公子の此改宗は土佐の國主（一條兼定。後に註す。）にも深い考慮を促す原因となつた。その夫人は實に、公子の姉であつたのである。

その頃土佐の國主は、その岳父の屋形に在つた。その領土の紛擾から逃げてここに來てゐたのである。

豐後には宗教の事に關してなほ一つの重要な事件があつた。事は當時その場に在つたカブラル師及びルイシュ・フロイシュ師の報告に詳しい。クラツセエ師、シヤルルヴヲア師も亦之を引用してゐる。われわれは既に邦文日本西教史で之を知るが故にここには唯必要なる筋書だけを作らう。

宗麟の夫人の弟に親方（註。Kunishu——即ち國國の貴族——にタワラのチカカタといふがあれど、王の義兄弟即ちその夫人の兄弟なり。フロイシュ、四九三頁。）と云ふのがあつた。繼嗣が無かつたから京の公

家（柳原殿といふ。フロイシュ「日本歴史」）から七歳ばかりの子を貰ひ受け之を養子となし親虎と名付けた。（別名はショオノシロドノ。フロイシュ日本歴史、四九四頁）豐後の屋形は之にその女を嫁せしめんと欲し、親方も之を諾した。親虎十四の時臼杵の屋形に伺候した。これよりカブラル師になじみ漸くその教に薫習した。

親虎十六歳、許嫁の女十三歳の時、親虎の婚姻を促した。然し親虎の信仰の強いのは宗麟の夫人の喜ばざる所で親方をして之を制肘せしめたので、親方はその子の信仰を動かさむと欲したが、兒の信念は強く、親方は遂に之を豐前（フロイシュはその地を以て Unbi となす。四九四頁。）に移して幽閉した。此間親虎はひそかにカブラル師と書信を通じた。數箇月の後親方は再び之を臼杵に呼んだが毫もその志の渝つてゐないのを知つた。兒は却つてカブラル師の許に走つて洗禮を乞うた。親方は怒つて再び之を監禁した。そして或は折檻し或は世間樂を以て誘つて其決心を翻へさうとしたが、兒は父の意に逆つて遂にカブラル師に洗禮を受けた。その儀は使徒サン・マルコの祭日の前日（シャルルブヲワ師に據るに陽暦四月廿四日である）に行はれた。そしてシモン（Simão、フロイシュ。）と名付けられた。親方は三たびその子を幽閉した。カブラル師はシモンにひそかに日本語に

翻譯せるセバスチアン傳を贈つてその志を激勵した。親方は三箇條の問題を提げて、人をしてカブラル師を詰責し且つ懇請する所あらしめた。師は一一之を辯解した。親方は更に師を威嚇したが效がなかつた。一方にはまたその子を欺き、若し父の言に從はなければ師父及び教徒を悉く殄滅すべしと言つた。然しシモンはカブラル師の通信を得る途を有したから毫もその態度を變しなかつた。親方はいよいよ憤激して師父、法兄弟及び教徒を殺し、その寺院を焚く決心をした。師父及び教徒の方でも其報を得て應戰の準備をした。宗麟の第二子ドン・セバスチアンも來つてカブラル、フロイシュ兩師及び教徒を助けた。（此時臼杵の寺院にはこの兩師の他、二人のジエスイタ派教師及び二三の問答師がゐたのである。）この時はこの公子の洗禮の後二年であると云ふから、千五百七十七年（天正五年）の事に係る。カブラル師は公子を諫めて其場を去らしめた。闔市の教徒は男女貴賤を問はず、此風聞を得て來り集つた。

此間セバスチアンとシモンとはひそかに郊外に相會した。この事宗麟の夫人に聞えてその怒を買つた。夫人は、月餘遠く狩獵に出てゐる宗麟に急を告げ且つ兩公子を讒訴した。宗麟はその情を察して敢て之を聽かなかつた。カブラル師も亦宗麟に書を送り、ドン・セバスチアンは自ら赴いて父

に謁し釋明するところがあつた。宗麟は之に向つて師父及び教徒を庇護すべき保護を與へた。屋形の人人、佛僧之を傳へ聞いて驚愕し、夫人は痛憤した。親方に至つては宗麟の意を迎へてドン・シモンを厚遇せざるを得ないに至つた。かくて教徒は擾亂に至らずして解散した。（本來日本人は勇俠を好み、死を輕んずる風があるので、今回の事件で耶蘇教徒は大に一般人士の同情を贏ち得て、異宗の人人の洗禮を受けるものが甚だ多かつた。――シャルルヺワ。）後日親虎は、豐後と薩摩との戰にその國土、その君父の爲めに殉ずるに至つたが、その死は極めて悲壯であつた。その事を叙する爲めには親虎に關する以上のいきさつを記して置かねばならぬ。

翌千五百七十八年（天正六年）に宗麟は其家督を嗣子義統に讓つた。（シャルルヺワ師は宗麟の夫人が事を企てたのは此機會であつて、新國主の意志の弱いのを知り、宗麟の留守中の事であると記してある。其他シャルルヺワ師の記は少しくクラッセ師と異る所があるが、畢竟同じ原本に據つたものであるらしいから一一その異同を論じない。）

豐後に於けるその後の事情を記す前に尚ほ一言附け加へて置くべきことがある。即ち前年の陽七月四日に長崎に多數の異國教徒の到着せることである。是れは先年カブラル師の命により教師を求

ゐたが爲めに印度に遣はされたるバルタザル・ロペス師が、それ等の人人と共に再び入朝したのである。パドレ六人、伊留滿七人であつた。グスマン師の傳敎史はその名を傳へて居る。卽ちパドレはアントニオ・ロペス師、ラモン師、メルシオオル・デモラ師、セバスチアン・ゴンザレス師、コンザロ・ラヱロ師、グレゴリオ・デ・セスペデス師であり、伊留滿はラゲナ、カリオン、アルヴロオ・デアス、チエゴ・メスキタ、シモン・デ・アルメイダ、チエゴ・ペレイラ及びバルトロメ・ドンドである。長崎の信徒は水中に入つて新來の敎師を迎へたと云ふ。カブラル師はその爲めに長崎に往つた。そしてそれ等の人人の部署を定めた。その兼ねてより抱いてゐた企圖――豐後府内の僧院は之をコレジオにすること、臼杵の僧院は之を修道院(ノビシヤド)にすること――はいよいよ實行せらるべき曙光を見るに至つた。元來カブラル師は偏見を持して居り、日本人敎徒は問答師以上には任用しないことにしてゐたのである。

さてなるべく簡單に豐後薩摩間の釁隙を記さう。

宗麟は義統に家督を讓つたが、まだしばらくは其後見をなした。千五百七十八年(天正六年)の頃にはいよいよ隱居しようとしたがいろいろの事件の爲めにその事が遲延した。一はその女婿たる

日向の伊東氏の死である。此人に就いては、たほ後來の記事に重要な關係があるから、少しく精細に述ぶるところがあらう。

日向飫肥の領主伊東義益（日本西教史は祐丘を以て之に當ててゐる。いま德富氏及び Steichen 氏に從ふ）は伊東義祐の子で、宗麟の姪を娶つた。そして二人の男子があつた。長はヨシカタ（義賢？）と云ひ、後に教名をバルテルミオと云つた。次は義勝で、日本天主教史上に同名高いジエロニモである。父の死する時、その長子は纔かに十歳であつたと云ふ。乃ち此機に乘じて、薩摩の島津義久はその領地を攻略した。それで義益の夫人は遁れて臼杵に來たのである。そこで宗麟はその子義統に勸めその復讎戰をなさしめ、六萬の兵を擧げて日向に入つたが、薩摩勢はその準備が十分でなかつたから河の（今の地圖に金山川と書かれた河でもあらうか）西岸に退き、義統の兵はなほ之を追撃して完全に勝利を收めた。宗麟は喜んで自らその地を檢分してクチモチ（西教史は津久見かと云ふ、疑ふべし。）といふ地を選んでその崑表を營まんと欲した。然しまだ十分義統の手腕を信ずることが出來なかつたから、豐後を離るるを躊躇したのである。その上なほその女と親虎との婚姻を定める必要があつた。夫人は然し教徒に對する怨懣が治まらず、此事には不贊成であつた。

又親方の方では既に退隱せる宗麟よりも其夫人の方を多く顧慮する要があつたから、夫人と心を合せて親虎を迫害しその改宗を强要した。親虎は此事を肯じなかつたから遂に之を放逐した。親虎はフロイシュ師を賴つた。宗麟はこの事を聞いたが知らざる僞してゐた。そし臼杵の師父に書を贈つて親虎を府內の會友に托すべきことを命じた。それで夫人も親方も宗麟が得心したものと考へた。

所が突然に宗麟は寡婦を娶つたことを宣言した。その婦といふのはドン・セバスチアンの妻の母である。そして同時に前夫人に對してその弟の家に寄るべきことを言ひ渡した。夫人及び親方に取つては實に晴天の霹靂であつた。

この事と共に人人をして瞠目せしめたことは、新夫人もその女も共にカテシスモを受けたものであつたことである。宗麟は又カブラル師に書を送つて、わかき日本人伊留滿のジョアンと名付くる者（これはセバスチアン、シモンなどの盟友であつた）を屋形に遣さしめ、日日說教せしめ、自分も之を聽聞した。

かくて新夫人とドン・セバスチアンの妻とは受洗した。母はジュリア（女はキャントー一西教史）と名付けられた。其儀には宗麟も臨席した。そしてこの婦以外の婦をば娶るまじき旨を宣言した

而も千五百七十八年（天正六年）の陽暦八月廿八日には、彼自らも臼杵の寺院に於てカブラル師の手から洗禮を受けた。この時宗麟は五十歳前後であつたといふ。（大友宗麟は天正十五年に五十八歳で卒したといふから、この年は日本風に算へて四十九歳であつた筈である。Steinchen は四十五歳と云つてゐる。）そして兼ねて傾倒してゐたフランシスコ・シヤギエルに肖つてフランシスコの名を求めた。彼がこの大なる耶蘇會士に會つて後廿七年のことである。式後師父等と會食し、またメサを聽いた。

やがて宗麟は全然隱居し、自らはタチモチに棲むことに決した。ここをば純粹な基督教徒の市街にしようと欲したのである。そしてその建設の未だ完からざるに已に自ら此に移つて工事の監督をした。その移轉の日の行動は甚だ戲曲的である。シヤルルヴワ師の記する所に據るに、受洗後五週間、卽ち陽十月四日の日に小舟を艤裝して臼杵を發した。船には青地に金の輪郭を置いた紅十字を現はしたる絹の幕を張つた。新夫人、セバスチアン、その妻、親虎、カブラル師、ルイシュ・アルメイダ、ジョワン及び多數の教徒が隨行した。宗麟は此新市街には耶蘇教徒以外の人人の移住を許さなかつた。

ルイシユ・フロイシユ師は臼杵に留つた。義統は之に、その父に倣つて基督教を庇護すべきことを誓ひ、且つ府内にコレジオを建設することをば援助するであらうと約束した。そして嘗て佛寺として建築したる一寺を寄與した。又更に善くその教儀を知らむが爲めに適當の書を與へむことを求めた。フロイシユ師は自ら日本文を以て綴れる小冊子を獻じた。義統は其妻と共に受洗する日のあるべきことを豫告した。

此時に當つて薩摩との戰爭が再び開かれた。薩摩は前回の失敗を恢復せむと欲して日向に侵入した。豐後はこの方面の防備を怠つてゐたのである。義統は立ろに四萬の兵を集め、親方を將として遣はした。そして指揮萬端はその父宗麟に委托した。又自らはその本營をノセン（コエリョ師はNo-chin と記し、豐後日向の境なりと云ふ）に遷した。フロイシユ師も義統に隨つてその地に行つた。豐後の兵は利を得、沿途の佛寺を毀ち耶蘇教の寺院を建てた。

宗麟の前夫人はこの機に佛徒を助け、再びその勢力を恢復しようと努力した。そこで義統はフロイシユ師を臼杵に返した。師は事を未前に防いで再びノセンに來た。義統の姉妹を娶つたコタン殿といふのを洗禮し之をレオンと名付け、その妻をマリアと名付けた。斯人は後にノセンの地を管理

した者である。

豊後勢は二城を手に入れた。然し最後に移つた第四の城が最も堅固なものであつた。親方は勝戦に油斷して、之を攻めるのに少兵を以てした。この城は薩摩勢に取つては頗る重要なるものであつたから、彼等はその軍を整理し、秘密裡に行進して急に之を襲撃し、豊後の兵は武裝する隙もなく之と戰つた。

ドン・シモン（親虎）は既にその父に許されてこの軍陣に加つたのであつた。彼は從來武道に於ては顯れてゐなかつたのである。今や父の親方が多くの薩兵に圍まれて甚だ危いといふ報を得るに及び、直に敵陣に攻め入り、その父を救つたが、自分は敵の爲めに殺された。重傷の爲めに死すべく見えたその父は回復した。シモンの死んだのはその十六歳の時であるといふ。

然しこの敗戰の爲めに豊後の勢力は覆へされて了つた。宗麟も新に經營せる市街を失ひ、義統もノセンより兵を徹した。然し薩摩の領主は敵がそれほどの打擊を受けたものとは思はなかつたから再び軍隊を編成して之と爭はうと欲し、肥前の龍造寺隆信及び筑前の秋月種實と同盟を結んだ。龍造寺は初め有馬の家來であつたが後豊後に隷屬し、之に對して貳心を抱くものであつた。薩摩の領

主はこの關係を知つてゐるから龍造寺を誘つたのである。

秋月氏は筑前に於て大なる領土を有してゐた。然し島津は此方面の解決を急ぐ必要なかつたから唯それと結んで、豐後に當つたのである。薩摩勢は殆ど敵を見ずして日向の大部分を略取することとが出來た。一方秋月氏は筑前に於ては何等の抵抗を受くる事なくして豐前まで打入つた。豐前もまた大友の領土であつた。龍造寺は筑後を攻略した。かくして宗麟が擴張した領土は義統の代に至つてその大半を失つた。

さて國情がこんなであつたから宣教師等も亦安泰たるを得なかつた。それでワリニヤニ師は、日本に到着するや、まづ豐後に赴いてその領主父子を訪ねようと思つたのであるが、右のやうな有様ゆゑに得る所少かるべきを慮り、一時其事を中止して、まづ有馬に赴くことにしたのである。

ワリニヤニ師有馬に赴く

ワリニヤニ師の來朝の頃は、有馬の領地に於ては耶蘇教は公認せられてゐる有樣であつた。當時の領主は有馬晴純（ハルズミ）の長子の義貞（ヨシサダ）（或は義貞（ヨシマキ）又は義直――德富氏。西教史には義純とあり、フロイツ

ユ師はヨシサダと記す。以後義貞と言はむ。）であつたが、千五百七十六年（天正四年）陽暦四月八日にその夫人、その兄弟（一人のみ）、姉妹（一人のみ）、三人の甥及び多數の家來と共に洗禮を受けたのである。その貞の弟で、大村純前の養子となつた純忠は既に千五百六十二年（永祿五年）にトルレス師の手で受洗してゐる。又大友宗麟の第二子が（千五百七十五年）カブラル師により洗禮せられたるは既報で如くである。さう云ふ時代であつたから、兼ねてより耶蘇教に對しては好意を有してゐた義貞が洗禮を受くるに至つたのは怪しむに足らぬ。教名はアンドレアといふのである。

初め義貞の此志を知るや、口ノ津に在つたアルメイダは、此事を豊後なるカブラル師に傳へ、急ぎ來つて、その手により此儀式を行ふべきことを求めた。そこで副管區長は凡ての事を打ち捨て、有馬に赴いた。然し有馬の領主は、カブラル師が容易には來ることが出來まいと推したから、アルメイダをしてその式を行はしめたのであつた。

シヤルルヴヮ師はかう解釋してゐる。「侯は深く基督教を研究した。彼がこの教の保護者を以て標榜したのも當然である。彼の大なる世間的の野心もこの志をば奪はなかつた。改宗の事は、殊にその父の死後は一再ならず企てられたのである。一たびその妻の兄弟たる諫早の領主及び平戸の領

主（松浦隆信）と同盟してその見たる大村氏に當つたのは甚だ奇に見ゆるが、この事は宗教上の見解とは全く無關係で、專ら兩者の性格の差異に原くのである、有馬氏は純忠の到底この同盟に抗すること能はざるべきを察して、その崩壞時に利を占めむと欲したのである。且つ大村家は有馬の分枝であり、その能く領土を保つのは有馬家に依る所が多い、然るに實際はといふと、大村は却つて勝利者となつた。この奇蹟は義貞をしていよいよ基督教を崇奉に至らしめたのである。云云。」

この最後の說は兎も角として、當時の事情は朧げに之を察することが出來る。大村純忠が平戸の松浦氏に取つて、海外貿易の上の競爭者であつたことは附加するまでもない。

領主の改宗で有馬の領土に於ては耶蘇教は頗る好況を呈した。そして未だ宣教師たちの足跡を印せざる地方に於ても多數の人人が擧つて洗禮を受けた。恰も好し、翌年（千五百七十六年）には口ノ津に四人の師父が到着した。卽ちアロンゾ・ゴンザレス、クリストバル・デ・レオン、フワン・フランシスコ、アントニオ・ロペス（グスマン師の記せる綴に從ふ）である。この年の終には有馬領内に二萬の教徒を數へることが出來た。

洗禮後の義貞の態度はかなり過激であつたらしい。その居市の佛教の大伽藍を耶蘇教の寺院に改

めた。同じ事を領内の各地に於て行はしめた。從つて佛教徒の反感は亦深甚であつた。彼等は義貞の子晴信（フロイシュ師――四八〇頁四八一頁――はシゲズミと云ふ。同一人か。又義貞の長子はヨシズミにして夙く――千五百七十一年――死し、その弟晴信、義貞の後を繼ぎたりとの說あり――Papinot。今は一般に信ぜらる所に從ひ晴信を以て Don Protasio に擬せむ。追記。）に賴つた。それでまた一二の逸話が傳へられてゐる。義貞が肩に腫物を生じて病臥し（背の癰疽の爲めに病臥す――フロイシュ、四八一頁）宣教師に會ふことを望んだのに、世子は之を阻んだ。義貞はその疾のゆゑに同年の陽曆十一月に死んだ。後の人人は義貞がその臨終に再び佛法に歸依したと宣傳して盛んなる佛葬を營んだ。耶蘇教徒の方は耶蘇教徒で、カブラル師を司祭として其寺院内に送葬の儀式を催した。カブラル師は然し直ぐそこを去つて口ノ津に行かねばならぬ仕儀となつた。

義貞の死後、世子は宣教師を國外に走らしめ、又基督教徒に再び佛法に歸ること命じた。もと「藥師堂」であつた耶蘇教寺院は再び沒收せられ（フロイシュ）、十字架は倒された。その爲めに又いろいろの不思議の現はれたことなども傳へられてゐる。

世子晴信は然し教徒の改宗するものの甚だ少いのに驚かされた。そして教徒の私かに師父を隱匿

するを知つてその家を焚かしめた。即ちなほこの領地に止まつたのは二人の師父であつたが、今は已むを得ずそこを去り、パドレ・ロペス及び伊留滿アルメイダも亦口ノ津に去つた。それで晴信もその伯父たる人人も又佛僧たちも基督教は既に消滅したと考へその迫害を中止した。その間に晴信の感情は漸く變じて來た。

アレッサンドロ・ヴリニヤニ師の口ノ津に到着した當時、近き有馬に於ける事情はまづさつと三んだやうであつた。師は口ノ津の會議でこの事を聞き、會議の結了後、豊後に赴くよりはまづ有馬に到つて領主に會ふことが更に必要であると感じたのである。

「日本西教史」には、之れより先き、大村純忠が自ら有馬に赴きて世子に會ひ、之を諫めて、その心を翻さしめ、晴信をして師父等を復歸せしむることを誓はしめたと記してゐる。それでカブラル師は時を移さず有馬に到り晴信に謁してその宏量を謝すと、晴信も再び基督教を布くことを許し、その證左として己が弟をして受洗せしめたといふのである。

さてヴリニヤニ師が有馬に到ると、晴信は頗る之を優遇し、之と宗教の事を談じて、自らも遠からず教徒たるであらうと宣言した。晴信の近親のものにも亦之れと志を同じうするものが少くたか

つた。唯然し急激なる變化は事を害ふべきを慮り、受洗の儀は口ノ津に於て行はるべしと勸めた。ワリニヤニ師はその準備の爲めに口ノ津に歸つた。

其後の晴信の躊躇煩悶の有様をばシヤルルヷワ師は頗る戯曲的に物語つてゐる。ここはそれを記す要もなからう。

此間龍造寺は急に有馬の領地に攻め入つて其數箇所を略取した。屋形の一老佛僧は毫も基督教を善解するものではなかつたが、晴信に謁して、方今の狀態に在つては、援助は唯大村純忠に求むるばかりであつて、その同情を獲む爲めには基督教を排すべきでないことを諫言した。是事基督教排斥の一派に取つて大痛棒であつた。然しかう云ふ事情からして洗禮の事は遲延せしめざるを得なかつた。殊に戰情が不幸の轉化を見る場合には基督教にその咎を歸せらるべき虞があつたからである。且つ屋形のうちで晴信に對して快からず思つてゐるものは、その不滿を宗教問題に假托した。既に敵を龍造寺に通じたものさへある。さういふ事情を知つたのでワリニヤニ師はいよいよ躊躇したのである。窮境に陷つたわかき晴信は神に賴るより他に途がなく、軍陣の間に師を呼んで、ここに洗禮の儀を行はしめた。その一人の伯父、一人の甥、二人の兄弟及び多數の侍臣がその行を共に

した。又數週の後には晴信の妻となるべき女、その母及び同族の二公子も洗禮を受けた。而して晴信はプロタジオ、その婚約の女はルシアの名を得たのである。時は千五百八十年（天正八年）の復活祭であつた。

間もなく龍造寺との釁隙も好個の解決を見た。晴信の臣下は漸く兵を集め、葡萄牙人も之に軍需及び兵員を送つた。又龍造寺の外國貿易の爲めに良港を求むる心のあるを知つて、ワリニヤニ師は自ら龍造寺の許に至つて調停の勞を執り、龍造寺は遂に兵を引いて筑後に歸つた。ワリニヤニ師は闔國の人士から感謝せられた。

晴信は忽ち四十有餘の佛寺を毀つて、基督教寺院建設の資として之を寄進した。そして口ノ津、有家、有馬に寺院を築かしめた。

有馬領土に於ける僧院及びセミナリオの事

口ノ津の會議で既にその計畫のあつたことを識つたワリニヤニ師は、有馬領のうちに、日本の少年を教育すべきセミナリオを建設する事に熱中した。そして晴信とも屢此事に就いて協議した。ま

た一個のコレジオを造ることに就いてもいろいろと準備せられた。

有馬領に於ける是等の事情はガスパル・コエリヨ師が千五百八十二年に長崎より羅馬に向けて發信したる書に詳しい。今左にその大要を抄譯しよう。

曰く、此地に於ける基督教の僧院は有馬のものが最も立派であつた。そこにはなほ日本學生の爲めのセミナリオがあつて、その裡に二十六人の貴族の子弟を收容してゐる。昨年（千五百八十一年ならむ）有馬及び有家に建築せられたる家屋は甚だ宏壯である。殊に有馬のものが優れて居り、美しき寺院と三棟の宿舍或は家屋より成つてゐる。實に九州に於ける此種建築のうち最も大なるものである。是等の家屋は、大きく且つ多くあつたが、その爲めに莫大なる費用を要することはなかつた。と云ふのはその材料は日本異教の寺院を廢して之を得、又は有馬の教王、ドン・プロタジオが材木を寄進したからである。

有家は有馬から程遠からぬ處に在るが、此にも美しい寺院が建てられた。有馬のものに較ぶればやや小い。兩處の寺院は基督教の爲めには多大の貢獻を爲した。即ち爲めに信徒の數は著しく增加し、その他の異端不信者も之を縁に教を入らずといふ決心をしたのである。今年は六百の人が洗禮

を受けた。

次にセミナリオに關しては、そこの學生は心靈、風儀、學術に於て顯著の進步をなし、その粗暴なる言語を弄し不信の行爲を示すを見聞することなく、皆平和と諧和との裡に暮してゐる。その敎養及び信念は歐羅巴敎會の修道士にも劣らざるべく、その課業にいそしむことは豫期以上である。其記憶、其悟性は歐羅巴に生れたる青年と同じく、寧ろ之に勝る所がある。その歐羅巴語學の習得に於ては、其彼等のものと甚だ緣遠きものたるに拘らず、數箇月のうちに能く之を讀み、綴り得るに至り、其至難なる拉丁語の如きもその怜悧なる記憶及び悟性とその不斷の勉强とに由つて著しき上達を見るに至つた、云云。

此記事によりてわれわれは結髮し帶刀せる當時の耶蘇敎青年の面影を眼前に髣髴せしむることが出來るのである。

ロノ津

ワリニャニ師の有馬に於ける事業は順調に發展した。そこで師はまたロノ津に引き返して、戰時

に沈淪した此地の多數の貧困なる基督教徒救濟に從事した。その爲めには葡萄牙商人たちはその財貨を用いて布施をなした。

ワリニヤニ師豐後に赴く

大友宗麟はしばしば書をワリニヤニ師に遣はし、早く豐後に來つて世子義統が洗禮の事を行はむことを求めたので、師も之に應じて臼杵に赴くべき用意をして居たのであるが、其後は宗麟より却つて其出發を延期すべき指授を得たのである。その理由は義統の優柔に歸すべきであつた。義統は其性怯弱で外に强敵を受け、内は基督教派の近臣に迫られて、其政令に果斷を缺いた。そして寧ろ多く非基督教派に聽いて、師父に對する感情は冷却してゐたのである。宗麟は病蓐の人となつた。病中は世子及びその訪問を拒絶した。病癒えて再び基督教主義を布告した。

其他に小さい内亂があつた。義統の臣下にチカヒロと云ふものが有つたが、恣に屋形から離れ、前領主が前夫人及び親方に與へたる彼の故地を復する旨を宣言した。宗麟はむしろこのチカヒロに應援を與へた。それで前夫人と親方は屋形より遠からなければならなかつた。

そのうちチカヒロは死んだが、その子チカクラは再び義統父子と紛議を起した。宗麟は薩摩との戰爭の敗北以來、屋形の威信の墜ちたのを痛感した。そして若しワリニヤニ師が臼杵に來るやうなことがあれば、チカクラの途に之を阻む意志を有することを察知した。是等の事情が、宗麟をしてワリニヤニ師の招待を躊躇せしめたのである。

一方にワリニヤニ師はまた他の事件で心を痛めてゐた。それはドン・ルイスと名づけられた五島の領主の訃である。またその爲めに起つた同地方の擾亂である。

肥前の大村純忠が歿したが、其庶子は支那の女の産むところであつた。それで有馬純晴の第二子が迎へられてその後を嗣いだ。而して庶出の子（西教史の譯者は千々岩直員かと言つてゐる）は五島を與へられて、五島殿と稱せられた。是人は耶蘇教を喜ばざる純忠の臣下と結んで純忠を攻めたことがあつたが、その子は伊留滿のアルメイダやルレンソオ（後者は日本人）の影響を受けてこの教を信じ遂に受洗の決心をした。その父も敢て之を阻まず、當時トルレス師の命でその地に居住して居たパドレ・ジョワンニ・デ・モンテに就いて洗禮を受けたのである。それは千五百六十八年、永祿十一年のことであつたが、千五百七十年（元龜元年）陽七月に、同年新に副管區長として日本

に來たカブラル師の司會の下に、師父の會議がセキの島（志岐？ 獅子島？）に於て催され、その結果ソリニヤニ師がこの五島に遣はされて、モンテ師に代り、ドン・ルイスを助け、その手でその妻、侍女、臣僕を洗禮した。ドン・ルイスの夫人はマリアと名付けられた。ドン・ルイスは熱烈なる基督教の保護者で、ソリニヤニ師は屡この公子と共に擾亂の渦中に投ぜざるを得なかつた。而して彼が後年アルカラに於てルイス・デ・グスマン師に語り、後者の日本傳教史の資となつたのは主としてこのドン・ルイスの行狀であつた。かういふ記憶があるので、ドン・ルイスの死、その後のその領地の動搖は師に取つて大なる傷心事であつたのである。

又豐後の事に移るが、義統は既にその統制力を失ひ、自らは退隱してその父に再び政務を見ることを請うた。そこで宗麟は、その子の退隱は許さなかつたが、之を補佐して政治を牽制した。

かくして叛臣のチカクラを平げ、その親戚及び一味の者を殺し、罪の輕きものは之を許して、國内が再び平安を得た。かの親方もまた歸參がかなひ、嗣子がなかつたから、宗麟は之に其第三子の親盛を與へた。世間は宗麟が再び精兵を揮げて仇敵に迫り、その失つた諸地を恢復するだらうと期待したが、宗麟は敢て此事に出でなかつた。それは我子を信頼せぬからでもあつた。

前にてワリニヤニ師が再び招かれて、いよいよ豐後に赴いたのは、かう云ふ紛擾のやつと治まつた時で、千五百八十年（天正八年）の陽暦九月十四日のことであつた。宗麟、義統の父子、共に臼杵に在つた。義統も面はゆく思ひながら師を見た。そしてやがて自分も基督教に入ることを約し、そしてその證左として府内に學校建築の爲めに一區の地を與へた。宗麟はまた臼杵の一地と黄金とを與へた。是等の地方に於ける學校建築のことは次の項に於て述べよう。

この年府内、臼杵及び附近の諸地に於て洗禮を受ける貴人三十人に餘り、庶民の之に倣ふものは無數であつた。ドン・レオンはノセン（或はNocin、野津の誤ならむか）に寺院を建立せしめ、その教徒は三千五百餘人であつた。

また嚮に言つた日向の伊東義益の夫人はその長子と共に臼杵でワリニヤニ師の手から洗禮を受けた。次子（ジエロニモ）は既に夙く之を得たのである。

宣教師の行狀作法に關する問題

ワリニヤニ師は漸く日本の事情に通じて來たから、今まで猶豫して居た重要な問題の解決に東懸

つた。即ち基督教教師たちの行狀及び作法の問題である。師は豐後に在る間、副管區長カブラル師及びパドレ・ルイシュ・フロイシュと此事に就いて熟議した。然し三人の間に一致を見ることの困難な場合が屢あつた。

第一は日本の習慣、即ち作居、飲食、坐法（殊に食事その他の時に於ける）、訪問、接客の禮、辭儀の法——一般に日本の禮儀作法を、どの點まで容認すべきかと云ふことであつた。そして是等の諸點に於ては佛僧神官の爲す所に倣ふべきであると決定した。國民の信賴を得るにはそれが好方便であり、歐羅巴禮法の率直單純は此國に在つては却つて禮を失するものと見做される恐がある。此國のかなり煩瑣な禮法も之を習はなければならぬ。ワリニヤニ師がその總長に當てた書翰にも亦この規定の事を言ひ、歐羅巴修道者に取りては寺院の裡に於ける極めて嚴格なる規則とてもこの禮儀の見習ほど苦しいものではないと記してある。從來は宣教師たちはこの點に就いてはかくまで嚴格ではなかつた。その爲めに人人の作法の間に往往甚しい不一致があつたのである。然し行狀の統一といふことはまた一の重要な義務であるから、ワリニヤニ師はこの問題を巨細に亙つて吟味したのであつた。

其中でも巡察使が最も愼重に考慮したのは法服の材料の事であつた。と云ふのは、其料に於ては ジェズイトのパドレたちは印度に於けると同型であつて問題はなかつたのであるが、その本地に就いては、二三の教師は木綿を廢して日本特産の絹布を用ゐた方が可いと考へた。その一の理由としては、絹は日本に於いては廉價であり、此國に於ては幼童と雖も之を着る。且つ日本の貴人は當然と著衣するを喜ぶから、彼等と交るには亦此種の衣を附けるがいいといふのである。サン・フランシスコ・シャギエルの如きも豐後の屋形に赴く時は常に盛裝した。そしてその人人の尊信を得たのである。而して平服を着けてゐる時は嘲弄及び危害を被つたといふこと、又トルレス師は毫も徳を傷けることがない限りその國の俗に順ふを可とし、日本の宗務に服するものは絹の長袍を着けるから宣教師もまた之に倣つて差支がないと言つたといふことなどを例に引いた。(尤も實際はトルレス師は絹衣を着けたことなどはないのである。) 一方には亦此事は豐後、大村の諸侯の希望する所でもあつたのである。

フランシスコ・カブラル師が副管區長の資格に於て日本に來た當時は實にかかる狀態であつた。彼はまづ之を惡弊と觀じた。そして十分その得失を考察した後に決心する所あり、そして日本の高

貴なる人の前に現はれるにも、印度より齎したる粗服を以てした。それで反對説の人人も彼に服した。唯バルタザル・アコスタ師、是れ美徽の習慣を作つた人である、だけは之に從はず、依然として、その宗教の爲めに利益であると辯解した。此抵抗は高價に報ひられ、日本の傳教には學者を要し殊に不從順は其動機如何を問はず最も禁忌すべきものであるので、副管區長は遂にアコスタ師を印度に送還した。師はその後も前非を悔ゆる樣子がなかつたから更に葡萄牙に追はれたのであつた。而して彼は遂に耶蘇會を脱したのである。かくしてジェズイト僧はまた舊の服裝を附けることとなつた。この解決はワリニャニ師の善しとした所であつた。

　衣食問題が解決して今度は有馬及び府内に設立すべきセミナリオの制度の事が講究せられた。ワリニャニ師の考は後來出來るだけかかる設備を増して行かうといふのであつた。人人の言葉に從へば、神の榮光を宣揚するあらゆる手段のうちで、セミナリオに由つて青年を教育するのが最も確實なる效果を有するものであつた。その上に、此國に福音を傳へる工人を作ることは焦眉の急であつた。需要日に日に増して、印度や歐羅巴からの供給ばかりでは到底間に合はなかつた。好い工人を作るには長き時を要する。而してかくの如き企圖は全く合理的であつたから、ワリニャニ師は反對

說などを豫期しなかつたのである。然るに實際は抗議が副管區長より出でた。

フランシスコ・カブラル師は高德のパドレであり、細心の傳教者であつたが、その性が偏執であつた。神に祈つて爲したる自己の判斷を以て最上のものとなし他に聽かなかつた。此人は日本人を識りその才能を認めて居つたから、一旦日本人が完全に宗教的人道的に教育せられたら、終には歐羅巴人を蔑にするに至るだらうと懼れたのである。それで今まで協會に入つた廿六人の日本人は、基督教教師たるを以て目的としてゐたのに拘らず、唯宗務の助手たるに足るだけの修業しか許されてゐなかつたのである。

然し彼が日本人をかく待遇したことは必しも確實なる實驗に基いてではなかつた。實際に於て彼等は謙遜であり、從順であつた。その上その國の習慣に通曉してゐること、その國語を話すこと等の點に於て、歐羅巴生れの傳道師よりは遙か好き便宜を有してゐるのであつた。尤もワリニャニ師とてもカブラル師の懸念を謬としないこともなかつた。殊に未來の事は過去の經驗ばかりから判斷することは出來ないものである。然しながらワリニャニ師はカブラル師の抱いてゐるやうな、極端な懸念をば正當とすることは出來なかつた。で精密に人選して、謙遜、事に從ふやうなもののみを

許して學を授けようと提議し、之を固執した。副管區長はなほも之に服せなかつた。ワリニヤニ師は此人の心の頑固にして後來憂ふべき結果を生ずることあるべきを慮つて、之を印度に返し、其闕をばカスパル・コエリヨ師を以て充さうと決心するに至つた。因に曰ふコエリヨ師は葡萄牙生れで千五百七十二年（元龜三年）印度より日本に渡つたのである。

さて豐後の局形に於ては、國內も平穩となり、宗麟はその子の洗禮を望んだが、義統は心依然として定まらず、ワリニヤニ師もまだその時でないと見たから、此を辭して都に向ふことにしたのである。

大村領

ワリニヤニ師は豐後から都に上る途、大村領を過ぎた。

大村純忠の永祿五年に洗禮を受けたことは既に記した。彼はそれからは熱心なる信者となつて、領內に基督教を奬勵した。松浦氏の平戶の繁昌を長崎に奪つたのだから、此事は政事的の意味に於ても重要だつたのである。同年兄有馬義貞を助けて龍造寺と戰つた。翌千五百六十三年には龍造寺

對有馬大村の和議が成つた。然し同年他國より來つた純忠を喜ばない重臣たちは五島の領主と結んで謀叛し、純忠は叢林に遁れて危難を免れたこともある。內亂はいよいよ大きくなり純忠はその實有馬晴純の援によつて辛うじて重圍のうちから救ひ出された。間もなく純忠の再擧して亂を平らるやいよいよ基督敎の弘布に力めたのである。千五百七十三年（天正元年）には然し平戶の松浦氏及び諫早の領主との同盟軍に攻められて大村は掠奪せられ、純忠は再び危地に陷つた。幸にこの度も形勢を逆轉せしめた。純忠の信仰は、千五百七十六年には領內耶蘇寺院四十、信徒四萬を數へしむるに至つた。翌年には龍造寺の軍がまた攻めて來たが、之を擊破することが出來た。

まづざつとさう云ふのがワリニャニ師の第二回の來朝の頃までの大村の狀況である。ワリニャニ師が豐後から大村領に出ると、またしても大村と龍造寺との間の葛藤があつた。

カスパル・コエリヨ師の書簡は略次のやうに此事を記してある。

龍造寺は數年來その主豐後國主に背き、その領地肥前及び筑後を打ち從へ、豐後國主と他の領土をも蹂躙して今年肥後の國主となつた。九州の諸侯は大いに彼を恐れたが、就中有馬侯、大村侯はその事甚しかつた。彼等は殆ど龍造寺に隸屬したが、なほ戰戰兢兢として其怒を恐れたのである。

殊に少からず耶蘇教徒を驚かした事件は、彼龍造寺が大村のドン・バルトロメオ（純忠）に對してその子と共に彼がコンガ（古賀）の城に來らむを促したことである。大村の一門は相謀つてその領地の一部を割く決心をなした。かくして龍造寺は平和の假面の下に大村父子及びその臣僕を誘つて手中に收め之を殺してその全領土を奪はむと欲したのである。然し若し彼等にして其招待を謝絕して不信の意を示さむか、龍造寺は忽ち干戈を以て彼等に迫るであらう。然らばこの强敵に對して果して抗することが出來るであらうか。

然し副管區長（カブラル師たり）は大村父子の龍造寺の城に行くことを喜ばなかつた。そして温言を以て此招待を斷ることを勸告した。固より龍造寺は肯かなかつた。それで純忠は人人と謀り、神に祈り、敢て龍造寺の許に往く決心をした。そしてその子及び五十人の家來と共にコンガの城に赴いた。

有馬の屋形の人人及び基督教徒たちの心痛は極度に達したのである。殊に教徒に取つては、若しドン・バルトロメオにしてその臣下と共に敵手に斃れむか、有馬の國主及びその領地も亦同じ運命に陷るであらう。この國土に於ける耶蘇教の事業は全く泥土に委ねられるべきであるといふ心配が

あつた。かくして人人は廿日の間を危惧のうちに暮した。然るに神は純忠を蘇して事は無事に濟んだ。龍造寺は決して純忠親子を虐待しなかつた。卻つて之を厚遇し、兩者の間に平和が決せられたのである。龍造寺はその女を純忠の子（卽ち喜前）に遣はさむと欲することを告げ、純忠は之を諾した。

この幸なる解決はこの上もなく人人を喜ばしめた。殊に他の一事の之と全く異る結果に終りしを見たからその喜悅は一層大きかつたのである。筑後に一豪族があつた。異教徒である。その富及び勢威は純忠と伯仲した。此人が純忠と同時に龍造寺に招かれた。恐らく龍造寺は始め此兩者を殺す積りであつたであらう。此人はカマチ殿と云ふのであつたが、龍造寺の心を疑つて遠慮したが純忠の例を見て、遂に意を決してその招待に應じ、近親の者と共に龍造寺の城に赴いた。龍造寺は之を遇することとまた慇懃であつた。然しその辭去するに當つてや、途に五千人の兵を伏せて之を殺し、勞せずしてその領土を奪つたのである。而もその一族及び妻妾を殺戮するや暴虐を極めた。

カマチ殿の不幸を見るにつけても、人人は深く神の惠を感謝した。

巡察使及び副管區長は基督教徒の安寧の龍造寺に依ること多きを見、屢〻人をして之を訪ひ、敬

意を表せしめた。そして彼よりも厚意ある返事を得たのであつた。終に副管區長は自ら龍造寺を訪れた。そして頗る優遇せられた。而も龍造寺の好意は其心底に一物を有するに出でた。卽ち支那より來る葡萄牙商船の其領内に寄港するのを望むのであつた。其代りには耶蘇教寺院の建設をも許さうと云つた。副管區長も之を聽いて大に喜んだが、然しその有馬及び大村に對する態度を見ると、其厚意のほども大に疑ふべきを識つたのである。

薩摩は初め豐後の大敵であつた。然し龍造寺が勢力を得來つて豐後の領主を攻略するや、そのやがて鋒を已に向くるに至るべきを慮つて信長及び豐後と結ぶに至つた。それで今度は龍造寺に對して攻勢に出で、その嘗て豐後の領主より奪ふ所の日向の大半を其手に收めた。今や豐後の領主は腹背に敵を受くることになつたが、その爲めに有馬、大村の諸侯並に兩條の基督教徒はしばらく安穩なるを得た。（田中義成博士の織田時代史には「九州に於ては薩摩の島津義久の兵威最も振ひ、日向豐後を略し、大友氏を壓して將に九州を風靡せんとするの觀あり。仍りて大友氏は援を信長に請ふ。八年＝千五百八十年＝八月、信長乃ち大友氏の爲めに近衞前久をして書を義久に送りて和を促すと共に、自ら中國を征せんとするの意を述べて、以て之を威壓せしかば義久大に懼れて命を奉じ

且つ使者を出して之に答ふ」とあり)。

以上はコエリヨ師の書簡の物語るところである。獨逸古譯の原文頗る解し難いところがあるから多少の誤なきを保せない。

なほこの序にコエリヨ師が薩摩に就いて書き續けることを引かう。薩摩も亦自領に葡萄牙商船の寄港するのを渇望してゐる。然し耶蘇敎の傳道、敎會堂の建設を許さなかつたから葡萄牙人はそこに上陸しなかつた。それで巡察使及び副管區長に懇請する所があつた。ワリニャニ師が豐後を辭して、大村領に往くとて薩摩の一港で船を待つと、人をして之に一善馬、一名刀を送つて、印度副王に齎さむことを乞ひ、且つ耶蘇敎の師父及び葡萄牙人と交を訂せむと欲する旨を言はしめた。又巡察使が將に乘船せむとする時、更に人を遣はし、耶蘇敎師父の爲めに其首都の一區地を與へて、寺院僧房を建築せしむべしと約せしめたのである、云云。

巡察使は唯途に薩摩を通つただけである。そして船に由つて大村領に入り、純忠に會つた。それは純忠が危險なる旅行から歸つて間もない時であつた。其後長崎に赴いて其地の寺院を見廻つた。

ワリニャニ師の目で見られた當時の長崎の市街、居民の狀況はどんなであつたらうか。それは甚



第二十九圖　ミヤコ

だわたくしを誘惑する興味であるがその研究は今は之を斷念したければならぬ。唯手近にある歐人の記錄から知られることのみを書き記さう。

ワリニヤニ

師は大村の人人に向つて、九州の諸港中、印度、支那より來る船舶に取つては長崎に優るものがな

い、然し此には何等の防備も施されず、不時の攻撃に當することが出来ないと云ふことを教へた。大村侯もその言を尤もとしたので、師は之に勸めてまづ横瀬浦（?原文オコシウラ）の防備を作らしめ、住民及び海船の安全を期せしめた。其後人は之に倣つて段段と他部に及んだ。而して其後久しく長崎が——稀に特別の事件の爲めにこの港を避くる必要のあつたこともあるが——葡萄牙商船の入る日本唯一の港となつた。此事シャルルヲワ師の日本史の第五卷第八章に出てゐる。

又巡察使が長崎滞在中、一葡人が日本の侍を殺し、基督教徒たる其子父の讐を復したことから端緒を發し大きな騒動となり、巡察使は長崎を去るに至つたといふやうな事件が物語られてゐる。巡察使はそれでまた一度有馬に赴いて事靜まつたのち再び長崎に歸つたといふ。

ワリニヤニ師都に向ふ

上述の如く、ワリニヤニ師は、豐後、有馬、大村の間を往來してゐたことと思はれる。そして千五百九十一年（天正十九年）の陽暦三月に臼杵を發し、肥前の港から乘船して都に發向した。パドレ・ルイシュ・フロイシュ及び日本人伊留滿ルレンソオが一緒である。船長は豐後の國主に雇つて

長門の諸港には寄るまいといつた。是は毛利氏が吉利支丹を憎み、又之を庇護する信長の敵で、而も信長とは正に開戰中であつた、羅馬の宗門の首長が都に出づる爲めに、やがて豐後を發すると いふ事を豫知して、若し領內に寄港するやうなことがあれば之を捉へるといふ計畫があつたからで ある。それにも拘らず船は二度も毛利の領土に投錨した。それからまた海上では長い間海賊の追尾する所となつたりなどした。

このルレンソオといふ日本人伊留滿は嘗て千五百五十九年（永祿二年）にヰレラ師の案內として豐後の府內から京に上つたことのある男である。その事はルイシユ・フロイシユ師の「日本史」に詳しい。多少、參考になると思ふからその時の船路を記するに、まづ府內を出で沖の濱から船に乘り、モリヱまで航し、更に安藝に至り、宮島より伊豫のホリヱに出で、風を待つて十日止まり、それより備後の鞆津に達し、ここに又十日滯留し、室津を經て、兵庫に行きそれから堺に達したのであるが、この行程は四十四日であつた。尤もその便は便船に乘つて行つた上に、いろいろの事情で船を代へたりなどしたから、普通以上の日數を要したのである。ワリニヤニ師の行は大友氏の別仕立の快船に由つたのであるからもつと早い筈である。クラッセヱに從ふに、豐後臼杵を發したのが三

月一日で、堺に着いたのが聖週の前二日であつたといふからその歳のパスコワが幾日になるか知らぬが、兎に角二十日を餘り違きぬ行程であつた。

堺に上陸するや直に高山右近の居城高槻に向つた。

高槻

巡察使ヴリニャニ師が高山右近の領地に入ると沿道の歡迎は類を見ないものであつた。此地に於て如何によく基督教が弘通せられてゐるかを目睹して巡察使はこの上もなく喜んだのである。たとへば或日巡察使は一人の高貴なる侍の領土を通過した（この名は諸報告中に之を見ないと云ふ）。その夫人が忽ち來つて師の足下に跪いた。そして涙を灑いで祝福を與へむことを請うた。師も之には大いに驚いたのである。元來この婦は善き基督教徒であつた。が、數日前知らずして犯したる過が大事を惹起す原となつた。然しその位地高きを顧みて、公衆の前にこの悔改めをなしたのである。師はその德を賞め、之を慰めた。

例のコエリヨ師は語る。「右近殿は當時廿四歲であつた。然し信長の寵を得、高槻の城、その他

の田園村落を有し、領内の民のうち二萬五千人は既に基督教に入つてゐた。多數の貴人も此内に算せられる。此歳また三千五百の人が新に洗禮を受けた。巡察使は、ここに於て名狀し難き敬愛の感情を以て迎へられた。右近殿は同地に一人の師父の來り住むことを望まれ、八人或は十人の教師の住み得べき僧院を立て、年年の費用を支出した。巡察使の豐後より都に至る途中この地を過ぎた時は恰も聖週(サンタ・セマナ)に當つた。教師たちも信徒も師が此處に止つて聖週(サンタ・セマナ)及び復活祭の儀式をなさむことを望んだ。而して儀式は極めて莊嚴に施行せられた。師の到着の報の知れてから日數も立たなかつたのに、美濃、尾張、その他の諸地より貴賤の信徒が參集した。人人は既に久しく師の來るのを待ちあぐんでゐたのであるから、師の堺に上陸したのは日沒の後であつたのに拘らず、使を四方に馳せてその到着を知らせたのであつた。

翌日黎明に八十餘の騎馬の人、多數の徒歩の庶民が師を迎へむが爲めに來つた。ジヤオン、サンガ（三箇）、オイアカマ（堺より十五里乃至二十里の處である）の貴人は深夜師の着報を得て、火急堺に赴いたのである。人人の師を導いて高槻に至るや、居民の歡喜絶頂に達し、老幼婦女も亦遠村より來つた。而してかく莊嚴に音樂、オルガンを以て祝はるる祭典はこの地方に於て未曾有のこ

とであつたから人人の驚も亦大であつた。寺院に於ては救世主の柩は飾られ、それを拜し、又身を犧牲せんとして來れる庶民は無數であつた。巡察使は身の高槻に非ずして、羅馬に在るかと疑ふほどであつた。

次の復活祭の日は日出前二時間から盛なる行列が行はれた。その狀全く歐羅巴に於けると同じであつた。いろいろの色で染められた十字架の旗、彩色せる提灯がその間に雜つた。畫像、繪燭、聖盒、城砦等の型が作られて運ばれた。行列に加はるものは二萬人許であつた。異宗の者も亦之に列し多大の感動を受けた。後メサが讀まれ、多くの人がサクラメントを頂いた。

右近殿は多數の教徒を招いで盛餐を供した。領主も他の人も大に喜悅して、來るべき聖屍祭もまた師の司會のもとに、同じやうに行はれたいといふ希望を陳べた。

而して實際にまた、巡察使は安土山より歸つて途に再びこの地を過ぎ、人人の希望の如く、ここで聖屍祭の儀式を行つたのである。

都

ワリニャニ師は高興で復活祭を濟まし、京都へ出て、オルガンチノ、フロイシュ兩師を隨へて信長に謁した。師が印度から連れた來た黑人が大に信長の好奇心を引いたとも、又信長が師に坂東の鴨十羽を贈つたとも諸書に傳へられてゐる。又信長は同年（天正元年）の舊曆二月二十八日に京都に近國の諸侯を集めて「御馬揃」の大競技を擧行した。「禁中の東南北八町に馬場をやり、高さ八尺に埒をゆひ、柱をば毛氈にてつゝみたり、既に其日にも成りしかば、主上行幸なる。卿相雲客殿上人、さも花やかに出立給ひて、左右の棧敷位に隨つて列坐せらる。辰に始まり、未に終りしかども、昔見るほども無きやうぞ覺えける」と信長記にあるがそれである。而してワリニャニ師も又此席に招かれたのである。その如何に壯觀を極めたかは伴天連の報告に詳しいが、それは「日本西教史」に讓らう。

當時京都の基督教はオルガンチノ師が首座となつて活動してゐた。そのことに至るまでの沿革及びその當時の情勢等は今ここには記すまい。唯コエリョ師の書簡から左の一節を拔かう。

信長は小國より起つて既に日本の三十四箇國をその掌中に收め、而もなほ未だ服從せざる諸國の征討に力めて居る。その爲めに日本の貴族より甚だ恐れられ、彼の敵すらも交を訂せむことを求む

るといふ有樣である。然し信長は之を肯ぜず、凡てを臣属せしめむと欲するのであつた。信長は自ら覺つては居ないが、畢竟神の掟をこの國に弘むる爲めに選ばれたものである。彼は神、佛を尊崇せざるのみならず、佛僧及び異宗の徒の大敵である。是等の諸派は、皆富みて勢力を有し大なる城市、富裕なる都會を自家の權力内に容れむとし、信長に抗した。彼等の敵對がなかつたなら信長は疾くに日本全土の主となつて居たのである。信長は毫も容捨なく彼等を攻めて、既に其大學林を毀ち、伽藍、僧房を焚き、皆之を其將士に分つた。それで他の諸侯も之に倣ひ、佛僧を逐つたが、我會（耶蘇會）の教師に對しては好意を盡した。殊に今年信長は我等に特別の友誼を表し、その居城（安土山）の一好地を與へてここに寺院、住居を建設せしめた。そして巡察使が都に來るや大なる敬意を以て之を迎へたのである、云云。

安土

巡察使は京都から安土に往つた。いつの日であるか詳しいことは分らない。コエリヨ師は、信長は都に上られそこで巡察使に會はれた。信長が安土山に歸られると、巡察使も亦やがてその後を追

うて安土に來た」と言つてゐる。シャルルヲワ師は巡察使は「馬揃ひ」の興行の後信長と共に安土に往つたと言つてゐる。孰れにしても師は京都にはさう長く滯在することなく安土に赴いたと察せられる。そして京都並にその附近の宗教事情を巡視したのは、多分安土に二箇月滯在ののちのことであると考へて可からう。

巡察使が安土に赴くに就いて、最も重要なる要件はその地に基督教寺院及びセミナリオを建設することであつた。是等の普請は同年の舊暦十月頃にはまだ準備中であつたことは、信長公記に「十月七日愛智川邊、朝鷹つかはされ、御歸に桑實寺より直に新町通御覽じ、伴天連の所へ御立寄、爰に而御普請の樣子被仰付。」「十月廿日より伴天連北南に二通、新町鳥打へ取鎮立されられ候はん由にて、御小姓衆御馬廻衆へ被仰付。足入沼を填めさせ、町屋舗被築、御普請在之。」とあるといふので分る。ワリニヤニ師はオルガンチノ師を以て安土のセミナリオの長とし、フロイシユ師を京都のパドレたちの指導者となした。

安土に於てワリニヤニ師が如何に信長に待遇せられたか、又そこのセミナリオの模樣はどうであつたかと云ふことは、予は之を舊稿の「安土城記」(「改造」大正十四年四月號)に詳記したから今

ここには記さない（尤も同記は幾分小說化したが、大體は諸伴天連、殊にコエリヨの報告に據つたものである）。

唯ここのセミナリオはワリニヤニ師の去つた後（天正十年中ならむ）竣成して、オルガンチノ師の外に四五人の伊留滿あつて、廿五六人の貴族青年を敎育したといふことをつけ加へて置かう。而して夫等青年のうちには實に伊東義益の第二子ドン・ジエロニモ義勝が雜つてゐたのである。

コエリヨ師曰く「我我は神の惠に由つて、是等の青年に多大の收獲のあることを望んだのであるが、皆その育善く、賢く、且つ語學も上達したから、豫想以上の結果を得ることと疑なき所である。云云。」

なほ予が「安土城記」を書いた時にまだ手にすることの出來なかつたフロイシユ師の日本歷史（獨譯本）の註に興味ある事があつたから、此序にここに引用しよう。それはヨホオ・パウロの子ヰセンテ法印が千五百八十四年まで安土のセミナリオの敎師をしたといふことである。然らば上記のイルマンの一人であつたらう。ヨホオ・パウロの如何の人であるかは日本の文獻に徵すべきものがないさうである。シユウルハンメル及フオレチユ兩氏（譯者）に從ふと、パウロの子は千五百三

十八年と千五百四十四年との間に若狹で生れ、受洗後キセンテ・キレラ Vicente Vilera の名を得た。千五百八十年に耶蘇會に入り、カテシスト、教師及び著述者として活動した。安土の後には大阪、長崎、京都等を往來した。日本支那の文學上の教養あつて多數の宗教書を著述或は翻譯した。彼は巡察使によつて京都の方面に遣はされ、安土のセミナリオの少年に日本の宗派について講議した、云云。」

近畿の巡察

ヴリニヤニ師は安土に止ること二箇月で、一まづ信長に暇を告げ、京都及びその附近の教徒を見まふことにした。信長も快く之に同意して、その領分のうちなら何處でも自由に旅行し、説教して差支ないと言つた。

さてヴリニヤニ師が巡回した地方の事情は如何であつたか。是も亦コエリヨ師の書簡に聽かう。但しそのうちの不明な地名、人名はまた之を考證する機會を有しない。

書簡に曰く、「都及び其附近の建築も今年は其數を增した。前年までは唯一つの僧院が有るばかり

であつたが、今年はそれが四となつた。即ち安土のセミナリオ及び僧院（是等は日本に於ける最も立派なものである）、津の國の高山右近の領地内に於ける僧院及び河内に於ける僧院がそれである。この地方に於ける基督教徒の數は二萬五千に及び、そのうち四千人は今年（千五百八十一年ならむ）の改宗者である。教者の數も亦増加して八人のものが十四人となつた。それは五人のパドレと九人の伊留滿とである。是等の人人は附近の諸地に遣はされ、播磨、越前、美濃、尾張までも神の掟が弘通せられた。安土のセミナリオの諸規定は有馬のものと同樣である。

都は九州よりも人人が富裕であり、都雅である。基督教弘通の效果は隨つて一層大なるものがあるだらうと信ぜられる。佛僧もここに莊嚴なる伽藍を建ててゐる。それ故に又巡察使もここの布教は特に意を用ふべきであると考へたのである。

巡察使は都の附近を歴訪した。多數の貴人は喜んで師を迎へた。或地方では十里廿里を遠しとせず、教徒が群集し來つて、師はそれが爲めに晩餐を設けて、千に餘る人人を饗應した。又人人は師の豐後に歸る爲めに五艘の船を準備せむと提議した。然し師は既に大友宗麟の大船を有するを以て之を斷つた。

又曰く都は内裡の住みたまふ處なり。……然しここは日本第一の都會である。それで巡察使はここに一の僧院を建築せむと決心した。然し異宗の壓迫が甚だ大きい。前年までは我等に一の住居をさへ貸し與へなかつた。そして辛にて、異宗の人人に取り圍かれた街隅に小さい場所を見出したのであつた。

この度は信長の好意によつて一寺と一僧院とを建てた。寺院は小さいが、美しく且釣合よく造られた。内部をば巡察使の齎らされたる燭臺、銀瓶、畫像、聖壇等を以て飾つた。

この寺は然し甚だ世間の耳目を聳動せしめ、從つて佛僧の反感を招くこと多大であつた。この年都に於ては三百の人人が受洗し、そのうちには貴族もあつた。

オルガンチノ師は安土に他の家屋を建築した。

巡察使は印度より多數の伊留滿たちが來るならば都にコレジオを建てようと企圖した。ここを中心として諸地方に布教師を出さむと考へたのである。この目的を以て既にルイシユ・フロイシユ師は一日本人伊留滿と共に越前に遣はされた。そこにはシユストオ高山（高山右近）の父（ダリオ・高山飛驒守）が居た。都より七十五里の處である。ここでも貴人の歡迎を受けたが、殊に高山右近

の父母は喜んで之を己が家に逗留せしめた。パードレがタリオの家に居るといふ報が傳はるや、人人はここに集り來つた。日夜說教し五十人の改宗者を見、ここに小寺院の基礎が築かれた。フロイシユ師はその同伴者の病氣や、戰爭の爲めでその地の人人の不安があつたりした爲め、長くはそこに止まらず都に引返した。

巡察使はタリオの居城より十五里離れたる處に赴き、そこに篤心の教徒レオンを見出した。他のミツションは播摩國になされた。巡察使はそこに一人の伊留滿を遣つた。美濃、尾張にも亦一人のパードレ、一人の法兄弟が遣はされた。信長の長子（三位中將信忠）は之を厚遇した。而して巡察自身も亦この地方に赴いたのであつた。

コエリオ師はなほ河內及び攝津の事情に就て物語る。

高槻は津の國に在つて四人の異宗の君主に分割せらるるが、そのうち高山右近のみは基督教徒である。それに接するは河內國であり、又多くの領主の割據するところである。然しその二、三の者は基督教徒である。オカヤマ（Ocayama）、サンガイボウ（Sangaiabo）、トボシンガタ（Tobo xingata）、及び堺では、凡てゞ六千人ばかりの教徒が居る。

オカヤマは基督教徒たるジョワン＝・ヨワキ殿（Ioaquindono）の領する處で、其附近の村落を併せ四千五百の教徒がある。城市は高槻より九里、都より二十七里のところに在る。このヨワキ殿と高山右近とは好誼がある。ヨワキ殿は其富、其勢力は劣るが、其信仰はジエストに讓らない。

ジョワン＝の母の兄弟のジョルジ・ジヤヒチ殿（Giafinchindono）といふはまた古よりの教徒であり、その高徳を慕つて、人人は之を父と呼びなした。彼はその記憶に由り、初めて日本に來れる我が協會の師父たちの名を書き記し、内に繪を插み、表に金を置いた美しい書籍を作つた。又これ等師父たちの手紙を集め之を切つてその書中に貼り込んだ。かくしてそれを寶物として珍重し、教徒の敬ひまた羨むところとなつた。オカヤマにはジョルジの力により一教會が建てられた。

オカヤマより三里の處に Sunga（三箇）と云ふ島がある。その領主も亦基督教徒である。その住民五百もまた教を信じ、一の寺院と僧院とがそこに建てられた。

この島より六里の處にシモン・タガ殿（Tagandono）といふのがある。この河内の國は二部に分たれ、その一部は異宗の君之を領し、他は基督教徒たる三人の君の領する所である。シモンはその三君のうちの一人であり、その女はオカヤマのジョワンと結婚した。そしてその領民をして教徒た

らしめた。彼は Jōji の城に住んだ。八百の教徒がそこに育つた。然し寺院はまだない。シモンはやがて之を建設せむと企ててゐる。

之に隣接する二國の領主のうち、一人はシモンの義兄弟でありノマ殿（Nomandono）と呼ばれた。この人もまた師父に達して好意を有したのである。

そこよりなほ十五里乃至廿里の處にトボシガタの城市がある。この地方はまた二人の君の領する所である。そのうち二人は基督教徒である。然し地域は大きくなく期待する所も亦隨つて少い。他の更に一たる領土を有する一人の君は今年改宗した。その息の一人はシモンの一女と結婚した。そして全領土を擧げて基督教徒たらしめやうと力めて居る。その父の死んだ時にその子（シモンの女の夫）がその家督を継いだが、その年は十一に過ぎなかつた。近くさういふ例があつたので、人人は或は信長のその領地を削つて之を他の功臣に與へはしまいかと憂慮したのである。そこでシモンはその少年を携へて安土山に詣り信長に謁し、贈るに重寳の刀と帷子とを以てした。信長は之を喜んで、地を換へ又は之を削るやうなことはしなかつた。而して贈る所の寳刀も之を少年に返した。

巡察使が河内を音づれた時、人人はこの地方に一師父一伊留滿を遣はされむことを望み、師も亦

之に同意した。

堺は Ialo より十二里離れてゐる。日本の大都の一である。多くの富豪此に住み、領主といふものなく、自治の制度を有するから人人は之をレプブリカと呼んだ。人人は此に特權と自由とを受用し、他の城市の常に戰禍に惱まさるる時にここはいつも平穩である。これ等の理由からして、我我の師父たちは此地に僧院を置かむことを望んでゐた。然し佛僧の反對とか又莫大なる費用を要するといふやうな關係からその事が延引してゐるのであつた。ここの貴人のうちにパウロ・ボンダイ殿（Bondaindono）と云ふがあり、トボシガクの君である。その人の助に由つて、僧院を建てることが出來た。そして今日は更に市の中心部に移轉する機會を得たのであつた。人人は更にここに、寺院の外に更に一の學林を作らむといふ希望を有してゐるのである。

さて巡察使ワリニャニ師はこれ等の場所を歷訪し、そして到るところにメサを讀み、莊嚴の式を行つた。各地に於て約五百人の人人が洗禮を受けたのである。

ワリニヤニ師都を辭す、又土佐の國司一條兼定の事

近畿地方の巡回を了へてワリニャニ師は再び安土に戻つた。その時に信長が繪屏風を贈つたこと
また花火を擧げ、城に提灯を飾つて盛な祭典を擧げて師に誇示したことなどは前記の「安土城記」
に之を記した。

さて巡察使は信長に別を告げ、いよいよ安土の地を去つた。オルガンチノ師が之を堺まで見送つた。師が再び高山右近の高槻を過ぎてそこで聖體の祝日の儀式を行つたといふのは、この途であつたのか、或はそれは安土を留守にして近畿を見廻つてゐる間のことであつたのか分りかねる。師は陽暦三月末に初めて高槻に來り、四月の始めに京都の馬揃を觀、それから安土で二箇月暮し、近畿を巡察して再び安土に歸り更にそこを辭して、再び高槻を通つて聖屍祭を施行したといふと少しく勘定が合はない。或は始め安土に止まつたが滿二箇月ではなかつたかも知れぬ。尤も是れは聖屍祭を六月上旬と見ての計算である。

そは兎も角も、高槻では再び盛なる行列をなし、寺院の前に穹窿門を造り、街道に灯を燃した。また多數の人人に晩餐を供した。皆右近の負擔する所である。

かくして、多分盛夏の候であつたらう、ワリニャニ師は堺から乘船して歸途に就いた。コエリヨ

師は、その航路一島の外側を廻るに在りといふが、蓋し是れ四國を指すのであらう、長門の海賊を避けて此道を取つたのである。との島には故あつて二箇月も滯留したと云ふ。

當時土佐の國司はドン・パウロといはれ、基督教信教であつた。

（註。「日本西教史」はドン・パウロを以て長曾我部元親に當て、予も初稿に於て之に倣つたが、是れは大なる誤であつた。フロイシユ師の「日本歴史」の第四百六十九頁千五百七十五年の章に次の記がある。曰く「土佐の王イチヂョウ殿は豐後王の甥が、卽ちその一姉の子である。その時なほ生存せし時、一たびそいい、まず豐後の國を訪れた。その時にまた臼杵の寺院にゆき、人人の勸めで神の掟の事なども聽聞した。それでつひに自分も信者になりパドレ João Baptista から洗禮を受けた云々。」又松崎實氏が昭和二年十一月發行の「太陽」に發表した小説「伴天連學善、兼定轉寶記」の註に「南路志言」の記事を引用してある。今茲に再びそれを抄しよう。曰く「從一位關白左大臣一條教房朝臣、文明二年庚寅兵庫に下給ひ、ついで御子房家朝臣は土佐に下行、幡多郡一萬六千貫の領主として中村に御在城を構へ、土佐國司と被成給ふ。これ土佐一條の祖也。長元物語に、土佐七郡大名七人にして御所一人と申すはこの一條殿也。以後四代相承ぎ、兼定卿に至る。此の君形儀荒き人にして、土居宗算と云ふ一の臣を手討にせらる。夫より家中の上下とも堪へも難えき有様に成行きたり。依て幡多の衆は、兼定卿を退け、若君虎丸様をば元親へ遣し守立給候樣に可仕と內談合を極め、家中連判を以て頓に卿を下田の本船へ放遣り、豐後へ遣捨申す。大友殿は兼定卿舅にて有け

れども、落人と成給ふ故か、許容無く、ついで豫州に落ちさせ給ひたるを、入江兵部太夫謀つて之を討奉る。虎丸君元服して内政公と云ひ、安土の南蠻學校に居給ひけるを、元親後日の報復を恐れ、大津城に迎へて女を配し奉る。御在城二年、教道の聞え有とて頓に女を奪ひて豫州に追奉る。時に内政公御年二十、一男一女あり、男を後に親政公と申しけるが、此二兒被抱給ひ、元親方同者に被護、日々の事をも缺きて憂き歳月を送らせ給ひけるに、程なく毒害に遭て果給ひける。遺兒二人は京都一條殿に引取られ給ふ。」追記。」

兼定がその臣 Josagami 氏の叛くところとなり、難を避けて岳父大友氏に寄り、千五百七十六年に（シャルルヴァ師）洗禮を受けた。後また土佐に迎られて、岳父より分たれたる手勢を具して土佐に歸り、ヨサガミ氏をハタの地に追ひ、自らは平和の基督教徒として、宣教師の爲めに寺院、僧院を建ててやつたりしたが、此事がまた異宗の反感を買つて、再び謀叛が起り、元親は戰場に傷き、遂に豫の長島に蹋踏せざるを得ないに至つた。

コエリヨ師に據るに、ワリニヤニ師はその長島から十八里距つた處まで來たので、人を遣はして兼定を招いたといふ。兼定は直に一船を艤して之に赴き二時間師と物語つた。（シャルルヴァ師はワリニヤニ師自ら兼定の居處に到つたと記してゐる。） 師は兼定の容貌に驚いたが、兼定は既に世

間殺を離脫して少數の同僚とそこに滿足して暮してゐたのである。そして異宗者の間に唯獨りの基督教徒であり、その教化を及ぼすことの出來ないのを悲しんだ。そして己が信仰の告白をなして、基督教徒として生き、基督教徒として死なむことを誓ひ、師にして若し彼が死を豐後にて聞かば、寺院に到つて彼の爲めに祈らむことを求めた。是れ彼が、四年前に受けた重傷の爲めにその身の甚だ衰へてゐるのを知つたからである。父義定は、その一子十三歳なる「即ち虎丸なり」を送り之を伴つて有馬のセミナリオに入れむことを委託した。

ワリニヤニ氏豐後に歸る。並にその地方に於ける寺院、僧房及び學校の事

初秋或は中秋のことであらう。ワリニヤニ師は義定の一子を連れて豐後に歸著した。宗麟はなほ豐後の政事を見てゐた。ワリニヤニ師のその間の詳しい消息を書いたものをわたくしはまだ手にしない。座右の諸書はただ師が日本の青年を歐羅巴に送る企圖の實行に努力したことを記するのみである。唯シャルルヴワ師はその頃豐後に於て「日向の女王その息女と息女の二子と共に寺院の傍に

入つた」と記してある。日向の女王とは簡にしばしば述べた、伊東義益の夫人を指すのである。その女(むすめ)、その孫に就いて今之を考ふる便りがない。

此機會に於てコエリョ師に據つて九州の寺院を一言しよう。

アレッサンドロ・ワリニャニ師が日本に於ける基督教敎師の僧院、駐在所を巡視して九州に歸るや、新に副管區長(ヴィチェ・プロヴィンシアル)を選び（コエリョ師はそれを以て已たりとは記さず）その下に、褒れてより人人の希望せしが如く、日本の管轄を一敎區となすの制度を定めた。而して支那の僧院等も亦この監督下に在るのである。然しマラッカ、マルッコの如きは地の理に從ひ、前の如く印度のプローシンシアルに直屬するのである。

日本に於ける基督敎區は三部に分たれ、その各に於てそれぞれの僧院、駐在所を有す。これ等は今や十四で、コレジオ一、修道院一、セミナリオ二の他に十箇所の僧院があるのである。師父、法兄弟の數は七十人である。目下の企圖としては都にコレジオを建てることで、印度より有徳の人の來るのを待つてゐる。今年修道院に入れるは二十人の修道士であり、うち八人は葡萄牙人、他は皆日本人である。二つのセミナリオには五十人の青年がゐる。多くは貴族の子弟で、そのうちには日



第三十圖

向の君の一子及一孫、有馬侯の血緣のものもある。

九州には始め十の僧院を置く筈であつたが師父法兄弟の數に乏しい故之を五つに縮めた。各地にパドレ、イルマンの七人と三四人の日本人の通辯が住んでゐた。

就中修道院は臼杵に在る。是れは昨年（千五百八十一年？）の聖誕祭の夜始めて開院の儀式を擧げたものである。そこには日本人六人と葡萄牙人六人とが學問にいそしんでゐる。巡察使は京より歸つて後たゞ二箇月この地に滯留し、その基礎を確立する爲めに努め、屢〻葡萄牙語の演說を以て人人を鼓舞し、フロイシュ師之を日本語に傳へた。今や修道師を併せ協會の人人二十人がここに住んでゐる。是等のものの建築費及び維持費はドン・フランシスコ凡て之を支辨した。而も戰禍の間にも拘らず、わざわざ都から工人を呼んで技術の精巧



印度ゴアの景

を期したのである。

巡察使が都より歸ると、そこの壁を完成せしめ、莊嚴なる儀式を以て祭典を行ひ、府内その他より師父法兄弟その他の人人來つてその行列に參加した。

教師の不足からノセン（コエリョ師のNochû）の駐在所は之を撤廢し、一パトレ、一イルマンは之を他に遣はした。

府内のコレジオには師父、法兄弟十三人が在つて主として拉丁語及び日本語習得に勉勵して居つた。殊に日本語に關しては辭書、問答書を作成した。（もしこの事が確實であるとすると多分後に千五百九十年代に出版せられたる諸書の稿本であつたであらう。）

又有馬のセミナリオに於ては巡察使が都から歸つて來たといふので、そこの學生たちが歡迎會を催した。巡察使はその

有様を見て大に喜び、巡察使行の困難も之を以て十分償はれると云つた。青年たちはセミナリオの廣間に自作の詩を張つたり、又その室を色紙の細工で装つたり、禮拜堂や聖壇などをば畫圖畫像を以て飾つたりした。それ等の事の間によく秩序調和が保たれてゐた。そしてその日は有馬の貴人の縦覧を許したので、人人は競つてここに來つて嘆賞した。また有馬侯も自らその儀式に臨席し、他の人人と共に巡察使を歡迎し且つセミナリオの裝飾を賞めた。

大村に於てはその僧院に二人の師父と二人の法兄弟があり、その附近の五つの寺院は皆その監督のもとにある。巡察使が都から歸つて大村純忠を尋ねると、純忠は熱心に之を迎へ、その聖誕祭をば大村に過されんことを懇望した。而して師の司會のもとに甚だ莊嚴に施行せられたのであつた。巡察使はその他日向、薩摩等の教徒を見まつてゐる。その事は、當時平戸、天草等に於ける基督教の事情と共に、今は本稿の餘りに長くなるのを恐れて、之を詳記しない。

ワリニヤニ師日本を去る事。並に四青年留學生の事

ワリニヤニ師が京都から歸つて急いで決定しようと欲したのは、兼ねてから計畫して置いた通り、

日本の青年を歐羅巴に遣はさうといふことである。今の言葉の留學といふのが師の意圖を現はすのに最も適當な言葉であると思はれる。ここにまた同時代の聞見者なるコェリョ師の言に據るに、「もし日本の基督教王たちが日本より羅馬の法王廳に使者を派遣し、その名に於て基督の代表者に歸依の情を現はしたら法王の喜は如何に大であらうとワリニャニ師は考へられたのである。

「之と共にエスパニャの基督教王を訪ね、歐羅巴の重要なる諸地を巡歷し、諸の好事を聞見し、殊に歐洲諸侯の高貴、羅馬諸寺院の莊嚴を拜したならば、自らの見識をも高め、又再び故國に歸つてのちは、この國の人人に其親しく目睹せることを傳へ教ふることを得るであらう。この國に於てわれわれの事業の阻礙せられるのは、人人がわれわれ基督教國民を以て劣弱のものにして生命肉體の糧を得むが爲めにこの國に來りて新教を說くと誤信するが故である。われ等が本國に於ける凡ての利福を棄て、而も海山重阻の國に來るものなることを信ずるもの殆ど無きが故である。

「また一方は巡察使はかうも考へられた。若し是等の日本使者が歐羅巴に赴いて、その性情、その悟性、その典雅、其怜悧を示さば、法王及び諸ろの基督教諸侯も之を尊敬するに至るべく、因つて基督教の爲めに、この國民に對して多大の援助を與ふるを厭はざるべく、ここに葡萄園を建設す

る我我の事業も隆盛を來すであらう。是を以て巡察使は諸王と談合して、四人の高貴なる基督敎青年を歐羅巴に送ることに決したのである。

「その一人はドン・マンシオ Dom Moncio であつた。（嘗に屢〻記した日向の伊東義益の妹の長子である。その名は確かには分らない）。是れ日向の王の孫であつて、豐後王の血族である。（シヤルルブワは豐後の王の甥と記す。またその歲は十五歲であると言つてゐる）。この者が豐後王の書翰を携へ、王の名に於て法王の足に跪くことになつた。も一人はドン・ミゲル Dom Miguel（千々石淸左衞門なりと云ふ）である。是れ有馬王の甥で大村侯ドン・バルトロメオの孫である。この青年はこの兩侯の書翰を携へて法王の許に到るのである。その他に二人の貴族青年が之に隨ふ。一人はドン・ジユリオ Dom Julio（中浦某）、一人はドン・マルチニヨ（Dom Martinho）（原某）である」

ここに少しく註解を加へる必要がある。大友宗麟は始め安土のセミナリオに居るドン・ジエロニモ伊東義勝を正使として遣はす積であつた。然し近く印度に出帆する船に間に合はなかつたからドン・マンシオを以て之に代へたのである。これ等の青年たちは殆ど同じ年配であつた。而してワリ

ニヤニ師自身これ等青年を歐羅巴に導く筈であつた。この事その後故あつて實現せられたかつた。そしてなほ師傅として選ばれたヂエゴ・デ・メスキタ師がジョルジ・ロヨラといふ日本の法兄弟を隨へ一行の同伴者となつたのである。

又宗麟の方から言へば、その常に念頭に懸くるところはフランシスコ・シヤギエルに對する仰慕である。彼等青年を遣はすのも一にはその蹤跡を祈る念からであつた。そして初めは特に大船を艤裝して之を送る積りであつたが、ワリニヤニ師の意見として之を廢め、便船を藉りることにした師が法王、西班牙王及びコンパニヤの長老たるアクワギワ師に宛てた書翰にもこれ等青年に對して過分の榮譽を與ふるのは不必要である。寧ろ多大の愛情を示すべきであると記されてあるといふことである。

「大村侯は、始めドン・ミゲルの母のその子の旅行を悲しみ、之を許さざるべきを憂慮した。ドン・ジユリアノの母に於ても同様であつた。これ等女性を說伏するのに人人は大に骨を折つたのである。それで母たちも、もはや之を阻まず、却つて快くこの擧に同意するやうになつた。

「これ等の使者たちは孰れも皆甚だ壯かつたが、然し法王も歐羅巴の諸侯も彼等の智德を見ば之

を愛し之を重じ、而して我我の協會のこの國に於てなしたる貴き事業の效果を認むるに至らむことと
は疑ない所である。」とコエリュはその書簡に記してゐる。

かくして千五百八十二年二月二十日（天正十年正月二十日）一行は葡國商人イニヤシオ・デ・リマの船に乘つて長崎を出帆し、歐羅巴に向つて出發した。

後記

ワリニヤニ師は一行を伴ひゴアまで來たが、自分は羅馬よりの命令で印度に止ることになつた。

さて一行のそれから先きの旅行に關しては、われわれは既に明治十一年出版の太政官本局の翻譯本「日本西教史」の第七章に由つてかなり詳しく之を悉ることが出來る。この章は主として千五百八十五年出版の Guido Gualtieri の日本使節記に據つたものらしい。然し或部分に密であり、或箇所には粗であることを免れない。それでわたくしはその原書の翻譯を企て、已にその一部を雜誌「思想」に掲載した。

またワリニヤニがその後印度に在つても、日本青年の教育の事業を忘れずに、その爲めに自らも



第三十一圖　支那マカオの景

拉丁文の書を作り、又人をして之を作らしめたことなどは、日本文化史上の甚だ興味ある一節である。然しこの事に就いては先年わたくしは「ぽるつがる記」（「思想」大正十四年二月號）其他の小稿のうちに記したことがあるから、今重ねてここに述べたい。

即ちこの稿は日本青年使節研究の準備である。後日好機會があつたら更に未だ見ざる原本に就き或は日本側の史書を參考して、誤謬をなほし、遺漏を埋めむと欲するものである。（昭和二年八月廿一日夜脱稿。同年十一月發行の「改造」に掲載。）

千五百九十年マカオに於て印刷せられたる一書に關する解題

José* Toribio Medina 著

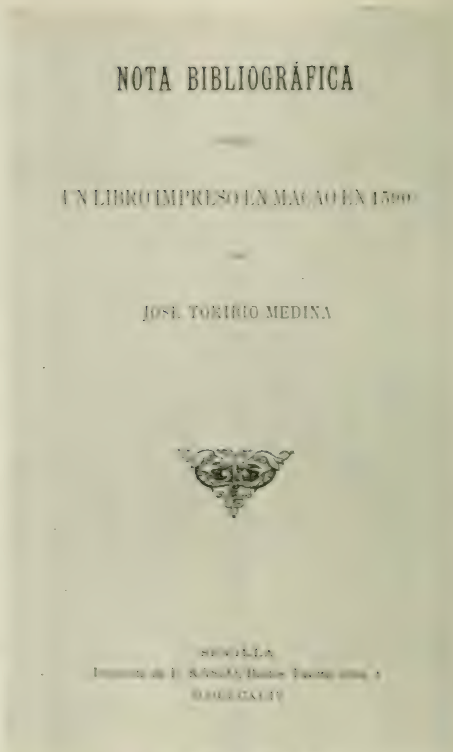
装飾圖

セビリヤ市 Bustos Tavera 一番地

E. Rasco 印刷所

千八百九十四年發行

* 本論文は東京外國語學校助教授笠井鎭夫君の翻譯に係る。ここに掲載を許されたることに對して感謝の意を表す。（本書の著者）



NOTA BIBLIOGRÁFICA

UN LIBRO IMPRESO EN MACAO EN 1590

JOSÉ TORIBIO MEDINA

SEVILLA

第三十二圖

（扉には表紙と全然同一の文句あり。譯者）

（見返しには「百部刊行」とあり。譯者）

千五百九十年マカオに於て印刷せられたる一書に關する解題

書籍解題

本書に關する記述。——本書を引用せる諸著者。緒言の拔萃。——葡文 Itinerario（道中記）存在するか？——書籍解題者の意見。——或る人人の陥りたる誤謬の原因と思はるるもの。——イノセンシオ・ダ・シルヴァ Inocencio da Silva の所信。——新論證。——教父サンデ Sande のカスチリヤ語、（譯者註。現代の標準西班牙語）飜譯に對する意見。——拉丁語譯、即ちアンベレス（譯者註。白耳義首都）に於ける飜刻。——De Missione Legatorvm（日本使節行記）はマカオに於て印刷せられたる最初の書籍なるか？——サンデ師略傳。

1590

De Missione / Legatorvm Iaponen / sium ad Romanam curiam, rebusq; in / Europa, ac toto itinere animaduersis / dialogvs / ex ephemeride ipsorvm Legatorvm col- / lectvs, & in sermonem latinvm versvs / ab Eduardo de Sande Sacerdote Societatis Iesv. /（木板畫：王座に於ける三位一體，その下に多數の殉教者.）In Macaensi portu Sinici regni in domo / Societatis Iesv cum facultate / Ordinarij, & Superiorum. / Anno 1590.

四折判、横十糎、縦十五糎。——原。見返しにドン・レオナルド・デ・サァ D. Leonardo de Saa 僧正の告令文あり、その中に會（コンパニイーア）（譯者註。Companhia de Jesus 即ち耶蘇會）の巡察師（ビシタドオル）アレッサンドロ・ワリニャーノ師 Alejandro Valignano（譯者註。伊太利生れ Alessandro Valignano、以後ワリニャーノ師と記す）及び同師の指定する教父（パアドレ）たちに對し、その書の査閲を任ずる旨見ゆ。その日附、千五百八十九年九月のノナス（譯者註ノナスは月によりて違ひあれども九月ならば五日に當る）、マカオにて、とあり。又上記ワリニャーノ師、ヤコボ・アントゥネス師 Jacobo Antunez 及びニコラス・デ・アヰラ師 Nicolas de Avila 署名の發行允許の一文あり。その日附は同年十月のノナスの四（譯者註。十月のノナスは七日、故にノナスの四といへば十日に當る）とあり。——三枚に亙る緒言あり、但し枚數を示す數字を附せず。——四百十二頁。強靱なる支那紙を用ひ圓形文字（レトラ・ロマーナ）にて印刷す。一頁三十五行詰。見出語（レクラモ）と、Aa-Z; Aa-Zz なる記號を用ふ。一葉四つ折り、但し Kk の記號を有する第一番目の一葉のみは二つ切りにしたるものを更に各〻二つ折りとして重ね。

緒言として次のものあり。——日本セミナリオの生徒達に宛てたるワリニャーノ師のプロロゴ、但し日附無し。——耶蘇會の總主監（プレポシト・ヘネラル）クラウディオ・アクアビバ師 P. Claudio Aquaviva に宛てたる著者の獻本辭、但し日附無し。——索引。

複寫（ファクシミル）參照。

セビリヤ大學圖書館。

リスボン國立圖書館。

トレ・ドゥ・トンボの記錄保存所 (Archivo da Torre do Tombo)。

P. Luis de Guzmán. *Hist. de las Mis., etc., Alcala*, 1601, fol., II, p. 660.

P. Pedro Ribadeneira, *Illustrium Scriptorum Religionis Societatis Iesu catalogus*, *Antuerpiae*, 1608. 8.°, pág. 51.

León Pinelo, *Epit. de la Bib. Or. y Occ.*, *Madrid*, 1629, 4.°, pág. 39.

Nicolá Antonio, *Bibl. Hispana.* 1672, fol., t. I. pág. 261.

Sothwel, *Bibl. Script. Societ Iesu*, *Roma*, 1676, fol., pág. 186.

Pinelo–Barcia, *Epit. de la Bibl. Or.*, *Madrid*, 1737, fol., I. c. 173.

Nicolás Antonio, *Bibl. Hisp. nova*, *Madrid*, 1783, I. c. 173.

Barbosa Machado, *Bibl. Lusit.*, *Lisboa.* 1701. fol., t. I. pág. 744.

Ternaux-Compans, *Bibl. Asiatique.*

Salgado, *Bibl. Lusit. escolhida.*

Figanière, *Bibl hist. num.* 1641.

Silva, *Dicc. bibliog. portugez*, *Lisboa*, 1858. 4.º, t. II. pág. 216.

Brunet, *Manuel du Libraire*, t. V. (Paris, 1864), col. 120.

Backer, *Bibliog. des Ecrivains de la Comp. de Jesus*, t. III, pág. 686.

従來此の書に關して文獻學上惹き起されたる幾多の疑問を完全に理解し、且つ之を最も容易に解決せんが爲めには、どうしても此の書物の緒言のうち、大いに興味ありと考へらるる箇所をところどころ拔萃し、之をカスチリヤ語に譯出する必要があると信ずる。

サア僧正は前に引用した彼の告令文の中で斯う言つてゐる「余は教父エドゥアルド・デ・サンデ Eduardo de Sande のものせる、De missione Legatorum Iaponensium ad Romanam Curiam rebusque in Europa ac toto itinere animadversis といふ書の吟閲を教父ワリニャーノに託す、而して其書前記諸教父に由つて差支へなしと認められたる後は、之を印刷に附するための允許

を與ふるもの也。」

又査閲者たちの是認の文に曰く、「我等はエドゥアルド・デ・サンデ師のものせる書、De missione Legatorum Iaponensium, etc. を讀みて之を調査せるに、カトリック信仰と善良なる習慣とに反するが如き點は毫も其中に見出さざりき。」と。

此等の文書が千五百八十九年九月及び十月の日附をもつて居ることを記憶して置く必要がある。

サンデ師の獻本辭の中から、我我は次の部分を譯出する。

「東洋諸邦巡察使アレハンドロ・バリニャノ師の仰せに、此等貴族少年より次ぎ次ぎに送られし書簡の中に語られたる事は總べて之を拉丁語に譯していと細かに書き留め、拉丁語を學ぶ日本學生たちをして此の使節行を誌せる書に依りて拉丁語の課程を修めしむべし、且つ又、拉丁語より之を日本語に飜譯したる後、初學者をして讀ましむべし、尙ほ拉丁語及び日本語にて印刷するときには甚だ必要にして且つ有益なる事柄を誌せる一種の寶鑑、同時に又興味ある一種の要覽の如き體裁を與へしむべし、とありたり。

而して我、此の仕事を實行することを引受けしかば、同師は、連續文にて書きしるせる史話の形

式を取らんには、興味乏しく見ゆる處あるが故に、之を避けて對話の形式を用ひ、使節マンシオとミゲル、その同行者マルティノとフリアン、レオンとリノ、かの有馬王の兄弟をしてその中に於て語らしむる趣向となすべしと仰せられたり。

是に於て我は尊師の命に從ひ、此等の眞摯たる青年たちによりて賢くも觀察せられたる樣々の事柄をば、先づ順序を整へたる後、之を拉丁語に飜譯することを企てたり。されど、我、多年の昔より拉丁語の研究を止めて、御命令に依り、拉丁語よりも更に重大なる研究、卽ち支那文字の研究を始め、今尙ほ之に沒頭し居る次第なれば、我が拉丁文の出來榮果して如何なるものにや……」

ワリニャノ師も亦た修業所(セミナリオ)の生徒に對して次のやうに言つてゐる。

「今や此書幸にして世に出づ。御身等の祖國より、羅馬法王廷近く派遣せられたる使節たちの絶えず具さに書き誌したる總べての事柄は擧げて本書の中に收められたり。本書はエドゥアルド・デ・サンデ師に依つて拉丁語に飜譯せられ、且つ使節たち自身の物せる記事に原き、使節たち、その同行者たち及びその親戚たちの間に取り交さるる對話の體にて作られたるものなり。右エドゥアルド・デ・サンデ師は我が耶蘇會所屬の僧にして、今日は支那にあれども、以前拉丁語研究に身を委ねら

れ、我より彼に依囑せる我が會の爲事には非常なる努力を以つて勵み給ひし御方なり……」

以上その書のところどころを書き抜いたから、今から、我我がさきに諷示して置いた書誌的疑問の取り調べにかからう。此の書はサンデ師の勞作の原稿であるか、それとも此の書以前に日本使節の道中記が葡萄牙語で出板されたことがあるか？ 我我が現に知つて居る所の、即ち今日迄に手に取ることの出來た著書の中、サンデの著書目錄に就いて語つてゐる書物の著者たちの年代的順序に從つて調べて行くことにする。

先づ第一に、耶蘇會所屬の教父（パドレ）ルイス・デ・グスマン（此人は東印度、支那王國及び日本王國に於ける同教團の傳道史の著者である）は千六百一年アルカラ（譯者註。西班牙に在り）に於て發行された彼の浩翰なる「傳道史」の中、前に指示して置いた箇所に於て次のやうに言つてゐる。

「此等の貴紳たちの身分に就いて今日迄言はれ來りしことの眞實なるは、先づ第一に、千五百九十年マカオ港に於て印刷せられたる、De Missione Legatorum Iaponensium（日本使節行記）と題する書をもつて之を證明し得べし。此書は耶蘇會に屬する教父エドゥアルド・デ・サンデの作りたるものなれども、彼自らその序（プロロゴ）に於て言へる如く、日本生れの法兄弟（エルマノ）たちや、修業所の學生た

ちをして、日本に於て讀ましむる目的をもつて作られしもの也。」云云。

耶蘇會の最初の書籍解題者たる教父ペドロ・デ・リバデネイラ P. Pedro de Ribadeneira 師も亦た千六百八年に印刷せられたる彼の書、「目錄」(Catálogo) の中に Itinerarium「道中記」を擧げてゐる。但しそれの發行日附を指定してゐない。

此の二人の著者はその同じ教團（耶蘇會のこと――譯者）に屬し、且つ種種の事件起るや直ちに記述して居るのだから、若し葡文「道中記」が存在してゐたなら、それを記述することを忘れる筈のない地位にあつたにも拘らず、サンデの著として葡萄牙語で發行せられた何等の勞作に關しても一言も述べる所がなかつたのである。

アントニオ・デ・レオン・ピネロ Antonio de León Pinelo はその書に關しては、得業士エレラ・マルドナド Herrera Maldonado が千六百二十年マドリイで印刷せられた彼の著 Epítome Historial de la China（支那歷史概略）の中に引用した範圍以上の知識を有たなかつた。得業士エレラ・マルドナドはその著、「支那歷史概略」の中に引用した文の中で、前記「道中記」の發行時として千五百十四年といふ馬鹿げた日附を指定してゐるが、其の書籍解題者（アントニオ・デ・ピ

ネロ――譯者）がそれを信じなかつたのは言ふ迄もないことで、一年は間違つてゐるに相違なし」と彼は斷言してゐる。

ニコラス・アントニオは千六百七十二年羅馬に於て發行された彼の著書 Bibliotheca Hispana（西班牙書目）に於て單に Itinerario de los Príncipes á Europa el año MDLXXXIV（千五百八十四年遣歐諸侯道中記）を引用してゐるのみである。

斯くの如く、その書の表題を葡萄牙語で擧げずして西班牙語で擧げてゐること、及び拉丁語板を擧げてゐないことを注意すべしである。彼があの引用をなすためにアレガンベ Alegambe 及びレオン・ピネロ León Pinelo の所說を參考に供した際、拉丁板を見なかつたに相違ない。だから若し西班牙語でその書の表題が引用されたといふ事實が一つの板の存在を證明するに足るものとすれば、我我はサンデのその書は都合三種あるものと考へねばならぬだらう、即ち第一は葡文にて書かれたるものであり、第二はカスチリヤ語にて書かれたものである。以上二つはどちらも四折判で、千五百八十九年マカオで發行されたものとなつてゐる。第三は拉丁語にて書かれ、これ亦た同じ都市（マカオ）發行であるが、前の二書よりも一年遲れて出板されたものとなつてゐる。

セビリヤ生れの彼の書籍解題者のその著書の第二版には、羅馬版に於てサンデ師に寄せられてゐる言葉がその儘書き寫されてあるのみだから、書誌的研究に對して何等新しい要素を供給しない。

ナタニエル・ソトウェル師 P. Nataniel Sothwel ——彼の Biblioteca に於て自て自ら署名する所に從へば、ソトゥエロ Sotuelo ——は誰も知る通り、彼の先任者たる耶蘇會會員リバデネイラ Ribadeneira 及びアレガンベ Alegambe の書籍解題を增補したのであるが、サンデの勞作を述べるに際しては Itinerario（道中記）を引用するに止めてゐる。そしてその發行日附を常に千五百八十九年なりとし、印刷の場所をばマカオなりとしてゐる。

レオン・ピネロ Léon Pinelo の Biblioteca Oriental y Occidental（東西書目）の第二版に於て、彼の續續者なるゴンサレス・デ・バルシア González de Barcia は Viage de Mancio Ito（伊東マンシオの旅行）及び其他の日本使節の記に就いて語り、「此書は葡萄牙語にて對話の形式にて書かれて居り、四折判として千五百八十九年マカオにて印刷せられた」と言つてゐる。

バルボザ・マシャドゥ Barbosa Machado は彼の大葡萄牙書誌の中にニコラウス・アントニオ及びピネロ－バルシア Pinelo-Barcia の所說をそのまま寫して、ただ葡文「道中記」のみを擧げて

ゐる。

テルノオーコンパン Ternaux-Compans は彼の「亞細亞書目」の中に、發行日附を千五百九十年と指定してゐるといふ違ひはあるけれども、矢張り葡文板を引用してゐる。

兩パッケル師はその板の表題として、Itinerario de quatro Principes Japonezes mandados a Santidade de Gregorio XIII e de todo quanto lhe sucedeo na Jornada até se restituhirem as suas terras, Macào, no Collegio de Companhia, 1590, en 4°（グレゴリオ第十三世台下のもとに派遣せられたる日本四大名の行程記、及び彼等がその故郷に歸着する迄の旅中起りたる總べての出來事の記。四折判、千五百九十年、マカオ、（耶蘇　會學林發行。）を擧げてゐる。

此等の書籍解題者はブリュネ Brunet の表題をそのまま寫して拉丁板を引用してゐる。此のブリュネは表題をかなり精確に與へて居り、又同時にその拉丁板が一部六磅六志で賣られたと報告してゐる。

要するに、その書に關する記述に於て現はれた最初の疑點は、發行時に關しては、緒言に記されてゐる千五百八十九年といふ日附から起つたものに相違ないと思はれる。恐らくその人が見た本に

扉がついてゐなかつたのだらうと信ぜられる、そこでその書の眞の印刷時日が出板允許文と是認文とに記されてゐる日附と同じだらうと想像したのであらう。

然しながら、書籍解題者たちがそれぞれの斷定を論議もせず調査も經ずして、樣樣の引用をあれやこれやと唯だ漫然と採用して行つたことから起つた所の、斯くの如き大混亂の間から、今や一つの明確なる批判が書籍解題界に既に現はれて來たのを我我は認めるのである。

實際、イノセンシオ・ダ・シルワ Inocencio da Silva は現に我我が懷いてゐる疑問の解決に取りかかり、その書に關してバルボザ・マシャドゥに依つてなされた記述からのみ出發して前文「道中記」を引用し、次のやうに述べてゐる。

「バルボザが此の著者サンデの葡萄牙語板に就いて我我に報告してゐるところは上に記述した通りである。そして彼の「書目（ビブリオテカ）」からアカデミアの僞の「目錄（カタログ）」や、テルノオーコンパンの「亞細亞書目」や、アウグスト・サルガド・J. Augusto Salgado の「ルシタニヤ書目選」(Bibliotheca Lusitana Escolhida) などに寫されたらしいのである。然しながら此等の書籍解題者の內、その書を見たといふ者は一人も居ないし、又或る場所に於てその書が一冊でも嘗て現はれたといふ記錄

はないのである。此の同じ事件に關し、前記教父によつて拉丁語で書かれた別の著作が實際に存在してゐる。フィガニエール氏 Figanière の思慮に富める觀察（彼の Bibl. Hist. núm. 1641 の中にあり）に從へば、此の拉丁板がバルボザをして誤りを犯さしめた、卽ちバルボザはその拉丁板の表題をその儘拉丁語で寫すべきを葡萄牙語で寫したのだといふのである。そして此の說をなすものはフィガニエール氏より以前にも既にあつた。

しかし茲に注意して置かればならぬのは、アントニオ・デ・モライス・シルワ Antonio de Moraes Silva が彼の著 Diccionario bibliografico portuguez（葡萄牙書誌辭典）の編纂のために用ゐた「引用書」を列擧した箇所に、Itinerario de Duarte de Sande をも擧げてゐるといふ一事である。けれども、彼はその「引用書目」の中に於て、それが西班牙語で書かれたことは誰でも知つてゐる數種の書籍をも葡萄牙語本として擧げてゐるが如き、數多の杜撰な點があるから、彼の證明は此の場合に於ては甚だ根據薄弱となるのである。それ故、若し彼の「葡萄牙書誌辭典」の本文の中に於て、彼が常に言葉の證明のときになすやうに、Itinerario（道中記）の中から引かれた實例を出して證明するならば、その時こそ始めて信用してよいであらう。そこで私は此の點を調べて見た

が斯る引用文は唯だの一つも見出さなかつた。とはいふものの、かかる引用文が無いと言ひ切るわけではない、何故なら私が見落したかも知れないからである。兎に角、ド・アルテ・デ・サンデの著作が葡萄牙語で印刷せられたといふことに就いては未だ疑が殘つてゐる、否、私はそれが決して葡萄牙語で印刷されなかつたといふことを殆んど確信してゐるのである。」

此の葡萄牙生れの書籍解題者の此の正鵠を得た觀察は幾つかの他の觀察に依つて鞏固にされ得ると我我は信じてゐる。

だが、一つの書物の非存在の如き否定的事實を取扱ふに當つては、それを證明するのは、今我我がその立場にある否定者の義務ではなく、常に、肯定者の義務であることを認めよう。

扨我我が書き寫して置いた千五百九十年の拉丁板の緒言には千五百八十九年九月及び十月の日附が附してあることは前に述べた通りだが、その緒言の中にはサンデの拉丁語飜譯のことが記されてゐるのみで、葡萄牙語飜譯のことは少しも記されてゐないことがわかる。若し葡萄牙語飜譯が、それを引用する人人の斷言する如く千五百八十九年に、若しくはテルノオーコンパンの說の如くその翌年に、出板されたとするならば、あの緒言の中に何等かの記述がなされたであらうといふことは

明かである。

尚ほその上、印刷材料が非常に豐富であつた筈はないし、且つ又そんな浩瀚な書を二冊迄も斯る短い期間に作り出し得る多數の職工が耶蘇會附屬の印刷所に居つた筈がないことを我我は想像しなければならない。書籍解題者たちが努めてサンデの業績に歸せようとする所の葡萄牙語飜譯に就いて著者サンデ自身は何等言及してゐないのである。彼の拉丁語本が印刷せられた時、彼はマカオに居なかつたといふ事實さへある。のみならず彼は當時支那語研究に餘念なかつた。尚ほ又、その葡萄牙語飜譯は目的を持つてゐなければならなかつた筈である、何故なら、緒言に於て記されてゐる所に依れば、拉丁語本は作業所（セミナリヨ）の學生たちの用に供するといふ必要があつたからこそ大なる努力を費して作られたのだから。それ故にヴリニャーノ師は生徒たちに對して、此の書物は價値の乏しい、單なる娯樂的のものではなく、非常に有用且有益なものである旨を述べてゐる。即ち、"numera haec non levia aut ludicra, imo valde utilia ac frugifera." と言つてゐるのである。然らば葡萄牙語飜譯は何の目的によつてなされ、又如何にして實行されたであらうか？

疑を容れる餘地の無いことは、マカオの敎父たちが日本の少年たちに對し日本語の讀方敎科書と

して用ひんが爲に、その拉丁語譯を更に日本語に飜譯せんとの熱烈なる意圖を有してゐたといふ一事である。サンデ師は總主監アクアビバ Aquaviva にその旨を確言してゐるし、又彼の拉丁語の對話の終りに、對話者の一人の言として次の句が見出されるのである。

"Reliquum est, ut cum reverendo Patre Visitatore de colloquiis his inter nos habitis, elegante sermone japonico scribendis & excudendis agamus."

彼等が特に記述してゐるところに據れば、彼等は印刷を實行せんがためのワリニャノ師自身が歐羅巴から必要なる印刷活字を持ち來らんことを期待してゐたのであるが、このことは遂に實現せられなかつたらしく、斯くしてあの事業は目論見の儘頓挫したことと思はれる。

これに引き換へて、サンデの書から、ドクトル・ブヘダ・デ・レイバ doctor Bujeda de Leiva に依つてカスチリヤ語に飜譯されたと言はれてゐる。此の飜譯は千五百九十一年西班牙サラゴサ市に於て八折判で實際に印刷された。そしてその表題は次の通りであつた。

Historia del Reyno del Iapon y descripción de aquella tierra y de algunas costumbres cerimonias, y regimiento de aquell Reyno: Con la relación de la venida de los embaxa-

dores del Iapon á Roma, para dar la obediencia al Summo Pontífice, y todos los recebimientos que los Príncipes Christianos les hizieron por donde passaron, y de las cartas y presentes que les dieron á su Magestad el Rey nuestro Señor, y á los demás Príncipes. Con la muerte de Gregorio XIII. y electión de Sixto V. y las cartas que dió su Santidad para los Reyes de aquel Reino, hasta la partida de Lisboa, y más seys cartas de la China y del Iapón, y de la llegada los señores Iapones á Goa.

（日本王國の歴史、彼の國の地誌、習慣、儀式、及び彼の王國の制度に關する記述。附記、大上法王に對し恭順の意を表するため日本より羅馬に派遣せられたる使節の來訪、彼等の通過せし地に於て基督教諸侯の彼等の爲になしたる總べての歡迎、並びに彼等が我が國王陛下、その他の諸侯に與へたる書翰と贈物に關する敍說。グレゴリオ第十三世の薨去とシクスト第五世の選擧の記事。彼等のリスボン出發迄に台下が彼の王國の諸王に與へたる書翰、更に支那と日本より送られたる、また此等日本諸侯のゴア到着に關する六通の書翰。）

此の書はサンデの著書を前に置き、その記事に基いて作られた著作ではあるが、飜譯と稱し得べ

きものではなく、抄譯と稱すべきものである。

ルイス・デ・グスマン師の著作 Historia de las Misiones, etc.（傳道史）の第九卷、卽ち、法王グレゴリオ第十三世台下に恭順の意を表するため日本諸侯のなしたる羅馬への旅行、及び歐羅巴より印度迄の歸還」を報告してゐる卷に收められてゐる敍說も上掲の書と同種類のもので、これ亦た恐らくサンデの著作から拔萃された記事なのである。グスマン師はサンデの著作を熟知してゐたのだから。

また、恐らく葡文「道中記」が存在するとの假定から出たのだらうが、此の葡文「道中記」がマルティン・ヌンシオ Martin Nuncio に依つて拉丁語に飜譯せられ、アントワアプに於て千五百九十三年、十二折判として出板せられたと言はれてゐる（バッケル著書第二卷六百八十六頁）が、旣に我我が研究したところに依れば、此のアントワアプ板なるものは飜譯ではなくて、マカオに於て印刷せられた原本の飜刻なることと明らかである。

羅馬への日本使節派遣は多數の冊子を續出せしめたが、それらの中の一部はバッケルによつてその著 Bibliographie の第三卷三百三十四頁に列擧せられてゐる。然し乍ら、アントワアプに於け

る翻刻に依つて、現今と同樣、當時歐羅巴に於て恐らく最もよく知られてゐた此のサンデの書の出現は、二種の Tratados（論文）の刊行を促した。此の二つの Tratados は多分ドミニク派の僧侶達の手になつたものらしく、グスマン師が彼の前掲の書（第二卷六百四十五頁）に於て我我に報告してゐるところに據れば、その中に於て「彼等に耶蘇會が行つたこととして幾つかの事柄を擧げてある。彼等の擧げてゐることが若しあの二つの Tratados の中に書かれてゐる如く確かで眞實であるならば私の此の『傳道史』の中の或る數卷の中に書かれてゐることの多くは何等根據のない虛僞のこととなるであらう。さういふ讒謗を敢てしてゐる」さうである。

　それらの Tratados の内容を我我は知らない、また耶蘇會員たるその歷史家はそれらの Tratados の著者の名前を擧げることを欲しなかつたが、此等の書は實際耶蘇會に對する極めて猛烈な非難を含んでゐたのである。そしてそれらの非難は主として、あの有名な日本使節の羅馬への旅行と、ヴリニャノ師が日本へ持つて行つた所の法王教令、即ち他の教團の僧や傳道師を排除し、耶蘇會員のみが日本へ渡り得る旨を定めた法王教令とから出たものであつた。

　日本使節に關する非難の中唯だ一つだけを玆に引用すれば、

「先年彼等（耶蘇會を指す――譯者）は法王に恭順の意を表するため、日本諸侯（プリンシペ）の稱號をもつて四人の少年を送つた。そして法王は彼等に士（カバリエロ）の位を授け且つ諸侯（プリンシペ）となしたと耶蘇會は言つた。斯うして法王のセレニシモ・プリンシペ（serenisimo principe）なる稱號を得て彼等を連れ歸つた。然るに彼等は今耶蘇會の唯だの法兄弟（マヽ）である。若し彼等が教會に入れられたかつたなら、織物を乞うて歩いてゐるだらう」などと、それらの著者たちは實際に言つてゐたのである。

さうして斯かる非難に對して反駁するためにグスマン師の著作の最後の部分が當てられてゐる。

我我が指示した方面に於て提出せられてゐる難問題は、我我の判斷に據れば既に解決せられたから、我我は疑ひも無くより重要なる別の難問を提出しなければならない。即ち、我我が今問題にしてゐる De Missione Legatorum Iaponensium ad Romanam Curiam はマカオに於て印刷せられた最初の書であるか否か？　がそれである。

ブリュネは此の書を擧げるに際して明白に然る旨を斷言し、「極めて珍しき書にして、マカオに於て印刷せられたる最初のものなり。」と言つてゐる。しかし我我はサンデの書そのものを用ひてその反證を擧げることが出來ると信ずる。

既に我我が知つてゐる如く、その書の緒言の中に、ワリニャノがマカオの修業所の學生たちにその書を提供するに際して與へた序言が見出されるのである。その中で彼は生徒たちに斯う言つてゐる。

「優れたる青年たちよ、茲に、日本使節の派遣及びその行程に於て彼等に起りし事柄を誌せる此の對話書を刊行するは、是れ御身等に對する我が愛情の第二度目の表明なり。何故となれば、我は歐羅巴に於て拉丁語にて作られ且つ發行せられたる「問答書」もて、何事よりも先きに、我が力の及ぶ限り、御身たちをして我等の基督信仰の主要なる眞理を會得せしめんと努めたりき。次には、規則もて教義を說明し、實例もてそれを確證し、以つてかの道德を御身たちの心の中に沁み込ましむるために使用すべき別の一書を出板せしめんと努めたりしが、耶蘇會の僧ジョアンネ・ボニファシオ Joanne Bonifacio の著にして當地に於て印刷せられたる De honesta puerorum institutione（正しき兒童教育に就きて）なる書もて既にその意を遂げたりと信ずればなり。」

それ故に該書こそマカオに於て印刷せられた最初の書であらう。從つてサンデの書 De Missione Legatorum は第二位を占めるものであらう。

それ等の著書の印刷せられた活字は歐羅巴製にして且つワリニャノ師自身に依つて歐羅巴から持ち行かれたものであることは容易に信じ得るところである。此ワリニャノ師に就いては、既に我我の知つてゐる如く、サンデは彼の對話書の中に現はれてゐる對話者の一人の口を使つて、飜譯のために必要なる日本活字をも彼が持ち來るであらうと表明してゐるのである。

マカオに於て出板された[原註1)]ボニファシオ師のその論說書の一冊すら我我は一度も見たことがない。しかしその印刷に用ひられた活字は疑ひもなく De Missione Legatorum に用ひられたものと同じで、ワリニャノ師に依つて持ち行かれたものだといふ我我の假定が若し確であるならば、その書は千五百八十九年の日附を持つてゐるべきである。ワリニャノは實際に千五百八十八年八月、羅馬への彼の旅行からマカオに歸着したのである（グスマンの「傳道史」第二卷四百十九頁）。さうして彼がサンデの著作に與へた序文は日附をもつてゐないけれども、彼の面前で記された出板允許の文に彼が署名したのが千五百八十九年十月であるから、これより以前であるべきである。且つ又、印刷に附せられ、その書の印刷完成迄には或る期間が經過したに相違ないから、マカオに於て印刷せられた最初の書は、既に我我が表明した如く、千五百八十九年の前半に現はれたに相違ない。

此書籍解題を終ろに當り、此書誌を書くに至らしめた著者サンデの傳記的材料を少しく擧げる義務だけが我我に殘つてゐる。

彼ドゥアルテ（又はエドゥアルド）・デ・サンデ Duarte o Eduardo de Sande は葡萄牙のギマラエンシュ Guimaraens に於て生れた。千五百六十二年六月、リスボンのサン・ロクの僧院(カザ・プロフェサ)に於て耶蘇會に入會した。其後コインブラの學林(コレジオ)に於て修辭學の教授となり、千五百七十八年東洋方面へ行つた。それから、ゴアに於けるバサイン Bassaim の學林の學頭(レイトール)、支那傳道の長老(スペリォール)、マカオの學林の學頭と順次に歷任し、千六百年六月二十二日マカオで逝去した。

原註1　此書「正しき兒童教育に就いて」の初板千五百七十五年板の外に、かのマカオ板に先んじて、千五百七十六年、八折判で出板せられたマティアス・ガスト Mathias Gast のサラマンカ板と、千五百八十八年八折判で出板せられたフェリペ・フンタ Felipe Junta のブルゴス板とを私は知つてゐる。何れもニコラス・アントニオの引用するところである。

追記、本解題は予のマドリィの一書肆に於て得るところである。之に由つて予はリスボアに於てボニファシオ師の CHRISTIANI / PVERI INSTITVTIO / ADOLESCENTIAEQVE / perfugium を捜索することが出來た。それは千五百八十八年のマカオ板である。畏友笠井君が予の爲めに此興味ある文獻を欽譯せられたことを深謝する。（えすぱにや・ぽつるがる記著者識）

十六世紀末澳門及び日本に於ける活字出版

（ポルツガル圖書館文書館年報第一卷五號、一九一五年十月掲載）

ジョルダン・デ・フレイタス (Jurdão de Freitas) 原著

（岡本良知　譯註）

ここに論ずるところは決して珍らしい事ではない。然し私の此記述を讀む人人は、私の永い間根氣よく捜集し、それから推論して得た諸知見が何等かの新しい興味を提供してゐるのを看過しはしないだらう。その要項を綴つてここに一文となし、「ポルツガル圖書館、文書館年報 Anais das Bibliotecas e Arquivos de Portugal」に載せることにしたのである。

澳門には千五百八十八年に、日本には千五百九十一年に、はじめて印刷術が傳來せられたが、

是の事が耶蘇會（コンパニヤ・デ・ジェズス）に負ふところである、言ひ換へれば、同會の東方諸國巡察使であつた同會士の伊太利亞人パードレ・アレサンドロ・ワリニャーニ（Alessandro Valignano または Alexandre Valignano）のお蔭であるといふことはこの種の研究に精通する人人にとつては、決して耳新しいものではない。然しかのパードレ・ワリニャーニが未だ印度のプロウィンシアルであつた當時、千五百八十七年十二月一日の日附でゴアから、エーウォラ（Évora）の大司教ドン・テオトニオ（D. Teotónio）——此人はブラガンサ第四世公の子にあたり、且つその時既に亡き人であつた印度副王ドン・コンスタンチーノ・デ・ブラガンサ（D. Constantino de Bragança）の弟である——に宛てた書簡のうちから次の文を拔萃しよう。これこそ洵に人の知らぬ珍文書である。

「外道邪教の手に成れる書籍は之を日本に輸入することと叶はずとの猊下の御意見は、まことに日本にとり最も適法の儀と存じ上げ奉り候。若し之に反するが如きことの行はれ候はばゆゆしき誤にこそ候へ。かかればひとり斯の如き書の輸入を禁ぜられ候のみならず、更に進みて苟もセミナリオの學童たらむほどの者は、聖淨正信たる書籍以外は一切他書について學ぶなからんことを命ぜられ候ひき。聖淨正信の書によりてのみ學童をして正しくラテン語を修め、之に伴ひてクリスト教教訓及

び其德操をも注ぎ入れ、悪業を嫌はしめ、且つは哲學神學をも學ばしめ候を得べく候。右は專ら正鵠を得たる教義を授け又公教會の信心に基づきたるものにてあるべく、且つ長き年月の修練に由り各種の謬論、邪見の毫もこれなきものたるべく候。かかれば、日本人のうちに流布せしめ候には、假令聖淨なる書なりとも選擇を要することに可有之候。而して屢ミヨーロッパの教界に於て惹き起さるるが如き肆言妄說の擯斥を旨となすが如きものを必要とすることに候。右に就き拙僧儀今般印刷機具を註文致し、日本に適し且つその國を淨むるの書を印刷致し候はん爲め、拙僧自ら之を携へ日本に赴くべき所存に有之候。」

(Cartas de Japão ——日本よりの書簡集——一五九八年刊、第二卷、二三三葉)

また、同じパードレ・ワリニヤーニは、千五百八十三年既に耶蘇會總長クラウディオ・アカウィワ(Claudio Aquaviva)に宛てて次の如く書いてゐる。

「而してこれらの教舍は皆幼童の學校を有することと相成るべく、尙幼童には日本語にて讀み書きを教へ申し候。然し日本文字は數限りなく、その印字の製造はまことに至難に候まま、我等の歐

洲活字にて日本語をも印刷致すやうに相成るべく、隨つて他年右歐洲活字日本書を讀ましめんがため、努めてラテン文字に由る讀み書きをも授くることに御座候。またこれらの敎會は何れも我等會者の外五人乃至六人の同行を所屬せらるべく候。右は、旣に報告も有之候如く、パードレに隨伴し、敎會內にては日本の風習に從ひ、他の職員を助くるものに御座候。」

(«Sumario de las cosas q̃ pertenecen a la Provincio de Japon, y al govierno della, compuesto por el P.e Alexandre Valignano Visitador de las Indias de Oriente dirigido a N. P.e Gen.al Claudio Aquaviva»)——日本敎區並にその管領に屬する諸事概要、耶蘇會總長クラウディオ・アカヴィーヴァに宛てたる東印度巡察使パードレ・アレサンドロ・ワリニャーノの信書——Biblioteca da Ajuda' 49—IV—56, f.l. 80).

「日本には未だ異端の作者の聞ゆるもの全く無之候へば、それ等の作者並にその著書を輸入候ことは好ましきことには御座無く且つ有害にも有之候。然れば之に代りて我等が敎に適ふべき書籍並に作者を輸入候ことまことに好都合に存じ候。而して作りてよき書は之を日本にて印刷致すべきものに御座候。右の次第に候間、我等會士は日本にて他事を敎へ候こと絕對に禁止候事然るべく候」

澳門港にヨーロッパの印刷術が渡來した年としての千五百八十八年は、ドン・ホセ・トリビオ・メディーナ氏（D. José Toribio Medina）の「千五百九十年澳門に於て印刷せられたる一書に關する解題」（Nota bibliografica sobre un libro impreso en Macao en 1590. Sevilla, MDCCCXCIV）が世に出た後、乃至は千八百九十三年二月二十五日、博學不屈なる研究者ソーザ・ヴィテルボ博士（Dr. Sousa Viterbo）がリスボンの「商業新聞」（Jornal de Commercio）一一七六八號紙上に「ポルツガルに於ける耶蘇會文學――その二、東洋の印刷術」（Litteratura jesuitica em Portugal—II—A Imprensa no Oriente）といふ標題を掲げて公にした後は、少くとも讀者の熟知する年でなくてはならない。

このエスパニヤの學者ドン・ホセ・トリビオ・メディーナ氏は、ドアルテ・デ・サンデ（Duarte de Sande）の著書「日本使節行紀」（De Missione Legatorum）に附してあるパードレ・ワリニヤニの序文（プロローグ）の一片を論據として、澳門でこの書が發刊せられた千五百九十年より前に、別に耶蘇會者

パードレ・ジョアン・ボニファッシオ（Joào Bonifacio）の著になる「正しき兒童教育」（De honesta puerorum institutione）の題の一書が印刷せられてゐなければならないと云ふ推論と演繹的結論とを公にしたが、それより以前に既にソーザ・ヴィテルボ博士は、後の書がアジュダ圖書館に今日までに知られた唯一の孤本として存してゐることを述べるところがあつた。それはアジュダ圖書館の私の前任者ロドリーゴ・ヴィセンテ・デ・アルメイダ（Rodrigo Vicente de Almeida）が曾て博士に教へたのである。

該書の標題を完全に示すと、（Christiani / pveri Institvtio, / adolescentiaeque / perfugium : auctore Ioanne Bonifacio / Societatis Iesv.（キリスト教徒たる兒童の學堂並に青年の安住地耶蘇會士ジョアン・ボニファッシオ著す。）と云ふのである。

此書は縱一一二ミリメートル、橫七六ミリメートル（大部分の頁に於て）で、見出字及び帖番號（A-Z, Aa-Kk）を捺した紙八枚づつの三十三帖から出來てゐる。扉の次に四葉（七頁）の序葉がある。その次には前面に葉數番號（第二葉より）を刻した二五二葉が續き、その後は葉數番號のない索引と正誤表の六葉、最後に空白の二葉が來る。全部で二六四葉、五二八頁になる。序葉の

第一は全面日本のセミナリオの生徒に對する(Ad alvmnos Seminariorvm Iaponensium)告論であり、他の三葉には信仰深き讀者へ(pro lectori)の著者の序文が書かれてゐる。この序葉第四の裏面からこの書の本文が書き始められるといふ工合になつてゐる。

セミナリオの生徒への告論はパードレ・アレサンドロ・ワリニヤーニの文である。この書の外諸書を印刷するのに活字を買ひ求めたことの參考文獻としてこの告論から次の語を轉載して見る。

「日本諸島に於て我が教の書の容易に印刻せられんがため少なからざる苦心を以てラテン文字原型活字を獲ることを得、且つ御身等の方に旅程を進めつつ支那の名高き澳門港を過りし折、そこばくの暇を得たれば、御身等のためにもと若干書を讀み了へたるが故に、……要務のうちにあれども、尚御身等の利益を思ふ念の罷むることなきままに、ここにかの讀み了へし書どもにわが心に適ふ如くやや加減、更訂を加へ版に上すなり。」

他に存するを聞かぬこの稀書は、劈頭の裝紙の第一葉と扉紙の上部とに見える手書及びアジュダ圖書館のこの書を載せた目錄が證する所では、耶蘇會が曾てサン・ローケ(S. Roque)に建ててゐたコレジオの文庫の所有するものであつた。この書に就ては、其後再びソーザ・ヴィテルボ博士が

千九百四年の「ポルツガル古文書志」(Archivo Historico Portuguez) 第二卷四五一頁に其考證を發表してゐる。

この書の組みと刷りとに用ひられた活字はかの De Missione Legatorum を印刷したものと同じである。扉紙のウィニェットも亦同じい。

澳門と日本とで書籍を印刷するためパードレ・ワリニャーニがヨーロパで活字を買ひ求めたといふことの別な參考資料は、ドアルテ・デ・サンデの著書の四一頁と最終頁とに見られる。そこから對話者二人の間に交へられてゐる問答を披萃しよう。

「レオ――餘すところは、かれてわが尊視するパードレ・ウィジタドールと我等との交へたる談話を、さながらに優雅なる日本語の話體に書きしるし印刷たさんことなり。リヌス――我等が役に立てんとてヨーロッパより買ひ求められし活字をば、ここに携へ來られしなれば、パードレのいそしまるるところを我等もよくよく世話し申し上ぐべし。」

日本諸島には、少くとも千五百九十一年に印刷機が輸入せられてゐたことは、アメリカ人著述家

（註。原著のまゝ）アーネスト・マッソン・サトー氏（Ernest Mason Satow）が千八百八十八年その小冊子 The Jesuit mission press in Japan, 1591—1610（日本耶蘇會刊行書志）中に既に記するところであつた。この事に關聯して、私が千九百五年に「日本語學關係ポルツガル書志並にフェルナン・メンデス・ピント傳補遺――文法書、語彙、辭典――附ア・エル・ゴンサルウェス・ウィアナ氏の言語學的一觀察」と題して公にした論文を今さらここに顧る必要がある。

コイムブラの學士院（Institutio）報の數號に亙つて揭載せられ、後八十三頁の一冊に纏めて拔刷とした私の此論文中に、日本の印刷術の事として次の如く書いておいた。

「天草にあつた印刷機とコレジオとは、宗門迫害に因つて、それより少し前に（千五百九十二年）加津佐に移されて居つた。パードレ・ワリニャーニは、千五百九十年にこの加津佐へ、ヨーロッパで求めた印刷機とその用具一切とを澳門から携へて行つたのである。マッソン・サトー氏は千五百九十一年加津佐出版になる二冊物の一書に就て詳しく書き記してゐる。サトー氏はこの書の扉紙をボドレイ圖書館（オックスフォード大學）所藏の一本からファクシミールとして複寫してゐる。」

かうして私は、この Sanctos / no go sagveo no / vchinvqigaqi / quan dai ichi.（サントク

スの御作業のうち抜書」といふ書のことを述べてゐたのである。その數行が印刷せられてある同じ頁に確に次の貴い文獻の標題をも書き止めておいた。今に至つて私がその考究を更に一歩を進めることになつたのはこれである。

Nippon no Iesvs / no Companhia no Superior / yori Christan ni sôô no cotouari uo tagaino / mondo no gotoqu xidai uo vacachi tamŏ / Doctrina…Amacusa, 1592.（天草ローマ字本どちりな・きりしたん）

この書については前頁から十二頁遡つたところに私が次の附註を加へて特に仄めかしておいた。「他日稿を更めて私はアーネスト・マッソン・サトー氏が日本最初の活字版書について記したところを敷衍し、日本に於ける印刷術の傳來を述べようと欲するものである。」實際このアメリカの蒐集家は——前述の「サンクトスの御作業のうち抜書」と千五百九十二年天草で刷られた書 Nifon no / cotoba to / Historia……（口譯平家物語）及び Fides no Doxi / to xite P. F. Luis de Grana-/da……（信心錄）を解說してゐるところに徵すれば、この「どちりな・きりしたん」が同じ千五百九十二年に印刷せられてゐたことを少しも知つてゐないと見える。

適からぬ以前に、Largo de Carmo に建つてゐた Liceu Central de Lisboa の文庫で幸にも私はこの書を親しく手にしたことがあつた。これは、私の親友で、當時既に國立圖書館文書館監察官をしてゐたガブリエール・ペレイラ氏（Gabriel Pereira）が、私が上掲の「日本語學關係ポルツガル書志並にフェルナン・メンデス・ピント傳補遺」著述材料蒐集に苦勞をしてゐたとき、この學校の文庫に藏する由を注意して與れたものである。當時の Liedu de Carmo の校長はクレメンテ・ピント博士（Dr. Clemente Pinto）であつて、その後千九百七年に至つて海軍武官、海軍兵學校教授のアベル・フォントーラ・ダ・コスタ氏（Abel Fontoura de Costa）が之を襲うた。

數日前のこと、Liceu de Passos Manuel へ十六世紀の諸希覯書と併せてこの現存唯一の貴重本を更めて調べに行かうと思ひ、學校當局の許可を請ひ得た所が、この文庫では、（千九百十年の終りから今の校舍に移つて來たのであるが）未だ Largo de Carmo の舊校舍にあつた時に鼬鼠どもがこの書をすつかり破毀してしまつたと斷言した。

この貴い一本は不都合にも確にこの學校の文庫には所藏せられてゐない。かうきまつたとき、私はエスパニヤの一書肆で――多分千九百十二年の九月後のことであつた――「稀覯以上にして重要

この上なき珍書の文獻」「今日まで何人も知るところなかりし現存唯一の本」と記した一本の行方に考へ及んだ。私が得た消息によると、この一本はその後數箇月たらずして五五〇〇ペセタで一アメリカ人が之を買つた筈である。

私は、このエスパニヤの古書肆 Madrid, calle de Mendizábal, no. 73 にあるピンデル（P. Vindel）の發行にかかる「精選古書籍目錄」（Catalogo de libros escogidos）——その印刷は千九百十三年正月完結——一七九—八二頁）をここに參照する。

この古書肆の販賣廣告に出てゐたかの一本中の裝紙の一葉から當時の手書で字體で書かれてある語を讀みとることが出來、而もその語は私が十年乃至十一年前に Liceu de Carmo で親しく手にした一本の裝紙の一葉から謄しとつておいたものと確に同じであると思へば、この搜索に向つてゐる私の偏執は、いよいよ注意をそこへ集中させたのである。その語といふのは、「日本の語のドットリーナ・クリスチアーナ。これを日本のウィジタドールよりエーヴォラの大司教ドン・テオトニオ・デ・ブラカンサ殿に贈る。」(Doctrina xpianna en lingua / Japonica p'a el sr. Don / Theotonio de Bragança Arce / bispo de Euora / Mandada o P.e visitador de Japão.) である。

假にこのドクトリーナ・クリスチアーナが、一は文庫に、他は古書肆にあつて、同一物でないと想像したのではあまり不思議な符合でなくてはならぬ。九年乃至十年以前にその一本に就て、私は「Liceu de Carmo 所藏の千五百九十二年日本刊書」といふ暗示的な題をつけて一論文を書き始めようとしたことがあつた。その原稿の始め二枚は今も尚私の手許に殘つてゐる。若しその論文が書き上げられ公表せられてゐたならば、恐らくはかの Liceu de Carmo の雌鼠どもも、その趣旨を誰かから聞いたりして、この貴重な文獻をすつかり噛つてしまふやうな亂暴を罷めはしなかつたらうと、今に至つて想ひ返すのである。

十年乃至十一年前卽ち千九百四年か千九百五年に Liceu de Carmo で書き留めておいた諸要點擧げる前に述べねばならぬことがある。私がそれを記した際はちよつと見ておいただけで、その時に主眼と思はれた諸點を僅かに書きつけておくにとゞめ、それを敷衍し、完記するのは他日に讓るつもりでゐたのであるが、此事は當時から既に私の氣にかけてゐたところであつた。不幸にも今は再び手にとつて私の記錄を敷衍し完記するの機會はもう來ないであらう。この私の覺書の要點は、前述の古書肆の主人がその目錄に記載してゐるところと全く一致してゐるのである。

続いては次に私の書き留めた要點を擧げよう。扉紙、上部に書名があつて、その直ぐ下には救世主の姿が描き出されてある。左の手には、十字架を掲ぐる地球を持つた全身立像である。救世主の基底には EGO SVM. VIA. ET VERITAS. ET VITA（我は道なり、眞なり、命なり）を一行に刻せられてある。その下は IESVS NO COMPANHIA NO COLLE-/ gio Amacusa ni voite Superiores no von yuru-/ xi no cŏnori core no fanto nasu mono na / ri. Toqini go xuxxe no NENQI. 1592. で終つて居る。

扉紙の裏には何も印刷してない。その次は Doctrina / nojo と題して項目を書いた葉數番號のない一葉であり、本文は一一四頁から成つて居る。

第一頁は、葉數番號なく、Daiichi doc / trina の章名が見える。以下の頁の肩には葉裏 Doctrina、葉表 Christan と刷り込んである。

内容は對話體になつてゐるが、私は Xixŏ と Dexi とが話を交へてゐるもののやうに思ふ。

章は、一、五、一四、二三、二六、三〇、五〇、六〇、六八、七四、九六、九七、九八、九九、一〇〇の各頁毎に改まつてゐる。九六と九八頁とには章が三つあり、九七頁と一〇〇頁とには二つ

ある。一〇一頁から一〇六頁までは Moromoro / no Christan xirubeqi giŏ / giŏ no coto. といふ題の章である。この頁に至つて、（モトノマヽ） Datai 及び Daisan の二つの名稱を私は記しておいた。一〇七頁から一一四頁までは Doctrina no / vchi cotobani ye te no / yauaraque. といふ章である。

帖番號（A-E）と見出字とを附けた八帖綴の版本である。扉紙の裏には當時の手書文字で、「キリストに於て崇め尊まるべき神父エーウォラの大司教にして同地カルトシヤ修道院創立者ドン・テオトニオ・ア・ブラガンサの贈りたるカルトシヤ修道院所屬、天への階梯なる書籍」といふ語が見られる。但しかの裝紙の一葉で讀んだ前掲の獻呈辭の字體とは異つた手で書かれてゐる。

この本は假綴である。これを保裝するに、數枚の紙を貼り合せた覆のやうなもの一つと――その表にはイタリック活字で日本語を印刷してある――紙八枚づつの空白な二帖とを以てしてゐる。

私が見た後（千九百十年？）この本はフォンツウラ・ダ・コスタ氏が命じて製本更へをさせた筈である。が、それから後はどうなつたか……すつかり姿をかくしてしまつたわけである。

この本を保裝してあつたかの貼り合せ紙幾枚かのうちの上部にある私の讀んだいろいろの語句によつて見るに、この貼り合せた數枚はアーネスト・マッソン・サトー氏が述べてゐる一五九一年版

の一サンクトスの御作業のうち拔書」に附いてゐたものと同じだと斷定せられる。これらの表紙は製本師のため廢物にせられ、こんな保裝に利用せられたのであつた。

ビィンデル書肆の目錄の記載に從へば、この一千五百九十二年天草版どちりな・きりしたんの頁は、縱一五糎、横九・五糎である。

かの時、即ち千九百四年または千九百五年に、Liceu de Carmo の文庫にあつて私は別に他の二種の貴重本を手にした。その一つは――それは羊皮紙の覆ひで、黒インキで二、三號と記されてあつた――紙魚に喰はれてゐてその手書の告辭を滿足に謄しとる事が出來なかつた。然し辛うじて次の文字を記し止めておいた。

「支那の書……撰ばる……種種の材料より優良高雅なるものを……用ふるところ小形なるは支那文字、大形たるは日本文字。日本文字は支那にても使はる。この書は兩樣の文字を學ばしめんがため印刷せられたり。云々」

澤山の蟲穴の缺部を補塡してみると、この終の方はかう讀まれるに違ひない。

「キリストに於て崇め尊まるべき神父、エーウォラの大司教にして同地カルトシャ修道院創立者、贈遺者ドン・テオトニオ・ア・ブラガンサの贈りたるカルトシャ修道院所屬、天への階梯なる書籍」

これは、右の書をエーウォラのカルトシャ修道院（Cartuxa de Evora）が所有してゐたもので、同院へはその創立者であつた人が、前記のどちりな・きりしたんと同じやうに、提供したものだといふ意味である。

不幸にも、右の書も亦今は Liceu の文庫には存してゐない。私がこの文庫で手にしたのはもう十年前のことになる。同文庫係員のいふところでは、これも蠧鼠が破毀したとのことである。

この書と同時に見た他の二書は、澳門若しくは日本で出版されたものではない。然し同じカルトシャ修道院の所有であつたもので、始め日本のウィジタドールから同修道院の創立者に獻ぜられ、それを創立者がまた同院に贈遺したのである。この二書は、Catechismus / Christianae / fidei, in qvo veritas / nostrae religionis ostenditur, & sectae / Japonensis confutantur, editus à /

Patre Alexandro Valignano / Societatis Iesv.（キリスト教信仰要理。これ我等の宗教の眞實を示し、日本の宗門を論駁するなり。耶蘇會者パードレ・アレサンドロ・ワリニヤーノの刊行にかかる。）の一部を成してゐるものである。——前に記したドアルテ・デ・サンデの De Missione Legatorum の序文(プロローグ)の始め八行を參照せられること。——兩書ともに千五百八十六年リスボン發行、即ち一の七十六葉からなるものはアントニオ・リベイロ、(António Ribeiro) 印刷所から、他の二十四葉かな成るものはマヌエル・デ・リーラ（Manuel de Lira）印刷所から出てゐる。この二書は幸にも消失しなかつた。分割したまま一冊に綴ぢ合され、黑塗りの革を張つた板紙と留金とで時代の製本を施されて、かの Liceu の文庫に存續してゐるのである。

惟ふに、この千五百八十年代リスボン印刷の二稀書と、同じやうにエーヴォラのカルトシヤ修道院舊所屬の歷史家ジョアン・デ・バーロス（João de Barros）の著に係る古寫本一冊とを、時の政府がリスボン國立圖書館に收納しようとして相當に骨を折つたものであらう。このことについては、千九百十二年、當時 Liceu の校長であつたアルベルト・フェレイラ・ウィダール博士（Dr. Alberto Ferreira Vidal）が同校「一九一〇—一一學年」(Ano letivo de 1910—1911) の報告書

(Relatorio)の中に詳しく述べてゐたのである。

*

以上論述した如く、耶蘇會士は始め加津佐に、其後天草に建てゝゐたコレジオで、ヨーロッパから輸入した活字を用ひ、初期の書籍を印刷したのであつた。

加津佐は、千五百九十八年出版の「日本よりの書簡集」(Cartas do Japão)一三一葉裏面に見える所によれば、「口ノ津から半レグア、有馬からは三レグア半のところである。」

千五百九十二年十月耶蘇會總長に宛てたパードレ・ルイス・フロエス(Luis Froes)の「千五百九十一年—九十二年報」(Carta annua de 1591—1592)中に、「現今は天草に在るコレジオ並に有馬と内に存する他の駐在所の事」といふ一項がある。

(De Rebvs Iaponicis, Indicis, et Pervanis Epistolae Recentiores—日本、印度、ペルーに就きての最近の書簡集—João Hay 編纂千六百五年アンエルス版 Biblioteca da Ajuda 所藏 29—11—41、一四六—一六五頁)

また Apparatos para a Historia Ecclesiastica do Bispado do Japam.（日本司教管區教會史摘要）——Biblioteca da Ajuda 所藏古寫本（49—IV—57）——にも亦二個所のコレジオについて十分な記述がある。特に二五、四九裏、八二裏、一七二裏葉及びそれ以下の紙面に見える。

千五百九十二年といふ年に關しては、ずつと前に引用した「日本教區並にその管領に關する諸事概要追補」（Addiciones al Sumario）から左に轉載するところはかなり興味が深い。

「その地にありたる五駐在所（レジデンシャ）の外にはコレジオも天草に移りたりき。當時耶蘇會士五十人以上を有するコレジオは他にあらざりしなり。五十人のうち四十人は教課に勵む學生たり。この天草諸島は隔離の地にして、且つドン・アウグスチン（小西行長）の所領たれば、この島の慣はしなることも敢て知らんとするなく、我等の好むところ氣儘に行ひ得るなり。蓋し天草には異教の者は何人も入るを許さざるが故に、日本國内地のいづくよりも自由たるパードレ並にエルマノ等の居住地たるなり。印刷機はここに移され、我が歐洲文字の書、日本文字の書共に新に出版せらるるに至れり。いま、この新刊書は等しく我等教會士にも教徒にも少からぬ賴りとなり、益を與ふるなり。加ふるに、この日本國にて甚だ畏怖せらるる天下の主關白殿の意に逆らひ、コレジオをもセミナリオをも

解散せず、勸行を罷むるなく、且つ日に日に新たなる書籍を印行し、新教徒を殖し行きて、かくも多くの者皆屋舍を建てて滯留すること、日本人にはいとど不可思議なるばかりにて驚愕小ならずと見えたり。」

(Adicion segunda del cap.º 4º, y quinto Sumario —— 日本教區長にその管領に屬する諸事概要、第四、五章追補第二。第一二二葉)

「善事のみを擇び學ばしめんが爲めに、學生等のために特殊の書を作るの要あるべしと同章に述べたるところは、最も肝要なることなり。またラテン語云々の件は、その一部既に實現し、餘すところも完成困難ならざるべし。如何となれば、我等當地に印刷所を有するを以て、既に數種のラテン語書を印行したることなり。即ち、『日本公教問答』、『日本使節行紀』を附錄したるパードレ・ボニファシオの『正しき幼童教育』一冊、『チチェーロ演舌文集』一冊、其他同種のものなり。皆手輕く印刷せられしところ、また將來も左樣なるべし。」

(Addicion 7ª acerca del 12…cap. del Sumario ——日本教區長にその管領屬する諸事概要、第十二

千五百九十四年には Emmanuelis Alvari e Societate Iesv de Institutione Grammatica libri tres（耶蘇會著マノエル・アルヷーレスのラテン文典提要、三卷）が、千五百九十五年には Dictionarivm latino Lvsitanicvm, ac Japonicvm.（ラテン、ポルトガル、日本語對譯辭典）が印刷せられた。サトー氏の書の第四番及び第五番に掲げられてゐるものである。

パードレ・ルイス・フロエスは、新に天草のコレジオの仕事に沒頭してゐた頃、長崎から發した千五百九十六年十二月十三日付の書簡にかういつてゐる。

「本年はセミナリオにて用ふるため、ラテン文にて『トリエント宗教會議公教問答』を出版致し候。また、ラテン文及び日本文の『コンテントウース・ムンディー』と稱する小冊子も出で申候。ラテン文のパードレ・イグナシオ・ロヨラの默想錄も同斷に候。」

（De Rabvs Iaponicis…第四〇三頁）

Contemptus mundi はサトー氏が（第六番）千五百九十六年の出版として述べてゐる唯一の書である。

翌千五百九十八年には耶蘇會のプロヴィンシアルは天草のコレジオを破壞した。そして會者は皆長崎へ行つてゐる。

（P.e Crasset 著 D. Maria Antonia de S. Boaventura e Menezes 譯 Historia da Igreja de Japão「日本西教史——一七五五年リスボン刊」第一一九頁）

サトー氏がその「書志」の第七番以下に掲げてゐる五種の書は、千五百九十八年（第七、八、九番）、千五百九十九年（第十番 Gvia do pecador「ぎや・ど・ぺかどる」）、千六百年（第十一番 Doctrina christam「長崎版どちりな・きりしたん」）である。

これらの書の出た時期に關しては、「日本の港長崎にて千六百年八月二十五日、クリストに於て甚だ崇敬せらるべきパードレに宛て書かれたる書簡」から次の文を拔萃して來なければならない。

「當地にはセミナリオの他にも別の印刷所有之候。耶蘇會は此事敎徒にとりて甚だ有用なりと考

直致し候ひしかば、少からぬ資金を右の印刷所に投じ申し候。既に一度ならずも報知申上候ことなれど、右印刷所よりは、日毎に新しき書を世に出し居り候。諸種の書籍の印刷に供へんがため、日本語活字を豐富に鑄造し、イタリック及びラテンの鋭鈍兩樣の印字をも製造致し候。Frey Luiz de Granada の Guia de Pecadores は美事なる日本語に飜譯せられ、日本活字にて印刷致し候その他にも、セミナリオ學生用の書籍多く消失致し候まま學生用にとて、且つ又は古典文學書も不足勝ちに候間、我等の歐洲文字にてサン・ベルナールの『默想錄』附き『內部の書』一冊、ウィルジリウスの書一冊を印刷致し候。尚また『全新精書』、日本語にての『どちりな・きりしたん』も同じく刷り上り候。後の者はこの度新に日本文字、歐洲文字兩樣のものを刊行いたせし次第に候。」

「日本文字印刷機は本年前記印刷所より取り離し、長崎の有力者の一人なる教徒に委託致し候。右には日本耶蘇會長老の指定する書の外は何書といへども之を印刷すべからずとの條件を加へられ候。かかれば我等の許には歐洲文字の機械の存するのみにて、責務も以前よりは輕く、出費も少く相成候。右印刷機相預り候教徒は、己が費用にてその機を使用し、印刷仕る可き書よりの利益も己に收むることに有之候。その後既に右機に由り日本活字にてキリスト教徒たるの訓育に要すべきこ

と總てを書き著したる一書の刊行も行はれ候。向後も教徒のため有利なる書は引き續き出版相成可く候。」

(Bibli teca da Ajuda 古寫本 49—IV—59 一〇葉)

この千六百年の事に就ては、今一つの他の年報から次の文が參考せられる。

「當地にはまたラテン活字、日本活字の印刷機有之候。こは當地の教徒にとりて甚だ好き機會にして且つ大なる利益に御座候。之を以て學校用ラテン語書、教徒馴化用日本語書を併せ、多くのもの印刷相成可く候。本年は Frey Luis de Granada の Guia dos Peccadores 外二三書日本語にて印刷致され申し候。」

(Relaçam annval / … / … / …nos annos / de 600. & 601 … / ……「一六〇〇、一六〇一年……年報」Fernão Guerreiro 著、エーヴォラ、一六〇三年 Manuel de Lyra 印刷所刊、一二三頁)

パードレ・ルイス・デ・グスマン(Luis de Guzman)はその著「耶蘇會東方諸傳道史」(Histo-

ria de las missiones qve han hecho los religiosos de la Compañia de Iesvs, para predicar el Sancto Euangelio en la India Oriental, y en los Reynos de la China y Iapon. 1601.）の第二巻にかういつてゐる。

一文字の習得を進歩せしめ、且つ耶蘇會精事等をして隣人を救ふに一層便利ならしめんがため、プロウ゛ンシアール・パードレ・アレハンドロは千六百一年かのコレジオ――天草の――に印刷機を備へしめたり。是れ從來少からぬ書籍を手にて寫し合へるを印刷にし、又日本語よりラテン語に翻譯する要甚だ大なればとて澳門より携へ來りしものなり。右の趣意に基づきて印刷せられたる書籍中に、日本文告辭を附したる arte Latina（ラテン語法）及びラテン、ポルツガル、日本語の語彙豐富なる辭典等あり。また、Flossanctorum（聖者の華）も刊行せられ、對話の形を借りたる告辭を附したる Doctrina Christiana も出でたり。此ドクトリーナ・クリスチアナには我等の聖き信徒に必要なるもの總てを十分に述べられたり。後にその全ドチリーナを簡約し十章の略書を作りて、Quinze Mysterios de el Rosario（ロサリオ十五祕義）及びその他の略書と合せ、教徒間に配布せんとて印刷せしめたり。蓋し斯の如き略書の配布は、パードレ等自由に布教すること難き折

柄最も肝要なるものなりしなり。且つこの方法によりて教徒の得るところ大なりしのみならず、日本人エルマノ等も我等の聖教に馴化せらるることいよいよ厚く、また、異教徒等に布教するに短時日にて足るの利あるなり。　（同四八九頁）

サトー氏が「どちりな・きりしたん」（第十一番）の次に擧げてゐるのは Vocabulario da lingoa de Iapam com a declaração en portugues…（日本辭彙）である。この「日本辭彙」に對しては、パードレ・ガブリエール・デ・マットス（Gabriel de Mattos）がその千六百三年一月二日發書簡中で述べてゐる語を引く。

「四旬節には、このコレジオより近隣の村村へ彌撒、說教を齎して助力に赴き候。慈善（ミゼルコルディア）院に、その院のイルマン及び當市の有力者集合有之候へば、イルマン一人は、昨年日本文字にて印刷されたる「ぎや・ど・ぺかどる」の書を週二回讀み解釋仕り候。」

（Biblioteca da Ajuda 古寫本 49—IV—59、八一葉裏）

「本年日本文字にて『コンテントゥス・ムンディー』一冊印刷有之候。日本人は右書を甚だ好み且つ好く利用致し居り候。またポルツガル語對譯の語彙豊富なる『日本辭彙』も近く印刷完成致すべく候。この書完成のためには一パードレ日本人數人の助力を得て尋常ならぬ勞苦を以て四年以上の歳月を費せしものに候。向後新しく日本に來るものにとりては確に甚大なる便益の書に相違なかるまじく候。」

（前書、八四葉）

サトー氏の『書志』に述べる最後の二書は、Arte da de lingoa Iapam composta pelo Padre Ioão Rodriguez, Nangazaqui, 1604.（ロドリーゲス日本文典）（第十三番）と、Manuale ad sacramenta ecclesiae ministranda D. Ludouici Cerqueira Japonensis Episcopi opera, ibidem. M. DCV（サクラメント提要）（第十四番）とである。この二書については曾て私は「日本語學關係ポルトガル書志並にフールナン・メンデス・ピント傳補遺」の四〇から四二頁に專ら述べておいたものである。（完）

譯者の附言

この論文の研究するところは今や既に日本に於ても研究或は解題を成されたものが多い。大正十四年二月「思想」に載つた木下杢太郎氏の「ぽるつがる記」は態度と様式とこそ異なるが、同じい材料を扱ふ詳に報道せられてゐるものである。ヨセフ・デ・バッソス・マヌエル現在の Catechismus Christianae fidei, in qvo veritas nostrae religionis ostenditur ……の上下二冊の如きは原稿のファクシミールをさへ添へられてある。木下氏の其前年の大阪毎日新聞に寄せられた諸稿と、昨年七月新小説上の「南蠻文學雑話」を併せて必ず参照する必要がある。尚この論文の趣意は、文學博士新村出氏の論文「活字印刷術の傳來」（南蠻廣記所收）と相應ずるところがある。

この文が最も多くの負を蒙してゐる「天草文祿元年ローマ字版ドチリーナ・キリシタン」は、現に東洋文庫に一本を存し、（而もそれはプレイタス氏によつていたく其紛失を惜まれた其原物である）藝文第六年十一號に新村出氏の解題があり、其の後も前記「ぽつるがる記」、永山時英氏「對外史料寶鑑第一輯」、大正十五年三月「新世」に寄稿の川副佳一郎氏「日本最古の活字本基督教問答」に解説せらるるに至つた。

ホセ・トリビオ・メディーナの「一五九〇年澳門に於て印刷せられたる一書に關する解題」は昨年十二月「思想」に笠井鎭夫氏の翻譯が出てゐる。之に關聯してドアルテ・デ・サンデの De Missione Legatorum は旬高「ぽるつがる記」及び大阪毎日新聞の木下氏の文とファクシミールとを参照する必要がある。

この論文中に掲げ引用する書のうち、アジュダ圖書館所藏のものについては G. Schurhammer 氏と E. A. Voretzsch 氏の Die Geschichte Japans (1549—1578) von P. Luis Frois, S. J. ……、石田幹之助氏の民族大正十五年正月號に載せられた一文、Christovam Ayres 氏の二書 Fernão Mendes Pinto (Historia e memoria da Academia Real das Sciencias de Lisboa, Nov. Ser. 2. class. Tom. X, pt. 1, 1905) 及び Fernão Mendes Pinto e o Japão (同前 Tom. X, pt. 2, 1906) と前記の「ほるつがる記」とを參照せられたい。一例をいへば Apparatos para a Historia Ecclesiastica do Bispado do Japam は、木下氏がその上卷がアジュダ圖書館に存在しないと述べてゐられるものであるが、尙外に Schurhammer 氏、石田氏、Henri Cordier の Bibliotheca Japonica 等の言及してゐるものである。また、この文の引用する Sumario de las cosas q pertenecen a la Provincia de Japon…… の如きにも前述の二三氏の説明があつた。

サトー氏の「書志」に擧げる十四種の書についての研究、解題は一々列擧に堪へない程數多く發表されてゐる。

この論文の筆者ジョルダン・デ・フレイタス氏はアジュダ圖書館の現館長（少くとも最近までは）である。

筆者がサトー氏をアメリカ人としてゐるのは何氣なく誤つたのであらうと思ふ。

バートロ・ワリニヤーニが一五八三年に耶蘇會總長クラウディオ・アカウィーヴァに宛てた信書を引用したはじめの部分にある「同行」は hade haver cinco o seis dogicos p.a ir…… の dogico の譯語である。この語はヨーロッパのどの國語も本來全然持たないものであつたから甚だ不審に思つて居たが、日本語「同行」(do-

gyo）から當時轉化したものであることに氣付いた。dogyo をこの西班牙語で形容詞化して dogyco となる譯である。校正間際になつて Gonçalvez Vianna の Apostillas aos Diccionario Portuguez（一九〇六年リスボン刊）の三六九頁にこの語について私と同じく書かれてあるのを見た。

耶蘇會が S. Roque に建ててゐた Collegio とは Igreja de S. Roque のうちにあつたものであらう。現今もリスボン市 Largo de Trinidade Coelho の北部にこの Igreja が存在する。この Igreja は、一五〇六年から同地に同名の小寺があつたのを十六世紀中頃 D. João 三世が耶蘇會に讓與したのである。現建築の大部分は同世紀末、一部は大地震後の建造になる。Collegio は耶蘇會讓渡直後に創立せられ、十七世紀前半まで存續したものであらう。

Liceu Central de Lisboa、後の Liceu de Passos Manuel については、詳細な建築物史を書いてある一五二五年刊リスボン國立圖書館編 Guia de Portugal にもその古事を擧げるところがないのを見ると、さほど古い學校ではないのかもしれない。同校の文庫において十六世紀の稀覯書が入つた由緒が調べられると甚だ興味が深いにちがひない。

アジュダ圖書館所藏古寫本 49—IV—59 に述べる interiori domo de São Bernardo の São Bernardo はフランスの宗教家 Saint Bernard（一〇九一—一一五三）であり、hum Virgilio はローマの詩人 Publius Virgilius Maro（前七〇—一九）の Aeneide ではなからうか。

ルイス・デ・グスマンの「耶蘇會東方諸傳道史」中引用文に見える Arte Latina は文祿三年刊「アルワー

レス・ラチン文典提要」ではなからうか。その次に見える辭典は天草版三語對譯辭典であらう。Doctrina Christiam は「天草文祿元年ローマ字版ドチリーナ・キリシタン」ではなからうか。かういふことをいひ出すときりがないのであるが、これらの推定は現今までに知られてゐる吉利支丹刊書に基づいたもので、他に人知らぬ佚書が多いことから見れば、もとより斷定に難い。

この論文が引用する斷片の諸文中にさへ吉利支丹版佚書が暗示的に示されてゐる。或ものはその書名も見えることに注意する必要がある。

アジュダ文庫に在る日本關係の未刊書に關する覺書

岡本良知氏の[註(1)]「在葡日本未刊書考」を一讀して予は大なる興味を覺えた。予先年ポルツガルに遊び、そのアジュダ文庫に未だ刊行せられざる多數の日本關係の文書有るを識り、之れが刊行の甚だ有意義なるを說いたことがある。時機は漸く熟し、此事の實現を看るのも遠くはあるまい。當時予はその書目を寫して置いたが、慣れぬ國語と倉皇たる羇旅の間との故で、其控は精確を保することが出來なかつた。唯後日完全な研究の行はれるまで、いはば岡本氏の論文の脚註といふほどの意味で、予は予の寫し來つた是等の書目を列擧して見たい。

日本に關係のある多數の文書を包有するは主として Iesuitas na Asia と總稱せられる寫本の集である。それは 49—IV—49 乃至 49—IV—66、49—V—1 乃至 49—V—31、49—VI—1 乃至 49

—VI—10 といふ書函番號を持つた六十二冊のものである。予は始め是等の寫本の由來を詳うしなかつたが、頃ろ石田幹之助氏の Voretzsch 氏に據つて記する所（「民族」第一卷第二號）に從へば「この寫本はもと澳門（マカオ）のジエスイイトの學林——所謂 Collegio da Madre de Deos と北京の耶蘇會士館とに藏せられてゐた原寫本からの轉寫本であつて、耶蘇會士 João Alvares が一七四四年から一七四七年に亙り、四年の歲月を費して調査した副本である」といふことである。初めリスボンに送られ、更に「一八〇七年にはナポレオン戰爭の騷擾を避けて一括して南米ブラジルのリオ・デ・ジャネイロに移され、一八二一年再びリスボンに送り還されてこのアジュダの王城に收めらるることになつた」やうな歷史を有するものである。

右のうちから予の備忘錄に載つてゐる書目を擧げ、多少の解說をも附して見よう。

49—IV.

49—IV—49. 「日本に於けるジエズイト教徒。第一卷千五百四十一年—千五百五十六年。」葡文。

49—IV—50. 「同。第二卷、千五百五十六年—千五百六十三年。耶蘇會のパドレたちの諸ろの地方に於ける所業に就いて通信せる書翰を譯せるものなり。」（葡文。）

右兩部に關しては岡本氏の論文が精しい批評及び解說を施してゐる。

49—IV—51. 「Pe Sebastião Gonçalves 著、印度に於ける耶蘇會の歷史。」葡文。（是には聖フランシスコ・シャギエルの傳包有せらるると云ふ。岡本氏。）

49—IV—52. 「Pes Pero de Mesquita 及 Manoel Henrique のマカオよりマラカに至れる使命。千六百五十一年—千六百五十五年。」（葡文。）

同號。「日本に於けるジェズイト教徒。Pero de Mesquita 及 Manoel Henrique 兩師父のマカオのコレジオよりマラカの市及び□□に送られたる新使命に關する記事。」（葡文。）

49—IV—53. 「日本歷史。千五百四十九—千五百五十二年。千五百四十四—千五百七十年。」

右はアジュダ文庫の目錄の面に記す所である。右の書に對しては既に多數の批評及び解說が施されて居り、岡本氏は Christovão Aires 氏の最も信憑するに足るべき精しい批評を紹介して居る。予はクロオ師の書 (P.-L. Jos.-Marie Cros, S. J., Saint François de Xavier, sa Vie et ses Lettres. Toulouse et Paris, 1900.) に由つて始めて右寫本の存在を識つたが、岡本氏の記事に漏れた部分を補足して、左にたゞ精しく同師の記する所を引用しよう。

右のうち「千五百四十九年—千五百五十二年」の分はクロオ師に據ればアレツサンドロ・ワリニヤニ師が千六百一年七月廿五日に完成したるものの寫であつて、原本の標題は Del Principio y Progresso de la Religion Christiania en Japon であると云ふ。クロオ師はこの寫本が $\frac{25}{12}$ といふ番號を有してゐると記するが、現在の番號とは合はない。もとマカオより來たものと云つてゐる。この分は寫本の第二百四十四葉より四百廿葉までを占めてゐる。

此冊子はなほ「日本教會史、千五百七十五年より現千六百三十四年に至るまでの間此國に居住したる耶蘇會の僧侶の編纂」せる部分を包含してゐると云ふ。但し記されたるは唯千五百四十九年から千五百六十年に至るまでの歴史である。實際はなほそれより前までで止まつて居る。而して眞に歴史的の物語は第百八十一葉に始まる。即ち其第三卷に當るものである。其標題は「……No qual se contem como se deu Principio a pregação do sagrado Evangelho naquelle Reyno, pelo B. Padre Francisco Xavier, e progresso que teve a Christiandade, do anno de 1549 athé o de 1552.」といふ。

此歴史の作者の名は記されて居ない。然し其甚だ古き傳道師であつたと推することは出來る。た

とへば山口に於ける聖フランシスコ・シャギエルの手に由る初期の改宗者の一人にして後に副伊留満となり、千五百九十年に死せる者の事に關して「予は此人と數年の間親密の交を爲せり」云々と記述してゐる。それで此筆者の、千五百八十年には宣教師か、少くとも耶蘇會のわかき修道士で宣教師たるべき學務にいそしんで居たものであるといふことを推斷することが出來る。彼が日本教會史を編したのは千六百三十四年のことである。或る箇所にはかなり精確に「我等はフランシスコ・シャギエル師より後廿六年にして日本に到りたる者なるが……」と記してゐるのである。故に筆者は千五百七十七年以來日本に居住したるものでなければならぬ。それでクロオ師は之に「マカオの年代史家（l'Annaliste de Macao）」の名を與へた。

ソリニヤニ師は「日本に於ける基督教の起源及び發達」を編したが其著述は必しも個性的のものではない。寧ろ Maffei や Torsellini の引用である。唯その間處處にこの大著作者の個人的觀察の結果が散見せらるるのである。

ソリニヤニ師は又しばしば其著作以前の諸著を鈔撮してそれに就いて言つてゐる。「予は Padre Giouan Pietro Maffei の好著述、Padre Torsellini の聖師フランシスコ・シャギエルの一代記

……を識る。而して此完成せる歷史は、予、千六百三年の二月、日本の巡察より歸り、マカオのコレジオに於て之を見たり。Padre Juan de Lucena に由つて葡文にて綴られ、千六百年羅馬に於て印行せられたるものなり。

「この著述以前のものは、日本の國民に就いて、はたまた神の日本に於て示されたる攝理に就いて十分なる知識を與へざりき。多くの事情は唯書翰に據り、人の語る所に據り或は又風說に據つて記され、完全なる說明を缺けり。從つて既に刊行せられたるもののうちには誇張、修飾は言はずもあれ、たゞ曖昧なる、或は反對なる點の甚だ多しとなす。

「若し夫れパドレ・フワン・デ・ルセナに至つては其書文體の妙を極め其記述詳密にして其信條甚だ善美なりと雖も、而も是れ歐羅巴に於て作られたるものにして決して自らその地に往せるにはあらず、從つて其實驗に觸れざる多くの事象のあるを免れず。誇張は殊に甚だ多く——故に種種の點に就いて精確なる觀念乃至說明を與へむが爲めには、予の既に前章に於て陳べ又後章に於て記せむとする所に就いて之を求むるを要するなるべし。」

ワリニヤニ師は此書編纂以前既に一書の Principio y progresso de Compañia de Jesus en

las Indias orientales と題するものを羅馬に送つた筈である。此書は Monumenta historica societatis Jesu の叢書として千八百九十九年に出版せられてゐるのである

マカオの年代史家の著述もワリニャニ師の著述も孰れもまだ刊行せられてゐない。

以上がクロオ師の考證である。此書に對するクリストワン・アイレス氏の說及び岡本氏のそれに關する疑問などはここには引用しまい。而して是等の考證のうち最も遅く出た F. A. Voretzsch (Artibus Asiae. MCMXXV, No. 1.) は本書の筆者として Rodriguez Tçuzzu を擬してゐる。是れは有名な日本文典を作つた人であるが、フオレチュ氏はこの斷案に關して何等說明を與へてゐない。唯此人が日本から追放せられたるパドレたちに手傳つてもらつてマカオで編纂したものであらうと推量してゐる。本書は一、東亞總論、二、日本事情、三、千五百四十九年より千五百五十二年に至る傳敎史の三部に分れてゐると云ふ。

同氏は又ワリニャニ師の著述の事をも簡單に述べてゐる。ワリニャニ師は千六百一年頃までは其續稿を作る計畫であつたことが其序文に見られるといふ。「シユウルハンメル氏に據るにこの書はワリニャニ師の最後の著述にしてこの卓絕せる伊太利亞人の最も弱き作品なりと」云云。

49—IV—54. 「千五百四十九年より千五百七十八年に至るまでの日本傳道の年代記。四百廿三葉。」

是れ有名なるルイシュ・フロイシュ師の日本傳教史である。既にシュウルハンメル、フォレチュ兩氏の獨逸譯も出たから詳しい事を云ふ必要がない。

49—IV—55. 「日本に於ける傳道事業の起源と並にそのスウペリオレス。自千五百四十九年八月十五日至千七百四十四年八月三十一日。」

49—IV—56. 「日本の總長の所有に係る諸記錄。千五百八十五年十一月十三日以來長崎にて書き始められたるもの。二百四葉。表紙を缺く。」 此書は岡本氏に據るにヷリニャニ師より Claudio Aquaviva に呈せられたものである。

49—IV—57. 「日本司教管區寺院史史料 (Apparatos para a Historia ecclesiastica do Bispado de Japam.) 千五百八十八年—千五百九十三年。」

此書に關しては予は已に「ぼるつがる記」中に述ぶる所があつた。即ち右には缺本があるのである。アンリ・コルヂエ氏の日本書目を參考すると、本寫本はアパラトスの第二部に當るもので、

その第一部は此には逸してゐるのである。コルヂェニ氏に據ると其第一部は五百五十八葉あつて次の諸項を含有してゐる。

一、「千五百八十二年より羅馬に着せる日本使節に關する記事要略」（一―一一四葉）はアレツサンドロ・ワリニャニ師の慫慂に由り豐後、有馬、大村の諸侯よりグレゴリオ十三世に遣はされたる日本使節の歴史を包有する。この甚だ奇なる物語は使節を歐羅巴に伴ひたるヂェゴオ・デ・メスキタ師により編纂せられたるものである。物語は千五百八十六年卽ち使節の日本歸國の途リスボンにて乘船せる時期までで終つてゐる。

二、「マカオの司教管區（日本）の教會史料。千五百八十三年の記錄より始まる。」（一一五―一一七葉表）西班牙語にて書かれたるワリニャニ師の書翰にて始まる。それはジェズイト以外の僧侶の日本に入るを拒むものである（一一五―一一七葉表）。次に千五百八十三年の記錄四章（第一乃至第四章）。一三五葉裏より一六八葉裏に至る間は日本使節の歐羅巴旅行に關する他種の物語を收めてゐる。然し集の始めのものと毫も異るところがないのである。一六八葉裏より一七〇葉裏に至る、エチオピア長老にして日本の司長たる Melchior Carneiro の略傳を載せる。一七〇葉裏の下

部には Estassão as Noticias, que achei pertencentes ao Anno de 1583, Josè Montanha と記されるが、かかる文字が他にも見出される所を見ると或は筆耕の名であるかも知れぬ。

三、「千五百八十四年の記錄に始まる。」（一七〇葉裏―二二六葉表。）副王 Franc. Mascaranhas のワリニャニ師に與へたる命令（千五百八十四年四月十八日）の寫に始まる。一七三葉表―一八九葉表、使節の旅行のアリカンテ乘船までの部を收める。一八九葉には記錄（第五章）始まり二二六葉表（第十五章。但し第九章は重複す）に至る。

四、「千五百八十五年の記錄に始まる。」（二二六葉裏―三四六葉表。）グレゴリオ十三世のジェズイト僧に與へて日本行を止めたる親書（千五百八十五年一月廿八日）に始まり、同じ事件に關し副王ドン・ヅアルテ・デ・メネゼスに與へたる許可狀（千五百八十五年四月）之に續く。次に日本使節の紀行中アリカンテ以後、伊太利亞到著、羅馬に於ける歡待、出發、各市―アンコナ、ボロニヤ、フェララ、ヱネチア、マントア、ミラノ、ジェノワ等―の歷訪、ボルツガルに歸著の部分を續載する。日本の記錄は同葉に始まり（第十六章）三四六葉表（第廿七章）に終る。

五、「千五百八十六年の記錄。」（三四六葉裏―四二八葉。）（內容說明略。）

六、「千五百八十七年の記錄」に（四二九葉表—五五一葉表）。（右同斷。）

以上コルヂニエ氏の說明する所に據ると、此寫本は第一回日本使節に關する重要な記事が收められてある。しかしその項目はグツルチエリイが日本使節記に似る所が多い。果してその原本であるか、今にはかに之を斷定することは出來ない。

又アパラトスの第二部はコルヂニエ氏に從ふに三百七十四葉より成り、一、千五百八十八年記錄。二、千五百八十九年記錄。三、千五百九十年記錄。四、千五百九十一年及九十二年記錄。五、千五百九十三年記錄を收めると云ふ。即ち正にアジユダ文庫に存する部分と一致するのである。此第二部のうち第二十五章は「四遣歐使節の歸朝」といふ標題の下に、岡本氏の「思想」第六十五號に譯述する所である。其他 José Fornaleto の五島に於ける所業、アルフオンス・ゴンザレス師及びガスパル・コエリヨ師の死、太閤の朝鮮征伐等が記される。コルヂニエ氏の引用する寫本は Luzarches 氏文庫に出でレオン・パジエス氏の手に入り、其後又他に轉じたるものである。メゾンネウの書目には三百フランの市價が記されたといふ。

49—IV—58. 「日本及び支那に於けるコンパニヤのパドレたちに對して記されたる各種の誹謗

に答ふる辯明書。著者、同じコンパニヤの巡察使アレシャンドレ・ヴァリニャノ。千五百九十八年。」八十九葉。表紙を缺く。

49—IV—59. 「千六百年より千六百七年に至るまでの日本キセ・プロキンシア年記。その國よりパドレ・ジェラルに送りたる諸書翰の寫。その國の基督教の狀況並にコンパニヤの狀況を細大に亙り記し、殊に肥後その他の地方に於て聖教の信仰の爲めになされたる殉死その他の事がらに就いて記すもの。（是れは千七百四十五年、マカオ市なる、日本プロキンシアの耶蘇會の Madre de Deos のコレジオの代理部に於て頃る謄寫せるものに係る。）又廣島の駐在所に關して。」

49—IV—60. 「日本教會の迫害中に起りたる諸事件の記述。自千六百二年至千六百二十一年。」百六十葉。

49—IV—61. 「日本プロキンシア年記。自千六百五十年至千六百五十六年。」

49—IV—62. 「同。自千六百六十八年至千六百七十年。」諸種の記錄を包藏す。

49—IV—63. 「在日本耶蘇會諸パドレの書翰集。自千六百八十年至千六百九十年。二冊。」

49—IV—64. 「同。自千六百八十年至千六百八十九年。」

49—IV—65.　「日本プロキンシアのセクレタリアに於て保管せられたる千六百八十九年より千六百九十一年に至るまでの諸書翰集。」

49—V.　（主としてアメリカ及び支那に關する記錄である。）

49—V—3.　「日本プロキンシアのセクレタリアに於て保管せられたる諸文書よりマカオ市の耶蘇會の Madre Deos のコレジオに由つて寫されたる諸記錄集。自千五百九十九年至千六百六十六年。二百十葉。」

46—V—5.　「日本及び支那の印度より別れて別のプロキンシアを有すべき件に關して日本長崎のコレジオにてなされたる會議の事。千六百三年。」「千五百七十四年の日本巡察使、日本人の爲めのカテシスモ、日本のパドレたちの辯明書並に未だ出版せられざる日本歷史第一部の著者たるア・ワリニヤニ師の一生と臨終。千六百六年。」（其他を含有す）六十七葉。

49—V—6.　「千六百一年より千六百廿五年に至る間のマカオ耶蘇會の Madre de Deos のコレジオの年報。」

◇

之より以下の番號の冊子は千六百四十年以後の事に關する諸記錄であり、予はその書目を寫すを怠つた。

アジュダ文庫に於ける日本關係の文書は唯 49—IV, 49—V, 49—VI の類集に盡きてゐるわけではない。其他にもなほ重要なものが存する。左に其數例を摘く

46—VIII—35. $\frac{25}{2.}$ 「日葡辭典。」是れはサトウ氏の「日本刊行書志」の第十二に當るものである。刊行本と如何の關係にあるかを詳にしたい。但し其千五百九十三年といふ年號(サトウ氏の引いた刊本は千六百三年の出板である)が注意に値する。八百一葉。「補遺と共に」との追記がある。

46—X—12. (此番號には支倉の事に關する諸種の記錄を包有する。)

「スパニャ及びポルトガルロの王フイリポ三世の其の羅馬に於ける大使カストロ伯ドン・フランチェスコに遣はしたる親書。千六百十五年九月二十日ブルゴスに於て認められ、法皇パオロ五世及び陛下の許に遣はされたる奥州王の使者としてフランチェスコ派僧フラ・ルイジ・ソテロ並に日本人一人スパニャに到著し羅馬に出發することを知らすもの云云。」

「日本の攝政(しやうぐん)、奥州(まさむね)の王の使者の申請に對するパオロ五世の答書の概要。」

「パオロ五世及びカトリコ王に遣はされたる日本使者の案件、殊に日本國の司教管區の設立に關して羅馬の僧會に於てなされたる討議。」

「奥州王伊達政宗よりパオロ五世に遣はされたる使者の通詞 Scipione Amati の編纂せる日本國の自然的、宗教的並に政事的三事情概要。」（以上孰れも伊文。）

46—**X**—13. には同樣に「日本及び東方印度地方に於ける耶蘇會のミッシオネの覺書。千五百六十八年、五百七十一年、七十五年及び七十六年總長に遣はされたる右會のパドレたちの各種の書翰より拔萃。」「千六百十二年日本人の殉教に關する報告」等を包有。孰れも伊文。

46—**X**—20.「日本司教管區に於ける殉死の報告。千六百十三年十月六日日本の司教より會總長クラウヂオ・アクワキヴァに寄せたる一書翰の拔萃。」等。伊文。

46—**X**—20. 乃至 42—**X**—22 には千五百七十七年より千六百八年ごろまでの間に法皇グレゴリオ十三世、シストオ五世或はクレメンチス八世の日本諸侯或は在日本諸パドレに與へたる親書の寫を含む。孰れも拉丁文。

46—**X**, 46—**XII** 等の書函番號も亦多少の日本關係の文書を含有す。その 46—**XIII**—11 et 12

は「拉、蘭、日對譯辭典」即ちサトオ氏書志の第五號に當るものの寫本である。

◇

以上は甚だ杜撰なる覺書に過ぎないが、之に由つてほぼアジュダ文庫の寫本の如何なるものなるかが分らうと思ふし、且つ向後それらを我國に移入する場合、どれから手を著け始めて然るべきかといふことを定めることが出來ると思ふ。それで蛇足ながら岡本氏の抄譯論文を讀んだ機會にこの稿を起したのである。

（「思想」昭和三年八月號。）

註。此小稿と共に同じ雜誌に出づるべかりし岡本良知氏の論文は、同氏の都合にて撤回せられ、この稿のみが現はれたので、文意に副はぬ箇所が出來て來た。尤も同氏の論文は、昭和四年、日葡協會より「初期耶蘇教徒編述日本語學書研究」と併せ、單行本として發行せられた。孰れも有益のものであるから、興味を有する諸見君は就て看られたい。（追記。）

グイドオ・クワルチエリガ
日本使節記に就いて

最近寫眞に寫して貰つた「日本使節羅馬到着記」のことを書かうと思ひます。是れはドン・マンシオ伊東等の一行の歐州旅行を記したものです。

第二回の遣歐使者支倉六右衞門に關する文獻としては、小生多少珍らしいものを閲覽し嘗て「支倉文獻考」を書きました（未發表）。第一回遣歐使者の事に關しては昨年の「思想」でヅアルテ・デ・サンデの拉丁文の使節記を紹介したことがあります。またそれに據つた西班牙文のブヘダ・デ・レイバの使節記のことに關しては本年七月號の「新小說」に書きました。

それ等書籍以外では大して珍らしいものを發見しませんでした。故アンリイ・コルヂエエ氏の「日本書目」は第一回使節の事に關する書籍、小冊子類の四十八種を紹介して居ります。勿論この

うちには發行地を殊にする異本や異國語の飜譯をも含んで居ます。今一々その書名を再錄しません。唯中に就いて重要なる二三種の名を擧げて見ませう。

◇

I. RELATIONI / DELLA VENVTA / DEGLI AMBASCIA-/ TORI GIAPONESI / a Roma sino alla partita di Lisbona / Con le accoglienze fatte loro da tutti i / Principi Christiani, per doue / sono passati. / Raccolte da Guido Gualtieri. 紋章 IN ROMA. Per Francesco Zanneti. / MDLXXXV. / Con licentia de Superiori. in-8. 百九十一頁。他に正誤表一頁。

是れにはヱネチア版異本あり。また佛獨の抄譯本あり。

II. DE MISSIONE / LEGATORVM IAPONEN / sium ad Romanam curiam, rebusq; in / Europa, ac toto itinere animaduersis / DIALOGVS / EX EPHEMERIDE IPSORVM LEGATORVM COL-/ LECTVS, & IN SERMONEM LATINAM VERSVS / ab Eduardo de Sande Sacerdote Societatis IESV. / 裝飾圖 / In Macaen-

si portu Sinici in domo / Societatis IESV cum facultate / Ordinarij, & Superiorum. / Anno 1590.

III. HISTORIA / DEL REGNO DE IAPON &c. / Recopilada por el Doctor Buxeda de Leyua, / vezino de la cuidad de Toledo. &c. /

右はサラゴツサの千五百九十一年版である。

◇

さてゲキドオ・グワルチエリの使節記（詳しくいふと「日本使者たちのロオマ到著よりスボナ出發までの記事」と云ふ標題である。）は其の記事中中精細であり、本文十五章、後に附錄がついてゐます。

カルデナアレ・アツツオリイノ台下に捧ぐる辭。

第一章。日本國並に日本人の風俗の事。

第二章。使者を羅馬に派遣するに至りし由來。

第三章。日本を發しゴアに到る事。

第四章。ポルトガルまでの航海の事。

第五章。リスボナ到着の事、附ポルトガル國滞在の事。

RELATIONI
DELLA VENUTA
DEGLI AMBASCIA-
TORI GIAPONESI
à Roma ſino alla partita di Lisbona.

Con le accoglienze fatte loro da tutti i Principi Christiani, per doue ſono paſſati.

Raccolte da Guido Gualtieri.

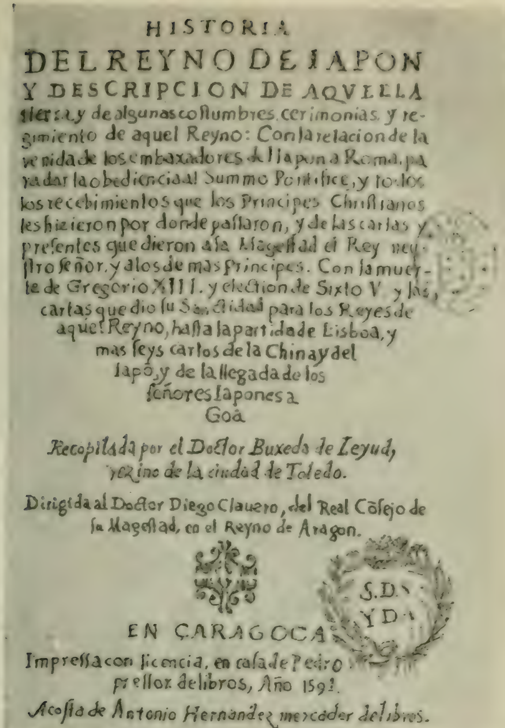


IN ROMA. Per Franceſco Zannetti.
M. D. LXXXVI.
Con licentia de i Superiori.

第三十二圖

グワルチエリ日本使節記表紙

第六章。イスパニヤ旅行の事。



HISTORIA
DEL REYNO DE IAPON
Y DESCRIPCION DE AQVELLA
tierra, y de algunas costumbres, cerimonias, y regimiento de aquel Reyno: Con la relacion de la venida de los embaxadores del Iapon a Roma, para dar la obediencia al Summo Pontifice, y todos los recebimientos que los Principes Christianos les hizieron por donde passaron, y de las cartas y presentes que dieron a su Magestad el Rey nuestro señor, y a los demas Principes. Con la muerte de Gregorio XIII. y electíon de Sixto V. y las cartas que dio su Sanctidad para los Reyes de aquel Reyno, hasta la partida de Lisboa, y mas seys cartas de la China y del Iapō, y de la llegada de los señores Iapones a Goa.

Recopilada por el Doctor Buxeda de Leyud, vezino de la ciudad de Toledo.

Dirigida al Doctor Diego Clauero, del Real Cōsejo de su Magestad, en el Reyno de Aragon.

EN ÇARAGOÇA

Impressa con licencia, en casa de Pedro ... impressor de libros, Año 1591.

A costa de Antonio Hernandez mercader de libros.

第三十三圖　ブヘダ・デ・レイバ西譯
日本使節記表紙

第六章（ツノマ、ヽ。）伊太利亞に到着してフィオレンツア國通過の事。

第七章。羅馬への旅行並に共地に於ける歡待の事。

第八章。パパ・シスト六世當選の事。

第九章。ロレト並にボロニヤの旅行の事。

第十章。フェララに於ける歡迎の事。
第十一章。ヱネチアに於ける歡迎の事。
第十二章。マントア國の事。
第十三章。ミラノ及びジエノワ國の事。
第十四章。リスボナへの旅行並に印度より出立の事。
第十五章。一行の容貌及び服裝の事。

そのあとに九州大名より法王に奉る書翰、法王の名に於てせるアントニオ・ボッカパッリィ台下のオラチオなどを載せてゐます。僕はいま人に就いて此書を讀み、まづヱネチアの章を譯しました、日本西教史、又はシャルジアの抄譯に見ぬ珍奇の事實を多く知るを得て大に愉快でした。來年一杯には飜譯を完成したいと思つてゐますが、なかなか思ふやうには行かず、確かに約束することは出來ません。

◇

此序に西班牙文ブヘグ・デ・レイバの本の目錄を轉載しませう。

獻本辭
讀者への辭
第一章。日本國、その地の風俗禮儀並に政事の事。
第二章。使者の羅馬に來り法王廳に伺候するに至りし因由の事。
第三章。日本を發しゴアに赴く事。
第四章。ゴアよりポルツガルに至る航海の事。
第五章。リスボア入市並にポルツガル國滯在の事。
第六章。カスチイヤ旅行並に伊太利に向け解纜の事。
第七章。伊太利亞到着、フロレンシア國通過、並にセナに於ける歡待の事。
第八章。セナより羅馬に至る旅行の事並に羅馬に至るまでの歡待の事。
第九章。グレゴリオ十三世の薨去並にシストオ五世選擧の事。

右の章の後に九州大名より法王に捧げたる書翰、オラシオン、法王に代つてアントニオ・ボツカハヅリのなせる答辭其他の寫が附いてゐます。

此書は大體に於てグワルチエリイの書の飜譯と見ることが出來ます。で、かのヅアルテ・デ・サンデの拉丁文の書はやはりグワルチエリの本などを參考にして作つたものでありませう。

ヅアルテ・デ・サンデの本の目錄も寫して持つてゐますが、拉丁文ですから今晩これを飜譯して紹介するわけにはゆきません。（大正十五年十月二十九日夜）（「紙魚」第四冊所載）

ポルトガルロ、スパニヤよりイタリヤへ

（グワルチエリイが日本使節記の抄譯）

引

グワルチエリイ著す所の日本使節記「RELATIONI / DELLA VENVTA / DEGLI AMBASCIA- / TORI GIAPONENSI / a Roma sino alla partita di Lisbona. / *Con le accoglienze fatte loro da tutti i Principi Christiani, per doue sono passati.* / Raccolta da Guido Gualtieri.」の事に就いては既に雜誌「紙魚」第四號（昭和三年一月一日發行）に記す所あつたから今ここに詳しうは述べない。是れには同じ年の出板に係るヹネチア板もある。ドン・マンチオ伊東他三人の旅行を記す文獻としては本書の如きはその最も重要なものの一である。而してエスパニヤの人 Doctor Buxeda de Leyva の筆になるサラゴツサ板の日本使節記「HISTORIA / DEL REGNO DE JAPON &c.」（千五百九十一年板）は予の比較した所では全く前者のカスチリヤ語譯である。各章の標題も其順序も同じいが、中の文章も略一致してゐる。但し其項目に就いて

言へば、原本は第七章となるべきを誤つて第六章としてゐるから、最終章は第十五章となつてゐるが實は第十六章である。そのあとになほ數多の書翰の寫がある。カスチリヤ本は十七章ある。卽ち第十七章の「日本使節の爲めに催された長老會議の事」といふが伊太利亞本には章の番號を附してゐない。本文に就いて言へば、亦多少の出入がある。例へば第六章に伊太利亞本に缺けてゐる人名トレドなる Ioan Mendez などが出てゐる類である。然しこの比較は後日の機會に讓つて今は述べまい。

唯ちよつと書き添へたいことは、メヂナ氏が一千五百九十年マカオに於て印刷せられたる一書に關する解題」(笠井鐵夫氏譯「思想」第六十二號)中にアヘダ・デ・レエバの書がエッアルド・デ・サンデ師の著書DE MISSIONE LEGATORVM JAPONENSIVM……のカスチリヤ語譯であるやうに書いてゐるのは當を得ないと云ふことである。サンデ師はむしろグワルチエリイの書などに據つたものと見做してよからうと考へられる。總體メヂナ氏は全くグワルチエリイの著書などは閑却してゐる。これ等のいろいろな關係も、エッアルド・デ・サンデ師の著書の解說と共に、予は亦後日之が研究の結果を發表しようと思つてゐる。

さてこのたびは唯グワルチエリイの右の書のうちから、殊にポルツガル、エスパニヤに關係深き部分のみを選んでここに譯出した。それは近く予の上梓せしめむとする「えすぱにや、ぽるつがる記」の外篇に插入せむが爲めである。原本には行を切ることがなかつたが此には近世の體に從つて行を切ることにした。

此伊太利亞古文から予のここに之を譯出することを得たるは、東北大學に勤務する獨逸人マルクワルト孃に負ふ所が甚だ大である。又予の此書に近いたのは、神戸なる友人竹田龍太郎、廣瀨常華雨君が、その地の

圖書館に有る原本に就いて十部の複寫本を作らせ、予にもその一本を配たれたに由るのである。玆にこの事を書して諸君の厚意を深謝するのである。

第五章

リスボナ入市の事、またポルトガルロ國滯留の事

さても一行の交趾（コオチン）を出發してからこの方、既に六箇月に十日足りぬ月日が經過した。此間は凡て航海の爲めに費され、陸（をか）と云ふものに觸れたは、僅かに、サンタ・エレナ Santa Helena の島で送つた數日のことであつた。それ故、艱難辛苦の旅のあとで、始めて安全の港を得、休息の場處に達した時に、公子たちがどんなに喜うだかといふことは、容易く想像出來やうといふものだ。河を遡つて眼（ま）のあたりにリスボナ（葡、Lisboa（リスボン））の全都を瞻望した時には、皆の歡喜が絶頂に達した。いまだ一度も見たこともないやうな美しい、大きい、またあてやかな此都の景色に見とれて、あなやと驚くばかりであつたと云ふもまことに其筈であらうずる。

錨を下すと間（ま）もなう**ジエズウ**の協會のパドレたちが出迎へに來た。皆は喜ぶまいことか、公子た

ちを抱きしめ抱きしめた。さうして出來るだけ内證にして己が家に案内した。さう云ふは、皆は初めは徒歩、騎馬の士を遣して、花花しう一行を迎へうする計畫を立てたことであつたが、如何にせむ一行の人人は疲勞の極に達して居た所で、そんたさわがしい歡迎沙汰よりは寧ろ休息の方を望うだといふわけでとそはあつた。されば夜に乘じて船を下り、少しの鬧譁もなく、耶蘇會の學堂であつた聖ロッコ San Rocco へ入つた。皆の歡喜はいやが上にも增して、再び抱き合ひ上たことであつた。公子たちも皆パドレたちの親切にこよなう滿足した。既に前がた、一行の到著の消息が傳はつて居たれば、それらの人人にふさはしいやうに宿舍の用意が備へてあつた。

リスボナ滯在は二十日餘りであつたが、その間に皆は旅の勞を癒し、又多くの公卿貴人たちを訪問し、それからこの市やその近くの重な名所名所を見物した。シントラ（葡、Cintra）の宮殿、ベレム（葡、Belem）の寺院などである。また此國の總督カルデナアレ・ダウストリア台下「Illustr. Card. d'Austria に謁見し、台下も亦皆を心から接待せられた。さうして公子たちやまた日本の基督教徒にとて厚い贈物をせられ、公子たちの方からも銀の細工を施した犀角の盞を贈られて、台下もいたう喜うで之を受取られた。

九月の五日にはエヲラ（葡、Evora）の大司教であるドン・テオトーニオ・デ・ブラガンツア台下（葡、don Theotonio de Bragança）の遣はされた儀装車に乗つてリスボナを出發した。台下は一行の到着の消息を受取るや否や、代表者をエヲラから半日の行程を隔つ處まで遣はして、己が名で之を迎へさせた。やがてまた馭者に己が馬車を牽ゐて皆を出迎させ、公子たちをばそれに乗せてエヲラに入らしめた。大司教台下は、公子たちを己が屋形に宿めうず考へられたが、公子たちはいままでの習慣に從うて、その申し入れを斷り、ひたみちに耶蘇會のコレジオに向うた。されば大司教台下は直ぐにそこに趣かれて公子たちに會はれ、懇た言葉を賜はれて何くれと親切を盡された。さうある所で、皆は定めの日までにマドリドに往くべいといとも旅を急いで居たれども、たつてそれを引き留め、皆もそれにほだされて七日が程ここに逗留した。その間といふものは、銀の制服を著けた侍僮を介錯につけ、盛餐を捧げしめて皆をねぎらひたまうた

さて十字架の日と云ふはこの大寺院のいとも貴い祭日であれば、大司教台下には皆にこの儀式を見せうず思された。その日には善男善女の參詣するもの引きも切らず、さしもの大伽藍の内も外も人人を入れかぬげに見えた。さるほどに群集の衆は、ここに日本の公子たちの居るを知つて

こよなう感激し、中には日に涙するものさへあつた。或者は大聲に呼はつて百千の祝福を與へた。取りわけて宗教裁判所の法官（l'Inquisitore nella predica）は其演說の中に一行の到著の事を述べて、辭を極めて之を賞讃し、主の恩寵を感謝した。メサの式終ると、大司教台下は親しく一行を晩餐に案内した。その時公子たちを慰めたは、唯食事と善い音樂とばかりではなく、台下がいつもの慣はしに從つて、かたへに別の食卓を設へ、十二人の貧者に食を與へ、またいろいろの惠を施されて、其あとでキリストの教を授けられたと云ふ一事であつた。晩餐が終ると、大司教台下は其禮拜堂に赴き、公子たちにかずかずの寶物、畫像其他の品品を示された。其數はいとも多く、孰れも美しいものばかりであつた。されば何にても氣に入つた物は、日本に持ち歸らるべしといはれた。公子たちは鄭重に御禮申して辭し歸られた。

翌くる日の九月の十五日に一行は其地を發して、ブラカンツア太公の莊園であるキラ・キコオザ（葡、Villa Viçosa）に赴かれた。そこで太公及び其母君たるドンナ・カテリナ殿より受けた款待は中中に口に述べ難いほどであつた。このドンナ・カテリナ殿と申すはフイリポ王の姪に當られる君であつた。まづ三里ばかり隔つた處まで御馬車が遣はされ、屋形の侍、騎馬の衆が之と一緒に

参つた。公子たちがキラ・キコオザに達すると、太公は三人の兄弟たちと共に、或る寺院で一行を待ち受けられ、その入口まで出て公子たちを迎へ、その寺でメサを聴いてから、之を其屋形に伴うた。特に公子たちの為めに毛氈やいろいろの器具を以て其室を飾り、二日の滞在の間は片時も公子たちを其家族の者から離すまじいといふほどの待遇ぶりであつた。食事の時も其他の時も、いつも公子たちと一緒に居られた。その鬱を散ぜしめうずと野猪の狩をして見物させ、また太公が身自ら其兄弟や家来のものたちと共に喜劇を演じて見せられた。またドンナ・カテリナ殿におかれても、公子たちの訪問をば殊の外に喜ばれて、それを待つに母親の慈愛を以てせられた。二たびも三たびも皆を招かれて、その屋形であれ、何であれ、すべてその使用に任された。さうして公子たちから日本の著物を借り受け、金の縫したる布で、急いで同じ形のものを作らせ、それを第二子のドン・ヅアルテ Don Duarte に著せ、既に得てあつた日本の刀をはかせ、人を日本の使者たちの許に遣はされて、もし差支もなくば屋形にお出でありたい、さすれば日本の人一人に會はせまらせうずと云はせた。日本の使者はまことに日本の人の居るかと、少しも疑はずに屋形に赴いたに、とはいかに、ドン・ヅアルテが日本の著物を著て、揚揚と得意のさまであつた。それで皆喜びさざめいたと

いふことである。

かかれば日本の人たちは、滿足もしまた驚嘆もしつつ此地に滯留した。さう云ふは、一には人人の慈愛、親切をその身に受け、一には莊麗、偉大、取り分け噂に聞いたにも優る禮拜堂の立派さ、居室のしつらひ、豪奢の裝飾を見、廚房の壺に至るまで悉く銀を以て製せるを識つたからである。さて一行のこの地を辭し去るに當つては、人人は其滯在の間に示したに優るとも劣らざるべき厚意を示した。太公は一行の羅馬より歸らう折には再びこの地にて相見ようずと約束せられ、またこれから先の旅の道道に要するもの入りをば支出せられた。さうして一行を已が馬車に乘せて自らも之に伴ひ、數里が程をばわざわざ見送りせられた。皆は太公の一族やもろもろの貴人たちに對して、心のうちに深い感謝と愛情とを抱きながら、今やマドリドに向けて出で立つた。是れはその地でカトリコ王に拜謁し、その齎らして來たる書翰と使命とを捧げうずる爲めであつたのである。

第　六　章

イスパニヤ國旅行の事

スパニヤに入つてまづ見たはマドンナ・デ・グワダルペ（西、Nuestra Señora de Guadalupe）であつた。ここにてパドレたちから鄭重た歓迎を受けた。貴い御寺で行はれるさまざまの勤行の有様をも見せられた。そこを立ち出で、タラヱラ（西、Talavera）を經て翌くる日トレド（西、Toledo）に到着したれば、貴人の子弟がいち早くも騎馬で出迎へて皆を案内した。若し皆の到着の時刻がかうも違うならなんだたら、もつと多くの出迎人があるべき筈であつたのである。次の日には皆に會はうとて多くの貴人や學堂の青年たちが來り、其優待が鄭重を極めた。演説や短い對話が述べられた中に深い愛情が罩められてあつた。その日は馬車で都のあちこちを見物し、とりわけそこの大伽藍を見て、その華麗、その裝飾に驚いたことであつたといふ。

第三日にはドン・ミケエレは急に重い熱病に侵された。危險がないともいはれぬ容態であつた。それのみではなく、やがて發疹さへも出で來たのであつたが、神の恩恵でおひおひに病勢が衰へた。されども再び旅に出るまでは、まだ長い間の療養を要したのである。さて疾も癒えたほどに、十一月の終になつて、始めてマドリドへ向つて出發した。その市に著くと、某の伯爵を始めとして主だつた人人が一行を出で迎へ、豫め用意してあつた四輛の儀裝車に分ち載せ、多くの人人之に

伴うて、まことに花花しい入市の有様であつた。さはあつたがその喜はやがて悲に變つた。さう云ふは、ドン・マルチノが既に道中で心地惡うあつた所で、マドリドに到着すると、間もたう重い熱病にかかつたことである。されとも手篤い介抱には事缺かなかつた。皆の宿つた僧院のパドレたち醫師たち、その中には第一流の稱あるものもあり、また國王の侍醫もあり、その看護に由り、別しては主の加護に由つて、疾は廿日の間に全癒したのである。かうして長う逗留したことがまた大きな滿足を受ける機縁ともなつた。それは或るやごとない大名の宣誓の儀式（スパニャで見られる最も莊嚴な儀式）を參觀することが出來るやうになつたことである。されどもこの時にはまだ皆の國王拜謁の事が濟んでゐたんだによつて公式に臨席したではない。されば陛下は、こちらからは能く全景を瞻ることが出來て、他よりはえ見えぬ席を設はせ、皆は王の侍ドン・クリストフオロ・デ・モオラ殿（西、don Christoval de Mora）に伴はれて其儀式に赴いた。その日は十一月の十二日のことであつた。陛下には、同じ月の十四日をば一行引見の日と定められ、その日には皆を迎ふる爲めに宮廷の馬車を遣はされた。

人人は日本の衣服を著けて參內した。その事に就いては、この後の物語にも要ある事であれば、

今ここに精しう説き明しせうず。第一に其材料はと云へば絹である。タッフエタともタビとも云ふ布のやうに甚だ薄いものである。地は白であるが、いろいろの色彩をもて鳥、花、葉の模様を織り込うであり、いとも精巧美麗である。唯我等が國國のくすんだ單調のものに較べると燦爛た程どに開けてある。かう云ふを二枚或は三枚重ねて著る。丈は地面まで屆き、前が開き、其袖は潤く、肘に達し、或はそれよりも少し長い。皆は儀容を調へる爲めに印度で肌着を作らしめたのであるが、それでもなほ腕の一部は素肌を現はしてゐる。又その上更に、同じ色の絹で作り、舟夫の著く足に垂るる袴に似たるものをば腰に著けるのである。尤もそれは外に出づる折でなければ著ぬのである。又われ等の著る外套と同じやうに、同じく絹の、されども更に精巧なる布をば肩に懸ける。是れは幅二掌、長さ三掌あつて、我司祭の著けるアミットオといふ布に似てゐる。孰れも唯裝飾といふ事の外の意味はないものである。その兩の端から前の方にと、二指ほどの幅の細い帶が出るが、之をば胸のところに交叉して、腰の所にて裏返し、かのアミットオをばしかと附けしめ、又帶の役にたすものである。頭には日本の人は何をも被らぬ。唯外を歩く折には雨と日とを防ぐべき傘をば用ゐるのである。さうはあつたが彼の公子たちは、われ等が習慣に順應する所があつて、印

蕃風の小帽子をば用ゐた。又襪をも穿かぬ。唯皆いたう清潔を重ずる所で、專らその目的の爲めに、皮膚の上に甚だ薄い柔い革で製した、其高さ一掌を超えざるべき履を穿いた。恰もわれ等が手袋に當るものであり、其足趾のところは二部より成り、拇趾と他の四趾とを二つに分つのであつた。この履の下にはスカルペ——と云はうよりは寧ろスヲオレと云ふべきものを穿く。これには褶が無く、唯半圓形の皮が附いて居て、それに足をはめるのであつた。さて最後のものは大小の刀である。これは日本にては廣く用ゐられ、十四歳以上になれば、男の之を帶びぬものとてはない。いとも精巧なる鋼鐵にて作られ、堅甲と雖も亦能う之を斫ることが出來た。其鞘こそは高貴の人人の間に在つては華奢の極を盡したれ。即ち各種の光彩を有する眞珠貝の小片と黒色の漆と相交錯して、恰も天然の斑紋ある石かと見ゆるものであつた。

さてこたびはかかる服裝して車に乘り、人のえ看ぬやうにと其扉を閉したに、それでも此事がいち早う知れ渡つて、多くの人人宮殿に群集して、皆が車から下れうとしても下りられず、下りても歩を運ぶことのかなふまじいほどであつたれば、宮廷の役人ども、警吏、禁軍と力を併せて、やつとの事で道を開かせた。王宮の役人に案内せられて、十二の部屋部屋を通つた。その中には國王の

寢室、食堂もあつた。その一番奥の間(ま)には國王が太子及び王子と共に居たまひ、カッパを著け、鉾を執り、大官に謁見を賜ふ時の容態にて皆を待たせたまうた。皆は陛下の御前に進み出で、恭しう三國主の書翰をば捧げたてまつつた。是れは日本及びカスチリヤの語(ことば)を以て記されてあつた。その上になほ口上にてその使命の趣を申し上げた。皆は日本の基督教徒のうちの大名として陛下の御手を吻ひ奉り、陛下の日本基督教徒の爲めに盡されたる恩を謝し奉り、なほ行末も長う恩寵を賜はられうずる旨を願うたのでこそはあつた。さて終に皆の日本より齎らしたる精巧な細工の品品を獻上した。陛下はそれらの辭を聽かれ、また喜うでその贈物を受けられた。御手を賜はらうずるとて皆を近う呼ばれた。されども御手を賜ふことなく、却つて皆のもの一人一人慈しみ抱擁せされたまうた。同じ事をば太子及び王子たちにもせさせたまうた。皆のわざわざこの國をおとづれ來たことに對して、また彼等の國主の陛下に寄せたる誠心に對して最も優渥なる感謝の辭を賜うた。そのあとにて國土の事に就いて語りたまひ、またいろいろの御下問を賜うた。その間は太子及び王子たちと共に、彼等の傍に起立のままで一時あまりに居たまうて、こよない愛情を示され、列座の面面、別してドン・クリストフォロ殿を驚かしたまうた。陛下のかかる恩寵を示されたるは未だ嘗てこれ無

き所なりと後で人に話されたと云ふことである。

終に、王宮の禮拜堂の晩禱を聽かうず欲りするやと問はせたまひ、皆の欲りする旨を答ふるや、人をしてそこに嚮導せしめた。唱ふ者、その他の者、用意既に整うてあり、晩の祈に二群の合唱團の奏する賞歎の音樂をもて始まり、其妙たること之に優るものはあるまじいとこそ思はれたれ。皆は聖壇に近き席に通され、そこに居並うた貴人たちはみな能う公子たちを瞻望することが出來た。晩禱、最終勤行は夜まで續いたれば、豫め定めた如く、其日のうちに皇后陛下に拜謁することはかなはなくなつた。皇后陛下には久しう皆を待たせたまふのであつたに。さうして式後直に其宿舍に還つた。その御寺にてはパドレたちが燭を手に持して、多くの貴人たちとうち群うて皆を待つた。その中には二人の司教も居た。一人はプラセンチア（西、Plasencia）の司教で、一人はサラマンカ(Salamanca)の司教である。

されば その翌くる日には皇后陛下に拜謁することに定めた。皇后陛下よりはその爲めに特に二輛の御馬車を遣はされた。人人がそれに乘り終つた所へ、更に國王陛下よりお遣はしあつた御馬車が著いた。これこそ國王陛下が皆の事を深う御心に懸けさせたまふ證であれば、人人は改めてその車

に乗り移つた。

皇后陛下の下され賜うた御慈(おんいつくしみ)はまことに其御徳、其御才(おんさえ)に相かなふものであつた。慈愛と歡喜とをもて皆に接吻を下され、さまざまの信心深い物語をせさせたまうた。

皆はまた或る日、國王陛下の御馬車にてエスクリアレ（西、Escorial）の名高い修道院を見に赴いた。陛下にはそこに人を遣はして皆を接待せしむるのみでは滿足したまはず、更に其修道院の長にも御勅書を賜はつて、心ゆくばかりに皆を款待せられいと命じたまうた。かうして皆はこよない厚遇をば受けて、其夜はそこにて一宿なし、翌くる朝は、まづミサを聽きすまいたのちに、其地の見べきものを見ようずとて出て行つた。第一は聖堂であり、次では豐富な寶庫であり、そのあとにて圖書庫にも行つた。其庫のうちには各國の語(ことば)もて書きつづられたる數多くの書籍ども、何れも美しい裝幀でしまはれてあつた。そこを立ち出でて修道院の建物を見物した。是れは四つの部分より成り、各其庭園を具へてあつた。その第五部は國王の所有に係るものであつた。各部とも無數の房室を備へ、六階相重つてあつた。其造構既に甚だ莊麗である所に、更に之を飾るに彫刻像、畫圖、精巧なる大理石柱、其他もろもろの高價の物品を以てして、其數とても算ふることが出來ぬほ

どであつた。

翌くる日は、聖體拜受を濟いて、修道院長の心づくしの朝餉の馳走を受け、またマドリドに歸つて行つた。發向の日もはや迫つたが、その間にも王宮の多數の貴人たちの訪問を受けた。その中でもフランシヤ（佛、France）の基督教王の使節は、其國王の御名に由つて、皆に、イスパニヤ、フランシヤの國内にては出來得る限りの援助を爲すべきことを約し、羅馬よりの歸るさにその國を過ることもあらば、國王は喜うで皆を引見したまふべしと云ふことを告げたのであつた。

其間にもまた見物する値打のあるほどのものをば凡て見に廻つた。例へば王宮の武庫、主馬寮、寶玉のやうなものであつた。國王陛下の御命令もあつて、それ等のものは一つ一つ精細に示されたのである。

さるほどにいよいよこの地出發の時が來た。陛下はカルタジエナ(Cartagena)、アリカンテ(Alicante)の艦隊司令官に御勅書を賜うて、乘船の事、あらゆる便宜を計るべく、又その旅の費用は一切陛下より支給せらるべきことを申し下された。同じやうな御勅書はムルチア（西、Murcia）の總督及び羅馬駐劄の大使たるオリワレス伯爵（西、Conde de Olivares）にも遣はされた。取り分

けオリヴレス伯爵には懇ろな御消息賜はつて、日本使者の一行をば最も好く待遇すべく、又他の家家にてもそれに倣つて一行を款待すべく望まれ、その上にそれ等の顛末をば逐一報告すべきやうに命ぜられたまうた。またスパニヤの國内にあつては到る處にて彼等の意のままたる行動を許し、其費用をば支辨すべきことを命じたまうた

出發に臨み、一日（その日はサンタ・カテリナの日であつた）陛下には一行の止宿せる耶蘇會の御寺に御幸あつた。トレドのカルヂナレ、宮廷の大官が隨行した。この事は公子たちに取つてはこの上もない喜であつたのである。

十一月の廿六日にマドリイを發向なし、ひたみちにアルカラ（Alcala）に向ひ、夜遲く其地に到著した。耶蘇會のパドレたちのコレジオに達した時には、既に群集が充滿したれば、已むを得ず門扉を鎖いて一般の民衆を遮斷し、纔かに貴人有司の訪問を許した。かうして二三時間が經過した。それらの人人のうちにはこの地の大學の學長や多くの教授たちもあつた。

翌くる日には公子たちに歐羅巴の學問の範を示さうずるとて、一行をコレジオに招き、神學の公開討論を擧行した。講堂の裡には入りきれぬほどの人であつたが、その中にもモンデシャル公爵、

（西、Marquez de Mondejar）の子息ドン・イニゴオ（西、Don Iñigo de Mondoça）殿といふが主として辯論せられた。

　また大學の方でもマエストロ・デ・フイロゾフイア（西、Maestro en Philosophia）の位の授與式を行うて人人に示さうするとて皆をそこに招待した。學長は教授一同、古き神學の學士と共に臨場して、公子たちをば扉の處まで出迎へた。かかる例は王族或は法王の使節を迎ふる時のほかにはないものであつた。恭しう挨拶を述べていとも懇た歡迎の意を示して後に、皆を導いて圖書庫、寺院、その寶物などを見せしめた。殊に寶物の縦覽といふは常には唯一年に一度許されることであつた。さてオルガノ及び妙な彈奏をなして、皆を今日儀式の行はるべき大講堂に案内した。

　ここにては司教、公侯の坐すべき貴賓の座に据ゑられた。學位を授與する職責を有する大法官はいつもの香料を齎らして、いとも嚴肅にして光彩陸離たる演説をなし、日本公子の事に關しては、とり分け其恭謙篤信に對して多くの頌辭を述べた。其辯舌には火の如き熱情が罩つて居り、居並ぶ面面も、其心のうちに同じ思があつた所で、皆この上もなう滿足し、唯其演說を喝采したに止まらず、又口口に話し合うて賞讃した。叡智學識で名の高い學士たちも感極まつて啼泣した。最後に學

士たちに位を授與し、また日本の公子たちは、各一對の手袋を銀の皿の上に載せて進呈した。さうして、國王であらうともかかる折はまた同じ獻品を受くるが慣なれば、公子たちにも之を取られうことを望むといふのであつた。

次の日は殉教者ジュストオとパストオレの御寺（西、la Iglesia de los Sanctos Martyres, Iusto, y Pastor）と云ふに參詣した。そこの僧侶は卓越せる人人より成るものであつたが、皆皆一行を門まで出迎へ、之を大聖壇のほとりに導いて、さるべき儀典を擧行した。

十二月の二日、一行のベルモンテ（Belmonte）に入るや、また今までに劣らざる款待を受けた。ドンナ・フランチエスカ・デ・レオン夫人（西、doña Fransisca de Leon）は已が馬車をば六里の先まで遣はされた。その別當は騎馬で之を奉ひ、一行を馬車に接待した。やや遅れてコルレジドオル（El Corregidor）、僧會會員（Canonici）を始め全市の人人、或は騎馬、或は徒歩で之に赴いた。一行の市に入るや禮砲は放たれ、いろいろに工夫を凝された美しき花火が打ち擧げられた。この祭典の間を縫つて耶蘇會のコレジオまで行くと、そこには既に絨毯、畫圖、華麗の臥床を備へたる室房が設つてあつた。

此市には二日間滯留した。一日、朝餉の後大寺院といふに參詣した。僧會はみな祭服を著けて一行を門まで出迎へ、その爲めに特に新作したスパニヤ國の語の頌歌をばオルガノに合せて合唱して皆を喜ばせた。その夜の一時には皆を通俗演戲に案内した。そこでは人人がいとも輕妙に、一行の羅馬に到著する趣を仕組みたる脚本を演じて皆を喜ばしめた。

さうしてムルチア（西、Murcia）に赴いた。この市では皆の到著の消息を聞くや否や、多くの貴人が出でて之を迎へた所で、其裡には騎士會員、有爵者たちがあつた。一百の騎士、多數の徒歩の人人が之に同伴した。

さて一行市に入れば、祝の鐘は高鳴りわたり、また諸處の喇叭の響は之に和した。市人は高意の上、街道の上に充ち滿ちてあつたばかりでなく、又屋の棟に登つて行列をば打ち望うだ。皆はひたみちに耶蘇會のパドレたちの御寺に赴いた所で、御寺の伶人は善い音樂を奏して皆を迎へた。さはあつたが一行は群集に遮られて御寺の門に入る事が出來ず、警吏の骨折もその甲斐なう見えた。

このコレジオに屬する莊園が市を離る一里ばかりの處に有つた。一行はそこに赴いて聖誕祭の前の夜まで二日間逗留せられた。始めて少閑を得た所で、日本に發する消息を書い認め、遂に羅の便

を待ちわびてあるらうする故國の人人に、この頃の旅の容態など細細と書き知らせたのでこそはあつた。

　またインノチエンチ Innocenti の日には市の有司に嚮導せられて騎馬で大寺院に參詣した。ここでも一行を遇すること鄭重を極め、皆をば合唱壇のもとも好き席に請じて晩禱を聽かしめた。その日にはまた他の寺寺、僧房をも歴訪して、各所の僧たちも亦多大の愛情、歡喜をもて皆を接待したことであつた。

　ムルチアを立ち出でてオリグエラ（西、Orihuela）に向ふと、市を距る半里ばかりのところで人の出迎ふに會つた。人人は疾よりそこに一行を待ち、或は手に炬火を秉るものもあり、既に市に近い氣色を感得せしめた。さうしてその後からも旗を立て、制服を著けたる多數の人人善馬に打ち乘つて來り、それに續いて貴人の群、最後には普通の市人が童子までも引連れて群ひ來つた。さて城廓の旁を過ぐると、多數の火砲が挨拶の禮を鳴らした。舍館はドメニコ派のパドレの僧院であり、室濶く、市は特に之を華潔に裝飾した。夜に入るとまた市人群ひ來つて、一行の宿舍の窓の前で毬の戯をなして見せた。イスパニヤにては馬上にて之を演ずるのであつた。即ち群は二組に分れて、

逃げる方追ふ方あり、各の組かたみにその方となつた。この演戯は烱烱たる炬火の下に行はれ、日本の公子を喜ばしむることこの上もなかつた。公子たち、このオリグエラの人人こそ世にも情あるものとこそ見ゆれ、その敏捷慇懃なる動作の裡に能くその心のうかがはると申された。

エルケ（西、Elche）は亦大きな市であつた。そこに著いたは既に夜の事であつた所で、炬火の光かがやかしい中に總督、法官、市の有司がいち早う一行を出で迎へた。騎馬の者廿五人、徒歩は三百人にも餘つた。市に著けば又鐵砲が放たれた。その夜はいろいろの鄭重な款待があつて翌くる日發向の砌には、總督はまた多くの貴人と共に一行を半里がほど見送られた。

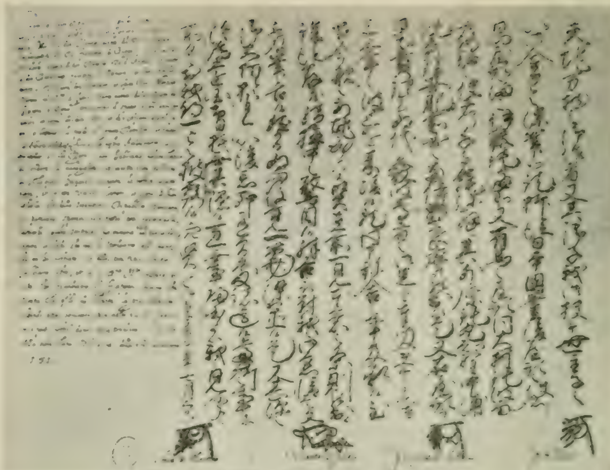
最後に一行の止まつたは海の都と知れたアリカンテ（Alicante）であつた。またまた大勢の出迎を受け、うち喜ぶ人人、殷殷たる鐵砲の裡に市に入つて、總督の屋形の客とはなつた。そこは既に國王のプロエデトオレに由つて心ゆくばかりに準備せられてあつた。エピフアニアの日（譯者註、一月七日）には多くの市人群ひ來つて一行を大本山に嚮導し申した。御寺には一つの天蓋にて飾られ、四つの茵を備へたる四つの座が設けてあつた。船の艤裝を待ちながら六日の間アリカンテに逗留した。船は國王の命によつて、最も好き室が皆の爲めに準備せられてあり、其裝飾も華麗で

あつた。乾餅、羊鶏、菓子の類も澤山に備へてあつた。さて船がここを出帆して二度までもかなり遠く航行したが、いつも同じ逆風に出會つて元の港に引返さではならぬやうになつた。第三回の時には、また別の暴風に會つて、前にはえ進まれず、アリカンテにはえ戻られぬ所で、已むを得ず廻り道をしてマジオリカ（西、Mallorca）の島に向ひ、アルクヂア（Alcudia）の港に到り著いた。その事が國内に傳つたれば、一群の兵士ども、旗を立て、隊伍を整へて、或は騎馬、或は徒歩で急ぎ船に赴いた。懇ろに一行をいたはつて、日曜日には其市のメサを聽かせた。市は市とて一行を待つこといとも鄭重であつた。それからなほも四日のほど其地に止つたが、いろいろの見物、饗設で日を暮いた。その間はその港より二十五里ばかり隔つたこの國の主な都に滯在してゐたのである。さある所でいよいよ好い風に會つたれば、その島に別を告げ、こたびはリヷルノ（Livorno）の航路を取り、常に追風を受けつつ航海した。この旅の間に、神の彼等の上に垂れたまうた蔭護をば、その後海上に於て知ることが出來たのであつた。さう云ふは、上に述べたやうに、一行が難風に妨げられたが爲めに、アルジエリイ王及びその一族、また土耳古の戰艦の魔手から逃れることが出來たのであつた。この土耳古の艦はその頃海上に現はれて、堅く武裝した大艦すら掠奪したと申す。

第六章

伊太利亞到着の事、またフイオレンツア國通過の事

さるほどに一行の人人伊太利亞の地に到著せらるる。是れぞ久しう欣求する所であつたれば、リヴルノ（Liuorno）に上陸した時の皆の滿足言ふに及ばぬことでこそありつれ。此地はトスカナ太公（Gran Duca di Toscana）の領土である。日は千五百八十五年三月の初日であつた。其地の總督は一行到著の報を聞くや、直に戰艦を遣はして彼等をば己が屋形に迎へ、同時に使者を太公が許に遣はされた。太公は既に久しく一行の到著を待ちわびて居られたれば、總督に御教書を返されて、最善の愛撫と榮譽とを以て一行を待つべしと命令せられた。それと共に一人の英吉利人の役人に一輛の馬車、二輛の儀裝車を率て日本の公子の許に赴かしめ、己が名にて彼等を迎へ且つ之を其住むピサ（Pisa）の都に招かしめた。皆はこの招待をお受け申しはしつれ、航海の勞を癒さうする爲めに、なほ幾日かその地に止まり、その間に海上一里ばかりなる燈臺、また城廓などを見物した。一行がその城廓に到著すると人はそこに有る多數の大砲を放つて敬意を表した。



第三十四圖　四使者の手書

暮くれば、かの馬車及び儀装車に分乗してピザに向ひ、遠路はるばると一行を出迎へたる多數のピザの貴人に伴はれて其市に入つた。時は第十九時の頃であつた。一つの屋形が皆の爲めに準備せられてあり、太公の舍人、侍僮が皆の指使を待つた。ドン・ピエトロ・デ・メヂチ殿(Signor don Pietro de Medici)が一行を訪問せられて、之に食事を遣はされた。一行は大本山と其多數の善美なる寶物とを見ようと欲りせられ、御寺に到るや、いとも恭しう之を禮拜接吻して、之を觀る多數の民衆に、その信仰の好い模範となつた。

さてその日も夕となつた。太公に謁するに最

もふさはしい時刻であつた。それにはまた日本の衣服を著て往くのが最も太公を喜ばす道であるらうと思はれた。かうして皆のそれぞれに用意を整へて居る所に、太公は之を迎へうする爲めに三輛の儀裝車、獨逸護衛兵及び多數の貴人を遣はされた。さてそれ等の人人に伴はれて、かずかずの燈火の光に照されて、皆は急ぎ屋形に參上した。太公は二人の弟をして皆を門前まで迎へしめ、又自らも階段の處に現はれ、ここにて皆を接吻してこよない愛情を示されたが、わけても、遠路はるばるとこの國に來た基督教公子をば、この國の誰よりも先に己が屋形に迎ふるを得たるは、偏に主なる神の御恩寵にてあるらうと云ふことをば繰り返し繰り返し申された。日本の公子たちは通詞を介して之に答へられ、耶蘇會のパドレたちに由つて、その宏大な威力の遙かに日本の國までも聞えてある太公の領土に、今親しく上陸することを得たは、身にとつてこの上もない滿足であるといふ旨をば申された。かうして互に鄭重な挨拶を交はしたのちに、太公はドン・マンチオの手を取りたまひ、それを先に立てて、皆を家の裡に請じ入れ、各の席に導かれた。さうしてまたドン・マンチオ其他の人人をば太妃の御居間に案内せられ、太妃も四人の公子たちに接吻を賜うた。太公はまづドン・マンチオを引いて己が傍に坐らせ、なほ他の人人、殊にドン・ピエトロ（譯者註、此人の何人な

ろか、未だ考へず）にも、一一その手を取つてそれぞれの座を與へられた。少時(しばし)が程は或は敬愛に滿ちた辭令を交はし、或は彼等の祖國の風土人情などに就いて問ひつ答へつ話し合はれた。皆が別を告げた所で、太公はまた自ら一行を門の邊まで伴はれた。やがて人を遣はして、謝食祭の第一日までその居邸に逗留せられたい旨を申し送られた。一行は羅馬へ急ぐ身でこそあつたれ、太公の好意をも無下(むげ)に御けもせられず、その請に應ずることにした。其間に、カルネヴアレの日には一行を伴うて鳥の獵に赴き、又彼等の爲めに狂言を興行せしめたりなどせられた。水曜日(チェネレ)（譯者註、謝食祭の第一水曜日）の朝には晌數のパドレ・サン・ステフアノの御寺に導かれた。そこの聖壇の一方には、太公は甚だ莊嚴なる座に着いて居られたが、一行はここにて再び太公に見參たし、その莊嚴の儀式を陪觀した。ここでは騎士たちが衣を取つて、今日大首長(グラン・マエストロ)として白色の長袍を著けた太公に對して忠誠を誓ふのであつた。

式後この御寺の貴きレリクエや、パドレたちの寶物(トレゾロ)、邸宅(パラツツオ)を見に赴いた。さうしてそれ等の孰れも宏大なに感嘆して、其富、其威力、わけても其仁慈なは、まことに太公といふ稱號に背かぬものであると申した。

さて太公に御暇乞申して、多くの人人に見送られ、フイオレンツア（Fiorenza）に向うて出發した。二里ばかり行く所に、瑞西人の士官護衛兵を引率して來りて一行の嚮導をなした。

耶蘇會の寺院に到著して車を下りると、そこには多數の市人來り群うてあつた。法王の大使もまた來つて彼等を訪れた。

公子たちはパドレのコレジオに宿泊せうず望うだに、太公の執事は之を肯じなかつたれば、さらばとて再び馬車に乘つて太公が屋形に赴き、そこに館られた。款待善美を盡したは說くまでもあるまい。フイオレンツアの貴人、高僧は皆來つて彼等を訪れた。その中にてもとり分けカルデナレ大司教台下には、一司教を遣はして彼等の平安を祝せしめたまひ、その返禮の爲めにとて皆が大司教台下の許を訪れると、自ら十字架を手にしつつ、階段の處まで出で迎へ、時いま斷食祭の間であれば紫の衣を著けてあるべき筈なに、特に猩紅の禮裝をなしたまひ、彼等の此地に到著せるを祝することいとも莊重であつたのである。皆にかずかずの贈物を遣はされ、その辭去するに臨んでは、屋形の門まで見送りたまひ、なほそれにても足れりとしたまはず、後日親しく一行を其旅館に訪れたまうた。

人人のこの地に逗留すること五日であつた。其間に最も善き宮殿、庭園また多くの寺寺、その寶物などを見物した。その外に出づる折は常に多くの官人及び三十の兵士之に隨從した。これ等の者どもは宿舍、旅中の護衛に任ずるものであつた。

フイオレンツアを辭去する時には、太公は一人の貴人を一行に附添はせ、その領國のうちにては凡ての費用を支辨せしめ、又到る處に一行を厚遇せしめたまうた。

三月十四日、一行はシエナ（Siena）に入つた。その入市に先ち、この市の多くの貴人、武官、とり分けこの地の大司敎は、自ら市門を距る半里の處まで來つて、極めて莊重に一行を出迎へたのである。一行は大司敎に謁し、馬を下つて、その馬車に請ぜられ、直接に總督の屋形に赴いた。皆は今までの慣はしの如く耶蘇會のパドレのコレジオに止宿せうず欲りせられたが、太公の執事の懇望もだし難うして、そこに赴くことになつたのである。

翌日は大本山に案内せられた。奏樂の裡に大司敎に迎へられ、その後そこの寶物を拜し、いつもの如き信心を示して民衆の模範となつた。次の日には**ジエズウ**のパドレたちのメサを聽き、食事の饗應を受けたるのち、いよいよ羅馬への首途に就いた。（「思想」昭和二年五月號。）

四遣歐使節の歸朝

（岡本良知譯註）

此に譯出せるは是れポルツガル國アジユダ圖書館所藏寫本49—IV—57、Apparatos para Historia ecclesiastica do Bispado de Japam. 1588—1593のうちの第二十五章なり

第二十五章

千五百九十年の消息の一

如何にしてパドレ・ギジタドオル・アレサンドロ・ワリニヤアニの、他の耶蘇會のパドレ、イルマン並にロオマに赴きし四人の貴族を伴ひて日本に着きしかといふこと。

千五百九十年、エンリツケ・ダ・コスタ（Henrique da Costa）の船、七月二十八日を以て長崎

に入港せり。此船にてパドレ・ギジタドオル（巡察師父）はロオマに赴きたる日本貴族四人ドン・マンショ（註、伊東修理亮祐益）、ドン・ミゲル（註、千々岩清左衛門）、ドン・マルチイニョ（註、原某）ドン・ジュリオ（註、中浦某）を伴ひ來れり。該船並に同時に支那より同行し來れるジャンクには尚ほ耶蘇會のパアドレ十二人、イルマン四人分乘してありき。

パドレ・ギジタドオル、四人の貴族及びその他の耶蘇會士の豫ねてより等しく熱望し居たりしこの到着の事は、啻に余等のみならず基督教徒の總ての上に、天の新しき光輝の降れるが如くにて、慰安、歡喜の大たるものありき。さればこれ等基督教徒は皆そのアルマの愉悅を現し盡はすに或極端なる方法を以てせり。且つまた既に記せしが如く、パドレ・ギジタドオル及び貴族四人に見えんとて所所より人人の參集せる程彼等一行の動靜は人の崇敬を受けたり。彼等は實に人人を驚嘆せしめしなり。

船の長崎に着ける日の翌日、ドン・バルトロメオ（註、大村純忠）の息ドン・サンシヨ（註、大村喜前）はその兄弟、一族及び多くの貴族を引き具して、其從弟なるドン・ミゲルをはじめ一行の人人を見んが爲めに大村より來れり。次の日には、また有馬のドン・プロタジオ（註、有馬晴信）及びド

ン・レアンの兄弟は多數の貴族を率ゐて參じたり。とはその領土を出で、海上十二レグアを來れるものなりき、――ドン・プロタジオは平素陸上を徒歩し、甚だ緩徐たる旅行をなすを常とせしに拘らず、――。かくて、パドレ・ギジタドオル、四人の貴族並に同じ船とかのジャンクとにて著到せるポルトガル人等を見て甚だ滿足し且つ驚喜せり。

またこよなき貴客たればとて十五、二十、三十レグアを遠しとせず、訪ね來りたる貴族等多かりき。これに就きては更めて記す所あるべし。此に集り來りたる多くの貴族のうちには、男子のみならず、女子もまた少からず、亦各處より來りてパドレにその來朝の祝詞を述べたり。自ら訪ね來るを得ざる人人は親しく手紙、傳言を送りこしぬ。來往かくの如く繁かりければ、遂には異教徒さへもパドレを見んとて多く集り來るに至れり。

パドレ・ギジタドオルの來朝を機とし、よき慮をもてるキリスト教徒の説に從ひて、殆ど全國に教會は開かれたれども、パドレ・ギジタドオルはまた同じキリスト教徒の意を徴して、祝典を擧ぐるに當りては謙讓を旨とし、その他何事も華美ならぬやうに心掛くるに若かずと考へたりき。是れ關白に聞えてその怒りを買はざらんがためなり。

本年は二百四十人の耶蘇會士到着せり。そのうちパドレ四十二人、他はイルマンなり。僧舎及び駐在所（レシデンシャ）に於けるパドレ等の主たる勤行は教の弘通、異教徒改宗のこととなり。また洗禮を授け、埋葬をなし、告解を受け、サクラメントの勤をなし、牧人の行、耶蘇會の事務を執り、神のミセリコルデアに賴りて教徒に馴化を奉ることとなり。かかる勤行は、異教徒の間に、絶えず我が聖法の信賴を弘め、且つ我が教に對して尊敬と親愛との念を增さしめたり。

ドン・ミゲルは船の着ける折柄あだかも病床に臥してありき。支那より日本への航海の間は全く臥床の人なりしなり。ドン・プロタヂオは、出で迎へたるパドレ・ギジタドオル、ドン・マンショ及びその他の貴族と初對面の挨拶を交へたる後、ひたすらに病床を訪ねドン・ミゲルを見たり。三時間若しくは更に永き間、くさぐさの物語りし、世の常ならぬ親愛を示して之を犒ひたり。且つその聞見せし諸事、或は（既に詳かに報告せらるるところありし如き）ローマ教皇陛下並にその他キリスト教の諸王侯より受けたる榮譽厚情等の話を聞きて、皆羨望に堪へぬものなりと申したりき。またドン・プロタジオは一行の齎し來れる珍らしき織物衣服などを驚嘆し、教皇陛下、皇帝陛下（註、フェリッペ二世）の一行の人人を遇せられたる寛容を知りて、曾て了解に難かりしところも今は

納得し得たり。今に至つて知るところを初より會得してありしならんには已が弟にしてドン・ミゲルと同歳なるドン・レアンをも一行に加へて派遣せしめしものをと惜しみけり。

この時、同じくドン・バルトロメオの繼嗣にして、ドン・プロダジオ並にドン・ミゲエルの從弟なるドン・サンショもまた長崎に來りてありぬ。之に與して、その兄弟、一族も到り、共に一行の族中にありし珍らしきことどもを識らんとせり。

日本を發してより後長き年月を經たりしが故に、一行の者孰れも皆甚だ成長し、其樣子もいたく變り、訪ね來れる人人は、ドン・ミゲルほか一同を少しも見知りてあらざりしほどなりき。また一行の人とても、幼くして別れしなれば從兄弟、一族の者をも覺えて居らざりしなり。蓋し訪ね來りし人も、訪ねられたる人も、その骨相、顏容皆往時と異なり、ここに八年またはそれ以上の時を經て相見るに到りしなれば、かたみ交りに熟視するも、徴なきに驚きたりしなり。

さればドン・ミゲルもその從兄弟を見覺えてはあらざりしが、有馬殿をばやがて識別するに到りぬ。有馬殿はドン・ミゲルの日本を出でし頃既に大人なりければなり。ドン・マルティニュまた已が兄弟に識る所なく、兄弟等もドン・マルティニュを覺えてあらざりき。更にをかしきは、ドン・

ミゲルの母の己が子を見知らずして、却つて他の人人の之を覺えてありしことなり。ドン・ジュリオの兄弟はドン・ジュリオを知らざりき。ドン・マンショが母の日向よりはるばる子を見んと長崎に來りしときもまた同じやうなりき。

日本人貴族の使命の、我が主たる神の御恵によりてよく完成せしことの、廣く會得せられたるは事實なり。何故とならば、この國の貴族、キリスト教徒等は、一行に見え、そのロオマ教皇陛下を始め諸王侯の尊重並に歐洲のことどもに就いて語るを聞かんとて、到るところより輻湊し來りしが程なりければなり。一行の物語るところは、聞くものをして常ならず喜び樂ましめたり。而して最も重要なるは、皆其語り出づることごとを信用したりしことなり。これに由つて、日本にては余等が國のことに就きて人人の始め抱きたりし見解の今は漸く變じ來れり。我等の日本人イルマンのみならず、會外の貴族、教徒までも、一行の述ぶることより、皆等しく最も烈しき效果、感銘を受けたるは疑あらざるところなり。蓋し、語る者は是れその同國人なり、語る所は是れその親しく見聞せる事實なり、而して己が國語にて余等が國のことを述べ、また質し尋ぬるところは總てよく説明なせりしたれば宜なりと謂ふべし。かくて人の耳にせるところはその心中に大なる銘刻をなし、而

してロオマ教會の尊貴とキリストの教法については新なる了解をなすに至れり。こは他の外道、異教の民、國國の教法を受け入れたるとは甚だ趣を異にし、かの尊貴なる歐洲の諸王侯より親しく之を授けられたるものなるを知りしことにあるたり。

人人は皆、一行の歐洲より携へ來たりし多種の樂器の奏する音律及び歌曲を聞きて悦ぶこと一方ならず、且つさほど雜多にしてしかも互に相應ずる微妙なる諸音の快適なるに驚けり。

有馬殿のパドレ・ギジタドオルその他の人にしばしの別れを告ぐるにあたり、懇願せしは、教皇陛下より已に贈られし聖十字樹（サント・レニョ・デ・クルス）、衛劍並に帽を飾り、いち早く盛大なる裝飾と祝宴とを催さんほどに、パドレ及び貴族四人の足は最初有馬に向けらるべしといふことにてありき。パドレ之に答へて、已等は配流謫行にも似たる身にしあれば、今はさほどの歡迎の宴を開きて露はに祝祭をなすの機にあらざるべしといへり。されどもドン・プロタジオは、關白はこの折あだかも日本の端の國國に於て戰（註、小田原の役のこと）に忙しければ都合惡しからじと申して、歡迎の祝宴を延ばすことをば肯はず、其卽行を主張したりき。かかる程に、數日を過ぎ、かの日本の端の國國の戰ひも大勝を以て終れりとの報知到りしかば、教徒等は皆かかる折柄かの祝

宴を催すは、如何なる方法にてなすとも不適なるべきを悟り、有馬殿も、パドレ・ギジタドオルの京より歸りたる後に之を行はんとて、延期することに同意したり。

　パドレ・ギジタドオルは長崎にて種種のことを指令し決濟したる後、四人の貴族を帶同し有馬に赴けり。その頃はドン・ミゲルの病氣も回復に向ひてありき。パドレが來着を待つてドン・プロタジオが豫ねてより望みたる歡迎の祝を避けんがため、パドレは人の寢靜まれる夜半、ひそかに有馬に到るべき手配をなせりき。されどパドレは直にその到着をドン・プロタジオに傳言せりしかば、ドン・プロタジオ俄に起き出でてパドレを訪ねたり。かかる不意の來問をかこちしかども、パドレのなせる辯明を聞きては心滿足したりき。

　翌る日ドン・ミゲルはドン・プロタジオに見參せり。ドン・プロタジオ甚だ歡びて之を迎へ、せめてドン・ミゲル一人にてもひそかに滯留せんことを希ひ、己と、妻、姑のみにて弟等すら加ふることなく、晩餐を共にしたり。

　その次の日は、パドレ・ギジタドオルと、當時有馬にありし凡てのパドレと、四人の貴族とを招きて款待を盡しぬ。かくてその示せる厚意の數數のうちには、時恰も建造半ばなりし甚だ莊嚴華麗

なる屋舍を急ぎ竣工せしめたることもありしなり。かの屋舍は、前夜、其親密の故をもて、特にドン・ミゲルに看せたる外は、パドレ・ギジタドオルの來國まで嘗て何人にも看るを許さざりき。パドレ・ギジタドオルを始めその他のパドレ等皆この屋舍の華麗と優美とに喫驚したりき。室房は皆華やかに美しく黄金と繪畫とに工飾られたるを看たればなり。且つ屋舍をめぐりて、新に壯大巧妙の極致を盡して城の築かるるあり。そは之を參觀せりし或ポルトガル人の、圖らざりき日本にもかばかりの壯麗なる城ありとはと嘆じたりしが程なり。ドン・プロタジオは、この屋舍、城廓の築造衞とその高邁なる氣品のうちに、己が心膽の大たると、今所領する國土を以て滿足せずその祖父（註、晴純）父ドン・アンドレ（註、義純——事實は兄なり）の昔に返して肥前の王國唯一の國たらんを熱望する人物たるを衒示せりき。こは我が主の心に叶ふところなれば遠からずして望を達するたるべし。

　ドン・プロタジオ、かの屋舍を神の事のために獻上したき旨申し出でたれば、パドレ・ギジタドオルは、その願は正しきものなればとて直に之を許可したり。其日パドレは教皇陛下より日本に送り賜はりたる上衣を着し、宗室より外廊に至るまで之を巡覽せり。それより、正式に飾りて莊嚴に

かの屋台にアグア・ベンタ（聖水）を撒き、銀の提香爐に焚きて薫香を捧したりき。

城内の者は皆、教皇陛下よりパドレに賜はりし上衣(カアパ)を目のあたり拜し、且つはキリスト教のために今一段力を盡すべきことどもを知るところとなりて、心悦ぶこと甚だしかりき。

パドレは有馬には三日留りしのみなり。而して直に加津佐(カヅサ)の僧院に向かへり。この時候なれば加津佐(カヅサ)へは各地のコレジオ、セミナリオ、教舍(カアザ)、駐在所(レジデンシヤ)よりスウペリオオル（長老）等集り參じたりき。パドレ乃ちこのスウペリオオル等と協議總會を開きて、我が主たる神に奉る聖務に關し、或は耶蘇會並に教徒の管理事務に就きて重要なる各種のことを協議決定せりき。總會には十二日、一日六時間を費したり。されど、目前に事多く輻湊し來り孰れも敏活に之を處置する要ありしかば、總會は更に日限を短縮せざるべからざるに至れり。

加津佐にて總會開催の間、四人の日本人貴族は有馬に滯留したり。ドン・プロタジオはかのパドレを招ける時の外に、更に二たびこの四人の爲めに盛なる歡迎宴を催せり。かかる折常に日本にてはたさるる慣はしなる種種の催しもの、舞踏、踊等を携へてこの歡迎宴に參ずべき旨を、領土の諸方へ布達せり。されば領民は皆種種善工夫の餘興を寄じて城に集り來れり。ドン・プロタジオ自ら

も假裝し、一族、貴族を伴ひて參せりき。かくて四人は有馬にて心滿ちたる日日を過したる後、大村にドン・サンショを訪ねんとてドン・プロタジオに暇を告げて出發せり。

有馬、有家にコレジオのありし間は、これをめぐる村村にはすべて布教し、教義を授け、告解せんほどの醇化を與へんとて、コレジオより派せられしイルマン等が勞苦はいかばかり人人の精神を進めたることとなりしか。かくてシモ（註、九州といふこと。卽ち當時のポルトガル人は京都を上とし邊土なるすべてを下といひし意を誤り傳へて、西方すべてが下なるに拘らず、九州のみを指すものと考へたりしなり。このことは「日本教會史」の著者はその第一編第五章に辨別せるを見る。）の到るところ、就中有馬の領内にては、との迫害の折なるにも拘らず、教徒の醇化に、或はまた未だ洗禮を受くるなき者の改宗のことに於て顯著なる效果を擧げたりき。されば諸地方にて千二百九十八人に上る洗禮を授け、且つこれらの改宗に伴ひこれにも益して、後日別に再報するところあらん程目出度きことのありしなり。圖り及ばぬ時變の機に改宗洗禮のなされたるも多ければ、人人への神の攝理、そがうちに如何ばかり大なるか、神の豫定の威力如何ばかり烈しきかを知るべきなり。かの人數は、一には限りなき異教徒の來りて洗禮を受けん折にそなへ七十、八十、九十等端數なき年を限りて定められたる人數を

期待するにも似、二には死をすら猶豫して待つ者には周ねく洗禮を施とすに不足なきパドレの來らん折まで生き永らへしむるが如し。

改宗せんとなす者にそが邪魔を企てて惡魔の加へたる大なる故障ありたれども、この異教徒の數多き改宗を以てしては、惡魔も露はにその威力を失ひたりしとかこつなり。是れ甚だその意味の深きを示すものならずとせず。

附　記

右は初めに斷つた通り、アジュダ圖書館の未刊行の寫本 Apparatos para Historia ecclesiastica do Bispad- de Japam. 1588-1593 中の一章である。

同圖書館の 49-IV-49—49-IV-66; 49-V-1—49-V-34; 49-VI-1—49-VI-10 といふ番號の六十二冊の寫本即ち Jesuitas na Asia の類集は主として東洋に於ける傳教事業或は其周圍の事情を記錄するものであるが上述の日本教會史は其 49—IV—57 に當るものである。

近ころ Voretzsch 氏の Schurhammer 師の意見として記する所に據れば、この寫本は同標題の書の第二卷となるべきものであると云ふ。

既に千九百十二年板の Henri Cordier の日本書目にはその第一巻に當るべき寫本の内容が詳細に傳へられて居る。即ち一五八三年―一五八七年の部分である。（此事既に述べたことある故重ねて詳説しない。）此巻は殊に興味深い諸章を含んでゐるのであるが、今之を何處に求むべきであるか知り難い。

までドン・マンシヨ等の旅行に關しては、古刊の歐文書がかなり澤山あり、上述の日本教會史寫本の前巻にもその二種が包括せられてゐるさうである。然し概して曰ふと、多くは使節の日本を發し、ポルツガル、エスパニャを經てロオマに至り、法王に謁して歸國の途に就き、印度ゴアに到着するまでの行程を記すものであつて、そこより更に日本に歸朝する間の消息を語るものは極めて寥寥である。

手近かな本ではグスマン、シャミヨリ、グラッセ等にもそれに關する記事があるが、それにはやはり間接的といふ憾がある。それでアジュダ文庫のこの一章は、使節の歸朝の模様を精寫し、其間に直接聞見者らしい筆つきがかなりあつて、亦重要なる一文献たるを失はぬのである。記述は甚だ短いが、其古朴なる文章のうちに、八年の旅行を了つて故國に歸つた人人、またそれを迎へる人人、その等い人情が現はれてゐて、無限の感興を惹起するに足るのである。

使節の長崎到着の日はグスマン、シャルヴヲ等孰れも七月の廿一日となつてゐる。この寫本には廿八日とある。孰れが正しいか、今にはかに判定することは出來ない。

予は嘗つてアジュダの是等寫本の印行翻譯の必要なるを説いたことがある。今重ねて之を述ぶることもあるまい、そのうち右寫本類の書目については多少の知るところを述べようと思つてゐる。

而してアジュダ原寫本に就てなされたる、魯魚の誤極めて多き複寫本から、予の爲めに、この勞多き翻譯を敢てせられたる岡本良知氏に對しては深き感謝を表するのである。（「すぱにや・ぽるつがる記の著者識」「思想」昭和二年三月號。）

再註。予頃日ルイシュ・フロイシュが記せる千五百九十年年報、並に千五百九十一、九十二年報を閲し、その巡察師父及び四青年遣歐使者の歸朝後の事を載する極めて精密なるを知つた。そして前掲アマラトス中の章は大體に於てフロイシュ書翰（一五九〇）の記事に倣、或はこれを抄したものではないかとさへ疑はしめる。是等の事に關しては後日更によく考へる所があらう。（同、昭和四年五月追記。）

支倉六右衛門の事

附　アマチが「奥州記」

一、支倉の使命に關する文獻

支倉六右衛門常長に關しては、其名が忽ち燦爛たる劇的空想を喚起する割合には、其史實の傳はること甚だ稀薄である。わたくしが十年前に仙臺に行つた時には、六右衛門の墓と稱せられる小さい石塔が、ただ一つ畠中に孤立して居た。後人の重修した迹も見えなければ、香華を手むくる人もあるまじく荒癈してゐた。

近ごろ京都帝國大學文學部教授新村出博士はわたくしに「粹水存響」乾坤二冊（大正元年發行）を贈られた。そのうちの金城秘韞の下篇に「歸朝常長道具考略」といふ項があり、かずかずの舶來品の名目を記したる中に、一、書物大小拾九冊といふのがある。その註に「日本紙へ認めたるもの

なり　これは六右衞門等覺書關書と見ゆるかな本なり　法敎の事にや草卒の際取りあげて讀みても見ず　尤もよみても解すべきものにもあるまじ　併熟覽したば經歷せし國國の事等の荒增は知るべきか　奇怪の事書あつめしものとも見えず」とある。

大槻文彦氏の右に對する補遺には「余カ祖父玄澤ハ和蘭ノ學ニ通ゼシヲ以テ、特ニ藩主ノ命ニテ文化九年ニ右ノ切支丹道具ヲ臨時ニ開キテ一覽スル事ヲ許サレ、又伊達家ノ舊記錄ノ文ニ因テ此事蹟ヲ考證セシモノ、此金城秘韞ナリ……」とある。文化九年は西曆千八百十二年である。

「右ノ器具ハ明治ニ至リテ、縣ヨリ藩ニ引繼ギ、明治九年、東北御巡幸ノ時、天覽ニ供シ、夫デ東京博物館ニ陳列シテアリシニ、是ハ藩政縣治ニ關スル品ニモナケレバ下ゲ渡シアリタシト明治二十二年春、伊達家ヨリ出願シタレバ再ビ戾サレテ今ハ伊達伯ノ所藏タリ」

「……但シ目錄ノ中ニ書物大小十九册トアルモ今ハ全ク存セズ、往時蟲干ノ時、業指邪宗門ヲ憚リテ遠クヨリ恐ル恐ル見タリ、舊藩士故一條鐵三郎嘗テ蟲干ノ時許可ヲ得テ一覽シタリトテ、其談ニ、六右衞門ガ手記ノ如キモノ、十餘册アリキ、紙ハ多クハ日本紙ニテ其中ニ曆ノ如ク上下ニ日本西洋ノ月日ヲ對照スルヤウ記シタルアリ又道中記ノ如キモアリシ云云、後ニ擧グル仙臺武鑑ニ「支

倉ノ所持ノ具今廳所ニアリ云云、書記アリト雖ドモ曉シ難ク、不可讀云云一トアリ、後ニ載スル常長ガ呂宋ヨリ仙臺ノ作勘三郎ニ送リシ書狀ノ如キ達筆ノ假名書キニテ俄ニ讀ミ得スモノナリ、此手紙ノ文字モ人人讀ミ得ザリシナラム、然レドモ此手帳アラバ讀ミ得ズト云フコトナク、一大考證トナルベキニ失セタルハ實ニ惜ムベシ、常長ガ携帶品ハ縣廳ノ倉庫中ニアリシナリ、黑澤郡水澤ノ人小野凉亭（耶蘇教徒）ノ話ニ明治十二年頃縣廳ヨリ支倉ノ書類出デタリトテ評判シ、何人カ持去リシト語レリト云フ、故秋山恒太郎宮城縣師範學校長タリシ時、縣廳ノ倉庫中ニ支倉携帶品ノ殘餘アラムカト遍ク探リタレド何モ無カリト云ヘリ、舊藩士故増田繁幸、三百年前ノ羅甸語ノ表表紙一バイブル」一冊（紙少ク不足シタリト云）ヲ藏セリト聞キ、支倉ノ手帳十九冊ノ中ノモノカト思ヒ、繁幸死後、遺族ニ搜索ヲ託セシカド、遂ニ見當ラズト答ヘタリ」

支倉手帳十九冊の紛失は實に日本史料上の一大損害である。支倉の手書として前記の作勘三郎に送れるもの（大日本史料に其寫眞を載す）の外予は西班牙シマンカスのアルチボに藏せらるるその眞筆の書翰の一を看た。その寫しは又日本史料に出てゐる。

金城祕韞には支倉將來の品のたほ多數の品目を擧げるが、それ等は主に服裝、馬具、聖像及び耶

蘇教語道具であり、彼の事蹟を傳へるものは、恐らくは右の紛失十九冊の本に越したものはないだらう。

この頃「伊達政宗歐南遣使考」（作史局平井希昌編、明治九年刊）を見たがそれは主としてレオン・パジェスの著書に據つたものであり、支倉六右衛門等の歐洲旅行の事は、今に於ては主として歐羅巴の文獻に便るよりは仕方がないことと思ふ。

さて歐文文獻では左の數種が知られてゐる。

I. Relacion / breve, y svmaria, del / Edito que mōdô publicar en todo su Reyno del / Bojû, vno de los mas poderosos del Iapon, el Rey / Idate Masamune, publicando la Fè de Christo, y / del Embaxador que embio a España, en cōpaña, / del Reuerendō Padre Fray Luys Sotelo, Re-/ coleto Frãcisco, que viene cō embaxada del / Emperador del Iapō, hijo de Seuilla, y / lo que en viaje le sucedio.

Con licencia, en Seuilla, por Alonso Rodriguez / Gamarra. Añs de 1614.

（日本に於ける最强國の一なる奥州の國の王伊達政宗の基督教を弘むべき布告をば其國中に觸れ出したる事並にセビイヤ生れのパドレ・フライ・ルイス・ソテロと共にエスパニヤに遣はされたる其使節の事に關する短き概略の物語。）

右はフオリオ版の二葉（四頁）の印刷物であるが、その第四頁は伊達政宗の使者がセビイヤ市に送つた手翰のエスパニヤ語譯の寫である。即ち

Copia / de vna carta qve / enbiò el Embaxador del Iapon a la ciudad de Seuilla, dando auiso de su llegada a España, y a que, desseando su gracia y fauor.

右の印刷物の事はレタナ書目の第七十六番に出てゐる。そして又マドリィの國民圖書館内に在るMuseo-Biblioteca de Ultramar の目錄の 2956 に出てゐる。わたくしが同處に於て此書を求めると、他と合本になつてゐたが、右の二葉は全部むしり取られてあつた。セビイヤ、リスボア、巴里等の大圖書館にも右の印刷物は存在しない。

支倉の手紙を主とした別のフオリオ版二葉の印刷物もあるらしい。同じレタナ書目の第七十六番として次の名がある。

II. Copia / de vna carta qve / embió Ydata Macamune (*sic*) Rey del / Bojú en el Iapon, a la ciudad / de Seuilla, en que dá cuẽta de su conuersion, / y pide su amistad, / y otras cosas. / 王室印璽 / 仠 Con licencia, en Seuilla, por Alonsa Rodriguez Gamara, en la / calle de la Muela. Año de mil y seyciẽtos y catorze.

是もマドリイ其他の圖書館に存在しない。但しその西、佛語に飜譯せるは諸書に散見する。年號は分らぬが右書翰の西譯、並にそれに對するフエリペ三世の答辭の寫しは右の小冊子に在る。

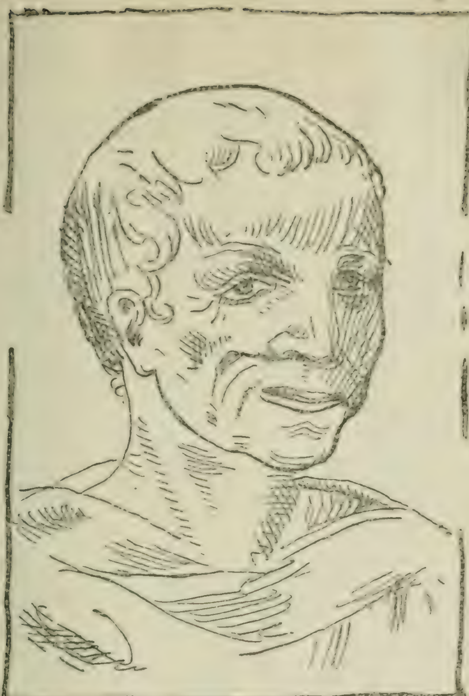
III RELACION QVE / PROPVSO EL EMBAXADOR / Iopon / a el Rey nuestro señor / y la respuesta de su Magestad.

本文の終りに CON LICENCIA / Impre / sso en Seuilla, por Diego Perez とある。

右は四頁本であるが、第四頁には記事なく、支倉の積りらしい人物の胸像を入れる。それは全く想像に出でたものらしく、羅馬人の着る衣に似たるを着け、半歐人半黑人の容貌せる漢子を現はし

てゐる。（第三十七圖はその摹寫であらう。コルチエエ氏日本書目には此冊子の記載を缺く。）

次に支倉及び其従者がマドリイ市の王宮の禮拜堂に於て、國王、皇后の面前で洗禮する光景を細



第三十七圖　古刊本に見えたる支倉の像

叙せるものに、フライ・ルイス・ソテロのセビイャに在るその兄弟に送れる書翰がある。その寫しの印行せられたるは左の小冊子である。

IV. RELACION / VERDADERA / QVE EMBIO EL PADRE / Fray Luys Sotelo de la Orden de San / Francisco, a su ermano don Diego / Cauallero

de Cabrera beindiquatro / de Seuilla, en que se do quenta del / Bautismo que se hizo a el Em-/ bajador Iapon.

本文の終には前冊子と同じく CON LICENCIA / Impresso en Seuilla, por Diego Perez. とある。年號は記してないが、矢張り千六百十五年頃の出版であらう。本書に就ては de Civezza は「極めて希有の冊子」と評してゐる。

III 及び IV の兩冊子は孰れもセビイヤの Biblioteca Colombina に在る寫本並に小冊子類の中に收められてゐる。この冊子はアルカラ僧院の文庫の舊藏である。予は之を寫すことを得た。

V. Relacion qve / proposo el embaiador / Iapon, a el Rey nuestro Señor, / y la respuesta de su / Magestad.

右二葉、本文二頁。第二頁の終に Con licencia / Impresso en Seuilla, por Diego Perez. [1616] とある。In-folio。

是れはレタナ書目に出づとてコルデエエ氏が引いてゐる。マドリイ又セビイヤ等の圖書館に存在

しない。

使節の羅馬入りに關しては左記の諸冊子がある。

VI. Relatione / della solenne entrata / fatta in Roma / da D. Filippo Franpcesco Faxicura, / Con il Reverendiss. Padre / Fra Lvigi Sotelo / Descalzo dell' Ordine Min. Osser. / Ambasciadori per Idate / Massamune Re di Voxu nel Giapone. / Alla Santità di N. S. Papa Paolo V. / L'Anno XI. del suo Pontefieato. / — / In Roma, Appresso Giacomo Mascardi MDCXV. / Con licenza de' Superiori. In-4. 八頁。是れは亦レタナの書目に出てゐる。

右の別本。（パジエス書目にありとてコルデエエ引用す）

VII. Relatione dell' entrata fatta a Roma da D. Filippo Fransesco Faxicura, con il P. Luigi Sotelo, descalzo dell' ordine Minor. Osser., ambasciatori per Idate Massamune, Re di Voxu nel Giappone. In Roma e Firenze, 1615, in—4.

VIII. L' arrivee / e entree / pvbliqve de l'am-/ bassadevr dv roy dv / Iappon dans la ville de Rome, / le 2. Nouembre 1615. / Envoyé par son roy pour / rendre obeyssance au Pape. / Avec leur sorte d'habillements & maniere de viure, ayant / demeuré deux ans en son voyage. / 〔裝飾畫〕/ A Paris, / chez Ioseph Guerreau, deuant la grande porte / du Palais, au Griffon, pres S. Barthelemy. / M. DC. XV. / Avec permission. in—8. 廿頁

右は巴里ビブリオテエク・ナシオナアルに在る。番號は O^{2n} 114.

IX. Recit de / l'entree / solennelle et re / marquable faicte à Rome, à Dom / Philippe François Faxiecura, & au / Reuerend Pere Frere Louys Sotello / de l' Ordre des Freres Mineurs Ob-/ seruantins deschaussez, Ambassa-/ deurs pour Idate Massamune Roy / de Voxu au Iappon. Sur sa Con-/ uersion au Christianisme & re-/ cherche de l'alliance des

Princes / Chrestiens. / Vers la Saincteté de N. S. P. Paul V. l'an XI. / de son Pontificat. Le 25 jour d'Octobre 1615. / Traduit de l'Italien Imprimé à Rome par Iacques / Mascardi, enuoyé au sieur d'Alleri, Gentil-/ homme Poictevin, Domestique de / la maison du Roy. / A Paris, / Chez Abraham Savgrain, / ruë S. Iacques au dessus / de S. Benoist. / M. DC. XVI. / Auec Priuilege du Roy / Pet. in—8. 十六頁。

X. Histoire / remarquable / arriuee le vingt-cinquiesme d' O-/ ctobre dernier, au grand Benefice / la Chrestienté. /〔裝飾紋〕/ A Paris, / Chez Abraham Savgrain, / ruë S. Iacques au dessus de S. Benoist, / M. DC. XVI. / Auec Priuilege du Roy. in—8. 十六頁

右は巴里ビブリオテエク・ナシオナアルに在り。VIII ト同本。番號は O:o 117.

XI. ACTA AVDIENTIAE / pvblicae / a S. D. N. Pavlo V. / Pont. Opt. Max. / Regis Voxu Iaponi / Legatis. / Romae die iij, Nouembris in Palatio Apo-/ stolico apud S. Pet-

rum exhibitae, / MDCXV. / Romae, / Apud Iacobum Mascardum, / MDCXV. / Superiorum Permissu. In-4. 十二頁。

右はシタナ書目に第七十六番として出て居る。之れには左の羅語文は翻刻があるといふ。

XII. Acte de l'audience publique prestee par N. T. P. (原文ノママ) le Pape V (原文ノママ) aux ambassadeurs du roy de Voxu au Japon en Rome le 3. de Novembre au palais apostolique pres de S. Pierre l'an 1615 (trad. par N. Oranus). Avec le recit de leur joyeuse entree et reception en la cite de Rome (trad. par Mart. de la Motte). Liège, chez L. Streel, jouxte la copie imprimée à Rome, par T. Mascard, 1615. 十八葉。

XIII. Actos de la audiencia publicadada de Paulo V. pondifice maximo, a los Embajadores del Rey Vexu Xapon. Mexico, 1626.

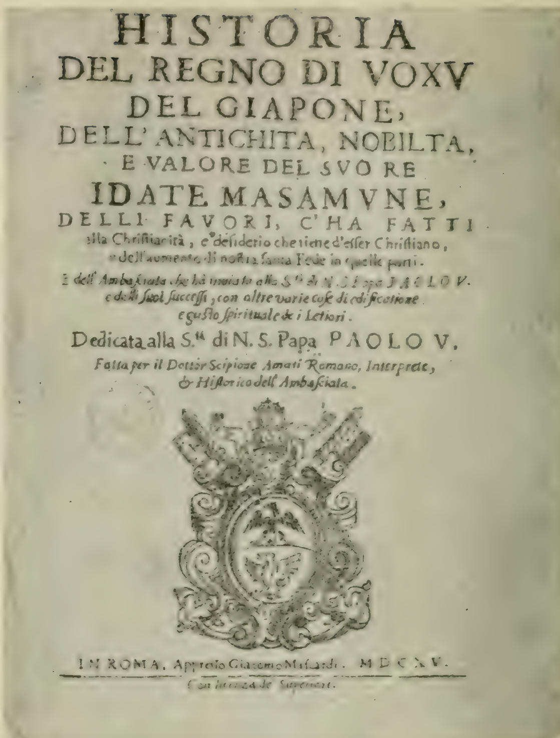
XIV. バツケヱ書目に據るに、右の書の拉丁文の翻刻（千六百廿六年版）があるといふ。

XV. Harangve / celebre et re-/ marquable, prononcée le 27. / Nouembre dernier, de-/uant le / Pape, & Messieurs les Cardi-/ naux : / Ensemble la res-/ ponce du Pape & les Actes de / l'Audiance publique. / 〔佛蘭西及びナヴルラの紋章〕 / A Paris, / Chez Abraham Savgrain rue / S. Iaques, au-dessus de S. Benoist. / —M. DC XVI. in—8. 二十四頁。

是は巴里國民圖書館に在る。番號は O^{2}o 116.

以上は孰れも片片たる小冊子である。其最も纏まつた著述は伊太利亞學士アマチイの作る所の奥州記である。

XVI. HISTORIA / DEL REYNO DI VOXV / DEL GIAPONE, / DELL'ANTICHITA, NOBILTA, / E VALORE DEL SVO RE / IDATE MASAMVNE, / DELLI FAVORI, C' HA FATTI / alla Christianità, e desiderio che tiene d'esser Christiano, / e dell' aumento di nostra santa Fede in quelle parti. / E dell' Ambasciata che hà inuiata alla S.ta di N.


HISTORIA
DEL REGNO DI VOXV
DEL GIAPONE,
DELL' ANTICHITA, NOBILTA,
E VALORE DEL SVO RE
IDATE MASAMVNE,
DELLI FAVORI, C'HA FATTI
alla Christianità, e desiderio che tiene d'esser Christiano,
e dell'aumento di nostra santa Fede in quelle parti.
E dell' Ambasciata che hà inuiato alla S.tà di N. S. Papa PAOLO V.
e delli suoi successi, con altre varie cose di edificatione
e gusto spirituale de i Lettori.
Dedicata alla S.tà di N. S. Papa PAOLO V.
Fatta per il Dottor Scipione Amati Romano, Interprete,
& Historico dell' Ambasciata.

IN ROMA, Appresso Giacomo Mascardi. MDCXV.
Con licenza de Superiori.

第三十八圖　アマチが奥州記の表紙

S. Papa PAOLO V. /e delli suoi successi, con altre varie cose di edificatione: /e gusto spirituale de i Lettori. / Dedicata alla S.ta di N. S. Papa PAOLO V. / Fatta per il Dottor Scipione Amati Romano, Interprete, / & Historico dell' Ambasciata. / 〔紋章〕 / IN ROMA, Appresso Giacomo Mascardi. M DC XV. /—/ Con licenza

de' Superiori. In—4. 黴木辭（拉典）、序文（伊太利）、目錄併せ十六頁、本文七十六頁。

本書はレオン・パジェス氏が其日本基督教史に引用したので割合に廣く知らるるに至つた。さして珍本といふほどのものでもない。わたくしは巴里國民圖書館本（O²o 241）に就いて寫本を作ることが出來た。（その表紙は第三十一圖の如くである。これは筆を以て摹寫したものである。）

この書には二種の獨逸譯がある。

XVII. Relation / Von der Fremden / reichen Bekehrung dess / Königreichs Voxu / in Japon. / Von dem / R. P. F. Thobia Hendschelio, S. S. / Theol. D. ord. S. Francisci / Vertentscht / Gedruckt zu Ingolstatt, durch Elisa- / beth Augermayrin Wittib. / Mit Romisch. Keys. Majestat. / 1617.

黴木辭（獨譯）、譯者序文、原著者序文、目次、本文併せて百六十三頁である。好譯とは思はれない。なほこれに續いて左の附錄がある。

Indianischer Religi- / onstandt der gantzen newen Welt, bey / der Indien gegen Auff-

und Niedergang / der Sonnen : / Schleinigister Form auss gründtlichen / Historien, sonderbar dess Hochwürdigen Vatters / Francisci Gonzagen Barfusserischen Ordenskronicken, / und Didaci Vallades, geistlicher Rhetoric zu- / sammen gezogen, und auss dem Latain in / Hochteutsch verwendt : / Durch / F. Valentinum Fricium, Barfüsser Ordens, F. D. / Matthiasen Erzherzogen in Oesterreich, u. / Beichtva- / ter, und ermelten Ordens n Teutschland, Poln, / Ungern und Boheym General / Commissarien.

この書は東洋文庫に在る。又神戸大倉山の圖書館でも頃ろ此一本を買ひ入れたとのことである。書中に支倉六右衛門の和洋折衷の服裝せる銅版畫が插入せられて居り、その下に Don Filippo Francesco Faxievra / Imbasciatore del Re de VOXV del Giappone alla S^{ta} / di N. S. Paolo PP. V. arrinato in Roma a di 20 di 8brè 1615. の文句がある。伊太利の原版に據るものと考へられる。

アンリ・コルデエエの日本書目にはなほ左の別本を記載する。バツケル書目に據るものである。

VXIII. Relation von der freudenreiche Bekehrung des Königreichs Yota in Japonien. Augsburg, 1617. in—4.

倘片片たる幾多の小冊子がある。コルデエ書目から之を再錄しよう。



第三十九圖
古獨逸語譯本の奥州記中の支倉が像

XIX. Conversion / merveillevse / a la foy catholiqve, / apostoliqve, et romaine, / de Idate Masamvne, Grand / & Puissant Roy de Voxu, à / l'Empire du Iappon. / Auec la lettre du dict Sieur Roy à N. S. P. le Pape / Paul V. pour sa dicte conuersion. / Ensemble l'entree solemnelle

à Rome de ses / Ambassadeurs, le 29. d' Octobre 1615. / 〔紋章〕 A Lyon, / Par Leon Savine, iouxte la coppie / imprimée à Rome, / — M. D. C. XVI. / Avec Permission des Supérieurs. In—8. 三十一頁。



第四十圖 別板常長像

右巴里國民圖書館番號

O² 0 115.

XX. Conversion / dv roy Ydata Maca-/ mvne et de l' edict qv' il a / fait pubblier par tout son Royaume de Boju / au Iappon, comanndant à tous ses vassaux / de receuoir la Foy Chrestienne; & de / l'Ambassade que cest effect il a en-/ uoyé vers nostre S. Pere le Pape & le Roy / d'Espagne. /

Le tout fidellement extraict & traduit des copies / imprimees en Espagnol, auec licence à Seuille, / & à Sarragosse cest presente année. / 〔佛蘭西紋章〕 / A Tolose, / De l'Imprimerie de Iean Bovde, / à l'enseigne S. Iean. 1618. / Auec Permission. In—8. 八頁。巴里國民圖書館、O² o 120.

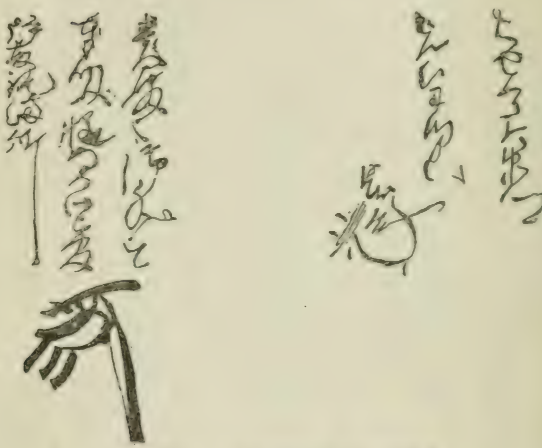
XXI. Fidelle et / notable recit / de la conuersion du Roy Ydata Macamu-/ ne, & de l'Edict qu'il a faict publier par / tout son Royaume de Boiu au Iappon / commandāt à tous ses vassaux de reçeuoir / la Foy Chrestiēne, & de l' Ambassade / que pour cest effect il a enuoyé vers Nostre / S. Pere le Pape, & le Roy d'Espaigne. / Le tout fidellement extraict & traduit des copies / Imprimée en Espagnol, auec à Seuille, / & à Saragosse ceste presente année. / 〔花文〕 / A Tolose, / De l' Imprimerie de Iean Boude, / à l'enseigne S. Ieun. In—8. 十四頁。巴里國民圖書館、O² o 224.

右の諸冊子は多分孰れも西、伊等に於て印行せられたるものを翻譯し或は之に據つて編述したも

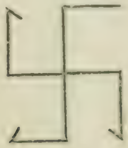
FAC-SIMILE
DELLE SEGNATURE
DEGLI AMBASCIATORI GIAPPONESI

ITO MANCIO
1585

HASEKURA ROKUYEMON
1615



STEMMA DI HASEKURA ROKUYEMON
patrizio romano



第四十一圖

ベルシエエが書の見返し

のであらう。

次はイタリヤ、エスパニヤの各地の市史、公文書などを捜したら支倉が使命に關する重要なる史料が得らるるに相違ない。わたくしはエスパニヤのシマンカスの古文書閣に於て六右衛門自筆の一札を見たが、また例へばセビイヤ市史 (Anales de Sevilla) の千六百十四年の部分（第六百十四頁）にも正宗の使節の到着を記する一節が出て居た。

支倉に關する比較的近年の文獻としては

XXII. Le antiche ambasciate giapponesi in Italia. Saggio storico di Guglielmo Berchet con documenti.—Estratto dall' Archivio Venete, Tome. XIII et XIV.—Venezia Tip. del Commercio di Marco Visenti 1877. In—8. 百三十八頁。

右の書は近頃神戸大倉山の圖書館に入つた。就いて見ると、千八百七十三年（明治六年）日本使節として岩倉右大臣の一行がヱネチアをおとづれたのを機會として、伊太利亞各地のアルチギオ及び圖書館などを調べて、この著者が千五百八十五年及び千六百十五年の日本使節の事を考證したものである。

XXIII. Francesco Boncompagni-Ludovisi, Le prime due Ambasciata dei Giapponesi a Roma (1585—1615). Con nuovi Documenti. In Roma, MCMIIII.—Per Forzani & Comp. Tipografi del Senato. In—4, pp. lxxxxj—71. 肖像及古地圖。

XXIV. Le Japon et Rome du XVII^e Siècle, par M. Drouyn de Lhuys, Membre de l'Institut.—Paris, 1877. In—8. 十六頁。(Compte-rendu de l' Ac. des Sc. morales et politiques の別刷。)

XXV. A Sketch of the Life of Data Masamune and an account of his embassy to Rome by C. Meriwether. (Trans. Asiat. Soc. Japan, XXI, Nov. 1893, pp. 3—105)

XXVI. Breve Cenno di quattro Ambasciate inviate a Roma negli ultimi anni del sedice-

simo secolo da Gamō Ugisato feudatario d'Aidzu. Per Carlo Valenziani. (Actes X^e Cong, Int. Orient., Genova, 1894. IV. Parte. pp. 107—112)

XXVII Les Dainyô chrétiens ou un siècle de l'histoire religieuse et politique du Japon 1549—1650, par M. Steinchen. M. A. Hongkong, Imprimerie de la Société des Missions étrangères, 1904. In-12. pp. IX—454.

最後に記せる六書は孰れもアンリイ・コルヂエエ氏の日本書目に擧ぐる所である。

其他從來の謬つたる歐文日本史書、パルトリの如き、シャルヲワの如き、パジエスの如きは、ルイス・ソテロ自身に關する文獻と共に今茲に揭げない。

（又「大日本史料」第十二編之十二には支倉に關する多數の文書が引用してある。殊に伊、西各地の市廳、文庫等に出づるは甚だ重要なものである。わたくしは實は久しく該篇を見る機會を有しなかつた。もしわたくしが早くその書を見たら、本稿、殊にアマチの書の抄譯などは試みるやうなことはなかつたであらう。同篇に於て既にアマチの書はわたくしと同じ目的の爲めに抄譯せられてあつた。追記。）

二　學士シピオネ・アマチが奥州記

前記のドットオル・アマチが如何の人物であつたか、Backer や Sommervogel の耶蘇會士著作目錄が手許にないから、今詳しく之を知ることが出來ないが、其著書「奥州記」には羅馬人にして伊達政宗が使節の通譯にして且史[illegible]とある。マドリイに於てメヂナ・ダ・リオセツコ公爵セヂカ伯爵の夫人ヰツトリア・コロンナ及び法王の大使カエタノの懇望により日本使節の通詞且つ事務官として使節に附せられたとある。そして一行と共に羅馬に入り、後此記を作つたのである。

拉丁文獻本辭

讀者への辭（以下伊文）

目　錄

三　奥州記の鈔譯

〔固有名詞は主として原本に從ひ伊太利亞風に讀んだが、西班牙の地名人名等の原語を知り得たるものは時に之を西班牙風に讀んだ。歐文の綴を添加する場合には後者に向つては特に（西）の符號を冠して之を區別した。〕

アマチは政宗の家系の秀衡に出づることと而して秀衡の血統のもと内裏に出づることなどを記して居る（第二章）。又ルイス・ソテロ（西 Luis Sotelo）が江戸に於て政宗の知遇を得るに至つた顚末に就いて興味ある逸話を傳へてゐる。

政宗には一人の妾があり、その異國婦人（フォレスチエラ）であるのを以ていたく之を寵愛した。それが病氣に罹り屋形の醫師の治療は何の效もなかつた。偶フランシスコ派の僧院の病院にフラ・ピエトロ・デ・ブルグヰロス Fra Pietro de Burguillos といふ上手の醫術のある由を聞き、其派の長老にして監督なるパドレ・ソテロを招き、囑するに其治療の事を以てし、政宗の愛妾はその醫僧の手に由つて

病癒ゆるを得た。政宗は喜んでソテロ及びそのフラテに金銀衣服綿布を贈らうとしたが、ソテロは之を受けず、却つてこの國の習慣に從ひ、九十箇のパン、三十挺の白蠟燭、三斤の丁子、三斤の胡椒を獻じた。政宗は盛儀を以て其屋形にソテロを迎へ、其能くこの國の言葉に通ずるを以て種種の事を問うた。殊に歐洲の國土、法律、宗教の事はその尤も關心する所であつた。自ら茶、點心を勸めて、鄭重に持てなした。政宗の奥州に歸る意あるを聞いて、ソテロはそれに隨つてその國に赴くことにした（第四章）。

アマチは同章に於て江戸の宣教事情を述べて曰く、「江戸は關東に於ける大市でその人口も多いが、教師としてはサン・フランシスコ社中の師父たちよりは他にはなかつた。ここには立派な寺院と僧院とがあり、「インペラトオレ」及びその太子の許可に由つて多くの信徒たちがあつた。」

一體江戸の基督教は姉崎博士に據ると（「江戸の切支丹宗門」。「改造」、大正十五年九月）サン・フランシスコ派のジエロニモ Jeronimo di Jesus に始まる。慶長三年（一五九八）以來家康にたよつてここに布教を弘めたのである。その開いた寺は Santa Maria de Rosario といふのであつた。其後例のソテロ（慶長十一年）及び耶蘇會のパエス Francesco Paez（同十二年）も江戸に來た。

ジエロニモは家康の命でマニラに赴き、再び日本に歸つて、その後間もなく（慶長七年）に病死したが、それと伴つて日本に來たパドレたちのうち四人は關東に入つて、彼のロザリオ寺院の傍の僧院と病院とを建てたと云ふ。

さて政宗が奧州に歸つてのち、ソテロは江戸の僧院に二人の司祭を殘してその國に赴いた。いままで此地方には一人の天主教僧の至れるものが無かつたから、ソテロは道道の諸國を巡り、或は懺悔を聽き、或は説教し、或は洗禮を施した。

ソテロが到着すると政宗は一佛教寺院を開けさせてそこに住ませ且召使や必要の資を與へた。政宗はちやうど獵に赴く時であつたから、ソテロの接待は之を家臣に命じて置き、さて狩より歸るや直に之を訪ひ、翌日之をその居邸に招いた。ソテロは三個の美しき玻璃杯、美味のパンを獻じ政宗は之を喜び納めた。ソテロは頗る謙遜で、立派な食事に箸を附けなかつたから、政宗は怪んでたゞ肉、魚を食べぬかと問いた。ソテロは之を機會としてジエズ・クリストの誕生節（ナタアレ）の事蹟にアッヴエントオと名付けらるる其前五十三日間の謝罪祭の事に就いて語つた。是れ神が人間を罪より放つ爲めにわざわざ其子を人間の形に現はして、人間第一の父たるアダムの後裔たちに無限の慈悲を

施されたのを記念する爲めに取り行ふ行事である。殊にサン・フランシスコ派に於ては齋に肉や乳製の食物を絶つのみならず、その身を苛責して悔ひ改めをなすのであると。政宗は此話を聽いて大に好奇心を起し、何時如何にしてクリストが此世に生れたるかを問いたが、ソテロは之に答へて、是れこそ言ふべからざるミステリオにして天の大祕であるから、長き修業、長き儀式を以て悟性を高めた上でなければ解すべきものではないと言つた。かくの如き會話がしばしば取りかはされ、そして漸く政宗に信仰の芽が生え來り、十一月の十八日には政宗も臨席してサン・ペトロ及びサン・パオロのバジリカの獻堂式を擧行するに至つた。かくて基督教はそのかみ羅馬に教堂を創めた如くに今や日本に於て新しき寺院をひらくやうになつた云云。（第五章）。

ソテロはしばしば王の宮殿に至り、カテキスモを講ずる機會を得た。この世の創製者に就いて語り、神のプロギデンツア及びアニマの不滅を否定し惡魔の族として永久の火に滅したるアミダ、シヤカ、カミ、ホトケを崇ぶ佛僧の說の謬れる所以を說明した。又王の質問に對して神の無限力、永劫性と日本の諸神の僞なる事とを明にした。是れソテロの說教の第一の個條であつた。その第二及び第三の個條は精靈の不滅、天使の性質、ルチフェロの淪落である。第四の個條は人間の創造、其

後裔に至るまでの罪悪である。又悪魔はいろいろの形をして現はれ、即ち日本に在つては神、佛、阿彌陀、希臘に在つてはジュピトオ、ジョゴ、バッコ、伊太利亞に在つてはサツルノ、ジャノオとして現はれた。孰れも悪魔が人間の悟性をたばかつたものである。又日月星辰を崇拝するのも悪魔の欺瞞に由るのである。何となればそれ等のものは皆精神を有せざる物象であるからである。又た第五の個條として説いたのは、人間はかく悪魔の工夫で誘惑せられて罪悪を行つたが爲めに、遂に大洪水に襲はれ、唯敬虔なるノエのみが助かつた。然しその後も再び人間の罪悪が増したから、神は其忠僕アブラアムを選び人間の主長となし、チルコンチジオネ其他の犠牲に由り神に事ふる道を教へた。又神はいろいろのミステリオを以て永久たるサピエンツアを人間たらしめた。是れその子クリストとして人間の神に對して犯したる罪の償をなさしめんが爲めであつた。彼はかくして第五の説教を説き續けつつ、更に神聖なる豫言者メシアに就いて語り、是れ神がその豫言を實にせんが爲めであると釋した。又處女サンチシマ・マドンナ、エルジネ・マリヤの純潔たるスピリト・サントオに由つて受胎せる事、クリストの尊き一生、その奇蹟、説教の事をも言ひ殘さなかつた。第六の箇條としては、主の卑き死及び其惱の終、罪の破却、人性の自由、サタンの捕縛、主の復活、

昇天、スピリト・サントオの來復その他のミステリオに就いて語つた。第七の箇條はわれわれの行爲の功過及び眞人惡人を待つ他界の賞罰、最後の審判、全世界の終焉、死者の蘇生、聖者の榮光、地獄の永久の苦患などである。なほ又諸使徒の說教、羅馬聖加特利古寺院の建立、其アウトリタア、其勢力並に其首長たるサン・ピエトロ及び其後繼者に就いて語り、最後に神の十の掟に就いて說つた（第六章）。

右は果して實際ソテロが政宗に說いた所であるかどうかは分らぬが、當時の伴天連の說教の內容を窺知するとたよりなると思ふ。

さて政宗はしばしばソテロの說教に臨み、又自己並に佛僧のなす質問に對するソテロの應答を聽いて、漸く自己の今までの迷信に氣付き、神の教を認むるに至つた。そして今日より眞の人間になつたと語つた。シヤカ、アミダ、Cobadagin, Hunzindasin, ダルマ其他の僞神に對して厭惡を感するに至つた（第七章）。

かくて王は國內の凡ての人が基督敎の眞理を學び神聖なる洗禮を受くべきことを命令した。そして之に背くものは威力を以て之を壓迫した。政宗はソテロを呼んで曰ふには、始めて敎儀を聽いた

時は強き憂愁に襲はれたが、今や光の眞中に在ると告白した。政宗はその家臣に説ひて此教を弘めむとしたが、パドレはその強ふべきものでないことを説いた。それで布告を作つて之を城門及び城内の廣場に掲げしめた。是れ千六百十一年の十一月の廿三日のことである。基督教の國内に弘通せしめらるべきこと、人の進んで此教に就くべきこと、また彼自らも洗禮を受くべきことなどを告喩するものであつた。そして此教に歸依した人人の位地、家系、姓名等の目錄を作つて提出せしめた。政宗はまた已が衣を脱いで基督教に入つた三人の鷹匠に與へ、此信仰に就いて清き精神を得たものは王の衣を著るに適ふべしと言つた（第八章）。

此事あつてのち政宗は散策に仙臺の市に赴いた。ここは家多く地形美しく、またその河では大きな鱒がとれる。政宗は釣魚の途また松島に至つた。恰もわがカタルニヤに於けるモンセルラトオの寺院、マルカ・ダンコナに於けるラレトオの寺院の如く、日本に於ける七大佛寺の一がそこに有つた。參詣人は常に絶えず、僧徒が甚だ多かつた。無數の偶像があつて昏迷の大衆が儀典を壯にして之を崇拜した。而して人のこの事を敢てせざるあれば大きな禍をなした。政宗は怒つて寺を毀ち、偶像教壇を壞つた。

また他の有名なる一寺は命を拒んで偶像の崇拝を罷めなかつたから、王は支倉に命じて之を燒かしめた。支倉は當時近衞のカピタノであり、四千の銃兵を率いて居た。政宗の命により寺に赴いて之を焚いた（第九章）。

佛教宗旨の荒謬、偶像の無力、基督教の神の全能、並に政宗の所業が知れ渡ると信仰を求むる心が人々の間に興つて、皆ドットリナ・エワンジェリカの說教を聽聞するやうになつた。洗禮を受くるものの數も增して、パドレは三人の日本人の教師と共に日も夜もカテキスモを講じて求道者を洗禮するのに忙殺せられた。

政宗は信徒の漸く多きを聞いて宏壯なる寺院、僧院及び祈禱所を建築せむことを望んだ。然しパドレは司祭、役員、助手もないといふことを指摘した。信徒等は既に二つの寺院を建ててはゐたが、それはあまり小さくつて、その王國の威儀に副ふものでなかつたから、政宗は之を大に遺憾とした。そして此事に關して屢パドレに諮問した。パドレ之に答へて、基督教は其首長として又基督の代理として羅馬法皇を有する。是れあらゆる基督教寺院の父であり、牧者（パストオレ）であり、世界到る處の國土、殊に新にカトリコの信仰の弘まる地に於ける宗教上の用務は專らその指揮に依るべきことと

を釋明した。茲に於て王はそこに使節を派遣する志を起し、其道程、國土に就いて質問した。そしてパドレ・ソテロ自らがそこに到らなければ功なかるべきを思つて、切に其事を懇望した。ソテロは今後が此地を去つては新しき葡萄園の荒廢せむを虞れたが、王命否み難くして遂に之を諾した。政宗は立ろに臣下に命じて、この旅行の爲め並に使節の威儀の爲めに、費を吝まずして事を謀らしめた（第十章）。

その時ソテロにはその交渉を打ち切つて急に江戸の宮殿に行く必要が起つた。それは和蘭人がマンチチオ伯の使節として江戸に來り、同盟を求め、スパニャ王を讒間してその掠奪者なるを言ひ、そして航海士、砲兵、船匠を江戸政府に提供し、相共に今手薄な東西印度を攻めむことを勸めたからである。ソテロは之に反對し、宮廷の寵臣の一に說くにカトリコ王との同盟がその反逆の臣下にして海賊たる和蘭と結ぶよりも優れる所以を以てし、遂に「インペラアレ」を動かし、そのパドレをスパニャ王の許に遣はして、フイリピネ、ヌアワ・スパニャとの通商を開く決心をせしめた。その爲め一艘の船が造らるることになつた。政宗は今回のソテロの使命は自己の意に出でたのでないので、單に二人の兵士を送つてパドレに附してその從僕となした。パドレは政宗の二人の使者と共

に千六百十二年のサン・フランシスコの祭日に乘船した。港出の其夜に船は暗礁に碎けたが、死者は唯一人のみであつた（第十一章）。

右の船はサン・セバスチァンと名づけられた。そしてその難破のことはセバスチャン・ビスカイノの報告に見えると云ふ（「大日本史料」十二ノ卷十二第十九頁）。

當時江戸には基督教の迫害の事があつた。事の起りは岡本大八と有馬王ドン・ジョワン＝有馬晴信なりといふ」との間に確執が起り、彼等の互に讒謗するに及んで、從來信用を得てゐた基督教徒もそれ以來忌まるることになつた。將軍はその絶滅を期したが、其後多少緩和せられて、唯宮廷から凡ての基督教徒を追放することによりて落着したといふのである。かくして十四人の貴族は其財産沒收の上追放せられた。迫害はサン・フランシスコ派の敎師にも及んだがソテロのみは許された。（此等の事情は改造、大正十五年十月號の姉崎博士の「江戸の切支丹」の論文に詳しい。）

奥州の王は江戸の太子に鷹狩に招待せられ、その機會に於てソテロと謀り、八百の船匠、七百の鍛冶、三千の人夫を急がせて大船の建造を企て、四十五日の間に竣成し、支倉を歐洲行の使節と定めた。

支倉の先祖は都に起り、ヤマカゲ・チュウソオの時代に奧州に移り棲んだのである云云（第十二章）。

ヤマカゲ某の事は分らぬ。蒼水存稿に引く所に據れば、支倉、姓は平で、其先は高野王に出で、元祖伊藤壹岐守常久の時に奧州に移り、二代の祖久成より支倉と稱したと云ふ（伊達世臣家譜）。

パドレ・ソライ・ルイス・ソテロは江戸の宮廷を出で、新船に乘つて發向する爲めに復び奧州に赴かむと欲した。その時恰も新しい迫害が江戸に起つた。千六百十三年（慶長十八年）七月の二十一日のことである。その際囚はれたる信徒は千六百人であり、其他江戸を追はれた人の數は限がない。そこでソテロは奧州に往くを止めて、各處の牢獄を尋ね人人の懺悔を聽き之を慰問した。この事が太子の議官に聞えて、人はパドレの速に奧州に赴くべきを命じた。パドレは之を聽かなかつたから、太子は怒つて之を捕へその非を詰つたが、パドレはなほも其主張を枉げなかつたので、太子は不快の情を起し、三歳以上の基督教男子は皆之を斬首すべく、又ソテロは他の日本人教師と共に之を火刑に處すべしと命じた。八月の十六日には教會の長老（Maggiori delle confraternità）八人、また十七日には十四人の兵士が斬られた。ソテロ及び他の教師も死罪に決して人人は之を見

なとて群集した。が折よくその前に奥州から使者が到著して、ソテロ赦免の事を取計ひ直ぐ之を奥州に連れ帰ることにした。太子は唯二人の教師を殺して他は之を放つた（第十三章。又上記姉崎博士論文参照）。

ソテロが幽閉せられたと聞いて、之に會はむが爲めに、同じ會の教師イニヤチオ・デ・ジエズウ Fra Ignatio di Gesu が長崎から江戸に來た。それはちやうどソテロが放免せられた日即ち奥州使者の江戸到著の後六日であつた。九月の廿五日にソテロはイニヤチオと奥州に向つた。奥州王はソテロの或は既に死したるかと思ひ、當時同じフランシスコ社中のイバニエス Fra Diego Ibañez が政宗の船に便乗して新スパニヤに行かむとしてその領内に來つて居ることを聞き、之をてソテロに代へ、新スパニヤまで遣はさうと欲し、一月之を招き其承諾を求めた。イバニエスが屋形を出て二時間ばかりすると飛脚が來著してソテロの助かつたことを報じた。已にしてソテロが到著するや之を招き饗宴を開いた。翌日ソテロと支倉とを呼んで、スパニヤ、ロオマへの使命のことについて相談した（第十四章）。

乘船の事が極つて、ソテロ及びイニヤチオは新しい信徒の洗禮に忙殺せられた。夜眠る隙さへも

ないほどであつた。

當時仙臺には二つの寺院があり、その他クサノカミ及び後藤の領内の秋田、仙北(せんぼく)、並に南部にも各一の寺院があつた。孰れも其地の信徒の建つる所である。

王の嫡即ち其第一の兒の子も教徒たらむことを望んだ。佛徒たる祖母は之を許さなかつたが、遂にソテロに由つて洗禮を受けた。

ソテロは五人の教師をしてカテキスモを講ぜしめた。

そして政宗に暇乞してパドレ・イニャチオ、フラ・ヂエゴ、使節支倉及び百五十人の日本人と共に千六百十三年の十月(オクトーブレ)の二十八日（慶長十八年九年十五日）に乘船し暴風と戰ひ、六千里(レグワ)離れたるヌノヷ・スパニヤに到著し、そこのアカプルコ Acapulco の港に上陸した。それは千六百十四年の一月(ジエナロ)の廿五日（慶長十八年十二月十六日）のことである（第十五章）

右に關し磐水存齋に收むる所の金城秘韞には「貞山公御治世記錄」を引いてある。

慶長十八年癸丑。

三月十日。

一　公南蠻國へ船ヲ渡サルベキ由内々將監殿ト御談合アリ因テ其御用意ノ爲メ船ヲ造ラシメラル。（註に將監ハ向井將監殿忠勝ナリとあり。又大槻修氏の註に向井ハ幕府ノ船手頭ナリとある。）

四月朔日。

一　太田新左衛門殿へ數寄御饗應ニ御出デ南蠻人楚天呂ヨリ公南蠻へ船ヲ渡サル義ニ就テ書状進上ス因テ御返書遣サル左ニ載ス楚天呂書状ハ不傳

（中略）八月廿一日。

一　南蠻人楚天呂登城大廣間ニテ御對面楚天呂進上物アリ語音通事ヲ以テ相通ス禮儀ニハ幾度モ起居ス白ク納ミタル手拭ヲ以テ度々唇ヲ拭フ其長高ク面赤ク鼻隆シ年齡六十餘ト見ユ從者廿四五人アリ何レモ年若シ長卑ク鼻隆シ

九月十五日。

一　此日南蠻國へ渡サル黒船牡鹿郡月浦ヨリ發ス支倉六右衛門常長幷ニ今泉令史松木忠作西九助田中太郎右衛門内藤半十郎其外内藏丞主殿吉内久次金藏ト云者差遣サル

向井將監殿下人十人許リ

南蠻人四十人許リ

都合百八十餘人

其外商賈人等共々同船ニ乘ル船中商賈荷物合百餘積タリ

此時數年本朝ニ逗留セシ楚天呂モ歸國ス

公方ヨリモ御具足御屏風等御進物トシテ彼國ヘ遣サルト云々船ヲ渡サルコト去年彼國ヨリ書信ヲ本朝ニ通ズ因テ大神君ヨリ御返書ヲ以テ商舶ノ來往ヲ許サル

此故ニ公將監殿ト相議セラレ去ル頃ヨリ黒船ヲ造ラシメラル其材木杉板ハ氣仙東山ヨリ伐リ出シ曲木ハ片濱通リ轉井江刺ヨリ採ル公義御大工與十郎及ヒ水手頭鹿之助城之助兩人ヲ將監殿ヨリ差下サレ彼船ヲ造ル、秋保刑部頼重、河東田縫殿親顯兩人奉行メ頃日成就ス

右船横五間半縦十八間、高十四間一尺五寸アリ、帆柱十六間三尺松ノ木ナリ又彌帆柱モ同木ニテ作ル九間一尺五寸アリ

今度公南蠻ヘ船ヲ渡サル事其地ノ樣子ヲ檢察セシメ上意ヲ經テ攻取リ玉フベキ御内存ナリト云フ

なほ金城秘韞補遺（大槻文彦）には治家記錄引證記、眞山記等を引いて居るが已に引用せる所と大同小異であるから重ねて錄しない。他になほ源家康の濃毘數般國王に送る復章等を載してゐる。

アカプルコの港に見なれぬ立派な大船が著いた。それには王旗が翻つてゐる。これ羅馬法皇及び

スパニヤのカトリコ王に遣はされたる日本使節を乗せたものである。港に駐在する司法官及び行政官は使節を出來るだけ鄭重に接待することを議決した。船は港に入ると禮砲を打つて平和の徵となした。港の方でも之に應じた。そして喇叭、太鼓を鳴らして使節を迎へ、之を副王宮に請じ、又鬪牛を催して之を款待した。

港の司令官はメキシコの副王の命により使節の旅行に就いて萬端の便宜を取りはからひ、船から揚げた荷物は車、馬によりメキシコへ運んだ。道道では凱旋門を設け、櫓を作り、窓に絨毯を飾つて歡迎した（第十六章）。

メキシコでは副王はサン・フランシスコ寺の近くの一邸宅を以て使節の旅館となした。時恰も聖週で（千六百十四年三月廿二日より廿九日なりといふ）でその行列を見ることも出來た。又使節の從者七十八人はサン・フランシスコの寺院で大司教に由り洗禮を受けた。支倉自身は大司教及びコミサリオ・ジェネラルの意見で此事をマドリイまで延期することにした。

旅行の事に關しては副王は使節の爲めに出來るだけのことは取計ふべきも、然し陛下からの許可を得てゐぬ限り、船がいつ歸還を命ぜられるか分らぬと言つた。使節は心中に旅行の障礙を豫感し

たが、結局隨行の大部分を後に殘してスパニヤに行くの決心をなした。昇天祭の日（五月八日なりといふ）メキシコを立つて多くの騎士、吏員に送られて五旬節の日にプエブラ・デ・ロス・アンヘレス（西、Puebla de los Angeles）の市に到著した。盛なる祭、殊に闘牛の催があつた。大法官のドン・トリスタン・デ・アレッサノ（西、Don Tristan de Arezzano）が大に歓待した。

この市を立つて北海の港なるサン・フワン・ヅオラ（西、San Juan d' Uola）に至り、その宿所に當てられたサン・フランシスコの僧院に入つた。そして一緒に來た人々をばアカプルコの港に殘して、ドン・アントニオ・デ・オケンド D. Antonio de Oquendo の船に乘り、千六百十四年六月の十日にこの地を發し、その七月の二十三日にハバナに著き、總督、司教の歓迎を受け、司令官ドン・ロペ・デル・メンダリスの艦隊の來るのを待ち、それに伴はれて八月七日にこの地を出帆し十月の五日にサン・ルカ・デ・ベルラマダ San Luca di Verramada の港に著いた。そこにはメデナ・シドニア公 Duca di Medina Sidonia が駐在して居り、使節の到著を聞き、陸路馬車を送つて使節を迎へ、或る名ある邸宅をその宿館に充てた。セビイヤ市の委囑によつて二艘の立派な船艫を艤裝して使節をコリア Coria に送つた。ここではセビイヤ市の命によりドン・ピエトロ・ガリ

ンドオ Don Pietro Galindo が之を接待した。一行の爲めに新しい衣裳を作り、容儀を整へてセビイヤに入る準備をした。

セビイヤ市はまたソテロの兄弟なるドン・ヂエゴ・デ・カブレエラ Don Diego de Cabrera、カラトラバ (Calatrava 國の騎士ドン・バルトロメオ・ロペス・デ・メサ（西、Don Barthromeo Lopez de Meza)、ドン・ベルナルドオ・デ・リベラ Don Bernardo de Ribera、ドン・ピエトロ・ガリンドオ Don Pietro Galindo 及び多數の市會議員及び騎士を迎へに出した（第十七章）。

エスパニヤのバリアドリイ市に近きシマンカスと云ふ村に此國の古文書を保管する文庫がある。そこにはまた支倉の一行に關する數通の文書の存することは已に大日本史料十二篇の十二に記されてある。予も亦そこで支倉自筆の一書を見た。それは奉書の紙を縱に二つ折にして日本の筆を以て書を記したものである。其日附は西暦では千六百十四年九月三十日に當る旨がその手紙の額縁に附記せられてあつた。（註、その文書は既に「えすぱにや記」「シマンカス」の章に記したるが如くである。）

右はエスパニヤ國王に上つたものであるが、この他にレルマ公に贈つたものがあるとて大日本史料にはそれを掲げてゐる。この日附によると支倉がまだエスパニヤの港に着かない間に書いたこと



第四十一圖

メルカトルオルの地理書中の西葡兩國地圖

になる。

さて同じ年の十月の廿一日にセビイヤ市は華華しい儀式を以て使節及びペドロ・ソテロを歡迎した。馬車、馬及び多數の騎士及び貴族たちが儀仗として遣はされた。使節はコリアの市を出て、心こめられたる歡迎、美美しき騎士、馬、多數の人人に出會つて大に喜んだ。これ等の人人はセビイヤを離るる六里まで來り迎へたのであつた。トリアナに近いて來た之を渡らさるに、馬車、騎馬の人人、各階級市民が輻輳して、二人の警視其他警官の努力と叱咤との甲斐なく前進し兼ねる有樣であつた。遂に市長のサルバテルラ伯（Conte di Saluaterra が多くの高官及びエンチカツトロ

(市參事會員) 及び他の騎士たちを連れて現はるるに及んで、使節は車を下り、その部下のカピタノ及び從者と共に (孰れも美しき日本服を著けてゐた) 馬に乘り、市長に挨拶し、この市の與へたる款待と榮譽とに對して感謝し、市長と大警視との眞中に入り、儀仗兵を先立て、トリアナの門からアルカサルの王城に至るまでの大道に充滿したる群集の歡呼と祝福とを受けつつ進んで行つた。王城は清められ、毛氈を張られ、珍奇の裝飾を施されて、使節及び一行の居室に充てられた。

市長は使節をねぎらひ、市殊に大司教及び僧會の喜びの如何に大なるかを語つた。それは此地の出生なるパドレ・ソテロが、聖教會の光榮の爲めに、また尊きバッチスモの水によつて後生を受けたる多くの靈魂の救濟の爲めに、使節の大命に任ぜられたことに對する滿足であつた。そしてこの市は一行のマドリイに出發するまでの間あらゆる便宜を計るであらうと云つた。使節はかかる榮譽を與へられたる厚意に對して嚴肅に感謝した。そしてその國の王がセビイヤの名を傳へ聞いて好意と友誼を示さむが爲めに彼をここに遣はしたといふことを陳述し、公式の謁見の時日を定めんことを乞うた。市長はやがて確答すべきことを約し、その夜の盛大たる饗宴の準備する要あればとして辭し去つた。饗宴は其料理の立派なことと、給仕の多きことと等に於て洵に此市の強大たるに背かざる

ものであった。市長は其他狂言、舞踊等の催しを以て使節を款待し、騎士、司教、僧侶、高官、司法官などもそれぞれ使節に物を贈った。

月の廿七日に市廳に於て謁見式が行はれた。使節は書翰の内容を述べ、ついでソテロが今回の旅行、日本の状態、殊にそこの基督教の事蹟に今後の旅程の事などを説明して此市の助力を求めた。その時使節の護衛兵の長のドン・トマスが大小の刀を捧げて入り來つた。是れ奥州王がその友誼の徴としてこの市に呈したものである。市長は書翰と大小の刀とを受け取った。書翰はエスパニヤ並にイタリヤの語に翻譯せられ、市廳の書記により公衆の前に朗讀せられた（第十八章）

政宗のセビイヤ市に呈した書翰は（エスパニヤ語の翻譯文と共に）現今なほその市廳の壁に懸つてゐる。その本文は次の如くである。

「大成天有主之御ばふらいを貝作て色有羅ニそてろ一へハ分國中江と遣ひて貴天有主之御法を承殊ニ勝ニ眞之御生之道を存御宗門可相成ゝ處に無據指一合御座ゝ而今に無其儀ゝ左てハ分國御宗門可申さめに一息さひふらいそころを頼支倉六右衛門を申侍一人指添相一渡申ゝ然者其元大國之帝王を同万事之さま上まみ一御進老聞たつさを、御をい申上此ねハひ相叶ゝ様を頼一きめに德爾人道上申ゝ然者其國御繁昌御様子彼侍て

せ一ふらいそてろ生國之山水ゝ間別而をいせつゝ存其子細者貴一天有主御宗門此國ゝひろめ給人其國ゟ出さるゝさゝまて一ゝ間國ともニ天有主御宗門へ御きい申上かそてゝあそ改る儀候兩人一萬等代ゝせひいやニ御さい申上ゝ様に堅定已來とも一をいせつ一身ゝ立合末代まて相替不申ゝ樣ゝ思ひ定め一をゝるとくせひいやゟ相定め之やくそくの判ヒ下ゝ一其をいせつ記に吾等指物進上申ゝ然者帝王を一そつそを御前吾等兩人使者無事ゝ參吾等之一望叶者様ゝ御肴發所仰ゝ然者其元に餘之一ふ手道之日らう人ト手ゟ合御座ゝ所承ゝゝあら須御談合ニ屆すくゝ日本ゟんかせひ一いやへ参候事成左右なる事有無之様一ヒ下ゝハゝ今ゟ毎年渡海申樣に拵可申ゝ思細一可申ゝへともふらいあい子そころ委曲口上ゝ可ヒ申ゝ間一早ゝ申宜ゝ又此方ゝなひて似合之御用もゝ一ハゝ可承間分御隨走可申ゝ恐ゝ謹言

慶長十八年　伊達陸奥守（花押）

九月四日　政宗　印

せひいやの屋ふをあて

らる人々御中」

（右の書翰には甚だ讀み解きがたき所が多かつた。ここには大日本史料の解に從つた。同篇には政宗の他の幾多の書翰を掲載してゐる。註[イ]。老間はロオマなりといふ。）

手紙が讀み上げられ、全市の喝采を博すると、市長は喜色を現はし、奥州王の望むところは之を

カトリコ國王陛下に言上すべしと云つた。謁見の式が了つて使節とソテロとは市會議員及び其使節士に伴はれて王宮に歸つた。

この市を辭去する日が近くと、使節は大司教を訪ねてその手を吻ひ、その饗宴を受けた。又僧會の議長にしてアルチデアコノたるドン・フエリス・デ・グスマン（西、Don Feliz de Guzman）はここで使節の洗禮の儀式を擧げようと提議したが、それはむしろ國王陛下の前にて行はるべしと云ふことで延期することになつた。

其後寺院、寶物の參觀のことなどあり、又市の高官、法官等を歴訪した。殊にサン・フランシスコの僧院に於ては又新にアンダルシヤのプロキシチアレに選ばれたパドレ・エルナンドオ・ナバルロ P. F. Ernando Nauarro の爲めの行列に出會ひ、莊重に接待せられた。

市は二人の委員をして寢具、馬、馬車及び多額の金子を用意し、國王陛下の手を吻ふ爲めに首都に赴く使節の出立をなるべく速にするやうに、市長並にジョソンニ・ガリアルドオ・デ・ツアスペデス Gio Gragliado de Zaspedes を始め大に盡力する所であつた。（第十八章の續。）

十一月廿五日、聖カテリナの日に一行はセビイヤを發してマドリイに向ひ、途途盛たる歡迎を受

けた。コルドバではコルレジトオレのドン・ジョワンニ・デ・グスマン Don Giovanni di Guzman が騎兵の一隊を遣はして之を迎へしめ、之をドン・ヂエゴ・デ・コルドワ Don Diego di Cordova の屋形に導いた。市は市會議員、僧官をして之を訪問せしめた。同夜は大饗宴が催された。翌朝はコルレジトオレ使節を訪問し、大寺院、王殿に案内し、又自邸に於て一行を饗應した又使節の請により牢獄を尋ねて多くの囚人を放免した。

　トレドでは大司教なるカルヂナルを訪問した。カルヂナルはその日使節の共賓客とならむことを懇望したが、使節は之を辭退し、ヘタフエ（西、Xetafe）に赴いて、そのサン・フランシスコの僧院に宿泊した（第十九章）。

　使節及びパドレ・ソテロはマドリイに入つた。沍寒太しく雪さへも降つた。當日は別に華華しき儀禮もなく一行はサン・フランシスコの僧院に入つた。そこには多くの大官、貴人、騎士が尋ねて行き、いろいろの贈物をなした。また侍從長、侍僧長は國王陛下の名に於て使節を訪問し歡迎の意を述べた。かかる長き旅行の後には暫く休養し、サンタ・パスクワ及び聖誕祭には十分たのしむべきことを傳言した。

千六百十五年の一月の三十日に使節及びパドレ・ソテロは國王の命に謁見を仰付けられた。その日王は御手を給ひ使命の趣を聽かれようといふのであつた。陛下はその爲めにサン・フランシスコへ騎兵をつけて馬車を遣はされた。一行はそれに乘り宮城に到ると、そこには親衛守護兵が居て之を迎へた。使節とパドレ・ソテロとその一行とは特別の服裝でそこに達し、そして王宮の廣間に導かれた。そこで使節は衣を更へ嚴肅なる儀式に適ふ禮服を著けた。やがて扉が開かれると、そこには國王が天蓋の下に、一つの椅子に倚つて起立してたまうた。使節は三度跪坐の禮をなし國王の咫尺に前み、國王が伸べられたる手を吻はうとしたが、國王はその手を引き込め、帽を脱して、親しげの面持して少しくその頭を傾けられ、そして使節には起立して使命を述べよと仰せられた。

アマチの記事にはこの時支倉が述べたる演説と、國王のそれに應へたまうた言葉と並にソテロが日本の「インペラトオレ」の名に於て國王に申したる演説と、國王のそれに應へられたる言葉とが載つてゐるが、今ここには之を省略する。

この儀式了つて使節及びソテロはフランスの王妃に選ばれたる王女の室に導かれた。ここには諸王子も在つて、パドレ・ソテロの口から日本の珍らしき事など聽かれて喜ばれ、また父王に謁き、

向後の便宜を取計るべきことを約束せられた。

謁見の事了つて使節たちはまたサン・フランシスコの僧院に還つた（第廿章）。

二月四日水曜日に使節たちはレルマ公（西、Duque de Lerma、日本文書のとうけいてれるま）を訪問し、奥州王の書翰を呈し、其名に於て敬意を表した。公は之を名誉として甚だ喜び、使節及びパドレを厚くねぎらひ、使節の欲する所を聴き、之を國王に奏請して殊に羅馬に往くに要するもの並に法王に捧ぐる書翰を得むことに盡力すべしと約束した。また日本に歸航するに要する人員船舶をば國王の名に於て提供すべしと云つた。使節はまた國王の御前に於て公の手によつて洗禮を受けむが爲めにはるばると四千レグ以上の航海をなし來つたといふことを述べて、公にもこの儀に出て貰ひ、ゆくゆくは日本の武士が此事に倣ふやうにしたいのだと云うて請ふ所があつた。公もさう云ふパトロンになることなら喜んで御引受けしようと答へ、又かくも遠き地の端から使節の來ることはスパニヤの王冠の榮光であると言つた。辭去するに臨んでは公は使節及びパドレを階段まで見送つた。

翌くる木曜日には跣足派の内親王 l'Infanta delle Discalze を訪ねて日本の事に就いて物語り、

洗禮の儀式をその寺院に行ふことを陛下に奏請してその許可を得むことを依頼し、其承諾を得た。

それからトレドのカルデナルの許に到りその聖式を司られむことを請ふと、カルデナルは差障の故で出來ぬと云つて斷つたが、その式には凡ての僧職の者と共に臨席しようといふ約束をした。そして自分の邸宅を示して立派な饗應をした。數日の後カルデナルは親しく答禮の爲めに使節を訪問し、多くの畫像、珠數、十字架、贖牌、其他の聖器、殊に高價なる聖女の畫像、金を以て飾れる彼自身の肖像などの贈物をなした。

土曜日には奧州王よりの贈物を捧呈する爲めに、ソテロと使節の護衛兵の長たるドン・トマソとが宮廷に到り、それらの品物を一室に並べて天覽に供し、陛下は之を嘉納したまうた。

その日曜日第二十二時、法王の大使たるカフアの大司教カエタアノは使節の訪問すべき由を聞いてイタリヤ及びスパニヤの僧俗の多數の貴族を集め之を待つた。使節が馬車から下ると、人人は急ぎ之を迎へ、法王の大使は第一の廊下まで出で迎へその渡來に對する喜悅の情を叙べ、是れ基督教共和國、殊に神の代表者の住む世界の首都羅馬に對する全世の欽慕の發現であり、法王も此事を聞き大に喜び特別の慈愛を以て之を迎へ、奧州王の願は直にかなへられるであらうと云つた。使節

はその衣を賜ひ且つ洗禮の儀式に出席せられむことと並に使命の完成を保護せられむことを請ひ、法王の大使は之を諾つた（第廿一章）。

「二月十七日の火曜日（アマチ原文には水曜日とあるがソテェの書翰の印行せられたるものには火曜日とある）」に國王陛下は日本使節洗禮の儀が跣足派の尼院に於て行はるべきことを命じたまうた。その日には陛下はフランス女王、兩内親王及び多くのスパニャの大官、有爵者、貴族と共に臨幸したまひ、唯太子は不例の爲めにその兄弟たる他の王子等と共に宮殿に殘りたまうた。使節は馬車でサン・フランシスコの寺を出發し、陛下の侍衛兵が王宮の寺院まで隨從した。そこは多くの毛氈、銀器、蠟燭を以て飾られてあつた。

左手の大祭壇の上には今日の洗禮の儀式に必要なる各種の器具を備へたる壇が特にしつらはれてあつた。そして日本人は階段の左右に二群に分れた。さて萬事調つて式始まると尼宮の侍從長のアルタミラ伯 Conte d'Altamira と日本の使節とが相對したる席に就き、王の侍衛長たるドン・ヂェゴ・デ・グスマン Don Diego di Guzman が皇后のカペルラに登つた。そこには今日の教父及び教母の席が設けられてあつた。卽ちレルマ公（西、Duque de Lerma）及び國王の親

任厚きバラシャ伯爵夫人（西、Condessa de Barajas）である。

さて皆が着席し了ると、王室の業僧手に燭を執つて入り来つた。編輯の族に属めるトレドの大司教に代つて今日司祭の役を勤むる侍従長が礼装で立つてゐる。使節は大なる喜悦と信心とを以て洗礼を受けてドン・フェリポ・フランシスコ・ハセクラの名を得た。式終つて王室の楽人テ・デウム・ラウダムスを歌ひ、オルガノと美しきシンフォニアとが奏せられた。教父教母は使節を慶賀し、且つ今後彼等の為めに神に祈らむことを求めた。そして好き時刻を計つて、使節を国王の御居間に伴つた（ソテロ書簡に據るとソテロも同伴したのである）。陛下はフランス王妃、尼公及び他の王女と共に語つて居られたが、使節が御前進んで跪くと起立すべきことを命ぜられ、且つ之を祝賀せられた。そして言はせたまふのには、神は卿を好き基督教徒となしたまふべし。今後我が為めには神を祈られよ。使節は之に答へて、外臣は今や日本の最も幸なる武士となれり。そは今までの希望を達して基督教徒となりしのみならず、又陛下の咫尺に於てこの光栄を擔ひ、神によつて新生を受け、寺院の名簿に加はるを得たればなり。この恩寵は言葉を以て言ふこと能はず、一生涯の間王室の繁栄の為めに神を祈るべしと言上した。フランス王妃及び尼公は之を聴いて大に喜びたまうた。

それから陛下の命令にてドニヤ・マリア・マンリケ（西、Doña María Manrique）、ドニヤ・マリア・デ・ベナビデス（西、Doña María de Benavides）の屋形に案内せられ、その宏大なるを嘆賞し、又尼院長の精院に至りレルマ公に遭遇した。公は使節に對して再び言ふやうは、自分が仲介となつて一靈魂を神に捧ぐるを得たのは之に勝る幸はないと。そして使命の事に關しては出來るだけ早く取扱ふべしことを約束した。使節は懇に公に謝して其手を吻うた。それから諸堂、寶物を見物し、諸ろの尼僧及び王妃の侍婢は之を見て心より感動し涙を流した。トレドのカルデナレは使節に會つて、その手の麻痺の疾と足の痛風との爲めにかくの如き喜ばしき儀式に參列することの出來なかつたのを遺憾とする旨を述べた。使節は其厚意を謝し且つ身に祝福を與へむことを請うた。かくて再び國王に謁見し、尼院を見るを得たるを謝し、その御手を吻ひ、新生を與へられ、今日よりは眞に神の僕と名のるを得るに至つたる恩寵に對して御禮の辭を述べた。陛下はいろいろの問を爲されたが、殊に羅馬行の事に關しての御下問があつた。すると使節は唯陛下の命を待つのみであり、成るべく早く發向したき旨を言上した。その事ならば已に命令を出し置けりといふ陛下の御答を得て、使節は再び御手を吻ひ感謝の意を表した。さて御前を退いて宮城の正門に出ると、多くの

大官、公卿、其衛の人人がここに待ち受けて居り、使節を儀装馬車まで導いた。そしてサン・フランシスコの僧院に至ると、ここでは院主が衆僧と共に居り、十字架及び燭を秉り、音樂を奏して一行を寺内に請待した。そこでは又テ・デウム・ラウダムスが歌はれた。使節は主に再生の恩を謝した。」（第廿二章全譯）。

「さて使節は貴き洗禮を受け聖教會の懐に迎へられたる後、八箇月がほどマドリイのサン・フランシスコの僧院に在つて、信仰の道を修練し、パドレたちの清き生活に倣ひ、その法悦を受くる機會を得た。國王陛下はかくも遠隔の國民が教會に入り基督教の信仰に滿され而して神の法則が使節の心胸に固定したるを知られて、之を遇したまふこと甚だ厚かつた。使節の請願も幸ひに聽許せられ、羅馬に赴くべき旅行の準備をなし、勅書を得又優渥なる勅語をも受けた。そしてそれらの大官を訪れ、暇乞を爲し、その究竟の目的に向つて發向した。その時メヂナ・ダ・リオセコ公爵夫人にして、モヂカの伯爵夫人たるドンナ・ヰツトリア・コロンナ Donna Vittoria Colonna Duchessa di Medina da Riosecco, e Contessa di Medica 並に法王の大使カエタノ台下 Monsignor Nuntio Caetano の懇望により、羅馬人學士シピオネ・アマチ Dottor Scipione Amati をば通詞と

なした。使節は朝廷の宏大華麗、宮中の祝宴、演劇、競技に滿足し、取り分け陛下の宗敎に對する敬虔に感じ、樞密會議の下に從屬する多數の顧問會議を有する政事組織を賞嘆した。使節の役目を果し、公私の機會に於てその信仰を披瀝し、人人に對して多大の好感を與へたる後、馬車、荷車、騾馬を連ねてアルカラ Alcala に向つて出發した。八月廿二日土曜日の夕その地に著し、サン・フランシスコの僧院を訪れ、主僧より莊重なる待遇を受け、メサに列し、多數の賓を賞嘆した。又病舍の係たる在家の信徒ミケル P. F. Michel に會ふと、彼は忽ちエスタジイに入り、使節及びその一行を驚かした。同じことはパドレ・トマソ P. Fr. Tomaso にも現はれ、彼は日本に於ける基督敎の事を聽くやエスタジイに入り、その體わたわたと顫へ、其體は足に柔らぬげに見えた。ドン・トマス Don Tomas、ドン・ピエトロ Don Pietro、ドン・フランチエスコ Don Francesco（孰れも日本人なり）之を見て、他世界の存在確實なる證左たりと感じ、この例に倣ひこの世を捨てむと思ひ、パドレ及びドットル・アマチの之を阻止せざらむか、身を僧となして聖者の衣を著けむと決心したほどであつた。それでもたほドン・トマス（Don Tomas —タキノ・カヒョオエ）とドン・フランチエスコ（Don Francesco —ノマノ・ハンペエ）とは髻を斷ち、武具を捨て日本の

僧の風となつてその身を主に獻じたのであつた。

アルカラの有名なる大學は無論見事に過ぎるやうなことはなかつた。そこでは校長及び學生から懇ろに迎へられた。翌朝はアロツカ Arocca（西 Daroca）に達した。是れはアラゴン領のうちの最も有名なる市である。それは主クリストが其聖體をここに殘したからである。使節は之を見むと欲し、アマチに命じて、警視廳及び僧會の許可を請はしめた。そしてその會見の場所に於て貴人に會ひ、厚く迎へられ、アマチはこのアロツカの市の聖體の奇蹟は世界の凡ての國民の間にその名の知られて居り、又遠き日本に於ても之をば最も貴きサクラメントとして崇拜すること、そしてその爲めにパドレ・ソテロ及びドン・フイリポ支倉が切に官憲に請ひこの貴き寶物を拜せむを求むることを傳へた。官憲に於ても此請を諒とした。それでアマチの辭去したのちに、二人の警官を支倉の許に遣はした。これより先僧會に於ても二人の僧を遣はして使節の希望に喜んで應ずべき旨を傳へた。それで使節たちはサンチツシマ・トリニダの御寺（西、Iglesia de la Santissima Trinidad）に行く準備をなし、警視廳の役人及びアロツカの貴族たちに伴はれ、太鼓、喇叭の奏樂の下にそこに赴いた。メサを聽き、聖體蓮に血に染まつた五つの小さき聖餅を見た。是れは世にも稀なる奇蹟

である。日本の使節たちは之を觀て大に喜び、又人人に送られて脊陸に歸り、更に馬車、サラゴッア（西、Saragossa）に向つた。之より先きドツトル・アマチは一書を裁し之をして之をギマラン伯 Conte di Guimaran に送り、その地の主なる貴族と共に日本の使節を歡迎せむことを望み且つ副王も之に加はらむことを求めしめた。伯は血統善く、最も尊敬せらるる武人であり且つ大なる勢力を有するものであつた。

九月三十日の第二十四時に同市に著し、ゲルベス侯ドン・デエゴ・ピエメンテルロ Marchese di Gelbes, chiamato Don Diego Pieméntello は翌朝豫め人を遣はして使節の手を吻ひ、歡迎の辭を述べしめた。而して一行を朝餐に招き、且つ市の見物の爲めに二輛の馬車を準備した。で人人はそれに乘つてピラアルの寺（西、Nuestra Señora del Pilar）に赴いた。これは基督教徒の間には有名な御寺で、一名カメラ・アンジエリカアレ Camera Angelicale といふのである。寺に入つて音樂、儀式、オルガノに由り、長老及び諸僧に迎へられ、そこの禮拜堂に於てメサを聽き、かの貴き柱（註 Pilar 或は Columna immobilis—使徒ヤコブ Santiago de Compostela に赴く時聖母その上に現はれたりといふ。）を拜し且つ數々の貴き寶物を觀た。それから又サン・フランチエスコの寺に行き、本堂、

僧院を観、回廊を通つて副王の館に入つた。衛兵之を導き、又副王も自ら出でて之を迎へ、鄭重且つ親切に之を遇し、最も莊麗なる一室に伴ひ、半時間ほどいろいろの會話をした。それから甚だ立派な饗宴を催し、十人の貴人がその間を取り持つた。宴了つて後侯爵はまた二時間ばかり使節と共にまじめな又は輕い談話をかはし、使節はいとも滿足げにそれに答へたので、副王はあとで大にその智勇を嘆賞した。散歩の時刻が來たので公爵は之に其馬車を提供し且つ侍者を附せしめた。又珍らしい人人及び其すばらしい衣服を看せしめんが爲めに、その夫人を訪問することをも許した。諸ろの御寺とその寶物銀器を觀、副王の好意に滿足しつつ再びその館に歸り、眞にその大國の君たることを認めたのであつた。

さてまたサラゴサを出發してからドットル・アマチは使者をフラガ Fraga に遣はし一書をドン・コデフレ・バルダキシ Don Godefrè Bardaxi に送つた。それで大尉ドン・マルチン・デレデア Capitan Don Martin d' Eredia は騎兵の一隊を率ゐてレリダ Lerida まで日本使節の一行を護衛すべき命を受けた。アラゴナ（西、Aragón）の國境たるフラガの地に到著して彼我相會し、隨行及び馬匹を提供し、翌朝はレリダに向つて出發し、第十六時頃そこに到著した。同地にはバルセ

ロナの参事會の陪席官レラノ（西、Rellano）が同政廳の命を受け、一行のカタルグワ Catalugua への旅行に護衛の兵を附すべき兵（十二人の騎兵）を伴つて到著して居り、ドツトル・アマチは之と商議した。そしてその護衛を受けて安全にイゴラタ Igolata（西、Igualada）に至つた。そこからは又騎兵と共にノストラ・シニヨラ・デ・モンセラト Nostra Signora di Monserrato（西、Nuestra Señora de Monserratê）に赴いた。ドツトル・アマチは前夜書をサン・ベネデツト S. Benedetto の院主に遣はしめ、使節の發向の旨を通じて置いたから、そこでは慇懃なる待遇を受け、國王の宮室に宿し、奇蹟を享樂し、諸ろのパドレ殊に山中に棲む隱者たちの貴き生活を觀ることが出來た。

學士アマチはいち早くバルセロナの副王アルマサン侯 Marchese Almazan 及びフイリベルト親王 Principe Filiberto に謁し、使節に名に於てその手を吻ひ、且つ副王に使命の事に關するカトリコ教國王の推薦狀を呈する爲めに、護衛の一士を隨へて、一行に先ちて出發した。バルセロナに到著して副王を訪ねると、副王は疾の爲めに病牀に在つた。そこに恭しく勅書を呈した。その書は次の記く記されてあつた。

サン・フランシスコの跣足派の僧フライ・ルイス・ソテロ、日本奥州の王の使者の同伴として王宮に來り、彼を補けて格別の熱慮と精勵とを以て諸般の事務に當れり。今右使者と共に羅馬に向ひ出發せむとするに臨み、朕は之を諸卿に紹介し、諸卿の彼等使者並にその一族の爲めに萬端の便宜を計り、適當なる待遇をなし、彼等の滿足してその地を過ぎむことを望む。是れ神の爲めまた朕の爲めに善行なるのみならず、彼等の人格實にまた能く之に値するなり。マドリイドに於て。千六百十五年八月五日。

副王は使節の到着を喜び、而も其病床に在り、總督の職をも辭せむとする折なれば、勅命にもかかはらず、自ら之を迎ふること能はざるを悲しむ旨を述べた。學士は今回の重き使命の事情を開陳して辭去した。副王はその後、伴の一士を通じて使節に答辭を寄せた。」(第廿三章、全譯)

「さてその土曜日の晩に使節の一行はバルセロナに到着した。學士アマチは二輛の馬車を率ひ之を市門の外まで迎へ、一行は之に乘つて市に入り、甚だ美しい館に落ちついた。是れはサン・フランシスコの御寺の近くに在り、海に面し、且つバルセロナ貴族の遊歩場の全景を見はらすことが出來た。この時親王殿下はモンセラトオ Monserrato に滯在したまうたから、學士は書記官と商議し

殿下並にドン・ピエトロ・デ・トレド Don Pietro di Toledo（西、Pedro de Toledo）の還歸を請ひ、その上で船艫に由り伊太利亞へ出發の許可を得たき旨を語つたが、その事甚だ困難たるべきを知つたので、書記官に托して、陛下よりの勅書を殿下に屆くることに決定した。その勅書の內容は次の如くである。

わが從兄の君。サン・フランシスコ跣足派の僧フライ・ルイス・ソテロは日本奧州の王の使者と共にわが宮廷に來り、格別の熱慮と精勵とを以て凡ての商議を處理したり。今回法王と同じ商議をなす爲めに羅馬に往かむとし、伊太利亞行の第一の船艫に當人並に一族のもの搭乘を請ひ、朕も之に同意したり。されば萬事好都合に取計はれむことを望む。

かくして副王の書記官アイロ Ailo と商議し、國王陛下の常に厚遇を賜ひ、またその國到る處に尊敬を受けたる使者に對して十分の便宜を與ふることの望ましき旨を悟らしめた。

事了して、二輛の馬車をしつらはせ、兩人の使者は之に乘つて副王をその病牀に訪ねた。一通の挨拶を述べ、謁見は終つた。そのあとでバルセロナ郊外のサン・フランシスコ派のジェズスの僧院 Convento di Gesu に詣り、ここにて長老より頗る懇篤なる接待を受けた。又その庭園を觀、再び

市門に歸り、海岸の遊歩場に遊んだ。翌朝學士はエリルの伯爵 Signor Conte d'Eril. Visconte d'Eboli に會し、使節の取持品及び全員の免稅の事を商議した。議員總會の席上學士はこの請願に關して述べて曰く、諸君、五千二百里、日本よりの遠き行程は常に危難と障礙及び多大の入費に伴はれてあつた。さればカトリコ教國王陛下は夙に此事に心を止めさせたまひ、新スパニヤの門戸たるアカプルコの港に著津の時よりこの國の境バルセロナ並に更にそれ以外の地に至るまで多大の庇護を垂れたまうた。使節をここに導きたる日本島の改宗といふ榮擧ある目的は三つの原因を有するが、基督教共和國（註。全基督教徒の意）に王冠を捧ぐる爲めに來れる一外國人に愛顧を與ふるはこの市の議官閣下の喜んで爲さるる所ならむと信ずる（譯者曰この章句意味解し難き節多し。）されば若し免稅の事が許可せらるるならば使節は大に滿足とするであらう云云。

議員は此事を協議するを約し、學士のここを辭し去るや、再び之を迎へて、その請願の聽かれたることが告げた。そこで學士は使節の名に於て諸議員に感謝し、而してこの市議總會の一條をその報告書に記錄すべきことを約束した。

翌朝使節の一行は議事室に詣りその最も華潔の室に入つて銀器什寶を觀、それより大寺院、武庫

を訪問して、再び波止場に歸つた。これらの見物は凡てドン・フランシスコ・エリル殿の馬車に由り、殿は常に一行に同伴した。是人は最も正しき侍で、世間の道に通じ、且つカスチリヤのアルミランテ國 Almirante 國の總督ドン・ピエトロ・ラミレス Don Pietro Ramirez 殿を通じて、實に學士アマチと親交があつたのである。

その間に親王よりの答書が書記官の許に到著した。書記官は學士を招き、乘船の事に關して意見を述べた。それで書記官に請ひ、殿下の名に於て船長ドン・フワン・ルイス・ボラスコ Don Iuan Ruiz Volasco に一書を遣はし、伊太利亞に到るべき便船並に港の事を照會して貰つた。そしてジエノワのフレガツテ二艘、バルセロナのベルガンチノ一艘の有つて、殿下よりの命令で、いつでも使節一行の用に供すべき手筈になつてゐることが分明した。ドン・ペドロ・デ・トレドの其船艦を率ゐて入津するにはまだ中中間のあることが知れたので、上述の數船で出發することに決定した。

使節及びその一族は都合よく航海することが出來た。最もその間に天氣惡しく、逆風吹いて航行を中止したこともあつたが、とに角大した危險に遭遇することもなく、ジエノワの領土たるサヲナ Savona に到著した。乃ち一緒でまづ學士を遣はし、カトリコ教國王の、この共和國に駐在する大

使ドン・フワン・ビベス Don Gio. Vives に下されたる一書並に同學士が兩使節の名に於て太公にあてて記したる書翰とを之に托した。後のものには兩使署名し且つ封印を施した。是れ同地に著船の許可を乞ふものであつた。」（第廿四章、全譯。）

以上を以て支倉及びソテロの兩使者が日本を立ち出てて西班牙に入り又その國を去つた時までの記事は終る。アマチの書はこの後なほ七章ある。此稿既に甚だ長くなつたから、此後の事は極めて省略しよう。それは本稿の「えすぱにや、ぽるつがる記」の外篇たるに適はしむる爲めでもある。

さて第廿五章は使節サヲナを發してジエノリに到著の事といふのである。ジエノワでは西班牙大使の饗宴に請ぜられ、又太公に謁見した。ジエノワの次にはチキタ・ヱッキヤ Ciuita Vecchia の港に立ち寄り、そこよりアマチをパドレ・ソテロの兄弟たるフライ・フワン・ソテロと共に羅馬に先發せしめ、日本使節接待の事に關して豫め法王廳の人人と協議せしめた。アマチは再びチキタ・ヱッキヤに歸り、日本使節の一行はカルデナル・ボルゲエゼより遣はされた馬車に分乘して羅馬に向つた。（第廿六章）。

一行はモンテ・カワルロ Monte Cauallo に著し、コスタグト Monsig. Costaguto、パオロ・ア

ラレオネ Monsig. Paolo Alaleone 等の諸官に迎へられ、更に法王の侍從長パオネ台下 Illustriss. Paone に案内せられて謁見の室に入り、型の如く三たび跪坐 Genuflessioni の禮をなして法王の前にひれ伏して敬意を表した。またカルヂナル・ボルゲエゼを訪ねてその衣を吻うた。また法王の甥のスルモナ公 Sig. Principe di Sulmona を訪問した。既にアヱ・マリヤの時刻で、人人は再び車に乗つてアラ・チェリの僧院 Convento d' Araceli に行く、そこに迎へられ饗應を受けた（第廿七章）。

公式の入市式並に法王に拜謁の式は十月廿九日に行はれた。アマチは之を記すこと極めて詳しいので再び原文に就て翻譯して見たい。

「水曜日は光榮の使徒サン・シモネ及びサン・ジュダの祭日である。法王はその日とこの上もなき莊重なる儀式を以て使節の入市の式を行はむと欲したまうた。カルヂナアレ・ボルゲエゼ台下も同じ意見であつたので、法王は羅馬の凡ての貴族、凡ての武士の之に參加し、取り分け諸カルヂナアレ及び各國使節の之に闕けざらむことを望ませたまうた。然しその日は折惡しく天氣が好くなかつたので、サン・カルロの日（十一月四日なりといふ）に延期しようとしたが、日本の使節たちは二

日の間もアラ・チエリイに閉居してゐるのを喜ばなかつたので、學士アマチはカスタゲートナ殿及びパオロ・アラレオネ殿を尋ねて、翌日謁見の式の行はれて、なるべく早く伊達政宗の請願の件を開陳したき旨を陳べた。是が兩公の總く所となつて、翌日の第廿一時に入市の式行はるべきことに決し、夜のうちに回答が發せられた。

翌朝法王の式部官の長ジヨワンニ・バツチスタ・アラレオネ殿、使節及びパドレを尋ね來り、莊嚴なる入市式の順序細目、宮廷に於ける習慣を傳へ、かつ之を隨員の一同に知らしめむことを求めた。さて常になく快く朝餐を取つた後に、豫定の順序に從ひ、カルヂナアレ・ボルゲエゼ台下の馬車に乘り、宮廷の武士、舍人、並に使節の隨員の乘りたる二輛の馬車と共に、まづ窃かにアンジエロの門 Porta Angelica の外廓まで行つた。是れそこより公式の入市をなす爲めである。

定めの場處に到著し、皆車より下り、使節たちは一室に入つた。そこにはマルカントニオ・ヰツトリオ Marc' Antonio Vittorio 來りて鄭重にもてなし、その他多くの貴人、武士またカルヂナアレ家の舍人も來り之に加り、孰れも通詞を通じて、祝辭を述べた。それから馬に乘つて次に記する如き順序で行列を始めた。

法王は宮廷の白馬をその附屬品、鞍及び美しき刺繍の布で飾つて送つた。既にしてサン・ピエトロの廣場、ボルゴ Borgo、サンタンジェロの城、橋、パリオネ Parione、ワルレ Valle、チェザリイニ宮 Cesarini、アルチエリイ Altieri、市廳その他廣大なる場處は無數の群集。車馬が充ちみちた。高價なる氈（タペチ）、絹の茵（クシニ）、色彩らたる布（ドラピ）で蔽はれた窓には、ロオマの貴女が居つて最も美しい光景を呈した。先驅の輕騎護衛隊の喇叭が鳴つて、全員が進行を合圖すると、次にはマリオ・チェンチ殿 Sig. Mario Cenci 及びクルチオ・カフアレルリ Sig. Curtio Caffarelli を隊長とする五十の輕騎隊、次には諸カルヂナレ及び諸大使の一族及び家人、羅馬、フランシア、スパニヤの貴族たちが華麗の服裝して、二人づつ並び進んだ。孰れも騎馬である。次には十四人の羅馬樂隊の太鼓。そのあとには同じ距離を置いて五人の喇叭手が騎馬でつづく。その朗な響は群集に歡喜の心を喚び起した。そのあとには多くの貴人、有爵者、騎士が美しい服裝してつづく。使節の隨員は白馬に乘つて各〻二人の貴人の間に介まり進む。最初は舍人及び近習のうちの七人であり、刀（カタナ）及び脇差（ワキザシ）と稱する（即ち長劍及び短劍である）武器を持する。その名は次の如くである。

Simone Sato Curanojo

Thomè Tannoquingi

Thomasō Iagiami Cannoyagiemon

Lucas Yamaguchi Canjuro

Gioanni Sato Tarozayenon

Gioanni Farada Cariamó Peringhiri

Gabriel Yamasaqi Cansque Peringhiri

彼等のあとには同じ列序にて日本の名誉の騎士四人が行く。一人は前に述べたると同じ服装、他の三人は足に達するまでの黒色の下着の上に、膝までの衣を被ふ。孰れも絹布である。又頭には白きオルメジノ（註一種の絹布也）製の帽を頂く。その形両角並び出でたる財布形をなし、僧侶(ボンヅ)の常用するものである。彼等のあとにはグレゴリオ・マチアス Gregorio Mattias 来る。是人は使節の執事として之に伴つて日本から来たのである。伊太利亜風の美衣を著けた。而してそれ等人人の名は

Don Thomas Taquinó Cafioe

Don Pietro Camillo Gueghi

Gregorio Mattias Maggiordomo

である。そのあとには二組の馬丁つづく。つひの服装の、黄及び綠の緋緞綃の衣を著け、一組は長刀、一組は日傘を持つた。其名は

Gregorio Tocuro

Thomas Squeichiro

Giacobe Mofeaye

Nicolas Giouan Quinzo

である。

法王の甥マルコ・アントニオ・キツトリイ殿の右側には使節

Don Filippo Francesco Faxecura

が騎行する。そのわきに法王廳供衛卒たる瑞西兵及び馬丁を隨へる。使節は白地に絹絲、金銀を以て獸鳥花卉を縫つたる印度布の美しき衣裳を着けた。その頸には珠數を懸け、頭には羅馬風の帽を頂き、晴晴しき面持して公衆の挨拶に對して會釋した。その一族の人人にも同じやうにした。

そのあとに伊太利亜風の立派な服装をした二人の譯官が續く。即ちスパニャ語の譯官たる羅馬人、學士シピオネ・アマチ及び日本語の譯官たる旗手フランチエスコ・マルチネス・モンタニョ Francesco Martinez Montagno である。

最後にはカルヂナレ・ボルゲエゼの馬車で奥州王の正使パドレ・ルイス・ソテロがフランシスコ派のパドレたちと共に來る。なほ多くの馬車がそのあとに續いた。サン・ピエトロの廣場を過ぎると法王の瑞西禁衞隊が禮砲を放つて歡迎の意を表した。サンタンジエロの城の前を通ると美しい音樂が奏せられ、再びモルタレツトオ及びアルチエリアの禮砲が打ち鳴らされた。市廳の廣場で行列は終る。その中央の欄には、セナトオレのカブリエル・フアルコニオ Sig. Gabriel Falconio の喇叭隊、又右手の棧敷にはコンセルワトオルたちの音樂隊と喇叭隊とがあつた。

使節が市廳に至ると、恰も古への凱旋の將軍の如く多くの人人から敬禮せられた。階陛の石段で馬を下ると、マルカントニオ・キツトリは別を述べた。使節は羅馬譯官を通じて謝辭を陳べた。階段を登り、法王の侍從カスタグト・フオリエル Monsignor Castaguto Forier から鄭重に迎へられた。

諸聖人の祝日（註。十一月一日なりといふ）には例の如く法王の臨席の下に、サン・ピエトロの新寺に於てメサが行はれ、使節は一族を隨へ、カルヂナレ・ボルゲエゼの馬車でここに到つた。サンタ・マルタの御寺に面する門に達するとジョヴンニ・バツチスタ・コスタグト再び之を迎へ、最聖のサクラメントオを拜すべく立派な帷で飾られた棧敷の請じ、人人はここでカルヂナレ・カルロ（Card. Gallo）（卽ち羅馬學林の長、オスチアの司教、ロレトの御寺の保護者、司教會の首座）の歌ふ嚴肅なメサを聽いた。そしてこの莊重な儀式、羅馬聖寺の比類なき偉大、とり分け法王の尊嚴と慈悲とを、歸依と驚歎との心を以て觀、法王の祝福を受けて、この上もなく滿足して同じ道をアラチエリに戻つた。唯學士アマチは宮殿にのこり、法王の侍從長たるパヂネ台下 Mons. Pauuone に會つて、使節が奧州王の名に於てする謁見の日を定めむことを請うた。」（第廿八章全譯。）

十一月三日に使節は伊達政宗の名に於て法王に謁見することに決定した。その第二十一時に使節は馬車でアラチエリを出で、在俗の人の黑衣を著けた。その他扈從の者も同樣の服裝で、これは二輛の馬に分乘し、徒歩の四人の馬丁が之に隨つた。一つの函が一緒に運ばれ、そのうちには衣裳、裝飾が入つてゐた。サン・ピエトロの宮殿に達すると一室に入り、黑衣を脫し、王者の前に出づる

時の華麗稿（fatto a modo di senechi）の白、青の彩色の衣に着替へ、パドレ・ソテロと共に謁見の間に出で、ここで莊重の儀式が行はれた。そして伊達政宗から法王パウロ五世に捧げた書輸を法王に呈した。アマチの書には拉丁語の翻譯が出てゐる。慶長十八年九月四日の日附のあるその邦語原文に大日本史料にその寫眞版が出てゐる。（第二十九章）。

此儀式の後使節は諸ろのカルヂナアレを歷訪した。使節はそれぞれ Eccellenza 及び Eccellentissimo を以て呼ばれることになつた。（第三十章）。

支倉の法事は支倉の希望に由り、サン・ジョワンニ・ラテラノ S. Gio. Laterano の寺に於て洗禮を受けた。そしてパオロ・カミルロ Paolo Camillo の名が與へられた。アマチ書中には其日本名がないが、小寺外記であるといふことである。一行はカルヂナアレ・ボルゲェゼの馬車四輛に乘つて羅馬七寺を巡禮した。（第卅一章）。

第三十一章を以てアマチの奥州記は終る。

支倉六右衛門の一行は千六百十六年再びエスパニアに歸り、暫くセビイアに滯在し、ここより船に乘つて新エスパニヤ（墨哥其古）に至り、翌年そこを去り千六百十八年マニラに達し、いろいろ

の事情からここに止ること二年、元和六年（千六百廿年）庚申八月乙酉廿六日辛未「南蠻國ヨリ歸朝」した（眞山公治家記錄）。

是等の間の事情は大日本史料及び金城秘韞に詳しい。

常長と共に羅馬に行つた人は果して何人であつたか、そしてそれ等の人の運命はどうなつたか、邦文史料の傳ふるところ甚だ少いらしい。金城秘韞は眞山公治家記錄を引いて今泉令史、松木忠作、西九助、內藤半十郎、田中太郎左衛門、內藏丞、主殿、吉內、久次、金藏の名を擧げてゐるが、アマチ書中の人名と符合する者は僅かに佐藤內藏丞（サトオ・クラノジョオ）、ニコラス・ジョワン金藏（キンゾオ）だけである。田中太郎左衛門といふは、アマチ書中の Tamoquingi か、Sato Tarozayemon かの孰れかであらう。

又大槻文彥博士の金城秘韞補遺には仙臺支倉隆藏氏所藏の死失帳から吉利支丹の侍の死の分明せざるものを抄記してゐるが、それに據ると、「支倉六右衛門召仕、吉利支丹太郎左衛門」は轉ぶことを肯ぜずして、寛永十七年（千七百三十二年）三月朔日、その妻せつ、その子三次と共に釣殺の刑にあつてゐる。

大槻博士はなほ神尾彌治右衛門の訴人の記錄を擧げてゐる。（大正十五年夏名古屋にて記す）。

追記。本稿は何も新しい事を提供しないから、久しく篋底に打ち捨てて置いた。唯先年大阪毎日新聞の爲めに作つた支倉六右衛門に關する一文が甚だ杜撰なものであつたから、それを全部廢棄し、その代りとして本章を本書に加へることにしたのである。

西班牙の風物と其國の殖民傳教史

（オットオ・マアス師の西班牙記）

ベルリンの、主に宗教に關する書籍を賣る本屋でわたくしは偶然オットオ・マアスといふ僧侶の「スパニエン」といふ著書（P. Otto Maas, O. F. M.: Spanien. Eine Studienreise. Franziskaner-Missionsverlag. Münster i. W. 1922.）を見つけた。寓居に歸つて之を讀むと豫期したより面白く、エスパニヤ、ポルツガルに對する游志が一層熾烈になつた。此著者はミュンステルの高等學校に學び、殊に Schmidlin 教授の傳教史の講義から多大の感激を受けたと云ふ。而して著者はその方面の研究に深入りすべく、其史料をエスパニヤの古文書閣に求めようといふ氣を起したのである。初めには唯二箇月三箇月の旅行の積であつた。著者が途フランスを過つて、其國境を越え、イルンの驛に着いたのは千九百十四年の七月三十日の正午で、佛獨開戰の後正に數時間の事であつた。さういふ關係で僅か數箇月の旅行の豫定が四箇年に延びた。その代り著者は其目的たる傳教史の研究の

上に豫期以上の收獲を得たのみならず、亦能くエスパニヤの風物を樂しみ其人情を識ることが出來たのであつた。

著者は新メキシコに於けるフランシスカン派の傳教史、十七世紀支那書翰集等に關する著書をエスパニヤの言葉を以て出版してゐる。孰れも未刊の稿本に就いて編纂したものである。（其他千九百十三年には佛教に關する研究などをも著してゐる。）此等のエスパニヤ語の書籍は、わたくしはその一本をも得ることが出來なかつた。既記の「スパニエン」と題する一書は、學術的の書ではないが、自然人生に對しても同情のある一學究の精緻なる觀察と並びに其溫雅の文體に由り、風土記又は旅行記としても甚だ興味がある。唯隨所にお國自慢とお國贔負との出て來るのが目ざはりであるが、是は已むを得ぬことであらう。わたくしは實に此書に由つてエスパニヤの各地のアルチボス（文書館）に關する知識を得たのである。わたくしが後にセビイヤに「印度文書館」を訪ぬるに至つたのは全く此書の指嗾に因るのである。

著者の先づ落付いた處はパストラアナ Pastrana である。昔は宏壯なる寺院の裡に二百人の學僧を棲ましたといふが、今は蕭條たる荒村に寂しく立つ一廢屋に過ぎぬ。フランシスカン派僧院の長

パアドレ・ロレンツオ・ペレス P. Lorenzo Pérez は亦基督教傳導史の書に由つて知られて居り、此獨逸學僧を待つこと甚だ懇ろであつた。食後の好きカフエエ、好きシガレツトに由つて、著者はつくづくと身の今エスパニアに在るのを感じたと告白してゐる。而して著者の此地で檢閲したのは主として十七世紀に於ける支那傳教の事に關する文書であつた。是れ著者の三箇月の滯在の間の心の糧であつたといふ。「紙は屢破れて居りその字體は甚だ拙い。殊に原本たる場合にさうである。十七世紀はエスパニヤの字體の墮落期であつた。又寫本には誤謬が多く、既にかなりエスパニヤの語に熟しては居たが、然し其言ひ廻しの微細な點に就いては必しも十分とは行かなかつた自分をいたく惱まして、時とすると失望に陥らしめた。後から一ぱい書き入れをして居る文書は、たつたフオリオ版の三四枚のものでも豫期の進行を妨げた。」と記して居るが、大に同感せられることである。唯著者はタイプライタアの使用及び寫眞の術に熟して居たから寫本の事は著しく進歩したのであつた。時とすると一日に二百枚のフオリオを寫したといふ。然し埋沒せる史料の豐富な事は著者も亦之を驚嘆してゐる。著者の點檢したものは、十七世紀に支那に於けるフランシスカン社の創立者たる P. Antonio de Santa Maria の手翰である。支那に於ける祖先崇拜の習俗と基督教の教條

の背反するといふ問題の解決が此フランシスカン派宣教師の主たる仕事であつた。

パストラアナの仕事が濟んでからマドリイに來た。カイニ・デル・シスネのフランシスカン派僧院に止宿して國民圖書館に通ひ、パストラアナ以來の仕事を繼續した。マドリイでは諸所で歡迎に對する同情を聽いて喜んだと云つてゐる。

十一月になつて著者はセビイヤに往つた。此途中の汽車で廿二歳のエスパニヤ青年と道連れになつた。此男はマドリイ大學で歷史の講議をも聽いたといひ、相當に本を讀んで居り、又此國人の常として話好きであつた。然し話して行くうちに此男が親佛派であることが分つたので戰爭の話に觸れることは避けたといふ。この男は南エスパニヤ(アンダルシア)を世界中の極樂土だと考へ、この Tierra de Maria Santissima (アンダルシアの別名) に於けるほど樹木草花の美しく、女の婀娜なる處はないと誇つた。女性の事については出發前にもある夫人から「あなた、女には御用心なさいよ、あちらでは女の人が綺麗ださうですから」と笑談を言はれたことがあつたが、いま其事を想出したといふ。

「あんた、セビイヤへ往つて、まるで小說の中のやうな狹い街道をお歩きになると、快活で勇敢

たセビイヤ女のいつもうきうきした眼でにらまれて、僧服なんぞだつて、あんたの助にはなりませんよ。無論惡意も邪念もあるのぢやないのです。唯調戯ふのが好きなんです」などと、その青年が得意になつて話した。その間に太つた男が車室に入り來り彼等の傍に坐した。バルセロナからセビイヤに旅行する商人であつた。四下をじろじろと見廻したあとで、手に持つ反獨系の新聞紙 La Correspondencia de España に眼を落した。

發車すると青年がまた始めた。「セビイヤほどの處は世界中に有りませんな。」商人はちよつと眼を上げる。

「殊にセビイヤの女と來たら。歩き方から話しぶり、人戀るさうな笑顏、いつもそはそはとはしやいでゐるところ。色の白いのはグラナダの女以上ですな。アラビヤの血とアラビヤの美が雜つてゐるのです。」

商人は額をしかめた。

「女ばかりではありませんね。生活に凡て南國の氣質があるのです。ラス・シエルペスの通を御覽なさい。商店、カツフエ、カジノ……。」

商人が始めて口を開いた。「ええ、ええ、其他にも穴だらけで、でこぼこした舗石道の通りがいくらでもありまさあ。」

「そりや、あんた、何もセビイヤに限つたことはありません（譯者註。この青年が若し日本を識つてゐたならきつと言つたであらう、東京を見て御覽なさいと）。」

「そして綺麗な女と一緒にうようよと乞食が一杯居て、一刻も人を落付かしやしません。」

「マドリイでも、バルセロナでもそれや同じ事です。」と青年が應じた。

「他の人だつてみんな怠け者で、冬は tomar el sol（日なたぼつこ）、夏は tomar el fresco（日蔭で休息）、その他の時は tomar un café（カフェエを一杯）でさあ。」

此會話は果して實際のものの寫生であるか、著者の創作であるか疑はしいが、とに角エスパニヤの人、殊に南方の人人の氣質を巧に描寫したものと許せねばならぬ。

セビイヤでは同じくフランシスカン派僧院の客となり、其翌日からは有名な印度文書館 Archivo General de Indias に通ふことになつた。「印度」といふよりも「殖民地」と直した方が、今ではむしろ解し易い。是れこの獨逸學僧をセビイヤに引寄せた原動力であり、而も彼は豫期せざりし四

箇年の長日月をここに暮すことになつたのである。

　その日はそこの事務官で有名な漫畫家 Don Juan Lafita 氏にあちこちと案内して貰つた。（註。わたくしも亦同氏の厄介になつたので、この記事は甚だ興味がある。同氏は佛語を解した。その漫畫を好くすることはわたくしは知らなかつた。）

　「エスパニヤ領のアメリカ、及びフイリツピナの全史、支那、日本史の一部がこの室の裡に眠つてゐる」と著者は記す。（然し實際は日本に關するものは——少くともラフイタ氏の說明では——さう多くはないらしい。）

　四時になると室が閉される。その前に使丁が聲高に La hora!（時間です。）と呼ぶ。

　セビイヤに於ける研究から得た感想として著者はエスパニヤ人の殖民政策をかなり同情的に批評し、是等の人人は法律を作つて土人を好く待遇し、之を教化することに力めた、而も後世、殖民地に於てエスパニヤ人に殘酷の行の多かつたやうに說くのは、主として英米歷史家の誣言であると斷じてゐる。掠奪を行へるは寧ろ次期の英人であるからかくの如く史實を枉ぐるのを要したのであるが、近來アメリカの歷史家は源泉的史料の研究に由り漸く其眞相を闡明するに至つた云云。

黄金を求むること、黄金の國、エル・ドードオを捜しあてることは航海の重要な目的の一には相違なかつたが、コロンブスの主意には同時に更に高い人道的なものがあつた。即ち世界を擧げて基督教信仰の國土にしようとすることである。それ故に掠奪、壓制等の如き事は必しも常住に行はれたのでなく、寧ろ



第四十二圖　セビイヤの市街

土民の爲めに出來るだけの事が盡されたのであつたと辯解してゐる。

著者は亦詩人の才を有し、セビイアの聖週を紓して甚だ趣がある。

復活祭の日曜にはセビイヤの市中に人出が多く、午後の一時頃になると其甚だ狹くして劇錯なる街道ラス・シエルペス（蛇の意）は身動もならぬ程である。聖週の行事のプログラムを呼び賣るもの
のの

「エル・プログラム。エル・プログラム。」

と云ふ聲がそのうちでも一際高い。白或は紫の外套を着、一メエトルも高い異樣の帽子を被つた人人が集つて來、其顏には非常に長い假面を被つてゐる。それは輿（パソス）を負うて街を練り歩くべき人人である。これは實に世襲の職であり、其組合は三十一もあると云ふ。

午後三時になるといろいろ行列が始まる。夕方の七時には是非サン・フランシスコの廣場を通過したければならぬ豫定である。人形や蠟燭や天蓋などを載せた輿が行列の中に介つて進行するのである。輿は皆甚だ重い。

行列は時時止る。すると群集中の或者が救世主或は聖母の爲めに「サヘタ」を投げる。即ち頌歌

を唱へるのである。歌が巧に歌はれると群集が雷鳴の如く「オレエ」（伊太利亞其他歐羅巴諸國のブラヴォ、支那の好なり。日本には之に當る現代語なし。昔のやんれやんれは是か。九州ではお、い、い、い、えすとおと云ふと云ふ。）を浴びせかける。

見物の席では水賣が「アイ・アグリ」と呼び、菓子賣が「アイ・カラメロス」と觸れ歩く。子供に風船球、杖。おとなには新聞、雜誌。全市を擧げて是れ祭典であり、又宴として競賣場である。唯行列の過ぎる時だけは、人人は帽を脱し、甚た敬虔である。そしていづれ十七世紀のモンタニェスか、或は其弟子のロルダンか乃至は他の工人の造つた美しい基督像を嘆賞する。

行列の通つたあとには大譚が始まる。

「今通つた聖像は一番古いものだ。」

「さうぢやない。マルカレエナの方が好いんだ。」

「セビイヤの城壁に匿してある基督の聖像が一番好いのだつてことだ。」

「それやどうか知らんが、勝利の聖女の着てゐる外套ほどの外套は二つとはないことは確かだ。」

それは赤、黒、紫の天鵞絨で作られ、黄金の縫を置いたものであつた。

夕方の七時に行列の先頭が治めてラス・シェルヘスを通過し終る。いつもはもつと遲くたつたさうだが、其年は外國の見物の退屈を恐れてきつちりの時間に行はれた。即ち金貨の威力がこのゐんきな市民にも效果を見せたのである。

第一の輿はサグラアダ・セエナ・サクラメンタアルと云ひ、最も大にして最も重たいものであつた。聖晩餐の式を殆ど等身大の人形を以て現はしたものである。臺の構造は美しいゴチック風であり、黄金の裝飾がぴかぴかと輝いてゐる。

夜の十一時頃まで祭が續く、行列はなほ夜半を過ぎるのである。かくの如き演戲はたゞ水曜、木曜及び金曜日にも繰返される。

輿のうちでは「希望の處女」といふのと、「大威力の我等が父イエス」といふのが最も人の好むところであつた。

「この上もない立派なものが
セビイヤの市には二つある。
希望の處女さまに

大威力の御主さま。」

こんなことを抄譯してゐては限がないから止める。わたくしも亦夏の聖屍祭の行列をば見たことがあるが、ここに記されるほどではなかつたが、亦頗る奇なものであつた。

著者なほ附加して曰ふには、この日のセビイアの女は其服裝全く古風で亦一つの見物であつた。即ち黑の絹衣を着け、高き櫛の上に黑のマンチリヤを被り、それが白き顏、白き首と好對照をなした。聖像の通る度ごとに、一家の人人が最敬禮を施すのを見るのは可憐の極みであつた。

著者はなほセビイヤのメサの日を記し、鬪牛を敍することが甚だ精しいが、今此には抄しない。唯然し此南歐の都會の夏の夜の市井生活の描寫は割愛の出來ぬやうな氣がする。

グワダルキビルに懸る大橋を渡るとトリアナである。そこにドミニカン派の寺があり、その僧侶と親しくしたから著者はしばしば此やや汚いごたごたした場末の市街に往つた。夕方の六時にはその道筋は殊に賑ふ。それは皆女房や娘たちで、長い總のくつついた黑いショオルを肩から掛ける。薔薇や石竹の花を髮にさす。即ち葉卷煙草の工場の工女たちである。青白い、或は日にやけた顏で人惡るげに通行人をしもしげと見る。殊に外國人に對しては一層ひどいので、この行列を見ると、

遠廻りをして避けなければならなかつた。

夜になると此橋の上には電氣の弧燈がつく。晝間と同じやうな繁劇の生活がそこにある。唯遠くの方のみがさすがに夜らしい。檸檬の新緑が河岸にゆくに從つてこんもりと黒くなり、水の面には、白、赤、緑の灯がきらきらと映る。そこには黒く大きな船が靜に碇泊してゐる。鋭い汽笛が響く。是れ或はこの果物を英國に、或は穀物をタンジエルに運ぶものであらう。船の黒き影はやうやく岸を遠かつてゆく。



第四十三圖　セビイヤ風景

河岸の石の腰掛には幾組かの男女の群が坐してゐる。大街を外れて、河岸に沿ふ家並に隨いてゆくと、どの家も中は死んだやうにひつそりとして居り、生活は専ら戸外で行はれるのである。近くでギタルラの柔い響

がする。やさしい人聲の哀調がそれに雜る。カスタニエツトの間拍子で、セビイヤの踊があるのだなといふことが分る。

「五月の十字架祭です。」の連れの人が說明してくれた。「この月は每晩每晩人が集つて踊るのです。昔からの習慣で中中やみません。貧富に係らず、よりよりの家に集つて踊るのです。」

その場に往つて見ると二十人ばかりの人が天幕の下に群り、今三組の人人が踊つて居、一人のわか者がギタルラを彈じて居た。後ろにはちよつとした花壇があり、その眞中に木の十字架が立ててあつた。紙でこしらへた花の房があちこちに引張渡される。

踊は格別のものではなかつた。人人は手と手と組み合はすやうなことさへも殆どない。まるで唯めいめいに踊るのである。然しその時お互に顏を見合はす。女は唯一人きりで踊ることが屢である。其運動は頗る典雅であつて、毫も野鄙のところがない。祭は夜中まで續くので、全く危險なことはないとは言へぬが、然し人人は聖十字架の前にそんな事が有らう筈がないと信じ切つてゐる。踊がおしまひになると、「オレエ、オレエ」の讚辭と喝采とが響く。

更に先に行くと道は狹く、段段と寂しくなる。然し家の内にはなほ人影が見える。それは主に女

兵や女で、男たちは大抵好い着物を着てカフエでふざけ、ギタルラに合せて歌を唱つてゐる。アンダルシヤ地方の歌は皆悲哀調を帯びてゐる。哀調ではあるが能く南國の烈しい氣分、生活に適してゐる。街道では屢盲目の樂人に出會ふが、死、喪、憧憬、涙また悲しき戀等が凡ての歌詞のうちに出て來る。「誰ぞや、我胸に刃を立つる。」といつたやうな調子である。そして泣といふ語のない歌と云つたら殆ど無いと謂つて可い。

なほあちこちの家の前では、黒い姿が道ばたに立つて、窓の格子に顔を當てて室の内部をのぞいてゐる。是れは一體何者であるか。時とすると日中でもさういふ人に出あふことがある。よく注意するとそんな人は皆わかい男である。そして家の半ば開かれたる窓の蔭には必ず女の顔が隠れて居るのである。

同伴者は「Estan pelando la pava」と教へてくれた。謂ふは「雌の孔雀を引つぱる」の意である。アラビヤ人が此國に棲んでからの習慣で、この地方では女は深窓のうちに生ひ立つて外に出ない。それでわかい男はただ窓の前で話すことを許されるのである。その時は他の人は見て見ぬふりをする。彼等の話は一時間餘も續くことがある。唯かはいさうなのは、二階から上に住んでゐる女

たちである。ちよつと電話仕掛で話するわけにも行かぬのであらう。

わたくしの抄譯が少しく長きに過ぎたやうであるからそろそろやめにして、グラナダ、そのアルアンブラ、又コルドバ、トレドなどの聞見錄からは引用しまい。唯終に臨み、當時セビィヤの印度文書館に於て、どう云ふ人人が研究に從事してゐたかといふことを傳譯しよう。

第一に著者自身は主として十七八世紀に於ける支那、フィリッピン等の傳教の事に關する文書を調査したのであるが、滯在長くなるに及んで、亦亞米利加に於けるフランシスカン派の活動の研究に移つて行つた。尤も此方面では、既にラ・プラタ地方に於けるフランシスカン派の事業に就いて數年前アルヂエンチンの Zeno Bustos 司教の調査があり、其後尙わかい西班牙人が其事業を繼續してゐる。又チリイの Robert Lagos 師は二十年ばかり前にチリイ傳教の史料を編纂し、其第一卷は千九百八年に出版せられてゐる。北部メキシコ、卽ち今の北米合衆國の南部に於けるフランシスカン派の事業をば有名なアメリカの教授 Adolf Bandelier がアルチボの塵埃の裡から明みへ出してゐる。その夫人が亦その研究に多大の援助を爲した。然し何と云つても Pablo Pastello 師が第一である。ジェズイト派で已に七十歲の老人であるが、五十年の間每日每日この文書館で研究を

續けた。メキシコの Mariano Cuevas 師は初期のメキシコの傳教史及び殖民史を研究し、エクワドオルの Enrique Vacas Galindo（ドミニカン）、ベネヅエラの Froilan de Rionegro（カプチノ派）等も亦古代の西班牙殖民史を調べてゐた。又フランシスカン派では既に記せるパストラアナの Lorenzo Pérez 師、ペルウのプロビンシアルの Bernardino Izaguirre 師があり、前者は日本及びフイリッピン、後者はペルウの傳教史を調べてゐた。又メルセエド派では Pedro Pérez が今も尚ほチリイには殘つてゐる其派の歴史を研究してゐた。かくの如く、主に西班牙の語に於てであるが、既に多くの傳教史は作られてゐるのであるから、それを研究するには、必ずこのアルチボに往かねばならぬと說くのは正當だとは謂へない。先づ圖書館に往き刊本に就くべく、而して若しなほ滿足し難き處あれば始めて此古文書館に赴くべきであり、之を逆にするのは家を建てるのに屋根から始めるのも同樣だとは著者の意見である。

この文書館の研究者はお互に甚だ親密で、解りにくい讀み難いものがあれば互に相談し合つた。而も文字の難解なるは、結局館員の Don Francisco Navas に持つて行つて埒を明けて貰つた。館長の Don Pedro Torres Lanzas は毎日客員たちに挨拶してその研究を補助した。

この文書館に於ける研究は又コロンビナ圖書館、文科大學の圖書館、及びビブリオテカ・アロビンシアルの所藏の文書に由つて助けられる所が多かつた。

（以上はオツトオ・マアス師の著書の極めて大體の抄譯である。わたくし自身も嘗つてセビイヤに赴いて是等の圖書館、古文書館を見物した。その事はは既に公表せる「西葡記」中に記した。而してわたくしは趣味と實益とを與へたる此書を紹介するのも無益の業には非ざるべきを思うて、今此稿を起したのである。）（「中央公論」昭和四年三月號）

昭和四年八月十五日印刷
昭和四年八月二十日第一刷發行

定價參圓
ネすはにい・ほちこかえ記

版權所有

著者　太田正雄

發行者　東京市神田區南神保町十六番地　岩波茂雄

印刷者　東京市神田區美土代町三丁目十七番地　白井赫太郎

精興社印刷

發行所　東京市神田區南神保町十六番地　岩波書店

電話九段(33)｛一〇二三番　一二八一番／二二八番　二六二六番／二一〇九番｝
振替口座東京二六二四〇番

(片山製本)

岩波書店刊行文學書目

- 藤岡作太郎著　國文學史講話　定價二圓八十錢　送料書留二十七錢
- 藤岡作太郎著　國文學全史（平安朝篇）　定價四圓五十錢　送料書留二十七錢
- 上田光知著　增訂 文學序說　定價四圓三十錢　送料書留二十七錢
- 吉澤義則著　國語國文の研究　定價三圓七十錢　送料書留二十七錢
- 新村出序　龜井高孝翻字　重閲　天草本平家物語　定價三圓六十錢　送料書留二十七錢
- 村岡典嗣著　本居宣長　定價四圓八十錢　送料書留二十七錢
- 太田爲三郎編　增訂 日本隨筆索引　定價六圓五十錢　送料書留三十六錢
- 夏目漱石著　縮刷 硝子戸の中　定價一圓　送料書留十六錢
- 小宮豐隆著　傳統藝術研究　品切
- 小宮豐隆著　[illegible] 批評集　定價二圓二十錢　送料書留十八錢
- 吉村冬彦著　冬彦集　定價二圓五十錢　送料書留十八錢
- 吉村冬彦著　藪柑子集　定價二圓　送料書留十八錢


GALLIAE CONFINIA.
Pyrenæi montes.
GALLICVS Sinus
BALEARICVM Mare.
SVCRONENSIS Sinus
ILLICITANVS Sinus
VIRGITANVS Sinus
Colubraria
Ebusus insula
Ophiusa insula
Cunici
Palmaria
Oriens.
Bergistani.
Ilergetes.
Surdaones.
Cosetani.
Iaccetani.
Laletani.
Heditani, vel
Lobetani.
Sedetani.
Leonicenses.
Celtiberi.
Dittani.
Titthi.
Contestani.
RIOR.
Bastitani.
DEITANIA.
Blastophoenices.
Bastetani
HISPANIAE LOCA ALIQVOT INCOGNITAE POSITIONIS.
POPVLI
VRBES
MONTES
FLVMINA
FONTES


HISPANIAE VETERIS DESCRIPTIO.
Ex conatibus Geographicis Abrah. Ortelij.
CANTABRI OCEANVS
niæ Septentrionalis
Frons Hispa
OCEANVS ATLANTICVS, QVOD ET MARE HESPERIVM, VESPERTINVM, OCCIDVVM, ET EXTERVM.
Occidens.
Frons Hispa niæ Occidentalis.
Zoelæ.
Astures transmontani.
Astures Augustani.
Lucentes
Cæpori.
Præsamarci.
Callaici.
Amphilochi.
Bedui.
Seuri.
Bracari.
Gronij, et Grauij.
Nemetati.
Origeni.
Turmodigi.
Vettones.
Lancienses.
Ocellenses.
Belitani.
LVSITANIA
HISPANIA TARRACONENSIS
Carpitani
Lusitani.
SPEXT
Colarni.
Turduli.
Celtici.
BAETVRIA.
Turduli Veteres.
BAETICA
Turdetani.
Cunaei.
GADITANVM MARE.
IBERI
Mauri populi.
HISPANIA TRANSFRETANA, TINGITANA, QVAE ET
AFRICAE
1586.
SVMMO THEOLOGO DNO D. BENEDICTO ARIAE MONTANO, VIRO LINGVARVM COGNITIONE, RERVM PERITIA, ET VITAE INTEGRITATE MAGNO, ABRAH. ORTELIVS AMICITIÆ ET OBSERVANTIÆ ERGO, DD.